

今帰仁村文化財調査報告 第1集

渡喜仁浜原貝塚

調査報告書〔I〕

1977年3月

沖縄県今帰仁村教育委員会

序

海山の美しい自然に包まれ、緑ゆたかなわが今帰仁村には、国・県指定の文化財が7件もあり、埋蔵文化財もまた豊富で、これまで記録されている遺跡・貝塚は村内各地に散在しています。これらの遺跡・貝塚は、海岸沿線近くに多く発見され、先史時代の文化・生活様式を解明する貴重な資料を内蔵するものとして、その存在価値は極めて大きいものがあります。

渡喜仁浜原貝塚もそのひとつで、一昨年12月京都大学地学研究学生によって、発見されたこの貝塚は、約20mのがけの谷間にあって、雨のたびに土砂が流出し、現場保存がむつかしくなったので、時機を失さないうちに緊急発掘をする必要がありました。

幸い、沖縄県教育庁文化課の御指導により、国庫補助が受けられ、文化課職員・県立博物館職員・沖縄国際大学考古学研究会会友・琉球大学考古学研究会会員の方々が、村教育委員会とタイアップして発掘調査が行なわれることになりました。

発掘団員は、第一次昭和51年4月～5月、第二次同年8月の月間にわたり、村中央公民館に泊りこみで、連日連夜この作業に専念されました。地元の村教育委員会文化財保存調査委員をはじめ、高校生・小中校生も発掘作業に協力してくれ、村民一般の埋蔵文化財に対する関心は一段と深まってきました。

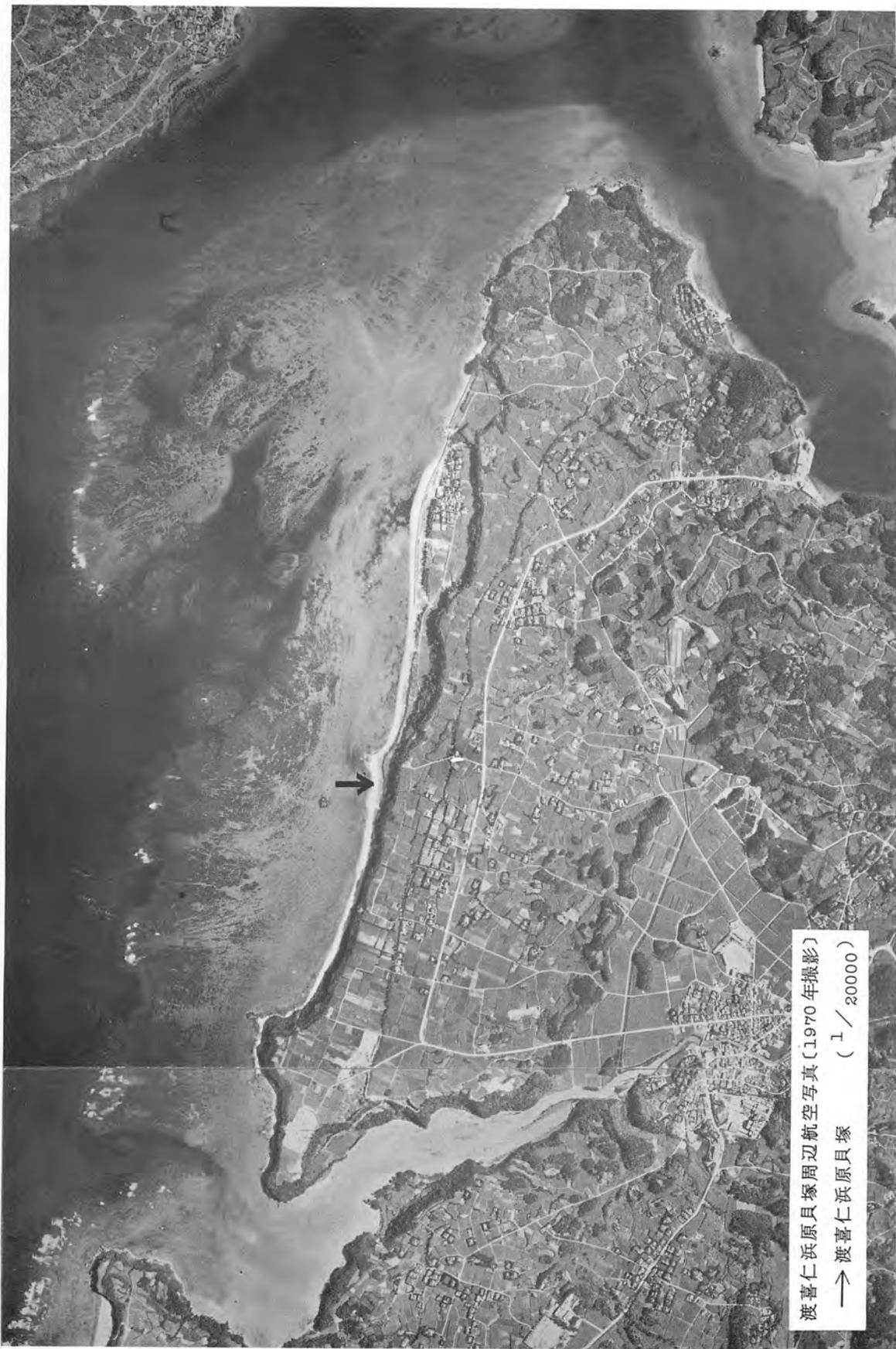
発掘された資料は、県立博物館で発掘団員によって整理され、このような調査結果が公表されることになりました。

今後、資料の一部は村中央公民館に保存して、村内の他の諸文化財とともに、広く住民一般の閲覧に供し、文化財に対する理解を深める資料にしたいと思えます。

おわりに、県教育庁文化課職員をはじめ、直接、発掘調査に従事された県立博物館職員新田重清氏を中心とする団員の皆様に対し厚く御礼申し上げます。

今帰仁村教育委員会

教育長 上 間 政 春



渡喜仁浜原貝塚周辺航空写真(1970年撮影)
→ 渡喜仁浜原貝塚 (1 / 20000)



1

① 遺跡前景—東支那海・古宇利島を望見

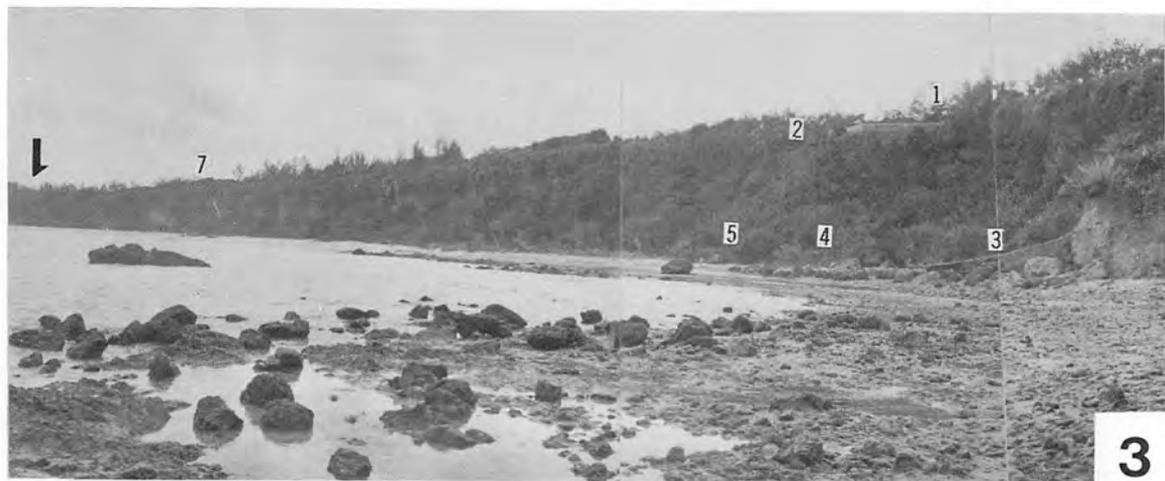


2

② 遺跡遠景—東方より

図版. 2

渡喜仁浜原貝塚景観(2)



③ 遺跡遠景及び周辺遺跡群 — 西方より (→ 渡喜仁浜原貝塚)
注: 第7章参照



④ 遺跡近景—北方より



5

⑤ A地区の様相—南方より



6

⑥ B地区西壁調査前の様相



⑦ B地区東壁における石積みの様相



⑨ D地区の様相 — 東方より



⑧ C地区の様相 — 南方より



⑩ B地区抜採風景



⑪ B地区cトレンチ調査風景



⑫ c地区kトレンチ調査風景



⑬ 海況調査風景〔1977年1月4・5日〕

図版. 6

設定
ピット
ー
共に
南方
より



14

⑭ 全地区設定ピット



15

⑮ 『第二次調査』の全地区設定ピット



16

⑩ A地区 b 試掘溝の北壁断面



17

⑪ C地区 k 15 ピットの北壁断面



18

⑫ B地区 c 4 ピット IIa 層の出土状態



19

⑬ B地区 a 3 ピットの西壁断面

図版. 8

B
地区
a3
ピ
ット
の
東
壁
断
面
⑳

I : 耕 作 土 層

IIa : 黒 褐 色 土 層

b : 黄 褐 色 混 土 礫 層

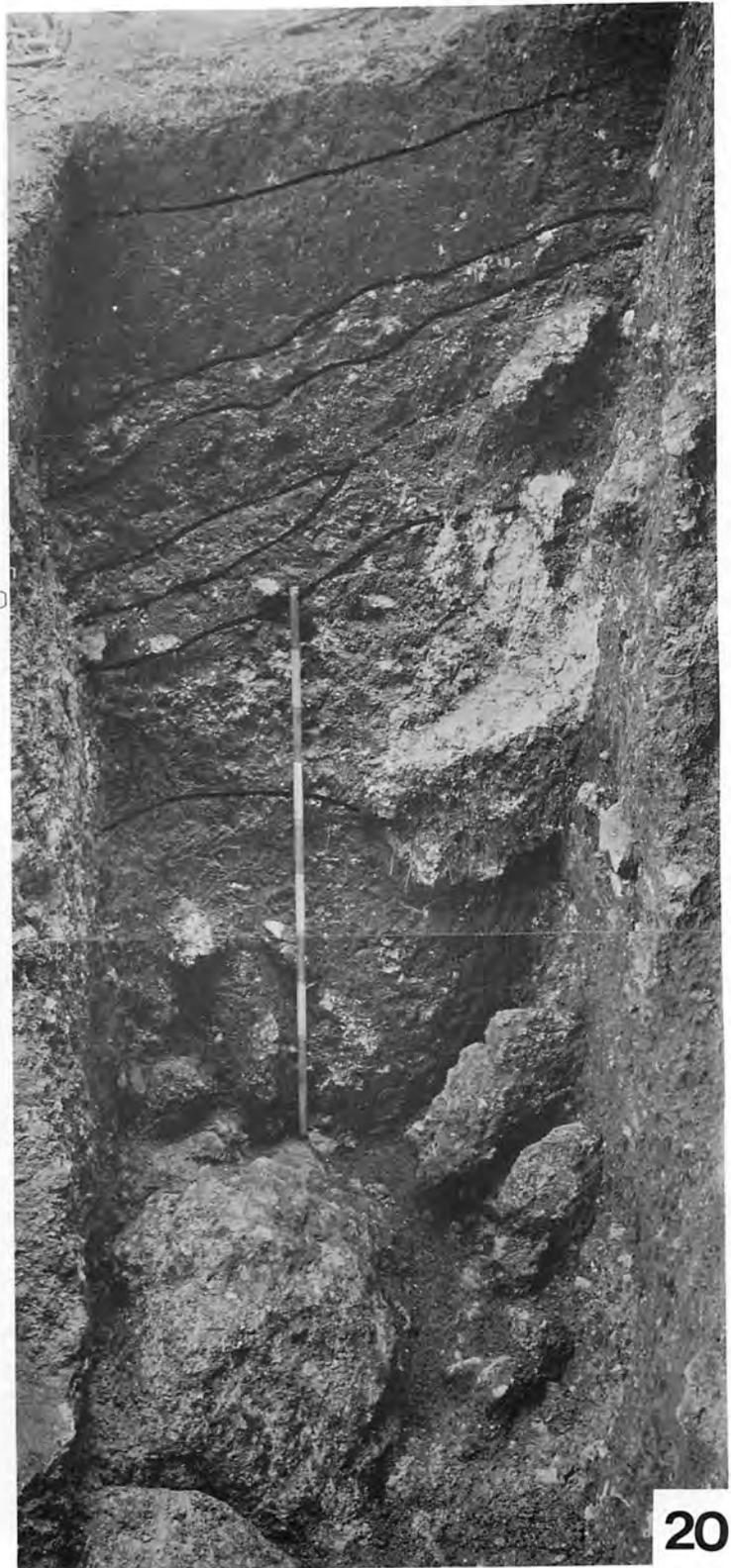
c : 混 貝 土 層

(a) : [レンズ状石灰岩礫層]

d : 混 土 貝 層

III : 石 灰 岩 礫 層

IV : 淡 黒 褐 色 土 層





㊸ c3ピットの石列出土状態—東方より



㊸ c2ピットの石列出土状態—南方より

図版. 10

B
地区
a3
ピ
ット
の
遺
物
出
土
状
況



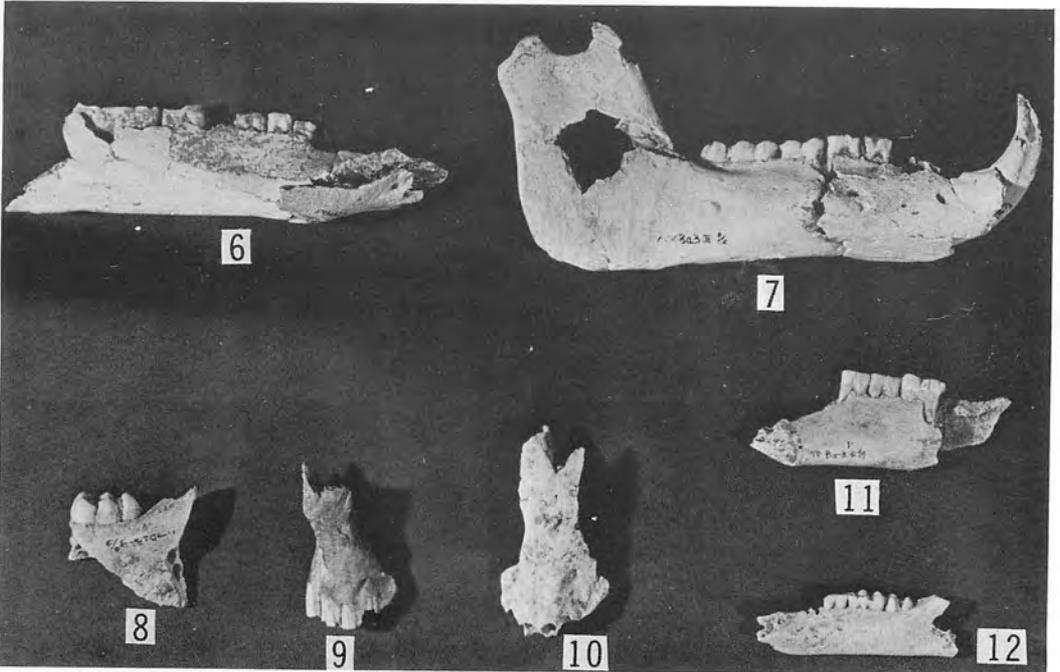
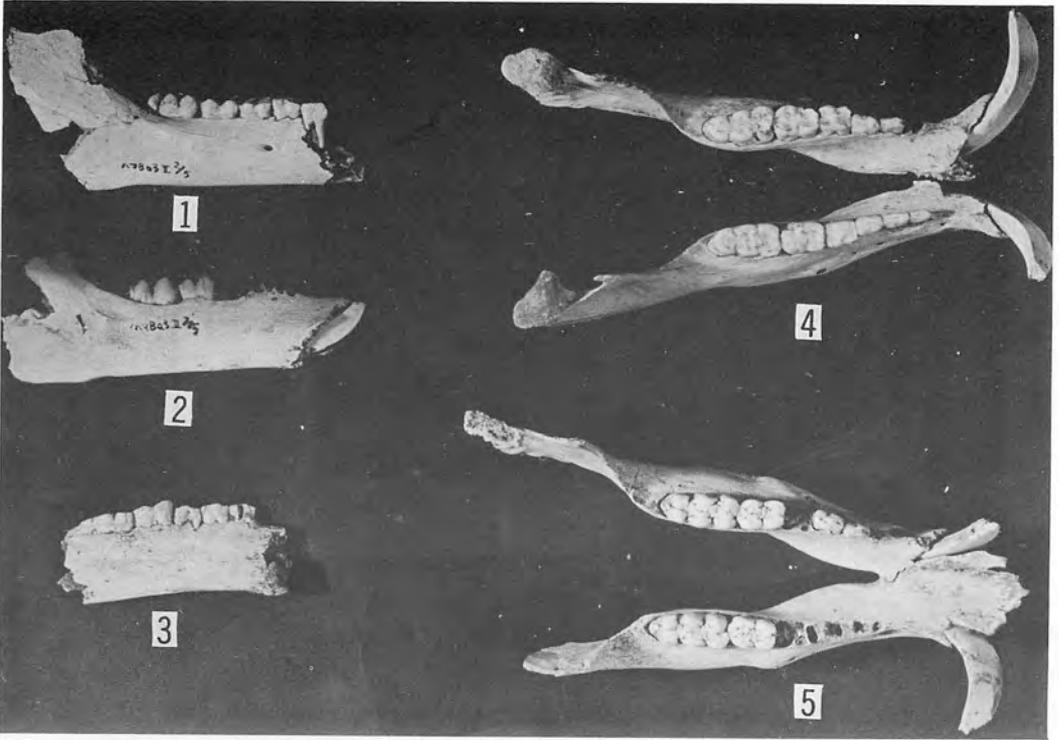
㊸ 第一号遺物組成出土状態〔Ⅱc層〕



㊹ 石器出土状態〔Ⅱa層〕



㊺ 骨製品出土状態〔Ⅱd層〕

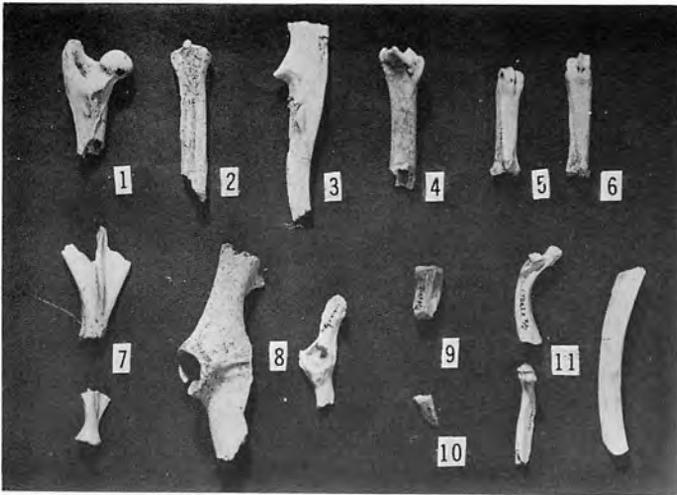


B-a3 ピット〔Ⅱc層 (1~6)、Ⅲ層 (7・8)、Ⅳ層 (9~12)〕

(1 × 1/3)

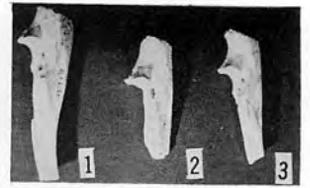
図版. 12

渡喜仁浜原貝塚出土イノシシの骨格及び甲殻類、魚類の鱗



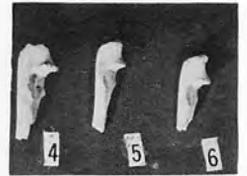
A. イノシシの各骨格部分

($1 \times \frac{1}{5}$)



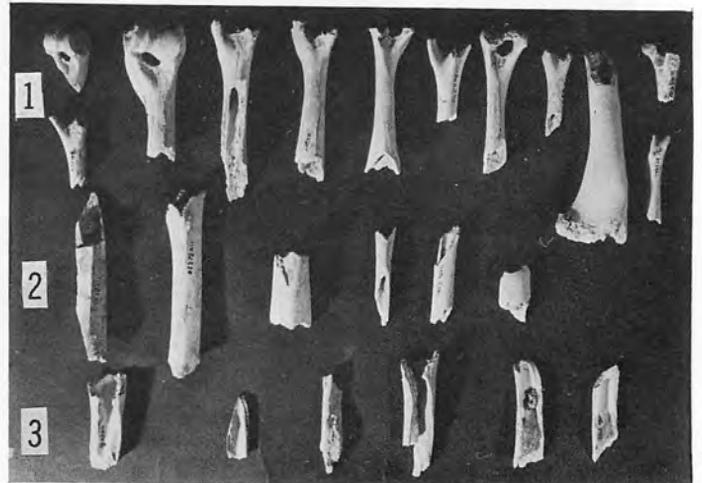
($1 \times \frac{1}{5}$)

(尺骨の大きさ)



A

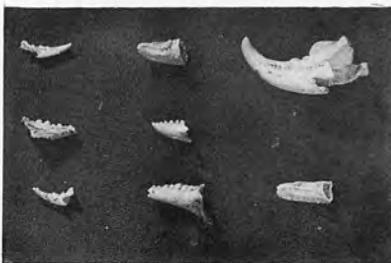
($1 \times \frac{1}{5}$)



B. イノシシの長管骨の破損形態

($1 \times \frac{1}{4}$)

B



C

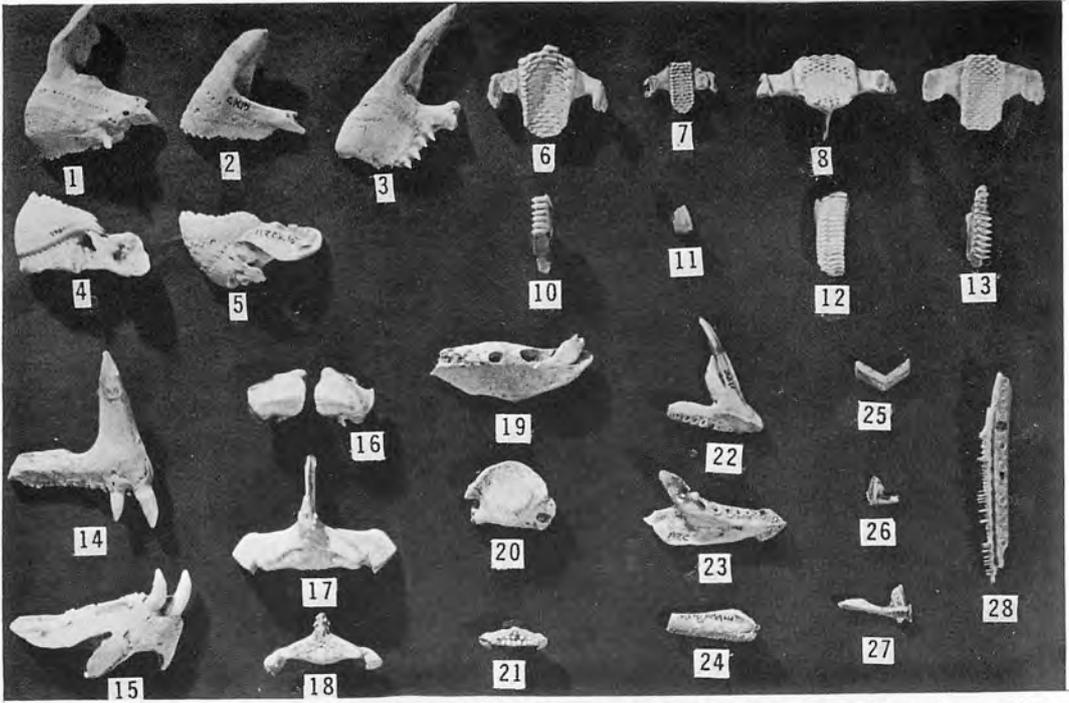
C. 甲殻類(カニ)のはさみ ($1 \times \frac{1}{5}$)



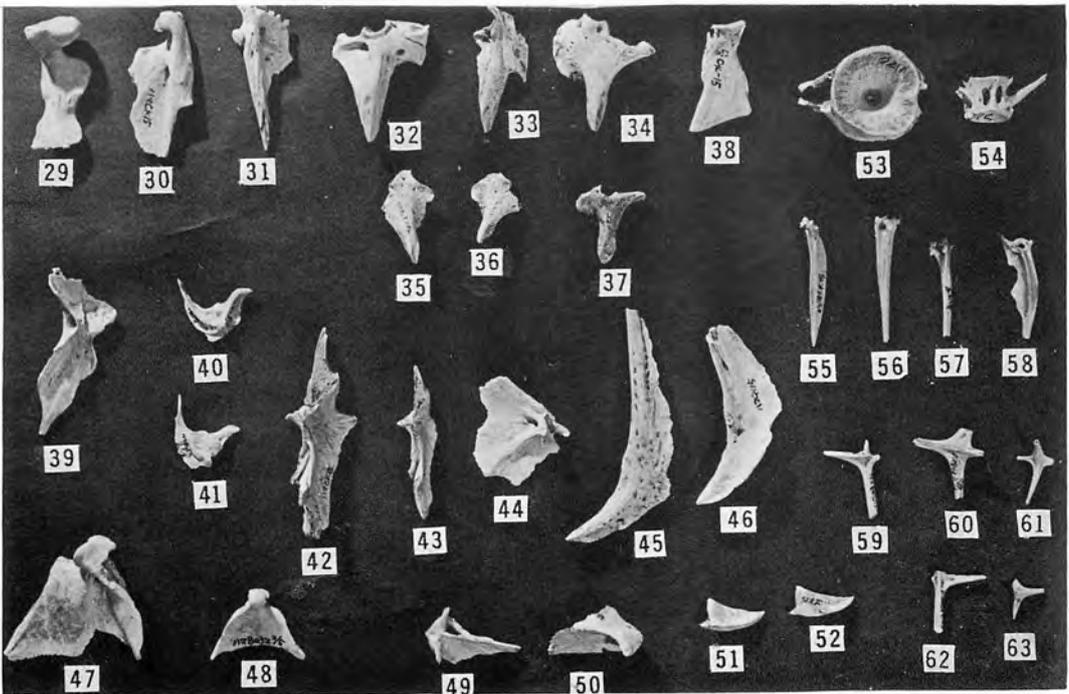
D

D. 魚類の鱗 ($1 \times \frac{2}{3}$)

渡喜仁浜原貝塚出土魚類遺存体



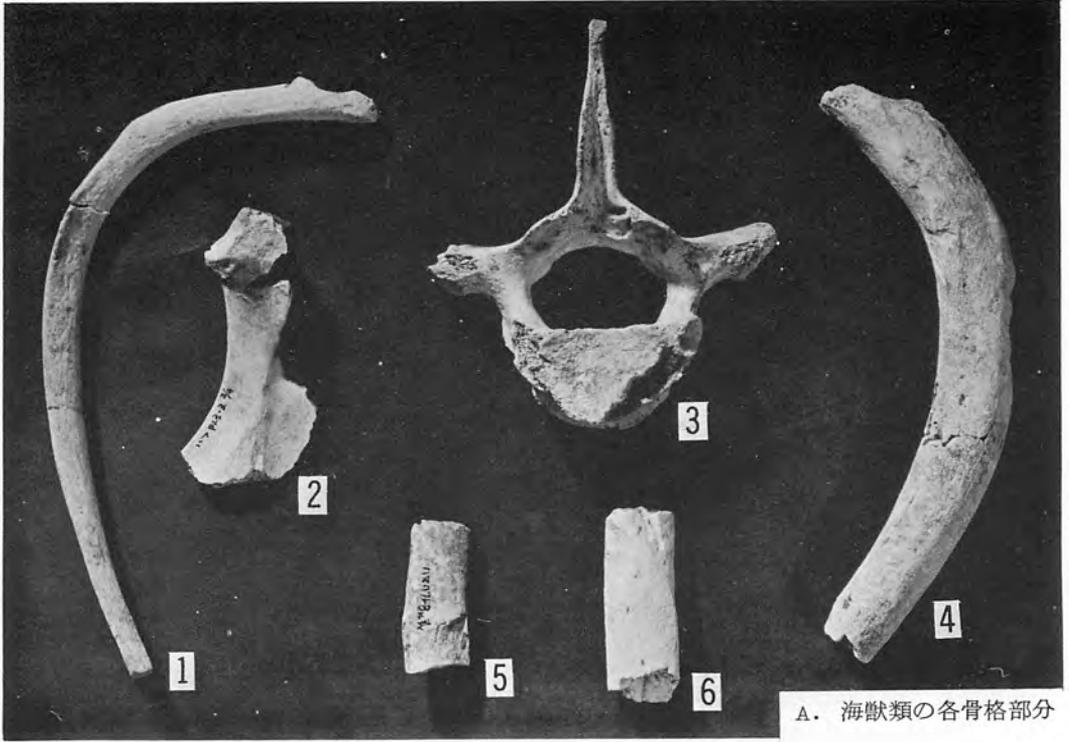
(1~13 ブダイ科、14~18・21 ベラ科、20 ハリセンボン科、22~23 フェフキダイ科、19・24~28 不明)



(第11表参照)

(1 × $\frac{1}{3}$)

渡喜仁浜原貝塚出土その他の動物遺存体



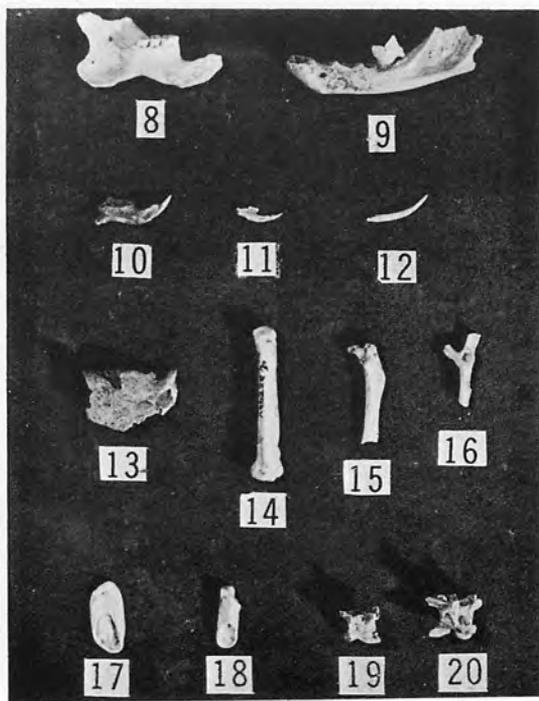
A. 海獣類の各骨格部分

($1 \times \frac{1}{3}$)



B. 種不明骨格〔シカ?〕

($1 \times \frac{1}{2}$)

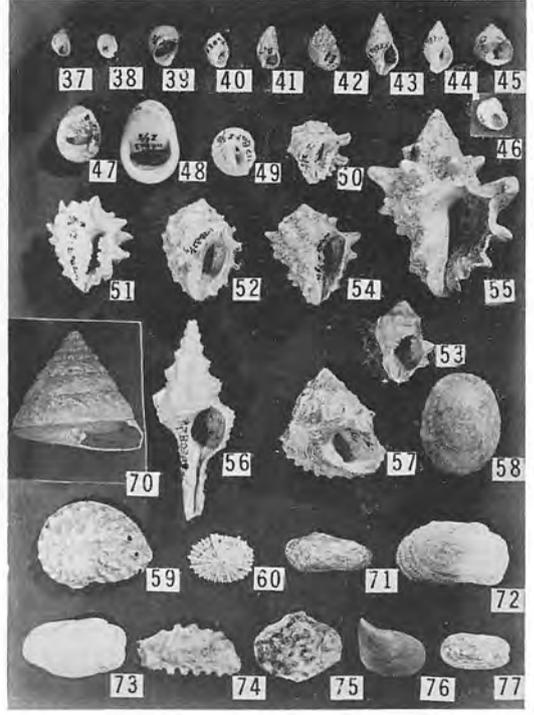
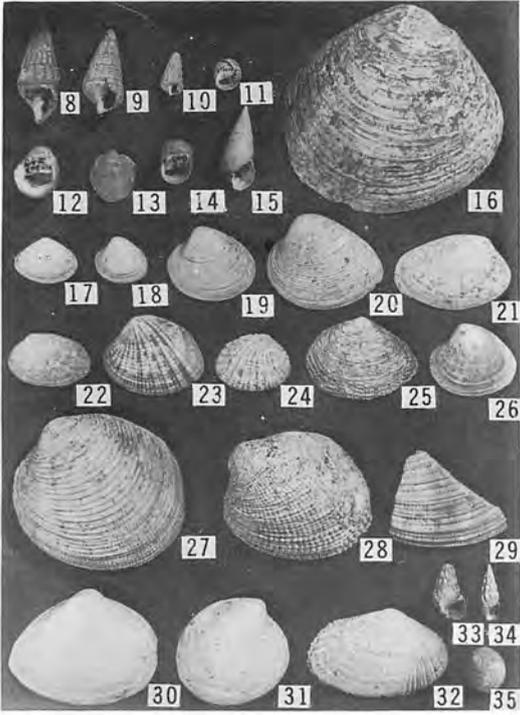
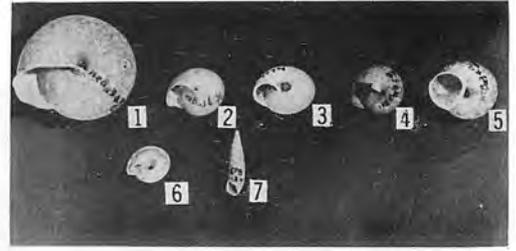


C. その他の動物遺存体骨格〔8ケナガネズミ、他不明〕

($1 \times \frac{5}{9}$)

1. 陸産貝 (No. 1~7)
2. 河川の貝 (No. 8~16)
3. 海産貝

- Aa. 潮間帯砂地の貝 (No. 17~36)
- b. 潮間帯岩場の貝 (No. 37~79)

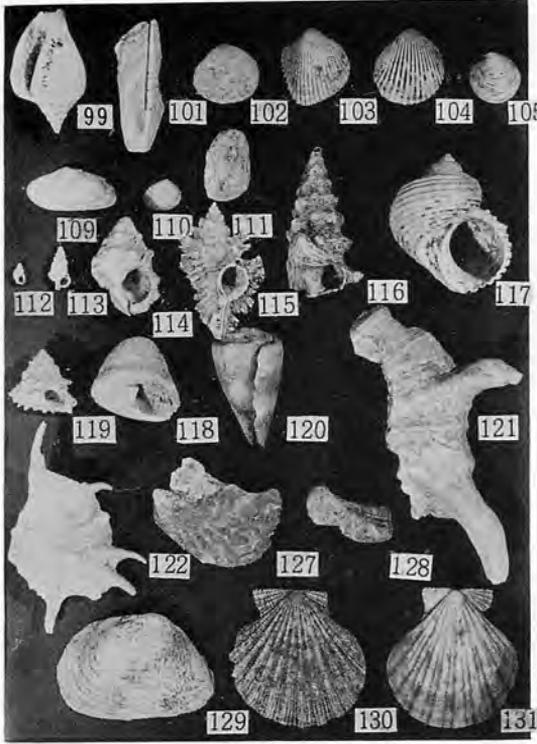


- Ba. 潮間帯～潮間帯下砂地の貝 (No. 80~82)
- b. 潮間帯～潮間帯下岩場の貝 (No. 83~98)

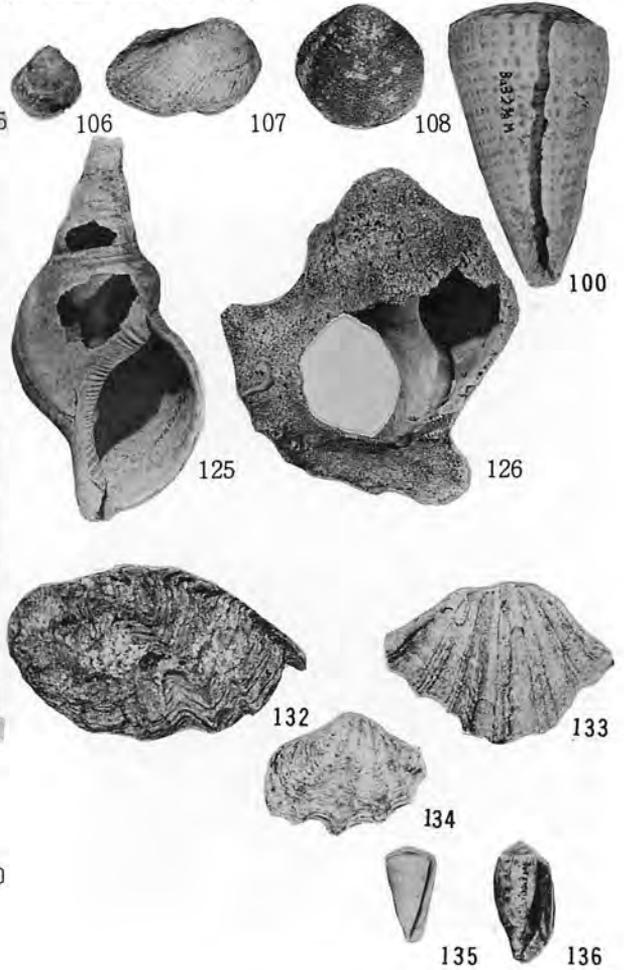


図版. 16

渡喜仁浜原貝塚出土貝類遺存体(2)と破損形態(1)



A. 出土貝類遺存体(2)

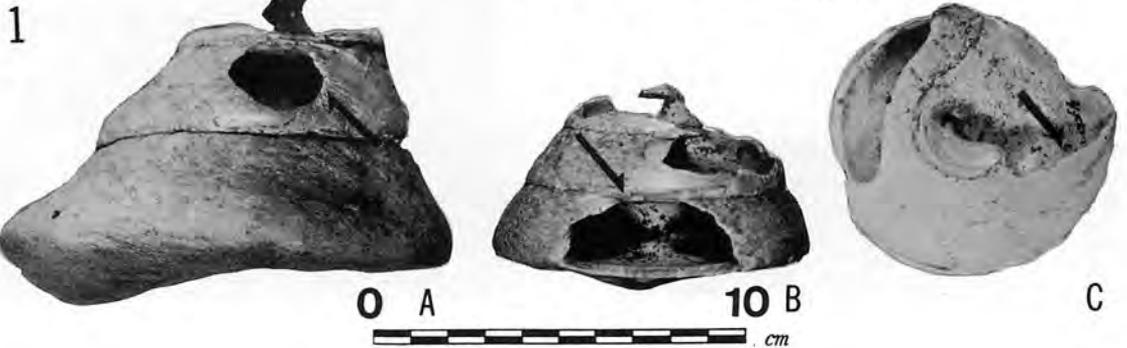


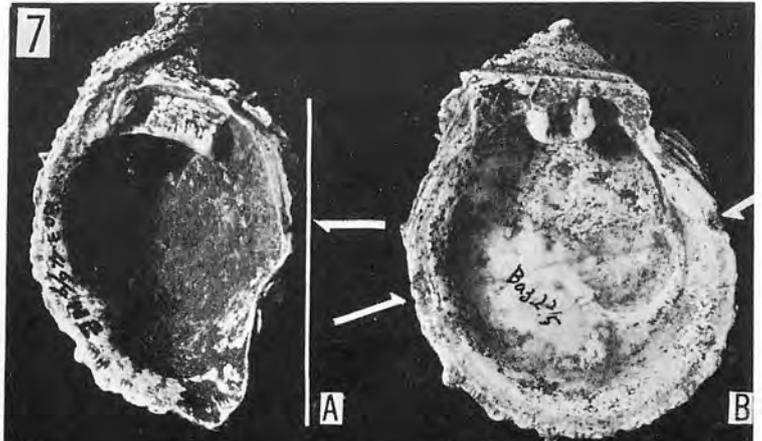
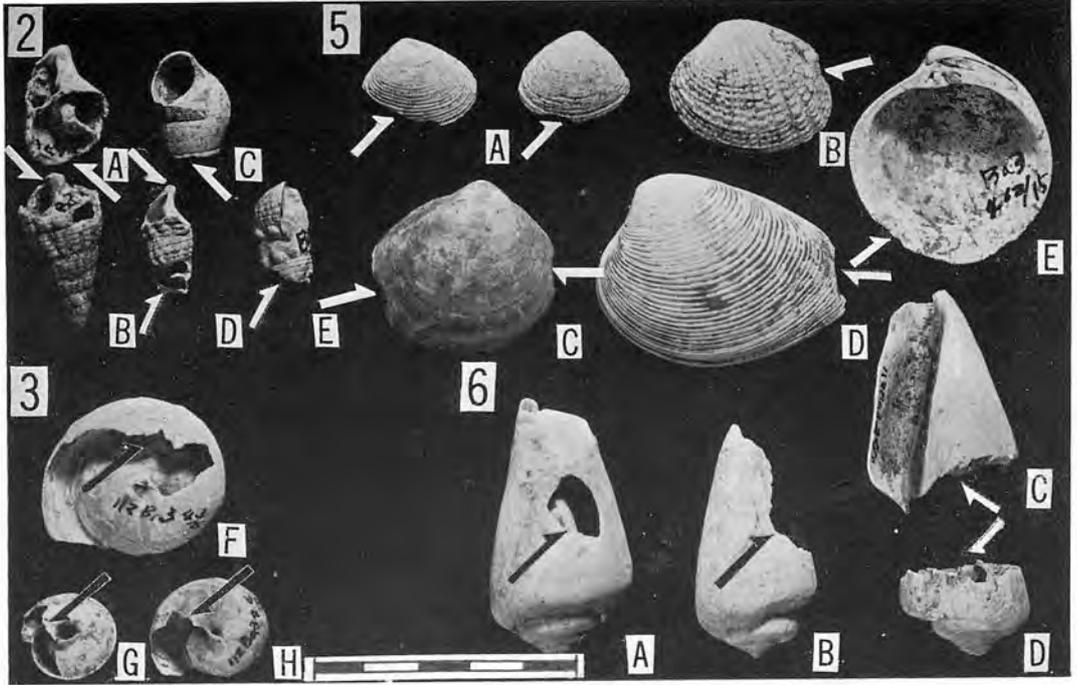
- Ca. 潮間帯下砂地の貝 (No. 99~111)
- b. 潮間帯下岩場の貝 (No. 112~134)
- c. 潮間帯下棲息地不明貝 (No. 135・136)

4. 種不明貝 (No. 137~141)

※ 36・61~69・82・83・123・124・137掲載写真なし

B. 貝類遺存体における破損形態(1)





1. サラサバテイの例
2. うみにな、かわにな科の例
3. 陸産貝の例
4. 二枚貝類の例 (1)
5. 二枚貝類の例 (2)
6. マガキガイの例
7. 8. 二枚貝類の例 (3)

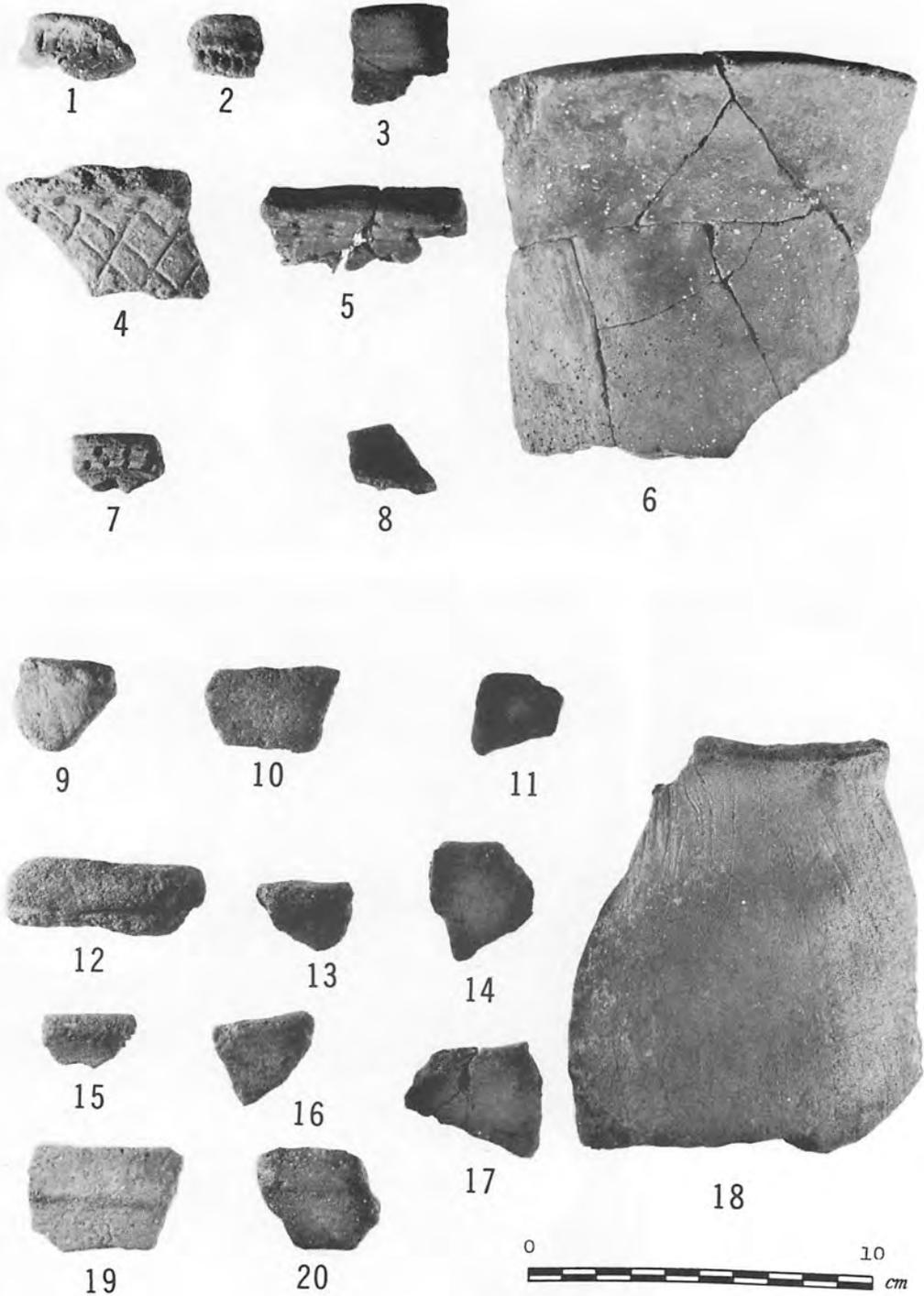


※破損部は矢印の部分

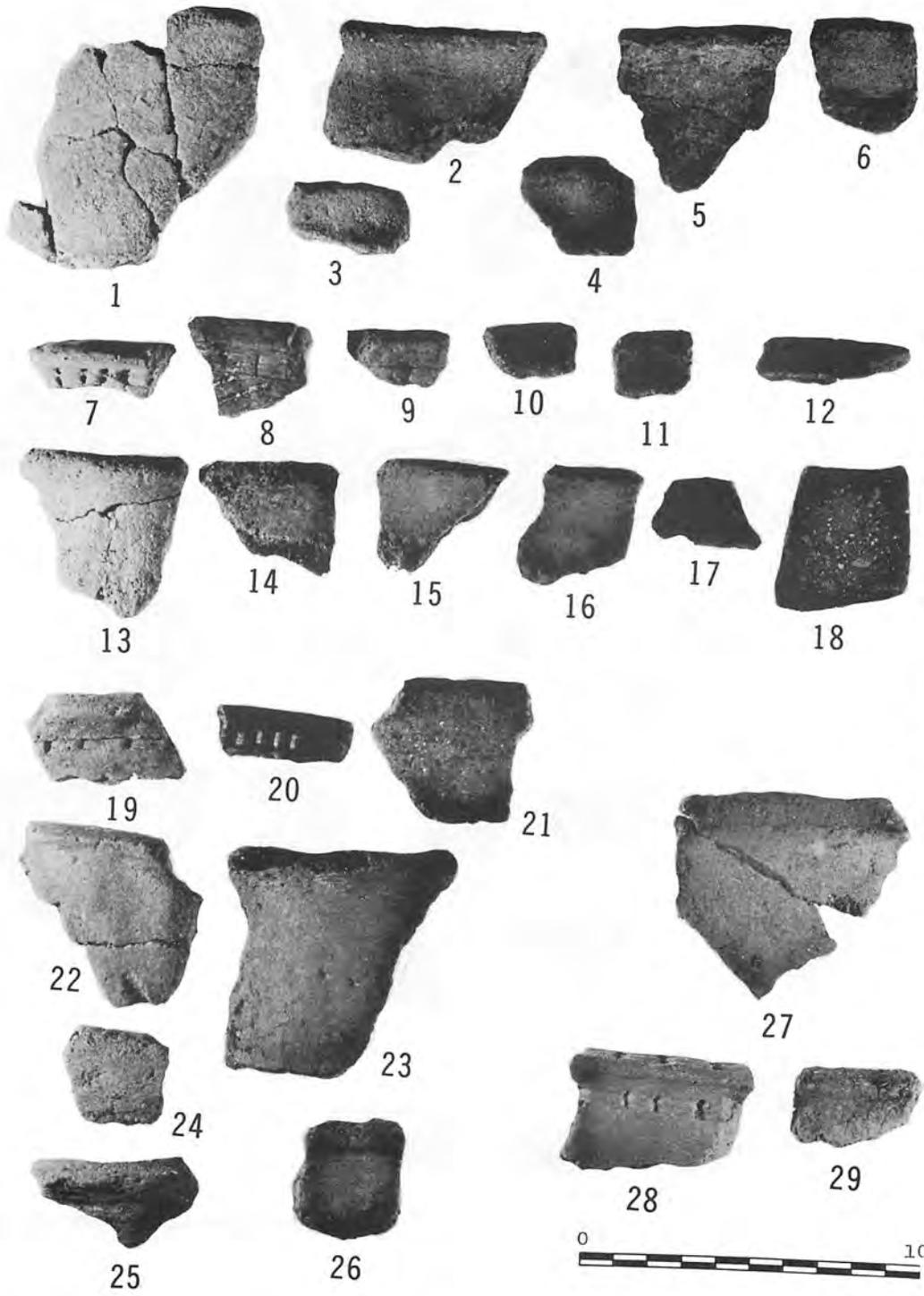
渡喜仁浜原貝塚出土貝類遺存体における破損形態(2)

図版. 18

B地区 a3ピット出土の前・中期系土器(1)〔IV層 $\frac{0}{30}$ cm深度〕



※9はIII層上部出土

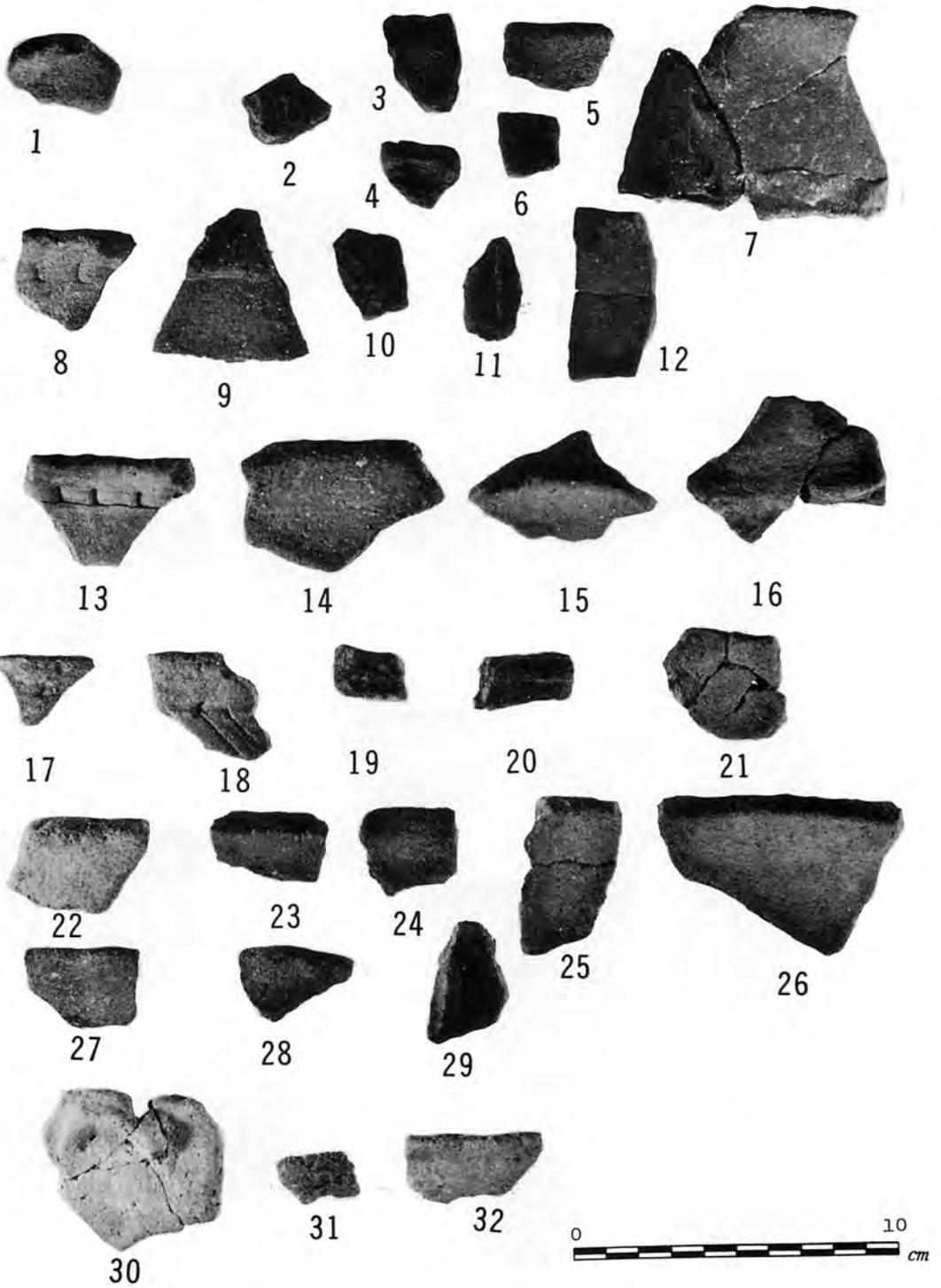


B地区a3ピット出土の前・中期系土器(2)〔IV層〕

[30 ~ 60cm (1~6)、60 ~ 90cm (7~18)、90 ~ 120cm (19~26)、120 ~ 150cm (27~29)]

図版. 20

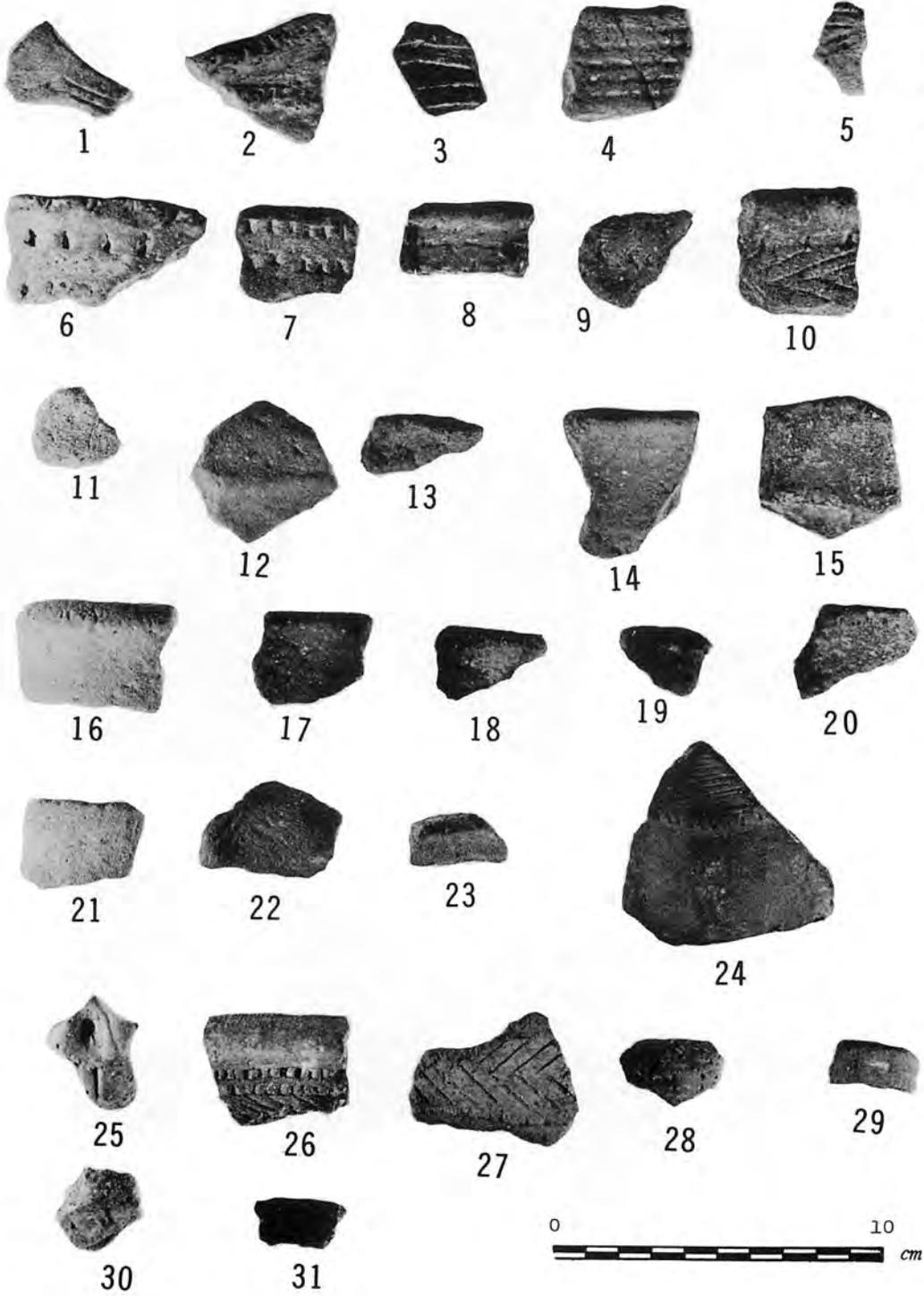
B地区
a3ピット
出土の前・
中期系土器
(3)
〔Ⅱ・Ⅲ層〕



〔Ⅲ層上部 (1~16)、Ⅱd層下部 (17~21)、Ⅱd層上部 (22
•25•26)、Ⅱc層 (23•24•27•29)、Ⅱb層 (28•30~32) 〕

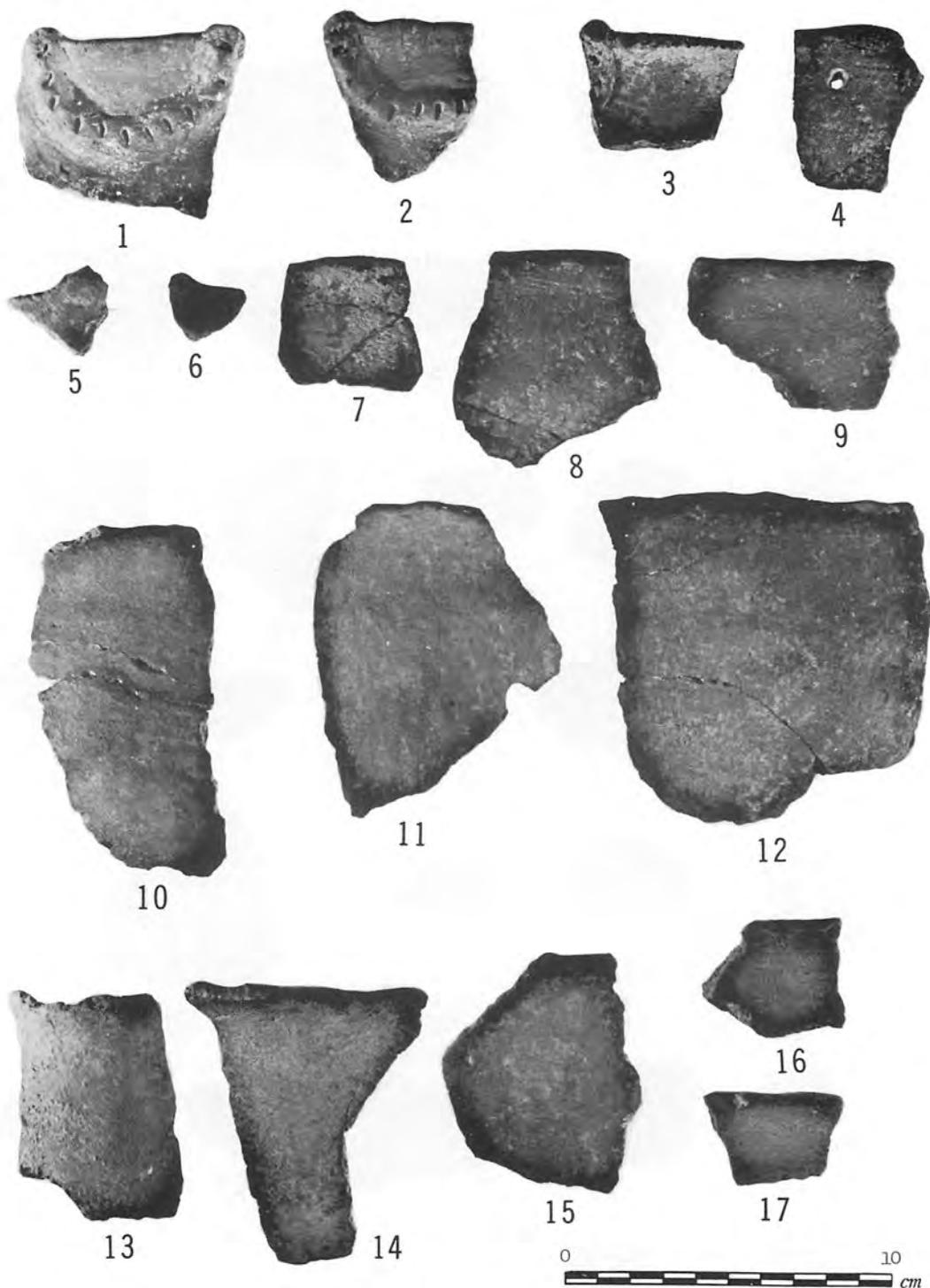
図版. 21

表採の前・中期系土器口縁部及び有文胴部

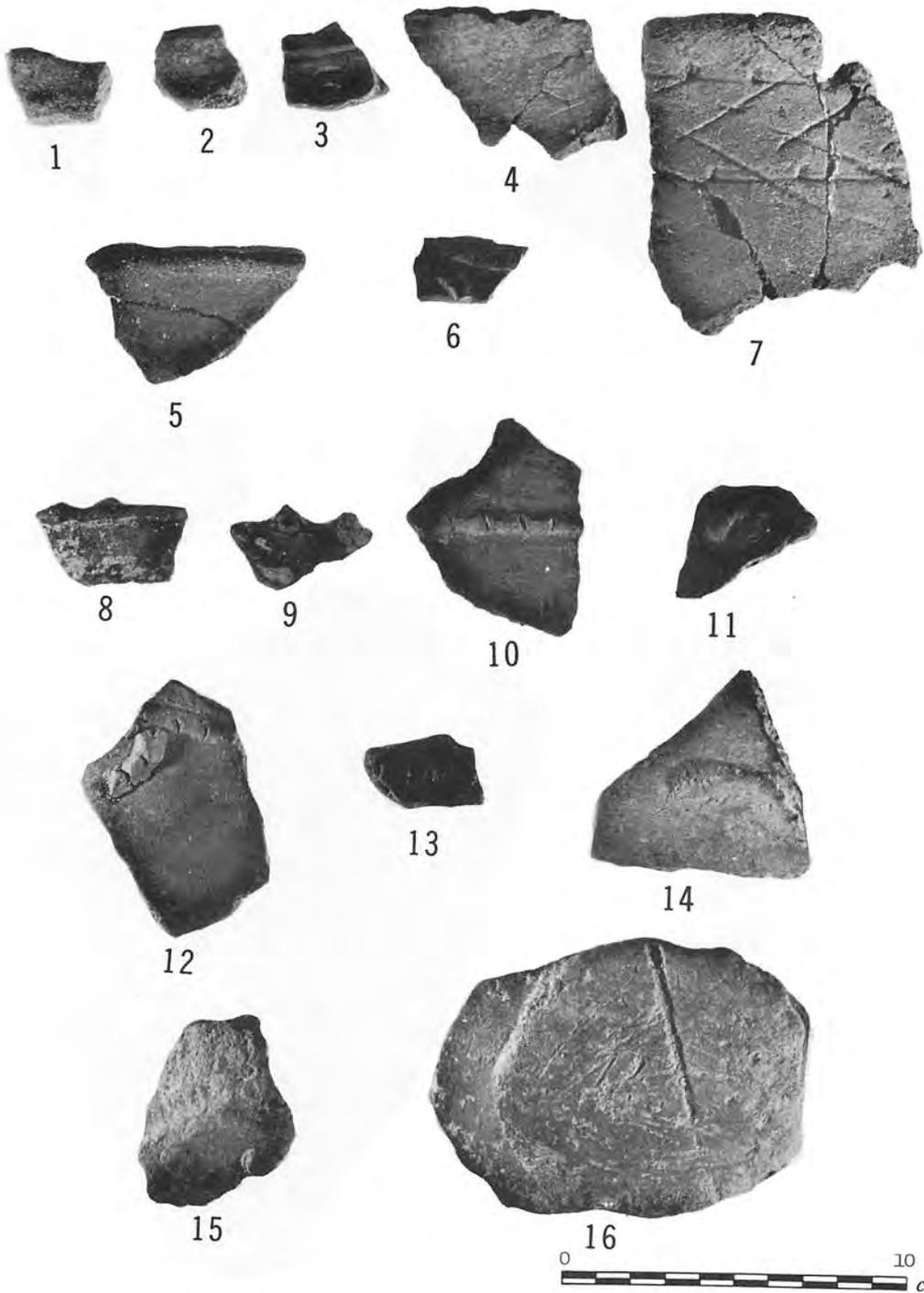


図版. 22

B
地区
a3
ピ
ット
出
土
の
後
期
系
土
器
〔
II
層
〕



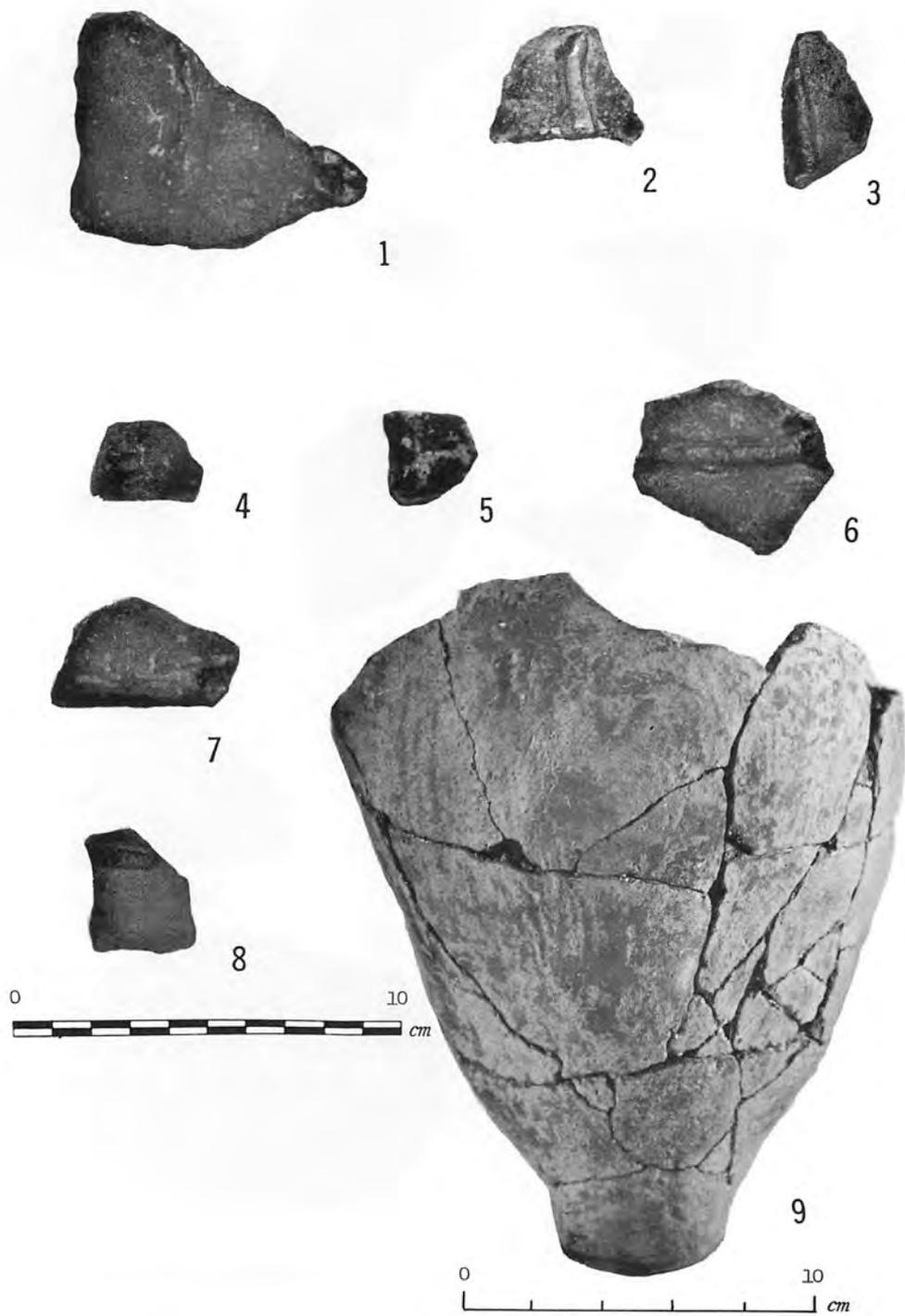
〔 II b層 (5・6)、II c層 (10~12・15)、II a層上部
(1~4・7・9・16・17)、II a層下部 (8・13・14) 〕



B-c 3ピット〔I層(1)、IIa層(2・3・6)、IIb層(7)〕：
B-c 4ピット〔IIa層(5)〕；C地区〔8~16〕

図版. 24

後期系有文土器及び完形土器



B-a3ピット(Ⅱ層(3)) : C地区(1・2・4・6~8) ※第二次出土遺物(9-個別スケール)



1. 貝殻条痕



2. ヘラ削り痕



3. 撫で痕



4. 研磨痕



5. 木目痕 ?

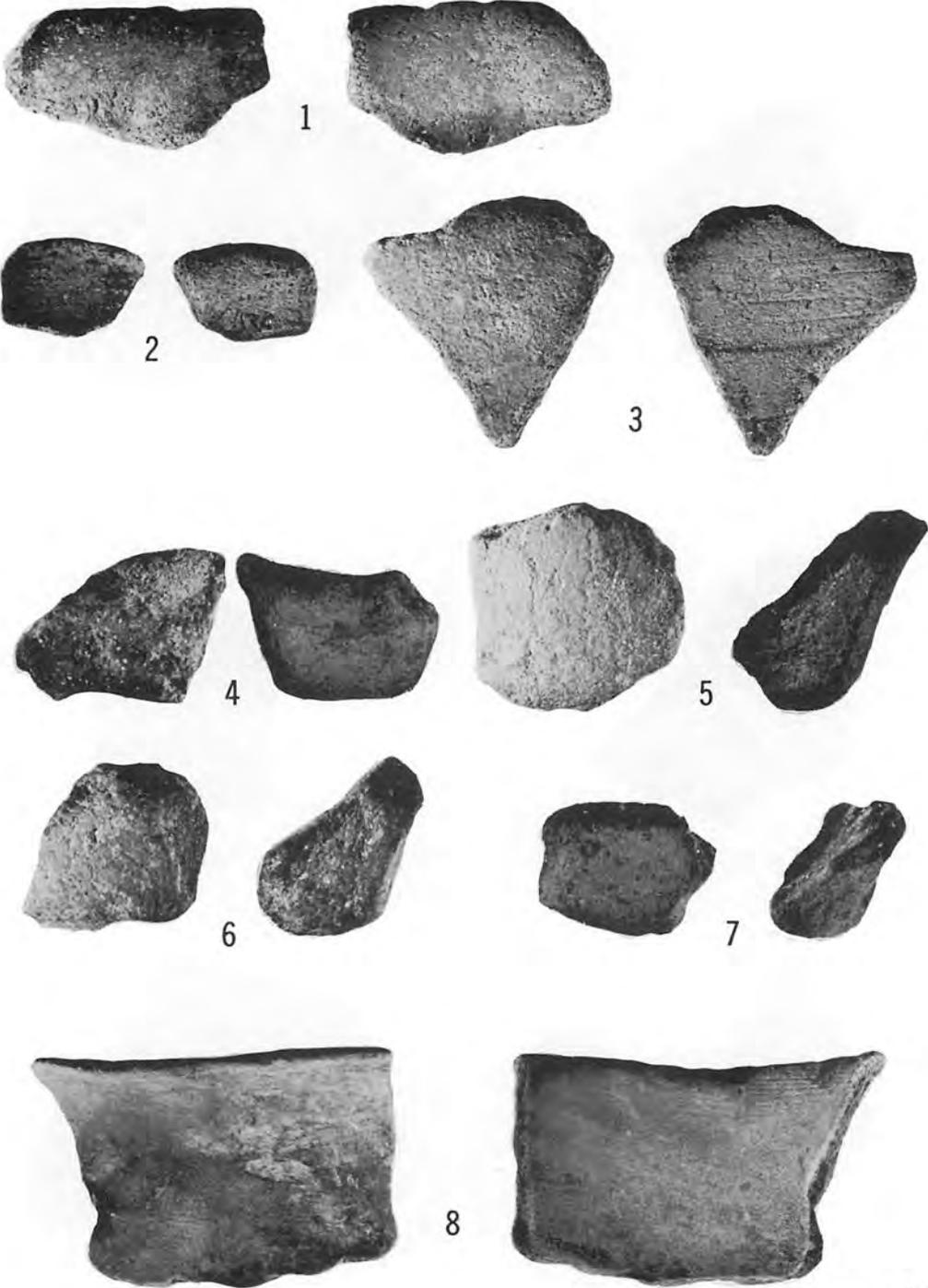


6. 雑仕上げ



図版. 26

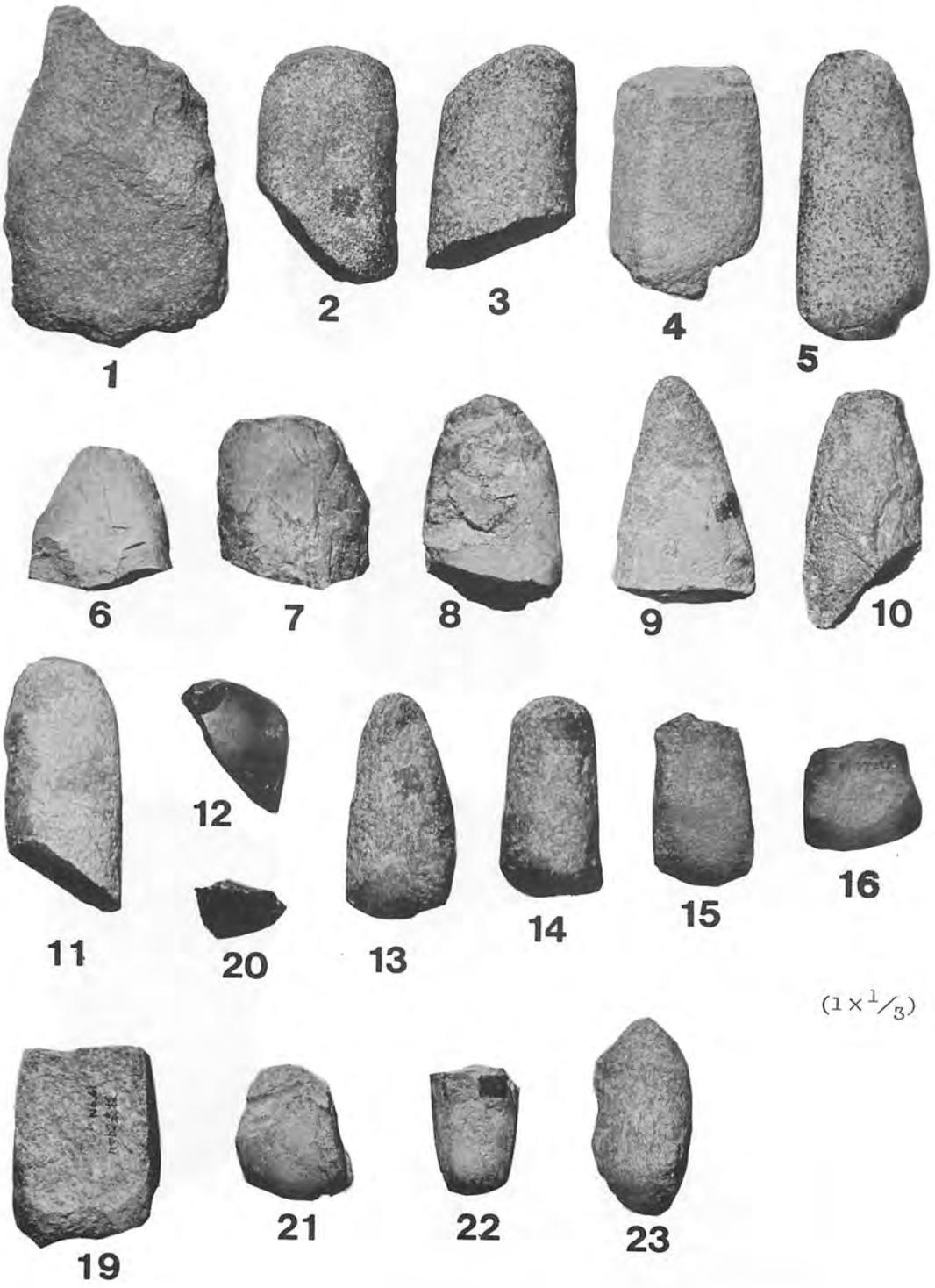
移
入
土
器



0 10 cm

B-a3ピット〔Ⅱ層(1)、Ⅱb層(4)、Ⅱd層下部(6)、Ⅳ層0~30cm(8)〕：c地区〔2・3・5・7〕

渡喜仁浜原貝塚出土の石斧状石器類



(1×¹/₃)

図版. 28

渡喜仁浜原貝塚出土の擦石類(1)



25



26



27



28



29



30



35



36



39



37



38

(1×1/3)

(第40表参照)

渡喜仁浜原貝塚出土の擦石類(2)



54



55



59



56



60



61



62



53



63



57



114



64



65

(1×1/3)



66

※114はその他の石器類

渡喜仁浜原貝塚出土の擦石類(3)



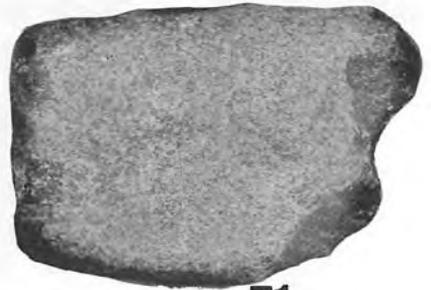
68



69



70



71



72



73



74



75

(1×1/3)



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88



92



89



90



91

(1× $\frac{1}{3}$)

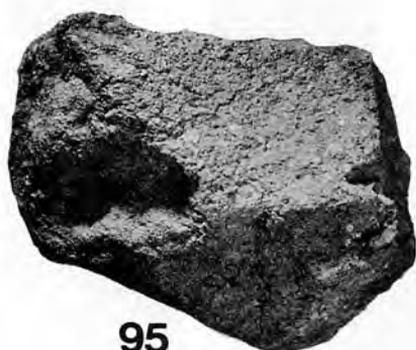
渡喜仁浜原貝塚出土の石うす類



93



94



95



96

($1 \times \frac{1}{4}$)



97

渡喜仁浜原貝塚出土のその他の石器類



100



101



104



105



102



103



106



107

(1×1/3)



108

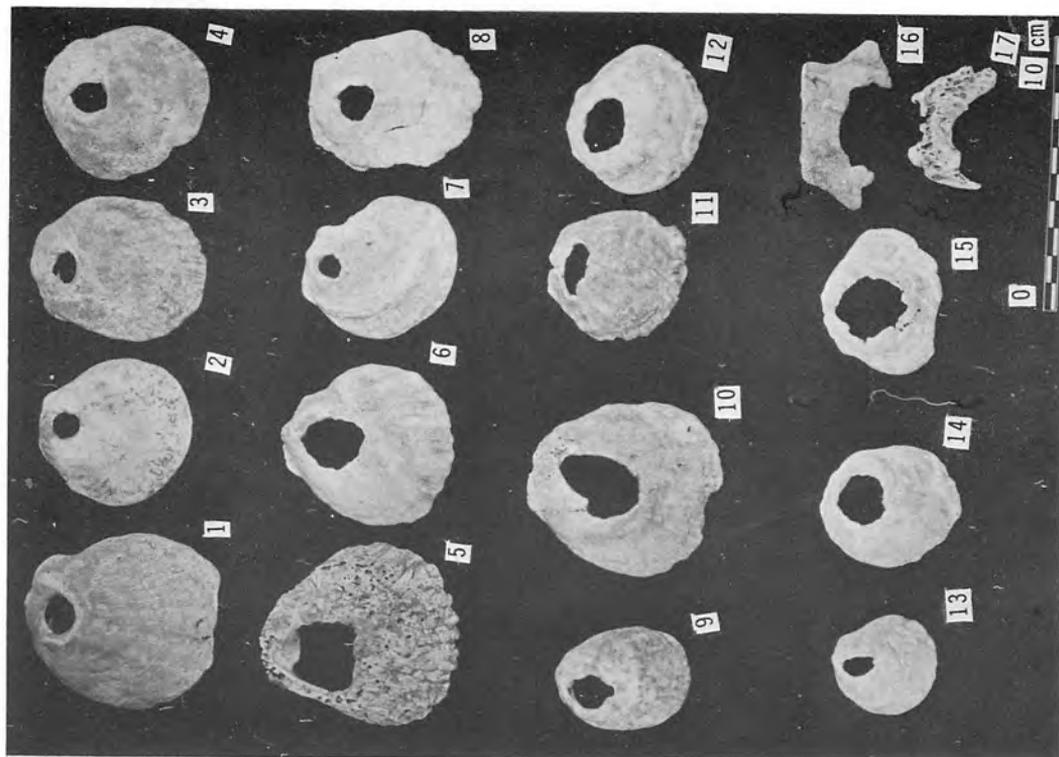


109



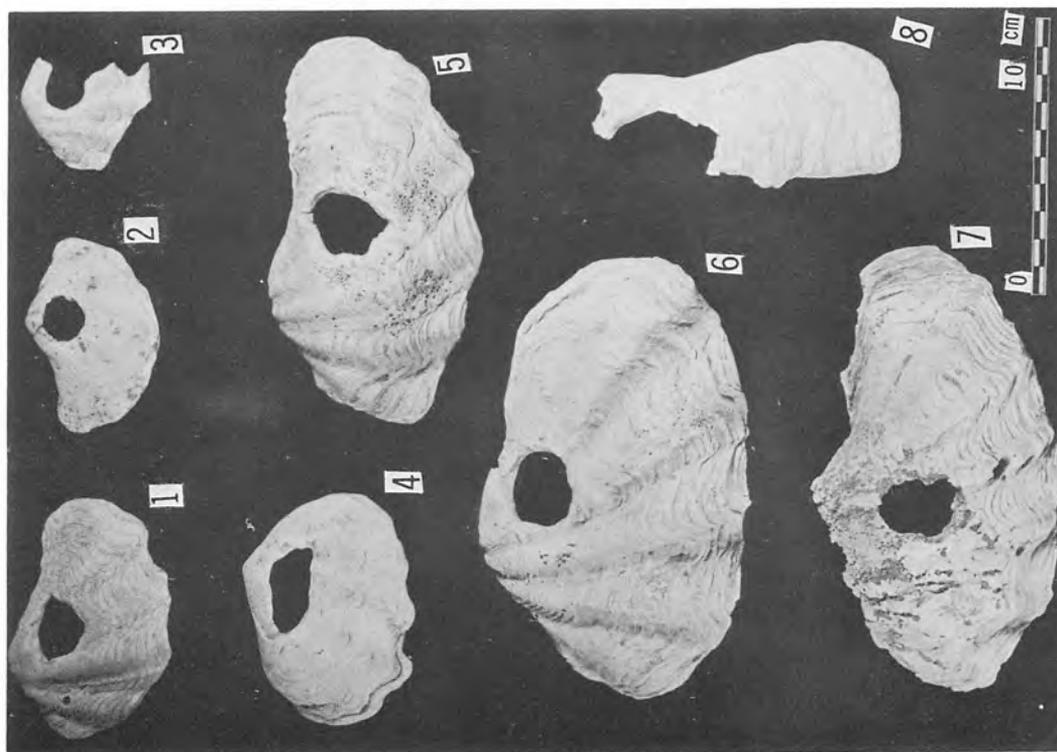
110

(1×1/1)



A. うみぎくがい科製貝錘

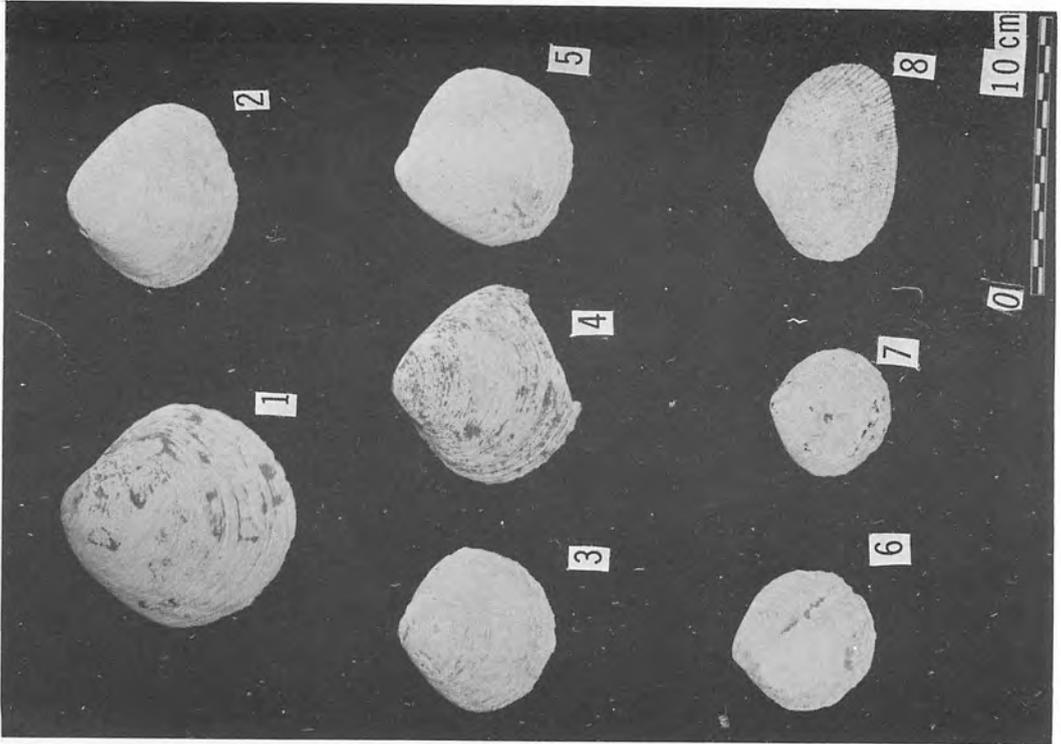
B地区〔表採(8・11・14・17・5)I層(1)、II層(2・3・9・10・12・13)
 : 不明(4・7)〕: C地区(6・15・16)



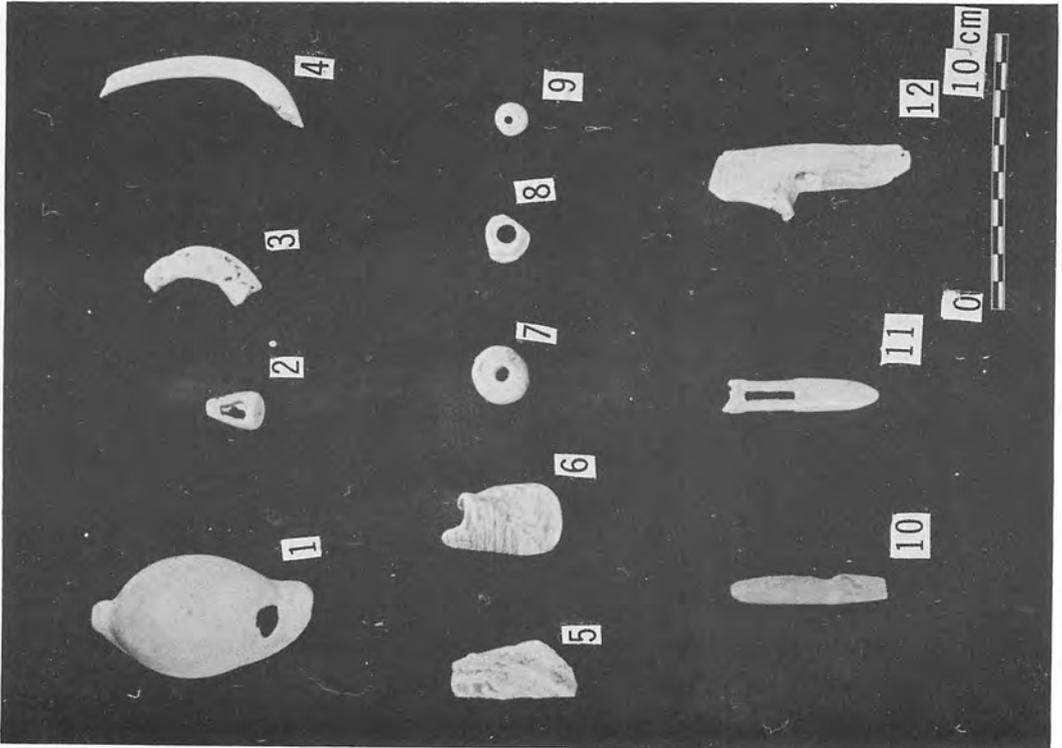
B. シャコがい科製貝錘

B地区〔表採(3・4)、II層(1・2・5・8)〕: C地区(6): D地区(7)

A. 貝 刃
B地区(II層(2・3・4・8)、IV層(5・6・7)) : C地区(1)

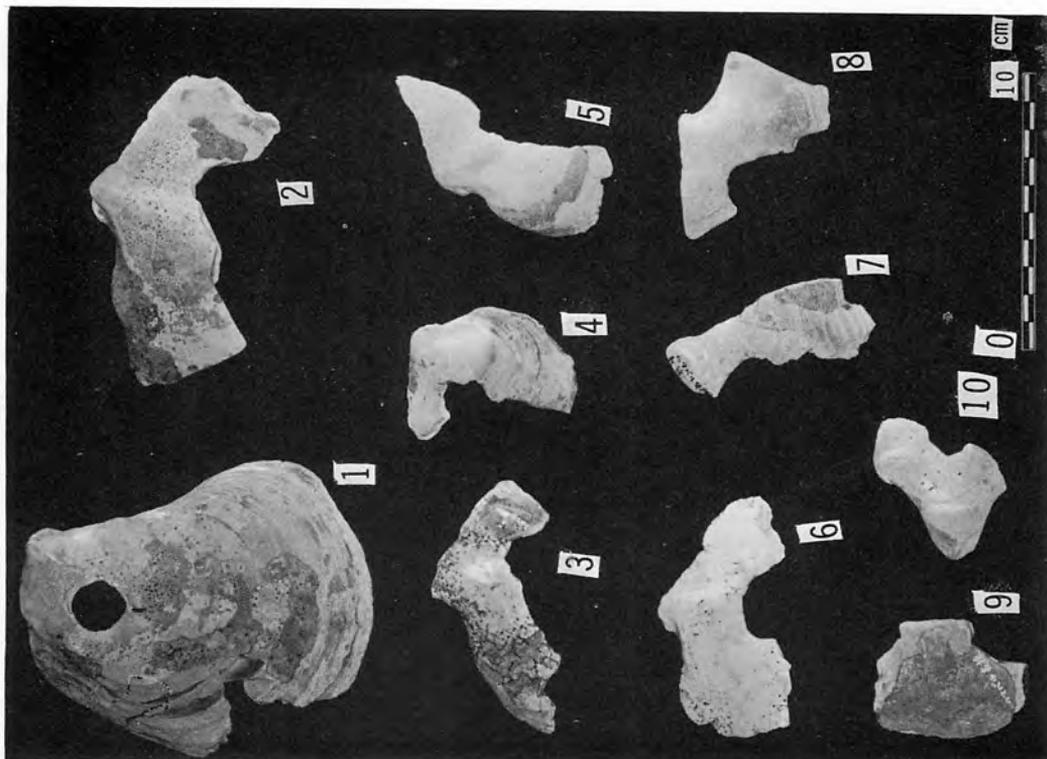


B. その他の貝製品、骨製品
B地区(表採(1・8・9)、II層(2・9・11・12)、IV層(4・5・6・10)) : C地区(7)



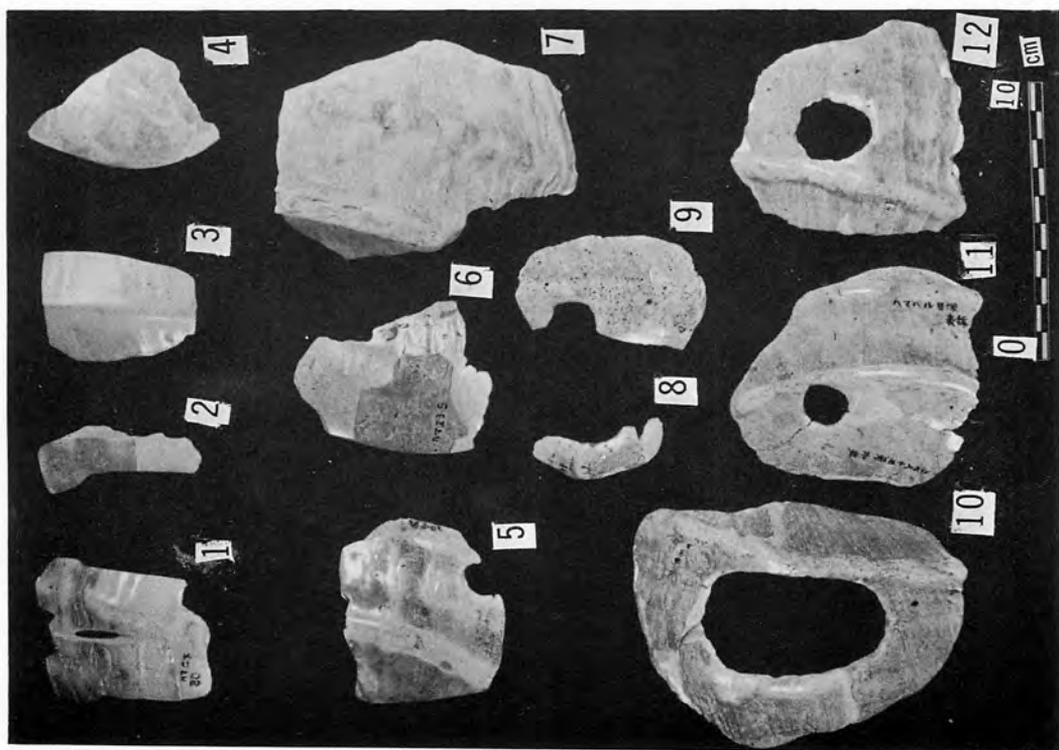
渡喜仁浜原貝塚出土貝刃及びその他の貝製品、骨製品

渡喜仁浜原貝塚出土土具種別製品(1)



A. アコヤガイ製品

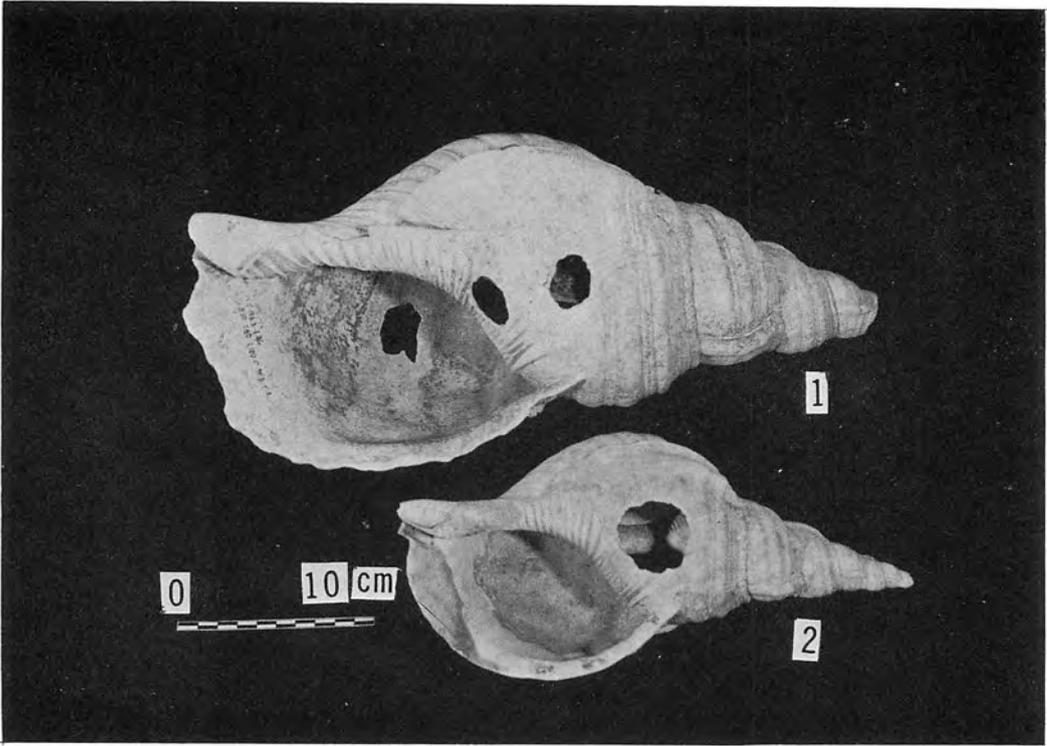
B地区(表採(2・8)、II層(1・9)、IV層(4~6・10)) : C地区(7) : 不明(3)



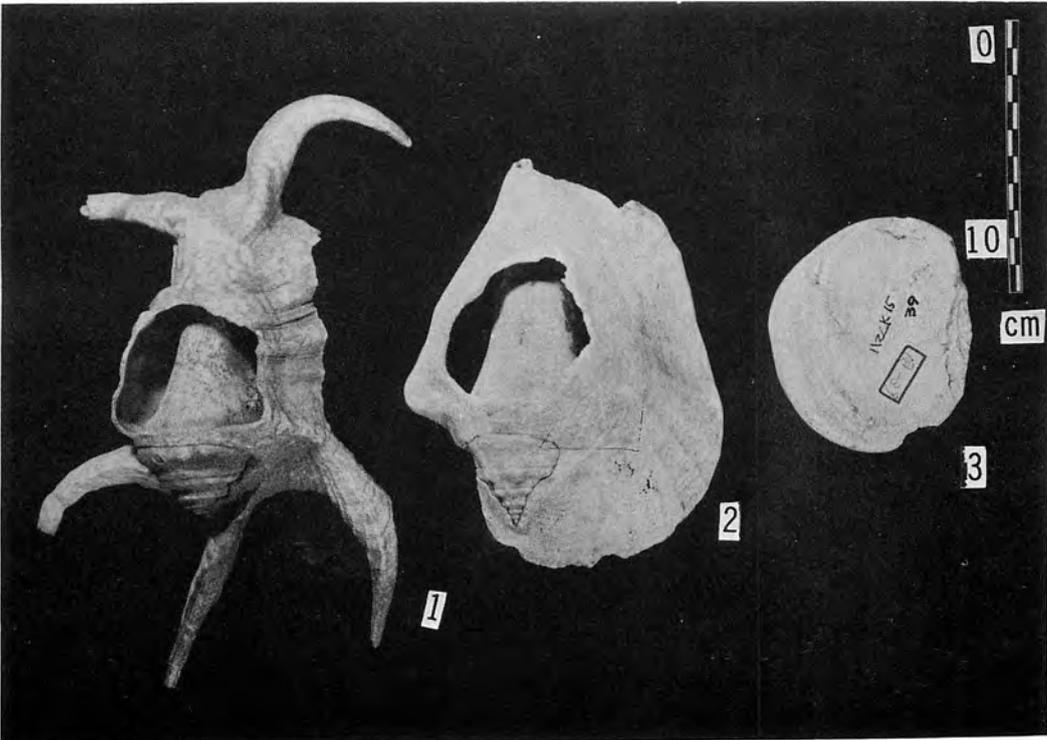
B. ヤコウガイ製品

砂浜表採(1) : B地区(表採(2・8・11)、II層(4・5・9・10)) : C地区(7

※ 第二次調査出土遺物(3・6・12)



A. ホラガイ製品
B地区〔IV層90~120cm(1)〕:C地区:(2)



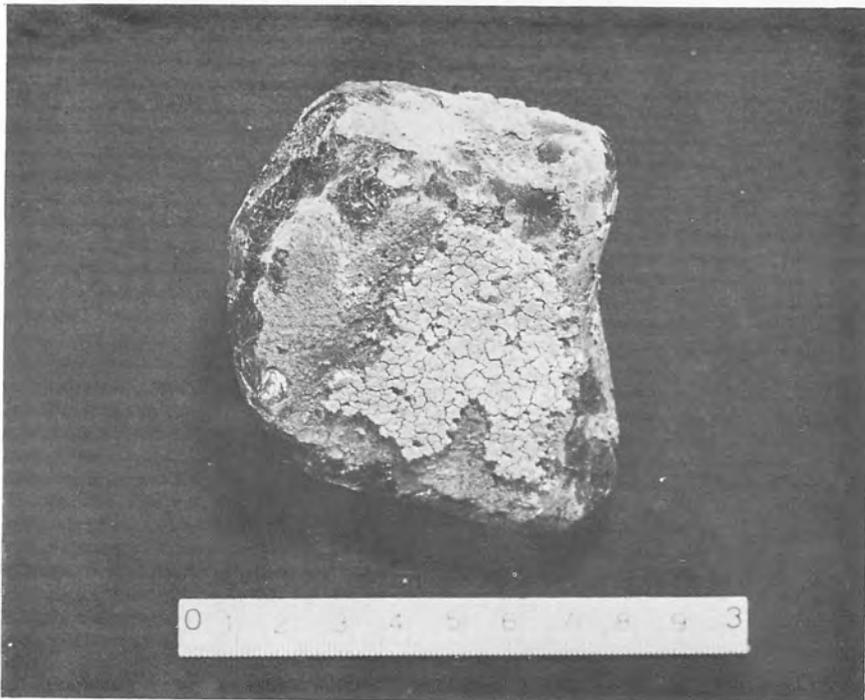
B. その他の貝製品(2)
B地区〔II層(2)〕:C地区(1・3)

渡喜仁浜原貝塚出土の骨製品及び特殊遺物



A. 海獣骨製品
C地区 k 15ピット

(1 × $\frac{1}{3}$)



B. 特殊遺物
B地区 a 3ピット (II d 層)

今 帰 仁 村

渡 喜 仁 浜 原 貝 塚
調 査 報 告 書

渡喜仁浜原貝塚調査団 編

例 言

1. 本書は、文化庁の緊急調査補助費を受け、今帰仁村教育委員会が、1976年4月より5月、同年8月の二次に互り発掘調査を行なった同村渡喜仁浜原貝塚の調査報告書である。
2. 本書の内容は、第一次調査を中心に、一部考古資料については、第二次調査出土遺物をも含めて検討を加えたものである。
3. 本書では、調査中に出土した各種の遺物を、食料残滓・土器・石器および石製品・貝製品・骨製品に大別した。そして、食料残滓貝類遺存体（作図なし）・石器および石製品・貝製品・骨製品においては、本文中の番号と図版、作図、挿表の番号は一致する。
4. 設定グリッドの名称は、各地点ごとに相異なる。すなわち、B地区は南北方向に数字を、東西方向にアルファベット小文字を配し、2m間隔に、南側から1・2・3・4・5、西側からa・b・c・d・eと柵目をつくった。そして、それらが交叉する区間を、それぞれa1・a2・・・グリッドと呼称した。そのうち、発掘を行なった部分は、おのおの1.5m四方である。なお、グリッドをピットと表現した場合と、グリッドの南北方向、東西方向への連なりをトレンチと呼称した場合がある。
5. 本書では、層位をアラビア数字で記した。なお、B地区II層については、それを細分し、各小層にアルファベット小文字を付し、両者を併用した。

(例) 黒褐色土層・・・IIa層

6. 本書では、本文中に引用した文献を〔著者名、発表年次〕の形式で表現し、巻末の文献目録と対照した。また、本文中で詳述できなかった分については、その箇所〔注〕を付し、各章の末尾で述べた。なお、食料残滓を整理・執筆するにあたって、参考となった文献については、それが、多岐に互ったため割愛し、別に『綴じ込み』で注記した。
7. 本書で用いた時期区分は、高官廣衛氏の説を基本とした。
8. 本文中の出土遺物各論（第3～6章）においては、冒頭に、各出土遺物担当者の整理・執筆にあたっての視点・方法等を添えた。
9. 出土遺物のうち、食料残滓の同定は、獣類遺存体を大城逸朗氏（県立博物館学芸員）・川島由次氏（琉大農学部助教授）に依頼した。魚類・貝類遺存体については、食料残滓班が、出土遺物の中より異種および異魚類骨格部と思われるものを抽出し、それを、吉野哲夫氏（琉大理工学部講師）・大城逸朗氏に委ねた。なお、不明貝種は、沖縄貝類標本館に展示してある現生種と比較することにより、貝種を判定した。その判断は、当館の仲嶺俊子氏と食料残滓班による。

石器および石製品・土器の混和材の石質同定は、大城逸朗氏に依頼した。混和材の石質同定は、土器班が、出土遺物を胎土分類したなかの典型的土器数片による。

10. 出土土器の作図については、器面調整痕の状態をよりよく示すために、若干の記号を用いた。孤状の破線は「指圧痕」を、対をなす短線は「ヘラ撫で痕」を、数条の平行線のうち、その間隔の狭いものは「ヘラ撫で」による「刷毛目痕」を、広いものは「貝殻条痕」を、それぞれ示す。また、方向が、一定なまばらな短線は「ヘラ削り」による「擦痕」を示している。
11. 本書に掲載した空中写真は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の20,000分の1空中写真

を複製したものである。(承認番号)昭52沖複、第6号。

12. 本書に掲載した地図〔第2図〕は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の50,000分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭52沖複、第23号。

13. 出土した遺物の注記は、次のように行なった。

遺跡名 地区・グリッド名 層位名 深度

(例) ハマBa3・II0/20 ~ 「B地区a3グリッドII層0より20cm」出土の意。

14. 出土した遺物・諸記録は、今帰仁村教育委員会と県立博物館に保管される。

執筆分担

大城 逸朗 (県立博物館学芸員 自然系担当)

第1章の1

(括弧内は現職) 新田 重清 (県立博物館学芸員 考古学担当)

第1章の2, 第2章の1・2・4, 第7章

與 那覇朝則 (琉球大学法文学部学生)

第3章の1~4・6・8

呉屋 義勝 (琉球大学法文学部学生)

第2章の3・4の一部, 第3章の5・8, 第7章の一部

池原喜美江 (沖縄県陸運協力会)

第3章の5

平良 睦子 (琉球大学法文学部学生)

第1章の2の一部, 第4章の1

恩河 尚 (琉球大学法文学部学生)

第4章の2・4

家田 淳一 (琉球大学法文学部学生)

第4章の3

米田 善治 (琉球大学工学部学生)

第5章

比嘉 春美 (県教育庁文化課嘱託)

第6章の1

山田 正 (読谷村立歴史民俗資料館嘱託)

第6章の2

渡久地 健 (琉球大学法文学部学生)

第3章の7

森 巖 (琉球大学工学部教授)

付章

玉城 勝男 (今帰仁村教育委員会社会教育主事)

地域と文化財

本文目次

第1章	渡喜仁浜原貝塚の位置	10
1.	地理的環境	10
2.	歴史的環境	11
第2章	渡喜仁浜原貝塚の調査経過	18
1.	調査体制	18
2.	調査にいたるまでの経過	19
3.	調査の目的および方法	19
4.	調査成果	20
第3章	渡喜仁浜原貝塚の食料残滓	33
1.	獣類遺存体	34
2.	鳥類遺存体	36
3.	海獣類・甲殻類遺存体	37
4.	魚類遺存体	37
5.	貝類遺存体	46
6.	植物遺存体	63
7.	渡喜仁浜原貝塚周辺の海況	64
8.	食料残滓小結	65
第4章	渡喜仁浜原貝塚の土器	67
1.	前・中期系土器について (B地区 a 3ピットⅢ・Ⅳ層を中心に)	67
2.	後期系土器について (B地区 a 3ピットⅡ層を中心に)	73
3.	移入土器について	87
4.	土器小結	88
第5章	渡喜仁浜原貝塚の石器・石製品	99
1.	石斧状石器類	102
2.	擦石類	105
3.	敲石類	109
4.	石うす類	110
5.	その他の石器・石製品	111
6.	石器小結	113
第6章	渡喜仁浜原貝塚の貝製品・骨製品	125
1.	貝製品	125
2.	骨製品	132
第7章	収束	136
付章	渡喜仁浜原貝塚の特殊遺物	143
一	地域と文化財	一

図版目録

巻頭 渡喜仁浜原貝塚周辺航空写真

図版.1 渡喜仁浜原貝塚景観(1)

①遺跡前景—東シナ海・古宇利島を見る。

②遺跡遠景—東方より

図版.2 渡喜仁浜原貝塚景観(2)

③遺跡遠景及び周辺遺跡群—西方より

④遺跡近景—北方より

図版.3 調査地区景観(1)

⑤A地区の様相—南方より

⑥B地区西壁調査前の様相

図版.4 調査地区景観(2)

⑦B地区東壁における石積みの様相

⑧C地区の様相—南方より

⑨D地区の様相—東方より

図版.5 調査風景

⑩B地区抜採風景

⑪B地区cトレンチ調査風景

⑫C地区kトレンチ調査風景

⑬海況調査風景〔1977年1月4・5日〕

図版.6 設定ピット—共に南方より

⑭全地区設定ピット

⑮「第二次調査」の全地区設定ピット

図版.7 調査地区設定ピットの様相

⑯A地区b試掘溝の北壁断面

⑰C地区k15ピットの南壁断面

⑱B地区c4ピットIIa層の出土状態

⑲B地区a3ピットの西壁断面

図版.8 B地区a3ピットの東壁断面⑳

図版.9 B地区cトレンチの石列〔IIb層〕

㉑c3ピットの石列出土状態—東方より

㉒c2ピットの石列出土状態—南方より

図版.10 B地区a3ピットの遺物出土状況

㉓第1号遺物組成出土状態〔IIc層〕

㉔石器出土状態〔IIa層〕

㉕骨製品出土状態〔IIa層〕

食料残滓

図版.11 渡喜仁浜原貝塚出土イノシシの顎骨

図版.12 渡喜仁浜原貝塚出土イノシシの骨格

及び甲殻類、魚類の鱗

A.イノシシの各骨格部分

B.イノシシの長管骨の破損形態

C.甲殻類〔カニ〕のはさみ

D.魚類の鱗

図版.13 渡喜仁浜原貝塚出土魚類遺存体

図版.14 渡喜仁浜原貝塚出土その他の動物遺存体

A.海獣類の各骨格部分

B.種不明骨格〔シカ?〕

C.その他の動物遺存体骨格

図版.15 渡喜仁浜原貝塚出土貝類遺存体(1)

図版.16 渡喜仁浜原貝塚出土貝類遺存体と破損形態

A.出土貝類遺存体(2)

B.貝類遺存体における破損形態(1)

図版.17 貝類遺存体における破損形態(2)

土器

図版.18 B-a3ピット出土前・中期系土器(1)(IV層)

図版.19 B-a3ピット出土前・中期系土器(2)(IV層)

図版.20 B-a3ピット出土前・中期系土器(3)(II・III層)

図版.21 表採の前・中期系土器口縁部及び有文胴部

図版.22 B-a3ピット出土後期系土器〔II層〕

図版.23 特記土器一覧

図版.24 後期系有文土器及び完形土器(第二次出土)

図版.25 後期系土器における器面調整の手法

図版.26 移入土器

石器・石製品

図版.27 渡喜仁浜原貝塚出土の石斧状石器類

図版.28 渡喜仁浜原貝塚出土の擦石類(1)

図版.29 渡喜仁浜原貝塚出土の擦石類(2)

図版.30 渡喜仁浜原貝塚出土の擦石類(3)

図版.31 渡喜仁浜原貝塚出土の敲石類

図版.32 渡喜仁浜原貝塚出土の石うす類

図版.33 渡喜仁浜原貝塚出土のその他の石器類

貝製品・骨製品

図版.34 渡喜仁浜原貝塚出土貝類

A.うみぎくがい科製貝類

B.しゃこがい科製貝類

図版.35 渡喜仁浜原貝塚出土貝類及びその他の

貝製品、骨製品

A.貝類

B.その他の貝製品(1)、骨製品

図版.36 渡喜仁浜原貝塚出土貝類種別製品(1)

A.アコヤガイ製品

B.ヤコウガイ製品

図版.37 渡喜仁浜原貝塚出土貝類種別製品(2)

A.ホラガイ製品

B.その他の貝製品(2)

図版.38 渡喜仁浜原貝塚出土骨製品及び特殊遺物

A.海獣骨製品

B.特殊遺物

付 図

図版.39 参観者風景

A.展示会風景(1976年8月4日琉球新報)

B.B地区a3ピット西壁層断面説明

C.調査概要説明

挿 図 目 次

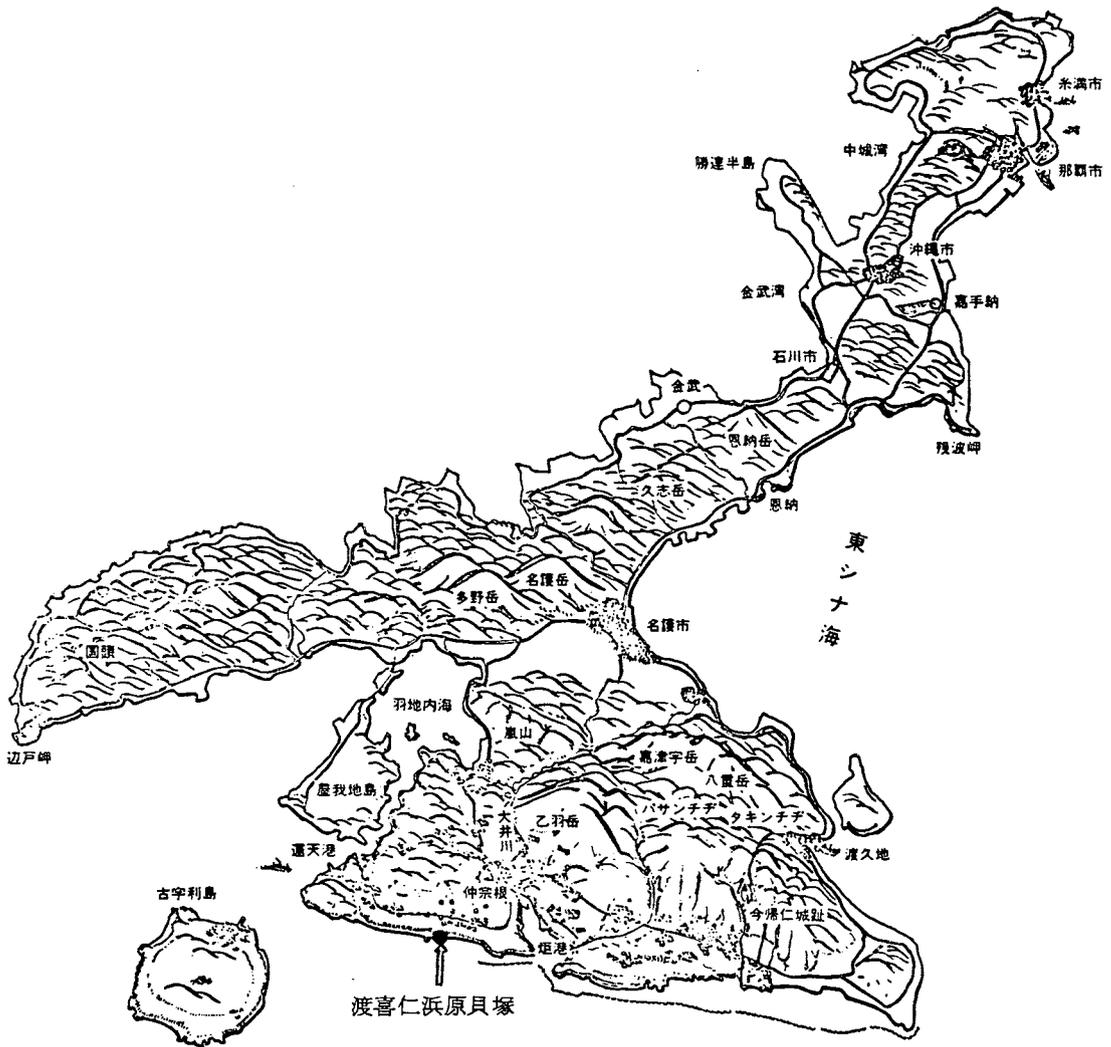
第1図	今帰仁村より見た沖縄本島の魚眼 俯瞰地図……………	9	第18図	B地区a3ピットII層出土の後 期系土器実測図(1)……………	94
第2図	本部半島北部における地形と主要 遺跡……………	15	第19図	B地区a3ピットII層出土の後 期系土器実測図(2)……………	95
第3図	渡喜仁浜原貝塚付近実測図・断面 模式図……………	21	第20図	後期系有文土器及び底部実測図……………	96
第4図	B地区a3ピット層序断面実測図……………	23	第21図	後期系土器底部実測図……………	97
第5図	各地区発掘ピット層序断面実測図……………	27	第22図	移入土器実測図及び後期系土器 拓影……………	98
第6図	B地区cトレンチの「石列」実測図……………	28	第23図	石斧状石器類実測図(1)……………	115
第7図	B地区cトレンチの遺物分布図……………	29	第24図	石斧状石器類実測図(2)……………	116
第8図	第1・2・3号遺物組成の出土略図……………	22	第25図	石斧状石器類(3)及び擦石類 実測図(1)……………	117
第9図	べら科の計測部位及び名称……………	40	第26図	擦石類実測図(2)……………	118
第10図	ふえふきだい科の計測部位……………	40	第27図	擦石類実測図(3)……………	119
第11図	渡喜仁浜原貝塚周辺の海況図……………	64	第28図	擦石類実測図(4)……………	120
第12図	渡喜仁浜原貝塚集団の食料資源……………	66	第29図	擦石類(5)及び敲石類実測図(1)……………	121
第13図	前・中期系土器における胎土の変遷 図解……………	70	第30図	敲石類実測図(2)……………	122
第14図	B地区a3ピット出土の前・中期 系土器実測図(1)……………	90	第31図	敲石類(3)及び石うす類実測図……………	123
第15図	B地区a3ピット出土の前・中期 系土器実測図(2)……………	91	第32図	その他の石器類実測図……………	124
第16図	B地区出土前・中期系土器実測図……………	92	第33図	貝製品実測図(1)……………	133
第17図	前・中期系土器及び底部実測図……………	93	第34図	貝製品実測図(2)……………	134
			第35図	貝製品(3)及び骨製品実測図……………	135
			第36図	渡喜仁浜原貝塚周辺の遺跡群……………	141

挿表目次

第1表	渡喜仁浜原貝塚出土遺物総集計表……	32	第24表	後期系土器の口唇形態分類規準表……	73
第2表	渡喜仁浜原貝塚B地区a3ピットの層相……	24	第25表	後期系土器の器面調整痕の手法分類……	76
第3表	渡喜仁浜原貝塚B地区cトレンチの層相……	25	第26表	B地区a3ピット出土後期系土器口縁部の口唇形態……	80
第4表	イノシシ顎骨の層位別出土状況……	35	第27表	B地区a3ピットII層出土後期系土器口縁部の口唇形態と器面調整痕……	81
第5表	魚類遺存体における各魚科の層位別出土状況……	38	第28表	B地区a3ピット出土後期系土器底部の器面調整痕……	82
第6表	魚類遺存体の体長復元(Ⅰ)…… —べら科の例—	40	第29表	B地区a3ピットII層出土後期系土器胴部の器面調整痕……	83
第7表	魚類遺存体の体長復元(Ⅱ)…… —ふえふきだい科の例—	40	第30表	B地区c2・4ピット出土後期系土器胴部の器面調整痕……	84
第8表	遺跡出土脊椎骨の椎径計測及び出土頻度……	41	第31表	B地区c3ピット出土後期系土器の器面調整痕……	85
第9表	各層位における魚類組成……	39	第32表	C地区k14・15ピット出土後期系土器の器面調整痕……	85
第10表	獣類・鳥類遺存体の出土構成表……	42	第33表	表採後期系土器の器面調整痕……	86
第11表	魚類・甲殻類・海獣類遺存体の出土構成表……	44	第34表	C地区k14・15ピット出土後期系土器底部の器面調整痕……	86
第12表	B地区a3ピットの貝類組成比較……	47	第35表	表採後期系土器底部の器面調整痕……	86
第13表	貝類遺存体の破損形態別出土表……	49	第36表	前・中期系土器の掲載遺物胎土別一覧表……	89
第14表	貝類遺存体の体長組成(1)……	54	第37表	渡喜仁浜原貝塚出土石器一覧表……	101
第15表	貝類遺存体の体長組成(2)……	55	第38表	石斧状石器類石質組成表……	102
第16表	B地区a3ピットの貝類組成細目……	56	第39表	石斧状石器類一覧表……	104
第17表	B地区a3ピットにおける食料残渣出土組成……	66	第40表	擦石類一覧表……	106
第18表	渡喜仁浜原貝塚出土土器一覧表……	68	第41表	敲石類一覧表……	109
第19表	前・中期系土器の胎土分類規準表……	69	第42表	石うす類一覧表……	111
第20表	前・中期系土器の胎土分類別文様構成……	70	第43表	その他の石器類一覧表……	113
第21表	B地区a3ピットの胎土分類別胴部集計表……	71	第44表	渡喜仁浜原貝塚出土貝・骨製品一覧表……	125
第22表	B地区a3ピットの胎土・文様別口縁部集計表……	71	第45表	貝錘の重量測定表……	126
第23表	表採、B地区cトレンチ、C地区kトレンチの胎土分類別集計表……	72	第46表	貝錘一覧表……	127
			第47表	貝刃一覧表……	128
			第48表	[Rosin]分析表……	145

渡喜仁浜原貝塚発掘調査報告

— 本 文 —



第1図 今帰仁村より見た沖縄本島の魚眼俯瞰地図

第1章 渡喜仁浜原貝塚の位置

1. 地理的環境

貝塚のある今帰仁村字渡喜仁は、本部半島の北東端に位置する。ここは、海拔30~40mの琉球石灰岩からなる平坦な台地状地形をなし、台地の西側は、ほぼ南東-北西方向へ流向をもつ大井川で境され、北および東側は海に面した垂直な崖になっている。

渡喜仁浜原貝塚は、この台地の北海岸に面した中央部からやや西側寄りの北緯 $26^{\circ}41'25''$ 、東経 $127^{\circ}59'10''$ に位置する。

台地の北海岸側は、N \rightarrow W方向にのびた一連の垂直な崖をつくるが、貝塚は、やはり同方向に平行して生じた割れ目で、崖と崩落した巨大な岩塊の間にできたものである。この崩落ブロックは、台地面と約7~8mの落差をなし、割れ目の幅は一様ではないが、広い所で約4mはある。

割れ目を充てんした堆積物は、褐色~茶褐色の細かい粘土や、時には周辺地層に由来する石灰質砂を含む粘土からなり、琉球石灰岩の角礫なども多数含まれる。なお、堆積層は、約30度北西方向に傾斜しており、堆積物は台地面から流し込まれて堆積した事を感じさせる。この崩落ブロックは、屏風状に立ち上がり、貝塚立地の条件としては直接北風をさける事ができるなど適地のようである。また、この地点からは右前方に古宇利島や沖縄本島の北部山地が手にとるように見渡せ、北西側のはるかかなたには伊平屋・伊是名の島々が望みえるなどすばらしい景観のところでもある。

台地前面の海には、裾礁型のサンゴ礁がよく発達するが、ここでは干潮時に礁原となって干出する部分はきわめて少ない。

地質については、貝塚のあるこの台地の南に古生代二疊紀の本部層が分布する。本部層は、暗灰色をした緻密な結晶質石灰岩、粘板岩、砂岩や灰白色をしたチャートからなり、本部半島の主部を占め、石灰岩からは二疊紀のフズリナ化石が発見されている〔HANZAWA, 1935〕。

台地の北海岸では、渡喜仁浜原貝塚から北東側へ約200m、北西側約900mのところ本部層のものと思われる露頭が点在している。岩質は、主に暗灰色をした緻密堅固で変成した砂岩である。渡喜仁浜原貝塚からは、一部加工された同質の砂岩が多数出土しており、おそらくこれらの地域が起源になっているものと思われる。

台地をつくっているところは、前述したが琉球石灰岩からなる。石灰岩は、約5mの厚さあり、黄白色をした細粒の有孔虫殻砂をマトリックスとし、その中に、二枚貝や巻貝の化石を含むものである。その比較的下部には、厚さ約1.5mでオパキュリナなどの大型有孔虫を密集した石灰岩が分布する。この大型有孔虫密集部は、高安〔1976〕により琉球層群上部累層中のA部層とされたものであり、それより下位は琉球層群下部累層の運天相に相当するものである。この地域における運天相は、厚さ約20m以上あり、主として黄白色の石灰質砂からなり上部へいくほど石灰岩化している。生痕化石が三層準ほど集中的に発達しており、またカキ貝、ウニ、腕足類、巻貝が密集した部分もある。

台地表面上には、約1.2mの厚さの赤褐色土壌が分布し、台地の基部付近では数カ所に湧水が確認される。この湧水は、石灰岩の割れ目などを通して砂質部に浸み出してきたものである。

2. 歴史的環境

A. 先史時代の歴史的展開

今帰仁村は、北部では実に遺跡の多いところである。これは、原始・古代人が海の幸・山の幸に依存していた採集経済段階から、現在の農耕社会に至るまで、人間が生活しやすい豊かな自然を擁していたからであろう。特に海岸に面した石灰岩台地の縁辺は、貝塚集団の好適な生活の場所であったと考えられ、古い遺跡から新しい遺跡までの殆どが、この台地に集中して分布している。この台地に人間が住みつくようになったのは、沖縄貝塚時代前期の末葉あたりで、与那嶺遺跡下層文化、運天貝塚東側地点下層文化、渡喜仁浜原貝塚第IV層の下層文化がこの時期に位置づけられよう。

次に展開するのは中期の時期である。石灰岩台地で確認されている殆どの遺跡が、この時期に登場している。典型的な遺跡が現在発掘調査中の西長浜原遺跡である。この他には、長根原遺跡、渡喜仁浜原貝塚第IV層上部～第III層、運天貝塚東側地点第II層から第I層（上層）、与那嶺遺跡上層、古宇利原B遺跡中層あたりが位置づけられよう。

中期の特色として一般的に把握されていることは、①遺跡の立地が内陸の低平な台地か、丘陵を背にした斜面に位置すること。②貝類・獣魚類などの食料残滓が激減すること。③石うすと擦石、ピラ形片刃石斧が増加すること。④土器の器型に丸底又は尖底を伴う壺型が登場すること。⑤具志川市苦増原遺跡〔注1〕では、多量にコナラ属の種子が炭化物として検出され、その他に、クスノキ科?・マメ科?の種子も検出されている。これらの種子は、貯蔵穴や住居址遺構から出土している。⑥遺跡の範囲も広く、住居址もいくつか確認されていることである。

以上は、中期の現象の特徴を抽出したものであるが、具体的には各遺跡の立地、あるいは、その規模によって様相が若干異なっている。例えば、遺跡の立地についても、海岸に面した台地の縁辺や砂丘に立地することもある。渡喜仁浜原貝塚や運天貝塚がそうであり、この場合後期の層が重複している。また食料残滓が激減するという現象もみられない。この様相は、遺跡の立地の違いによる自然への適応の差異か、発掘規模の問題か、包含される状況の問題か、食料残滓の捨て場所の問題かに関連するとおもわれるが、今後検討されなければならない問題であろう。

ところで中期遺跡の構造的調査がようやく始まった段階で、その性格を規定することはできないが、一応の作業仮説を立てることは許されるであろう。筆者は以前に、中期の内陸に分布する遺跡の経済様相をとらえて、強化された採取経済ないしは原初農耕（根栽・木の実の半栽培段階）を想定した〔新田, 1969〕ことがある。最近、具志川市地荒原B貝塚、苦増原遺跡、今帰仁村西長浜原遺跡の調査によって、その性格が次第に明らかになつてくることは注目すべきであろう。すなわち、この時期になると定着の原始的・原始的村落共同体が形成され、一定の管理された食用植物が食料資源として供されていたのではなからうかと推定されうる様相をうかがわせるものがある。このような経済様相を単なる採取段階の延長線とみなすか、半栽培段階ととるか、原初的農耕（焼畑による雑穀の栽培も含めて）の登場とみなすか、いろいろ論議されるところであるが、その性格の検討は今後の資料増加と、調査成果に期待することが大きい。

中期に後続する後期の遺跡は、一般に海岸の低地か砂丘に進出して形成されるが、渡喜仁浜原貝塚や

運天貝塚西北側地点のように中期と重複して、層序的に把握される場合がある。この時代の上限は弥生前期～中期頃と思われ終末はA・D10世紀頃と思われる。大きく前半と後半に分けられ、前半は甕型尖底土器、後半では甕型クビレ平底土器が主体を占めている。文様からは有文から無文化の傾向へ進行していく。石斧等は、激減・後退の様相を帯びている。また貝製品、特に貝錘の増加が目立つ。食料残滓も大型多肉質貝が顕著に出土し、海への積極的適応が行なわれたものと思われる。それとともに、散発的ながら九州の弥生式土器が出土する。その他貝札や開元通宝等が移入経路は明らかではないが、出土する。周辺地域との文化交流が頻繁に行なわれた証左であろう。

仲尾次貝塚で、熔鋳炉らしき遺構と鉄滓が報告されている。これは石斧の減少・後退化と無関係ではなさそうである。石器と併用した鉄器の沖縄における登場を示唆するものであろう。また、久米島ヤジャガマ洞窟遺跡〔注.2〕では、後期後半の土器と共伴して炭化米、ジャリンバイの種子が検出された。これは、きわめて注目すべきことである。とすれば、この様相は本土の弥生式土器とともに稲作を基盤とした弥生文化の南漸も想定しうるものであろうか。しかし、本土の弥生文化は沖縄において定着しなかったというのが定説である。

筆者は、かねてより後期の経済様相を、漁撈を中心とした単なる採取段階ではなく、中期の経済様相の延長線上にありながら、本土弥生文化の影響を強くうけて徐々に農耕社会へと移行する過渡的段階ではなかろうかと考えていた。一方、漁撈においては「追い込み網」という技術の革新が行なわれ海への適応が深化されていった時代ではないかと考えている。一般的に後期遺跡が砂丘や低地に多く分布するのは、この海への積極的適応と後背地の利用という経済の様相を反映しているからであろうと思われる。

次に到来するグスク時代は、原始社会から古代社会へ移行する過渡的時期で、次第に農業が定着化していく時代である。初期においては、遺跡はフェンサグスク・具志頭グスク・具志川グスク等のように海岸近くに立地する。しかし、次第に内陸の丘陵地へと移行している。これは、各共同体への鉄器の普及による農業の進展によるものであろう。今帰仁村には、グスク時代の遺跡が数箇所確認されている。しかし、その機能については調査がなされておらず確言しにくい。村落としての機能を果たしたグスクもあったであろう。農耕時代となると、鉄器の普及により、広大な島尻マージの石灰岩台地や国頭マージは畑地として開発され、沖積低地は、水田として利用されたであろうと思われる。このような生産基盤の卓越は、国頭における先進地域となり、その地理的位置や炬港、親泊という貿易港を擁することと相まって北部における強力な政治集団（北山）が形成されていったと考えられる。

B. 周辺遺跡の概観

貝塚時代の遺跡（第2図参照）

今帰仁村の貝塚時代の遺跡は、海岸に面した石灰岩台地の縁辺や海岸砂丘に立地する傾向にある。遺跡の数は北部において、きわめて多い。その主要な遺跡を編年上、古いほうから概観してみよう。

(a) 運天貝塚群

前期後半から後期前半に及ぶ時代幅のある遺跡である。運天の北方、古宇利島に對面する海岸崖下に、東汲川の泉を中心として形成される。1969年筆者が、浦添高校郷土研究クラブ員と試掘を行なっている。

資料の一部は、すでに多和田真淳氏が発表している〔多和田他，1975〕。

土器の分布は、泉を中心に崖上の台地、崖下の畑地及び海岸の防潮林近くまで広範囲に及ぶ。試掘は東側のA地点である。この下層の土器は、多和田真淳氏が「運天式土器」と命名した器型や文様で前期的様相をとどめている土器である。中間の層は、大山式土器とカヤウチバンタ式土器、上層は、丸底を伴う宇座浜式へと展開している

西側及び砂丘地は、後期のアカジャンガー式土器やそれに続く無文甕型土器が出土する。

この遺跡は、西側の砂地が採砂により破壊されているが、前期から中期、中期から後期への文化変容を知るうえでの貴重な遺跡である。

(b) 古宇利原B遺跡

古宇利島で一番古い時期に位置する遺跡で、前期から後期までの貝塚である。

下層は、横捺文土器、中層は宇座浜式土器、上層はアカジャンガー式土器である。

(c) 西長浜原遺跡

与那嶺の西長浜原の平坦地に広がる約5000平方メートルの広大な遺跡である。

前期後半から中期にかけての単一層をなしているようである。

出土遺物のうち土器は、丸底または乳房状尖底を伴う甕型、又は壺型土器で中期の特徴を示しているものである。また、石うすが擦石を伴って出土している。遺構としては地山を掘り込んだ隅丸四方形の竪穴住居址が3・4箇所、また、敷石住居址も確認されている。この時期の原始共同体を解明する手がかりになるものと期待されている〔西長浜原遺跡調査会，1977〕。

(a) 仲宗根長根原遺跡

仲宗根部落の北方、沖繩リゾートステーションの展望台付近が遺跡である。前期終末から中期にまたがる時期である。1976年、渡喜仁浜原貝塚確認調査の際、博物館の大城逸朗氏、筆者らによって発見された。宇座浜式土器や石うすが採集された。遺物は、今帰仁村教育委員会・沖繩リゾートステーション・県立博物館が保管している。

(e) 仏ン当貝塚

与那嶺部落の北方にある仏ン当洞窟の前面岩陰から広場へかけて形成された、中期から後期までの時期の貝塚である。上層と下層に分けられ、下層は有文・無文とも著しい条痕が特徴であるという。上層は厚手の赤褐色無文土器が主体のようである。弥生式土器が出土している〔多和田他，1975〕。遺跡の立地や出土遺物の上で、注目すべき遺跡であり、学術調査の必要があると考えられる。

(f) 与那嶺遺跡

与那嶺部落の東長浜に立地する中期から後期前半（補註・多和田氏編年）の遺跡である。現在発掘調査中の西長浜原遺跡とは隣接している。下層は宇座浜式土器、カヤウチバンタ式土器が出土し、上層は無文土器が主体のようである。

(g) 古宇利中原遺跡・兼次古島遺跡

中期から後期前半・後半（補註・多和田氏編年）の遺跡である。

(h) 仲尾次貝塚

与那嶺部落の東長浜と仲尾次部落の接点にある小湾状の海岸砂地に形成された後期後半の遺跡である。この遺跡では後期の土器に、山之口系弥生式土器が伴っている（多和田他，1975）。また貝塚のやや中心に珊瑚礁屑などをしきつめた楕円形の火の跡が確認され、多くの鉄滓と軽石状物質が検出されたという。多和田氏は熔鋳炉跡として報告している。宅地造成により消滅してしまった。

(i) 松当原貝塚

運天部落2班、俗称汲川の集落の西側海岸砂丘に形成された後期の遺跡である。大部分は採砂により破壊されている。

(j) 越地貝塚

ウンビ部落との境界に近い海岸の丘陵地に形成された後期の遺跡で、具志頭式土器を出土する。

グスク時代の遺跡（第2図参照）

今帰仁村内では、グスク時代の遺跡が数箇所確認されている。それらの遺跡は、前述の貝塚時代に比べ内陸部へ入る傾向にある。その主な遺跡を概観してみよう。

(a) 平敷ウガン遺跡

古伊万里の破片が得られるが、全体的に腐植土が堆積している。

(b) ウンジョウヘイ遺跡

謝名部落の拝所であり、類須恵器・明代の青磁・染付・南中国の鉛色陶器などが表採されている（多和田他，1975）。

(c) 内グスク遺跡

玉城部落にある。類須恵器・宋代の白磁・明代の青磁・染付・南中国の陶器・異質な砂を混和材とした土器等が採集されている。

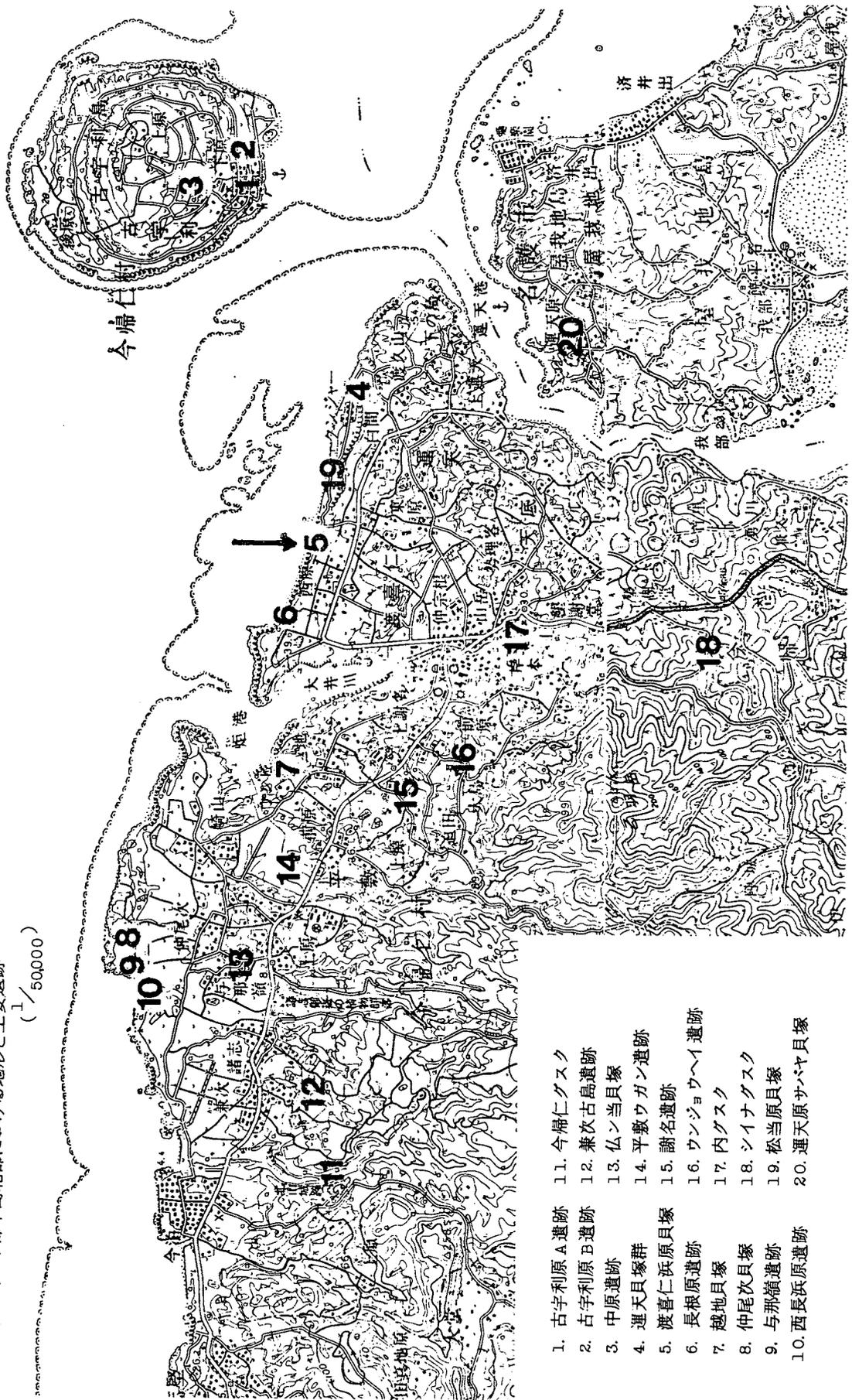
(d) 今帰仁城（グスク）

今帰仁城跡は、三山分立時代の「^{グスク}城」として知られるが、城内からは、フェンサ上層式土器や多量の青磁が採集される。多和田氏は、城内の大隅洞窟内から、牛骨、木炭、ウマノアゲマキを検出し、氏の編年の晩期頃の住居址ではなかろうかと報告している。

c. 想定される生活様相

第2図 本部半島北部における地形と主要遺跡

(1/50,000)



- | | |
|------------|----------------|
| 1. 古宇利原A遺跡 | 11. 今帰仁グスク |
| 2. 古宇利原B遺跡 | 12. 兼次古島遺跡 |
| 3. 中原遺跡 | 13. 仏ン当貝塚 |
| 4. 運天貝塚群 | 14. 平敷ウガン遺跡 |
| 5. 渡喜仁浜原貝塚 | 15. 謝名遺跡 |
| 6. 長根原遺跡 | 16. ワンジョウウヘイ遺跡 |
| 7. 越地貝塚 | 17. 内グスク |
| 8. 仲尾次貝塚 | 18. シイナグスク |
| 9. 与那嶺遺跡 | 19. 松当原貝塚 |
| 10. 西長浜原遺跡 | 20. 運天原サバヤ貝塚 |

古代の漁撈

今帰仁村の遺跡はその殆どが、前述したように海に面した平坦な石灰岩台地の先端部や、砂丘地にみられ、これに沿うように干瀬がとりまいている。干瀬は、古宇利島前方から始まり、備瀬へと続く広大な礁原で、大井川の河口付近や親泊の北方で切れている(第11図参照)。この切れ目の水路が、パー(外海)とイノー(内側の海・礁湖)をつなぐ通路で、かつては漁船や山原船が航行していた。

原始・古代社会における漁撈は、上記のイノー(礁湖)で行なわれたと推定されるが、その漁撈の形態と漁具・生産時期等については、必ずしも明確ではない。これについて渡喜仁浜原貝塚出土の若干の考古資料と、民俗資料・事例からみてみよう。

渡喜仁浜原貝塚出土の魚類遺存体は、殆どがサンゴ礁域に棲息する魚類で、べら科・ぶだい科・そしてふえふきだい科の一種(沖縄名タマン)である。他にジュゴンの遺存骨、クジラ類の遺存骨の製品がみられた。

この捕獲法としては、本遺跡出土の貝錘・石錘[?]により網漁が想定される。また破損品のため用途は断じ難いが、残存部が「アグイ」の先端部に類似する骨製品も出土している。

民俗事例では、礁原での潮の干満を利用した「魚垣」^{ナーガチ}や、宮古伊良部村佐和田の浜にみられる「干潟に小石を積んでジョウゴ型の囲いをつくり、ひき潮時に沖に帰る魚を袋路に誘いこんですくいあげる」(沖縄タイムス、1975、8.21)「ガーツ」(ガーツとは囲いの意で、この原始的漁獲法は「石網」とも称される。)漁法があげられる。また最近では忘れられてしまったが今帰仁村の年中行事に、天底の「サージャーウェヌ」・古宇利島の「サージャーウ」等がある。この行事には、追い込み網漁に関する漁撈儀礼が含まれている(多和田他、1975)。ところで、「サージャーウェヌ」及び「サージャーウェー」の語源について、島袋源七氏は、「ササオイ」の転訛が「サージャーウェー」であるとし、「古くはササムといわれ、今ではササ網又はササンナといわれる刺網の中に磯魚を追い込む漁法がササオイ」(島袋、1947)であったと論証した。多和田氏も「追い込み網」を想定している。また天底の「ウブユミ」の中に「ワラビミチ」を祈願する漁撈神事がある。「ワラビとはワラへ網のことで、ワラビミチとは、ワラへ網で磯魚を取る漁法に、その名前が由来する漁撈儀礼であるという。磯魚追い込み網にセメンナ網というものが古くは、これをセマルともいった」(島袋、1947)とされる。

その他、戦後まで行なわれていた今帰仁ハーリーは、大正の始め、遺跡近くの渡喜仁ウッパマ地先の浅瀬に迷いこんだクジラを旧三月に捕獲したこと由来するともいわれている(多和田他、1975)。本遺跡出土の海獣類遺存体は、たまたま群れからはずれ迷いこんだものを、捕獲したものか、現在名護市でみられる「イルカ狩り」のような、共同体による組織的捕獲によるものかは想定しがたいが、貝塚時代に海棲獣類も捕獲していたことに間違いはなからう。

また、突き蛤による捕獲も想定される。

貝類は、潮間帯に棲息するものが多種にわたり、多量出土している(第3章参読)。その他春・初夏にとれるウニの棘・殻も多量に出土した。

遺跡周辺の海岸は、現在でも「アオサ」・「モズク」が季節には大量にとれ、ウニも最近まで漁業組合で、増殖に力を入れていた。

渡喜仁浜原貝塚集団も、豊富な海藻や貝・ウニ等を採集していたであろうと考えられる。

また漁撈と並行して狩猟も行なわれており、本遺跡より獣骨・鳥骨が出土している。

根栽・食料植物の採集

渡喜仁浜原貝塚集団と山とのかかわりは、どうであったろうか。

本遺跡からは具体的な手がかりとなる植物遺存体の出土は、きわめて少ない。これは、海産資源と比較して、食料に供された後の残滓がのこりにくい性質のためであろう。今回は、僅かながら何種類かの炭化物が出ている。本遺跡Ⅲ・Ⅳ層に相当する具志川市苦増原遺跡からシイの実が出土し、去る三月に発掘された久米島ヤジャーガマ洞窟遺跡〔注2〕からは、後期後半の層からシャリンバイの実が多量検出された。これにより、食料資源としての木の実を採集していたことが考えられる。

他に考古学的に未だ検証されていないが、民俗資料として天底の「芋ナイ折目」（『琉球国由来記』巻15）の供物にみられるチンヌクヤタロイモ・ヤムイモ等の根栽等の登場も想定される。

食料残滓の他に、道具の様相は当時の生産を反映していることが多い。石器では、石うすと擦石とを伴っていることから、粉食が考えられる。

貝塚集団の生活様相

これまで民俗資料から生産活動の様相をみてみたが、考古学者で、かつ植物学者であられる多和田真淳氏は、沖縄貝塚時代の生活様相を次のように想定された。長文ではあるが貝塚集団の生活様相を彷彿させるものがあるので引用した。

「……………小さいながら集落（マキョという）が営まれ、男は共同で山へ猪狩（鉾と落し穴を用い、補助役として柴犬がいた）に、海へ魚とりにゆき（網による追込み、銛による魚突き、魚毒によるササ入れくササは酒の女言葉）が行われ、釣針は用いられなかった）、女子供は海辺で海藻、貝、小魚、湿地でタニシやカワニナ、野原でカタツムリ、山野でシイの実・カンの実・テッポウユリ・キールンヤマノイモ・ヤマタイモ（野生のサトイモ）の芋類、フトモモ、ヤマモモ、シャリンバイ、ギイマ、アデク、カキノキ科、テンニン科、コクテンギ、モクタチバナ科、ヤマヒハツ類、ヤブニッケイ、ホルトノキ科、アカテツ、リュウキュウナガエサカキ、アダン等の果実、ピロウ、クロツグ、アダン等の葉芯、その他野菜類をとり、集落の近くにダイジョ（マイモのこと、方言ヤマンム、ヤマン、ヤムン）とサトイモ（陸芋、チンヌク、マーム）を栽培した。農具は、男達が使いふるした鉾の柄を短かく切って使った。これを手鉾、テイビクといった。これが沖縄の天孫子時代（沖縄貝塚時代前期から中期の頃の時代。歴史用語や考古学用語ではない。沖縄では、古い時代を総称した伝説的・概念的用語、筆者〈新田〉補註）で、まだ沖縄は天産拾得時代であり、農業も半栽培の状態であった。方言で「カメーユン」というのは単に物を採ることではなくて、老若男女それぞれの能力に応じて、神や自分達の祖先の造り給うた土地のな（生）りもの、海の寄りものを集めることであった。これは、共同体としての与えられた義務と責任であった。」〔多和田他、1975〕。

注1. 新田が、発掘責任者として、1976年9月1日から10月8日まで、緊急調査した遺跡。

注2. 新田と、安里進氏を発掘責任者とする後期洞窟遺跡共同研究会により、調査された遺跡。

第2章 渡喜仁浜原貝塚の調査経過

1. 調査体制

調査主体 今帰仁村教育委員会。
調査協賛 沖縄県立博物館・琉球大学考古学研究会。
調査責任者 新田重清（県立博物館学芸員）。

第一次発掘調査

発掘調査員 中村 愿（調査主任：沖縄国際大学考古学研究会会友）。
宮城利旭（沖国大考古研究会友）。上原 静（同）。比嘉春美（同）。池原喜美江（同）。
山田 正。米田善治（琉大考古研究会員）。呉屋義勝（同）。與那覇朝則（同）。
恩河 尚（同）。平良睦子（同）。鮫島 伸（同）。中村ひで子（教員）。
発掘補助員 玉城九つ（主婦：字兼次）。諸喜田なえ（同）。玉城かつみ（同）。新城美智子（同）。
大城ヨシ（同）。仲宗根なす子（主婦：字今泊）。仲尾次よし子（同）。
調査参加者 大城逸朗（県立博物館学芸員）。
玉城鎮夫（村教委文化財保護委員会委員）。宮里博輝（同）。
総 務 玉城勝男（村教委社会教育主事）。島袋 満（村教委）。

第二次発掘調査

発掘調査員 米田善治（調査主任：琉球大学考古学研究会会員）。
安里 進（伝統工芸館 首里 琉染）。
呉屋義勝（琉大考古研究会員）。與那覇朝則（同）。恩河 尚（同）。平良睦子（同）。
家田淳一（同）。中村ひで子（教員）。
発掘補助員 与那嶺修（北山高校生）。神谷隆也（同）。大城正光（同）。石川清和（同）。
平安山良弘（同）。玉城 一（同）。山内徳子（同）。村上涼子（同）。内間明美（同）。
与那嶺理世（同）。座間味 靖（同）。
調査参加者 大城逸朗（県立博物館学芸員）。
玉城鎮夫（村教委文化財保護委員会委員）。宮里博輝（同）。古波蔵政春（同）。
玉城三郎（同）。新城俊昭（同）。
総 務 玉城勝男（村教委社会教育主事）。

発掘調査は、第一次発掘調査を、1976年4月28日から5月13日までの16日間、第二次発掘調査を、同年8月3日から23日までの21日間に互り実施した。第一次・二次発掘調査期間中の祝祭日・学校休暇時には、上述の調査団以外にも多くの方々の協力を得ながら進められた。

また、調査の成果を広く一般に活用してもらうため、調査の都度、「大昔の今帰仁村」展、「浜原集団の生活」展を催すとともに、「発掘ニュース」を配布した。

2. 調査にいたるまでの経過

1976年1月7日、京都大学で古生物を研究している河村善也氏が、たまたま字渡喜仁北方の石灰岩断崖地帯を野外調査しているときに、本遺跡を発見、土器片と魚骨を採集して博物館にもたらされた。それから数日後、調査団の一員である新田は県立博物館の大城逸朗学芸員（自然系担当）とともに、現地を調査し、従来、知られていない新しい遺跡であることを確認した。表面調査で、沖縄貝塚時代中期から後期におよぶ土器片が多量に検出され、擦石、石うす等も採集された。ところが、遺跡の大部分は崖上から落下するテッポウ水・排水のため崩壊し、危機にさらされていた。

遺跡の保存措置を講じるため、この状況を今帰仁村教育委員会に連絡し、2月9日、同教委の玉城勝男社会教育主事を案内して、再度現地を調査した。このときの調査では、遺物包含層が前調査時より、さらに崩れ落ちており、一部は海岸近くまで地すべりした状態で流失していた。梅雨の時期を前にして地すべりした包含層だけでも緊急調査する必要がある。

この結果にもとづいて今帰仁村教育委員会は、記録保存を前提とした発掘調査を決定し、新田に発掘調査の依頼と、調査団の編成を要請した。これを受けて新田は前述の発掘調査員を組織、さらに村教委の協力のもとに、渡喜仁浜原貝塚調査団を編成し、二次に互る発掘調査を実施した。

なお、後日村教委の尽力と県教育庁文化課の計らいにより、本遺跡は、長く現地に保存されることになった。併せて記したい。

3. 調査の目的および方法

前記の遺跡の現状からして、発掘調査はできるだけ早急に着手する必要がある。そこで、調査団は調査に関する諸準備を整えるとともに、本調査を有意義にするために以下の目的を設定した。

- ① 本遺跡周辺には、従来知られている遺跡が8箇所（運天貝塚群＝4地点・松当原貝塚・大浜原貝塚・渡喜仁原遺物散布地・長根原遺跡）ある。それらの遺跡および未見の遺跡も含めて、本遺跡一帯を『遺跡群』として把握、総合調査することによって今帰仁地区の原始・古代社会の発展様相を把握する。
- ② 数度の予備調査によって採集された土器片から、遺跡はおおよそ沖縄貝塚時代、前期後葉から後期に互る時代幅を持つことが判明した。そのことをかんがみて、出土土器片より前期から中期、中期から後期にかけての型式学的把握を試みる。
- ③ ②と同じように、食料残滓についても検討を行なう。この場合、中期層からの食料残滓の検出および後期における食料残滓の量的変化と季節的变化を把握することが主題であった。
- ④ 本遺跡より表採された弥生系土器が、どの時期に移入され、それと共存する土着土器型式は何か。
- ⑤ 中期・後期の上限、下限の絶対年代（14C年代）測定のために、それに相当する層位よりサンプルを採集する。

以上の目的にもとづき第一次調査においては、遺物の出土位置を明確にし『遺物分布図』を作成する。さらに、食料残滓についてはランダム・サンプリングをおこなうことに主眼をおいた。

これらの計画にもとづいた調査の成果は、次のとおりである。

4. 調査の成果

渡喜仁浜原貝塚は、字渡喜仁北方の海に面した石灰岩台地の割れ目に形成され、上方の台地から流れ落ちるテッポウ水・排水により、割れ目に堆積した遺物包含層は浸食を受ける(図版. 3-⑥)。そのためか、遺物は広範囲に散布している。そのうち、割れ目に堆積した遺物包含層の地表面はやや平坦状をなすおよそ66平方mの区域である。しかし、この区域の西端部は前述の浸食を受け崩落しているため、その部分を含めると約165平方mの面積を占めることになる。この区域をB地区と呼称する。

かつては、B地区の西側部分を形成していた遺物包含層であったが、浸食のために、B地区北西側に二次堆積した区域をC地区(図版. 4-⑧)と称する。また、C地区の反対側、すなわち、B地区の平坦地より東側の傾斜面やその傾斜面と畑地の接する区域をD地区(図版. 4-⑨)と称する。さらに、崖上の石灰岩台地の縁辺部をA地区(図版. 3-⑤)とした。それらの詳細については、第3図を参照してもらいたい。

A. 第一次発掘調査

第一次発掘調査は、B地区における層序把握とC地区における遺物収集を主目標に、さらにA地区における居住地の有無について調査を行なった。

a. A地区

概要 本地区は、渡喜仁浜原貝塚集団の居住地と想定された場所であったので、B地区bトレンチの延長線上に2箇所、東西におのおの1箇所の試掘溝を設けて調査した。各試掘溝の名称は、B地区bトレンチの延長線上にあるものを、北側からa試掘溝・d試掘溝と命名し、その西側をb試掘溝、東側をc試掘溝と名付けた。

層相 本地区の層位(第5図-2, 図版. 7-⑬)は、I層:腐植土層(表土層)、II層:淡黒褐色土層、III層:黄褐色土層(地山)、石灰岩基盤の順をなし、すべて無遺物の自然層であった。

b. B地区

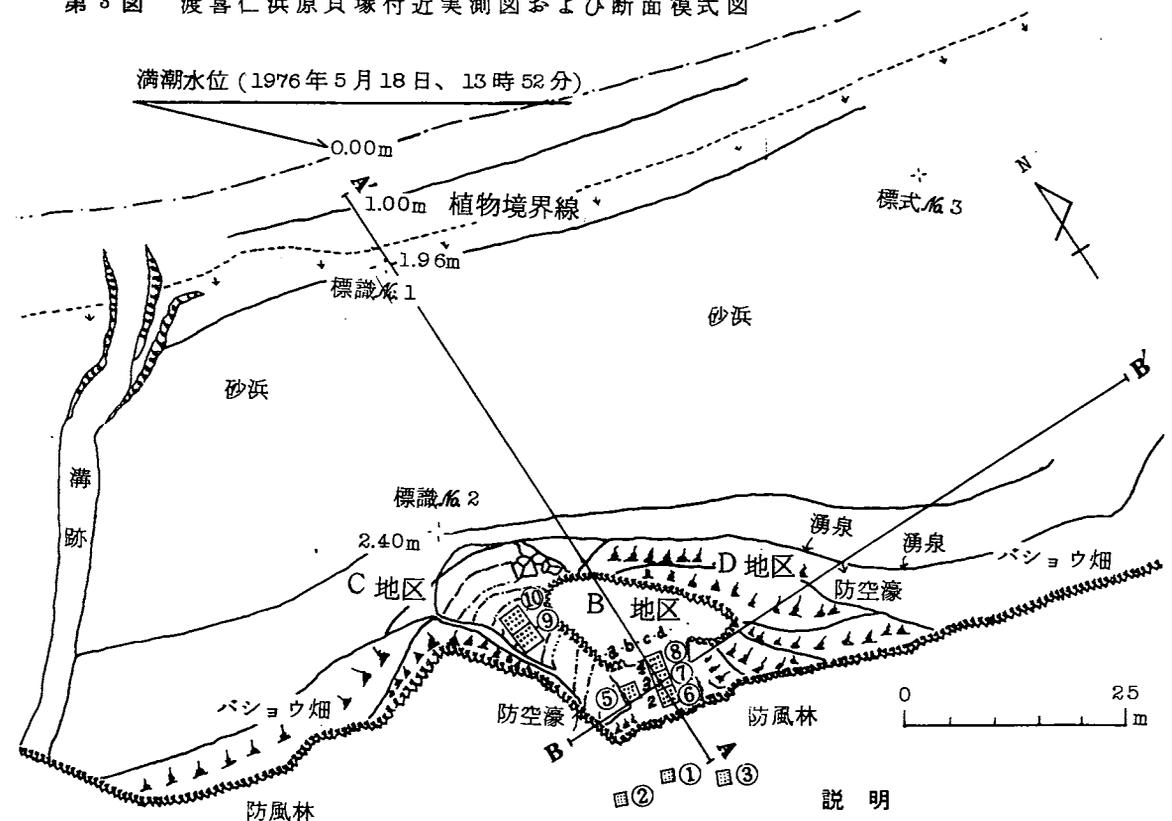
概要 本地区は、A地区より約7~8m下方に形成された遺物包含層を含む地区である。その西側は、前述したように浸食が著しいが、東側の縁は、人為的に自然石を利用した石垣が積まれ、土崩れを防いでいる(図版. 4-⑦)。石垣の高さは1m内外であるが、その根石は包含層内に食い込んでいる。後世、この平坦面の土崩れを防ぎ、畑地に利用するために築いたものか、あるいは、本遺跡と関連する遺構であるのか判然としない。

また、西側の崩れた断面にあらわれた遺物包含層をみると、南から北側に傾斜し、最も厚いところで地表面から約4m内外確認された。しかし、割れ目にみられる堆積層(遺物包含層と無遺物層の総称)は、北側の石灰岩崩落ブロックと南側の第三紀砂岩(琉球石灰岩下に形成)間のV字状の裂け目を補填するように形成されているものと思われ、層は周縁部から中心部に向かって傾斜しているものと推定された。ちょうど、残されたB地区部分の西端部がその中心部の最も厚い層を形成している部分と思われた。

調査は、B地区全面にグリッドを組んだ中より、a3・c2~c4ピットにおいて行なった。しかし、調査日程や調査員等の都合により、cトレンチは遺物包含層を完掘するには至らず、完掘したピットは層序を把握するために設けたa3ピット(試掘溝)だけであった(図版. 6-⑭参照)。

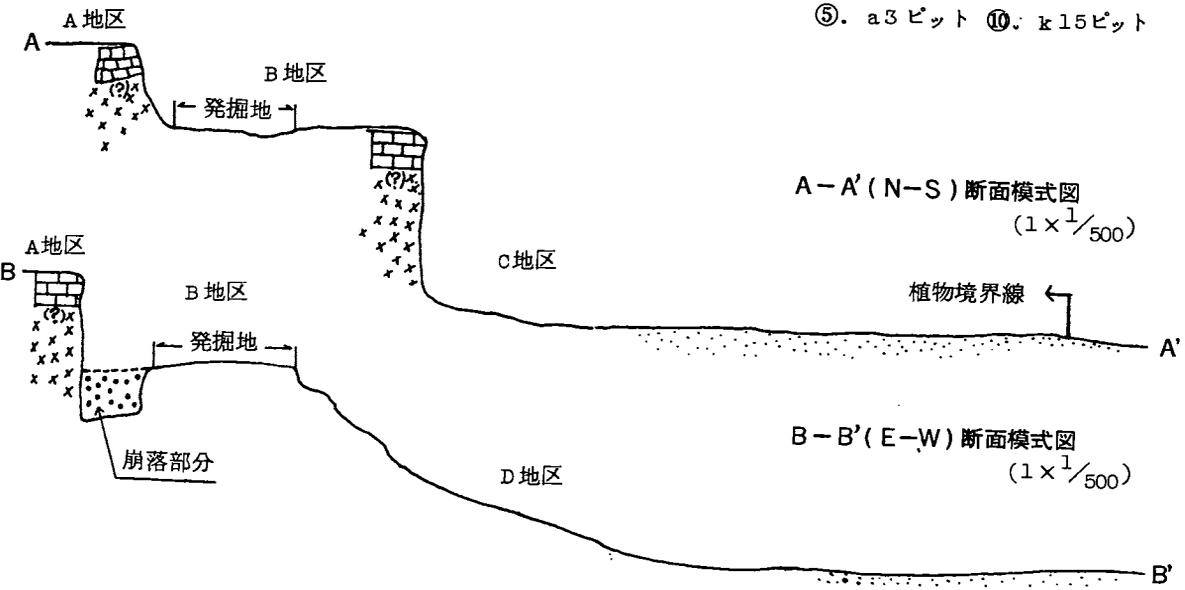
第3図 渡喜仁浜原貝塚付近実測図および断面模式図

満潮水位 (1976年5月18日、13時52分)



説明

- ①. a 試掘溝 ⑥. c2ピット
- ②. b 試掘溝 ⑦. c3ピット
- ③. c 試掘溝 ⑧. c4ピット
- ④. d 試掘溝 ⑨. k14ピット
- ⑤. a3ピット ⑩. k15ピット



a 3ピット a 3ピットにあらわれた断面（第4図、図版7-⑱、8）をみると、層位は大きく分けて4層、細分すると8層に区分される。各層位は、一般的に東・西壁側においては南から北側に傾斜し、南・北壁側においては東から西側に傾斜していることが確認された。各層位全般に亘って自然遺物と人工遺物が検出された（第1表）が、その詳細については第3章から第6章で扱う。次に、東壁断面にあらわれた層序にもとづき各層位の層相を記述する。

I層：耕作土層で茶褐色を呈し、植物の根が繁茂する。貝塚時代の遺物に現代製の鉄片やガラス片が混入する。層の厚さは、20~30cmでB地区全域に分布し、土の状態や混入物から畑として利用されたことが追証された。

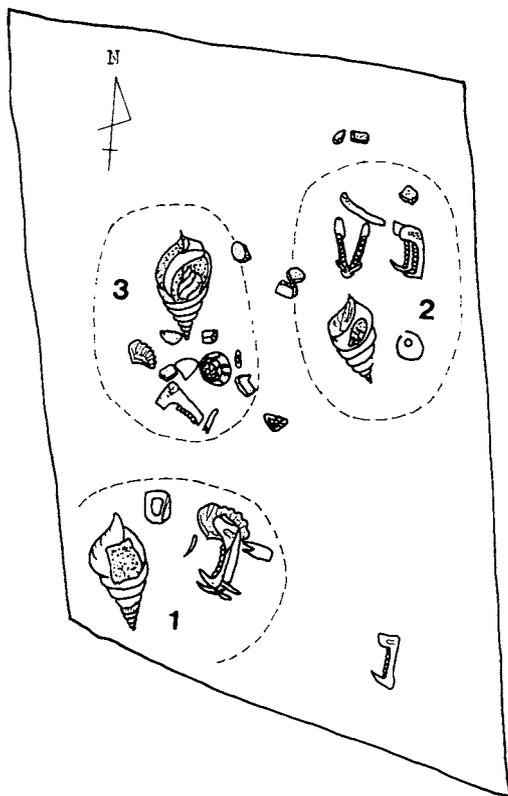
II層：本ピットで確認された層のうち最も厚く、約150cm内外で細分して5枚の小層に分けられる。しかし、後述するように遺物整理のうえでは4小層にまとめ、上部からII a層・II b層・II c層・II a層と称した。本層底面は摺鉢状を呈し、そのことから、本層はB地区全域の中心部をなす最も厚い層であることが窺われた。

II a層は黒褐色土層をなし、直径5~7cm位の石灰岩礫が僅かに混入する。遺物の出土状況から本小層の上部も攪乱を受けているものとおもわれる。層の厚さは、ほぼ一定して約50cm内外である。

II b層はこぶし大の石灰岩礫が主体をなす黄褐色混土礫層である。本層からは、自然遺物・人工遺物ともに出土が目立ち、注目すべき人工遺物としては、弥生系土器の底部片1片とRosin1点(12g)が得られた。層の厚さは約30cm内外である。

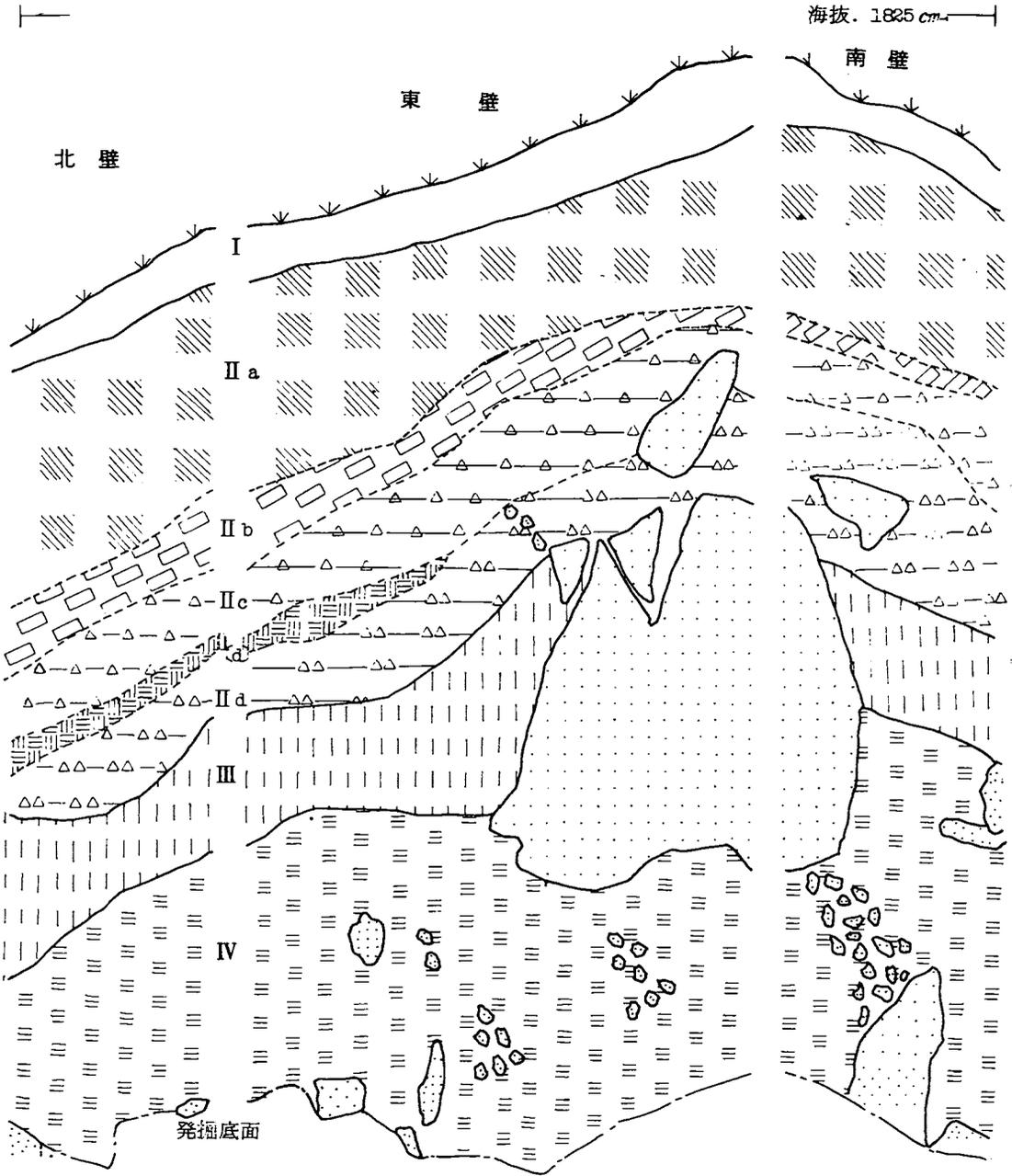
II c層は約30cm内外の厚みをもつ混泥土層をなし、遺物の出土量は上記層位と比較して多量になる。すなわち、自然遺物においては非石灰岩の円礫・角礫と貝類・獣類・魚類遺存体の出土が著しく、土器・石器等の人工遺物も多岐に亘った。

なお、本層からは『ホラガイ：イノシシの顎骨：アコヤガイまたはヤコウガイ製品』が集合をなした状態で3箇所において検出された（第8図、図版10-⑳）。この遺物組成を出土順に「第1号遺物組成」、「第2号遺物組成」、「第3号遺物組成」と付する。第8図からも窺われるように、ホラガイの殻口部は北側（海）に、イノシシの顎骨の前端部は南側（山）に向かい、その両者間に貝製品が整然と配置されていた。これらの遺物組成は、貝塚堆積時における偶然的遺物集合体であるか、それとも、人為的な配列であるかは確証が得られず、今後の資料追加とともに検討を要する問題である。なお、各遺物組成を



第8図 第1・2・3号遺物組成の出土略図
(ほぼ1×1/20)

第4図 B地区 a3ピット層序断面実測図



- 説明：I - 耕作土層
 II - a 黒褐色土層
 b 黄褐色混土礫層
 c 混貝土層
 (d) レンズ状石灰岩礫層
 a 混土貝層
 III - 石灰岩礫層
 IV - 淡黒褐色土層

注. 海拔は、1976年5月18日の満潮水位を基準に測定した。

構成する遺物は下記のとおりである。

- 第1号遺物組成—ホラガイ：イノシシ（図版11-4）：ヤコウガイ製品（図版36-Bの10）。
 第2号遺物組成—ホラガイ：イノシシ（図版11-5・6）：アコヤガイ製品（図版26-Aの1）。
 第3号遺物組成—ホラガイ：イノシシ（図版11-1）：ヤコウガイ製品（図版36-Eの4）。

II a層は、約10cm内外のレンズ状石灰岩礫層と約40cm内外の混土貝層からなる。レンズ状石灰岩礫層は、II c層と混土貝層の間に挟在し、両小層を貝類遺存体の含有程度で分かつ。しかし、遺物整理の上では混土貝層と一括してII a層とした。なお、レンズ状石灰岩礫層について説明を要するときはII (a)層として使いわけた。II a層全体の層相は、非石灰岩の円礫や角礫を多く含み、食料残渣の量も多い。人工遺物は他のII層小層と同じように、後期系土器が主体を占める。また、弥生系土器の底部片1片がII a層下部より出土した。しかし、そのことに比して、II (a)層・II a層下部においては石灰岩礫が多く、人工遺物の量は少なかった。

III層：淡黄褐色砂礫と石灰岩礫が互層をなし、東壁断面においては、層は北側から中央部あたりで急な立ち上りをみせ、層の厚さも75cmで最も厚くなる。この層は、南側で大きな石灰岩塊によって絶ち切られている。

IV層：本層は、かなり石灰岩礫が混入し下部に至るほどその直径は大きくなる傾向を示す。そして、約100cm内外の深度までは、一般的に淡黒褐色土をなし、南側の一部には黒褐色土もみられた。しかし、その深度より下部は、大きな石灰岩塊が埋まり、岩塊の間に淡黒褐色土が落ち込んでいた。この石灰岩塊は、重量があり、とても人力では除去することができなかつたので、これ以下の発掘は断念せざるを得なかつた。周囲の状況から察して、石灰岩塊下にも遺物包含層が続くことが推測される。

この結果、深度4mにおよぶB地区の堆積土は、5小層を含む4層に集約されることが確認された。それはまた、第3章より第6章で詳述されるように、II層が沖縄貝塚時代後期、III層が中期、IV層が前期終末より中期に位置する3文化層として把握された。なお、それらの絶対年代（¹⁴C年代）測定のためのサンプルも採取した。

層位	厚さ (cm)	層相	遺物出土状況						備考	時期
			土器	石器	貝製品	獣骨	魚骨	貝		
I層：耕作土層	20~30	攪乱層である。	△	+	無	○	○	+	鉄片・ガラス片出土	—
II層	a：黒褐色土層	上部は攪乱を呈す。 下部にいくほど炭化物・焼土増加。	△	○	無	+	+	+	Rosin・弥生系土器出土	後期
	b：灰褐色混土礫層	上部層との境面は明瞭。 石灰岩礫の風化した礫層。	△	+	○	△	△	△		
	c：混貝土層	本小層より非石灰岩礫（石材）増加。 下部層群との境面は不明瞭。	△	+	○	◎	◎	○	第1~3号遺物組成出土	
	d：レンズ状石灰岩礫層 混土貝層	石灰岩細礫の風化した礫層。 南・西壁に露出せず。 堆積土はc層と大差なし。 ペブルが多い。	○	◎	○	○	◎	◎	Rosin・弥生系土器出土	
III層：石灰岩礫層	40	凹レンズ状を呈す。 東南隅に大きな石灰岩露見。	△	△	無	△	+	+	中期	
IV層：淡黒褐色土層	100	上部層とは不規則面を呈す。 よくしまり、下部は発掘不能。	◎	◎	◎	◎	△	◎	前期~中期	

第2表 渡喜仁浜原貝塚B地区a3ピットの層相

〔遺物出土状況の欄中、◎は最多、○は多、△は少、+は僅少の意〕

cトレンチ B地区西端部侵食面およびa3ピットで確認された層群のB地区全域における平面的広がりを観察する目的でc2・c3・c4ピットを設定し調査を行なった。その結果、層位と遺物については、c2ピットでII a層を欠落することを除き、a3ピットの範疇を出るものでないことが把握された。しかし、2・3ピットのII b層上部において、一定の大きさの石灰岩礫・非石灰岩礫（石材）が、まとまりをもって配され、その凹凸に砂礫や土で整地された『石列（図版.9，第6図）』が検出された。

この『石列』はII b層上部を形成し、c2ピットについては表土下30~35cm深度の北側、c3ピットは東南隅で表土下40cm深度、ピット中央部では表土下60~70cm深度より検出され、ゆるやかな傾斜をなしている。それは、本ピットを対角線状に区切った東南隅においてみられる。この『石列』を構成する岩礫は先にも述べたように石灰岩礫・非石灰岩礫の10~20cmの角礫が主であるが、その間隙には約3~5cm内外の円形のペブルやc3ピットで顕著なようにしゃこがい・サラサバタイ・スイジガイ等の大型多肉質貝の殻も点在する。また、『石列』の上面からは、II a層やc3ピットII b層の北西隅に比して多量の土器片や貝類遺存体が検出されたほか、うみぎく科製貝錘が1点出土した。

さらにc2ピットの南側より、上記の岩礫とは異なり大形の石灰岩塊が、まばらな状態で露出した。しかし、これらの大形石灰岩塊上面には、遺物は殆どみられず、石灰岩の風化礫が堆積していた。

ピット名	c 4	c 3	c 2
深	10	I 0 表面は腐植上をなし、その直下部には ϕ 5~6石灰岩礫が多量。 0 本深度の土壌は粘質の固い黄褐色土で下半部は ϕ 2の石灰岩礫が多量。 0 南西隅より黒褐色土露出。	0 近世の獣骨片・炭化物が出土する腐植土である。 0 L 17まではガラス片・鉄片が出土し ϕ 8~9の石灰岩礫が多量。 0 南側は石灰岩塊で遺物は僅少、北側は石灰岩礫と遺物が多量。
	20		
度	30	II 0 南側に炭化物が多量。全面的に炭化物が多量。 0 南西隅に ϕ 2~3の石灰岩礫が多量。土壌の色調が黄色化。 0 南西隅に炭化物が多量。 0 南西隅に炭化物とともに焼土も多量。北東角でも炭化物が増加。南側中央部に貝のまとまり。 0 土壌の色調が変化し、北西隅・南西隅において貝殻が露出。 II 0 炭化物・焼土・ ϕ 5~10の石灰岩礫の出土が著しい。 b 0 南側中央部に貝・土器のまとまり。 (発掘底線)	0 石列が露出する。 (発掘底線)
	40		
	50		
	60		
	70		
80	0 北東隅L 35より黒褐色土露出。 北西隅より石灰岩塊が露出。 南西隅に炭化物が多量。 0 上記石灰岩塊面が拡張。 (発掘底線)		
90			

注. 数字の単位: cm
 ϕ : 直径
L : 深度
を 示す。

第3表 渡喜仁浜原貝塚B地区cトレンチの層相

これらの今回知り得た知見より、この『石列』を本遺跡と関連する人為的遺構と判断するには尚早であったので、今後の調査にその如何は委ねその上面の遺物と共に盛土をして調査を打ち切った。

本トレンチにおける遺物の出土様相は第7図に示すとおりである。

本挿図からも明らかなように、c 2ピットの遺物分布のありかたは、土器片・貝殻ともにピットの北側とくに北西隅に集中する傾向を示す。c 3ピットのそれは、断面分布図よりI層耕作土層からの出土は少量でII a層に至って増加する傾向にあり、またその平面分布は北西隅に集中していることが窺われる。さらに、c 4ピットもc 3ピット同様、I層からの出土量は僅少でII a層に至り増加する。これらの傾向は、本トレンチの北・南縁部に大形石灰岩塊が張り出し、II a層底面が摺鉢状を呈すると思われることに由来すると推測される。また、II a層の出土土器をみるとc 3ピット北西隅を中心として楕円状に後期系土器が集中し、その周辺部からは前・中期系土器が多量に出土した。貝殻の場合は、c 4ピット出土分は僅少で小型の二枚貝や巻貝が目立った。獣骨・魚骨は比較的少ないが、数点を採集しえた。なお、貝だまり27・28は、アラスジケマンガイ・イソハマグリを主とした小型二枚貝の集積である。

したがって、cトレンチの調査したII a層内においては、c 3ピットの北西隅が本遺跡の南北方向の主要部を形成しており、それから遠ざかるにつれて遺物の出土量は減少していく。しかし、注目すべきことはc 3ピットの北東隅・c 4ピットにおいて出土した土器の殆どが、前・中期系土器であるという事実である。そのことはまたII b層のc 3ピットについても把握された。

c. c地区

概要 本地区は、遺物包含層が形成されているB地区の北西側の傾斜地で、海岸砂浜と接続する。

調査は、B地区より崩壊した遺物包含層が厚く堆積（二次堆積）していると思われる平坦地に、2m四方のグリッドを2ピット設定し、本地区全域の地表採集とともに、出土遺物の収集を行なった。グリッドは、南側からk14・k15ピットとし、発掘は原則的に20cmごとに掘り下げていく方法をとったが、マージ土と遺物包含層がサンドウィッチ状に挟在していた。しかし、部分的には遺物包含層がまとまりを示しているところもみられた。調査の結果、本地区の堆積層は、明らかにB地区の遺物包含層が崩落し二次堆積したもので、遺物もB地区の範疇を出るものでないことが明らかにされた。

k14ピット 本ピット西壁断面図（第5図）をみると、各土塊は南から北側方向にかなりの傾斜をなしていることが窺える。発掘は、石灰岩礫が堆積している深度まで掘り下げ、土器片165片、石器4個、貝製品2個、食料残滓（貝類を除く）25個が検出された。なお、発掘底線より半腐植したスキが得られた。

k15ピット 南壁断面（図版7-⑦）にみられる黄褐色無遺物土まで発掘し、土器片487個、石器13個、骨製品1個、貝製品10個、食料残滓（貝類を除く）1,024個が検出された。

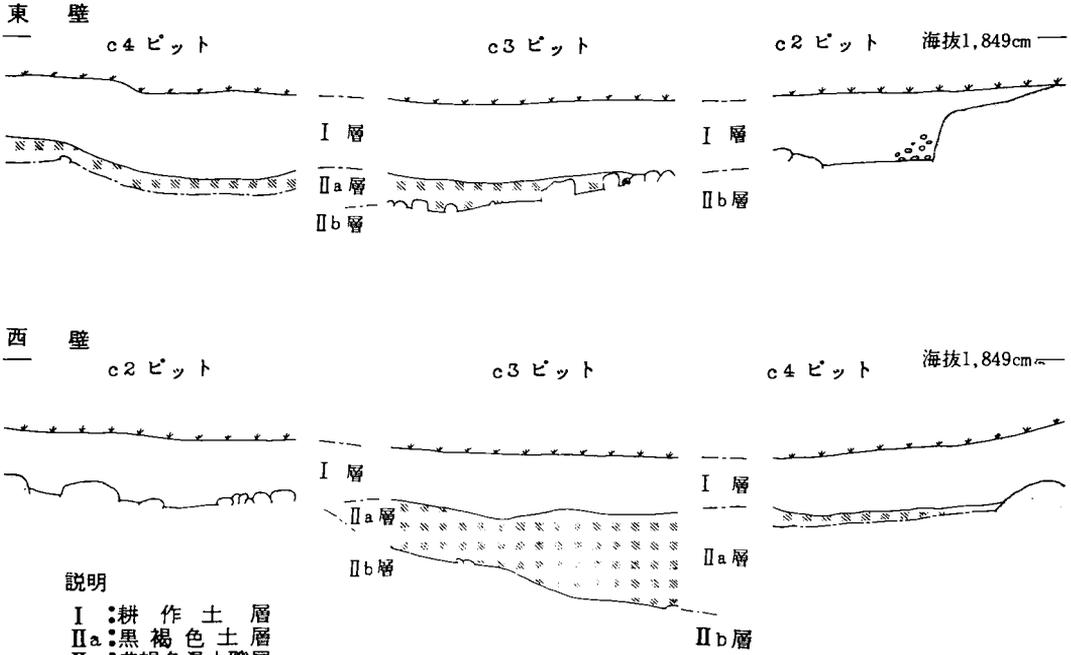
d. D地区

概要 本地区は、前述したようにB地区の東側傾斜面やその傾斜面と畑地の接する区域をさし、西側はc地区と接続する。調査は、B地区より崩壊した遺物包含層あるいは純然たる遺物包含層の有無を確認するために1箇所の試掘溝を設けて実施した。

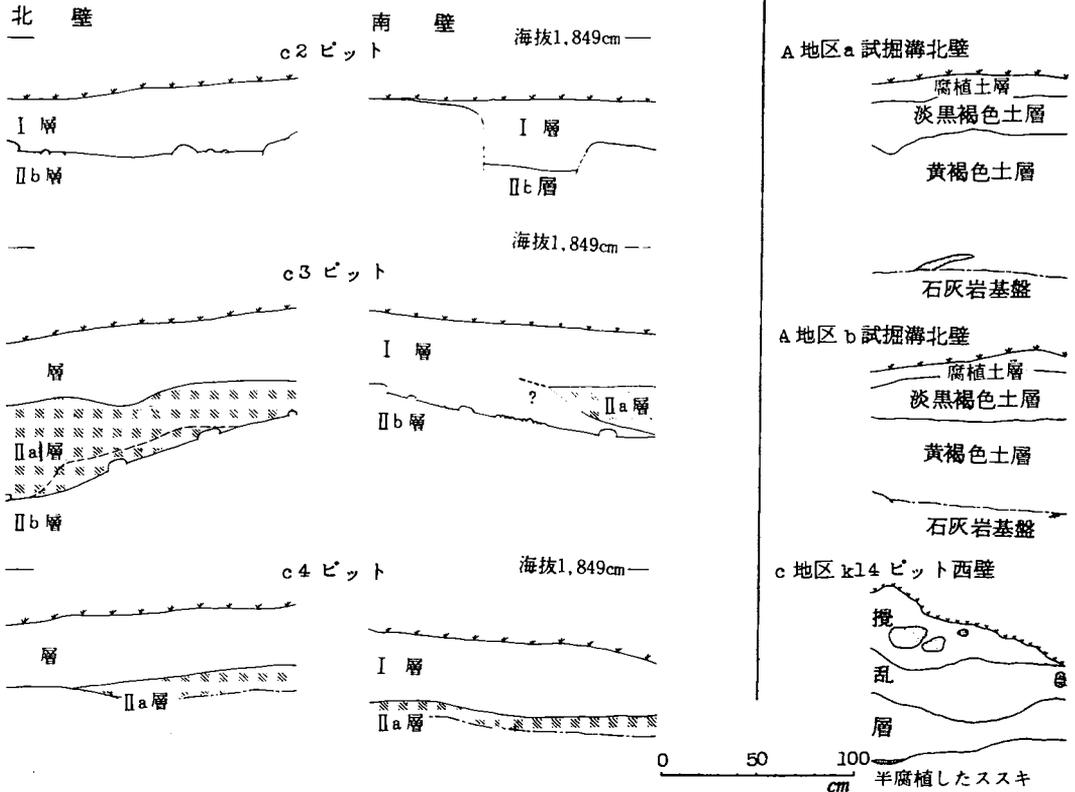
層相 約1m内外掘り下げたが、遺物を含む遺物包含層は認められず下方まで無遺物の海浜砂層が堆積していた。

第5図 各地区発掘ピット層序断面実測図

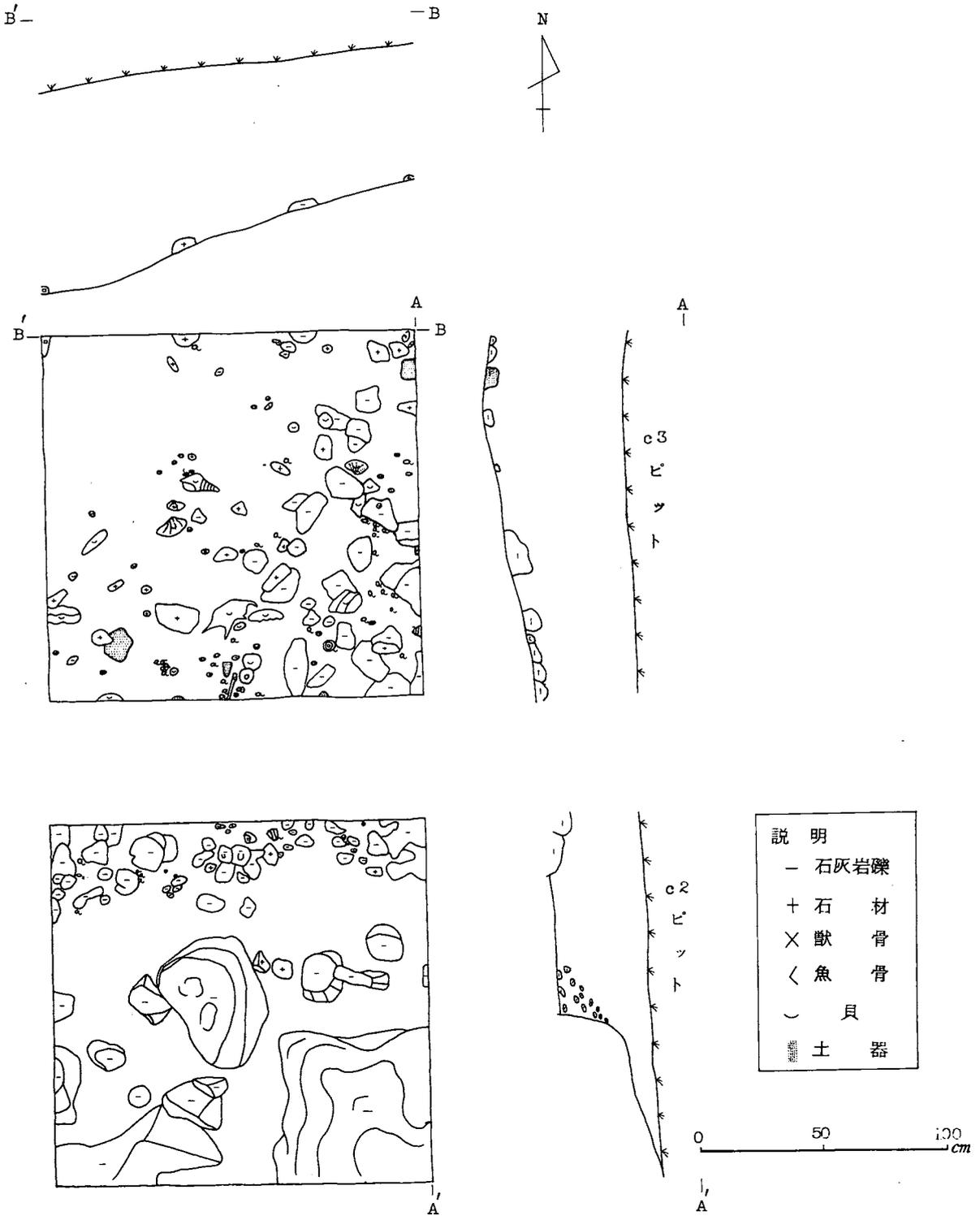
1. B地区cトレンチ層序断面実測図



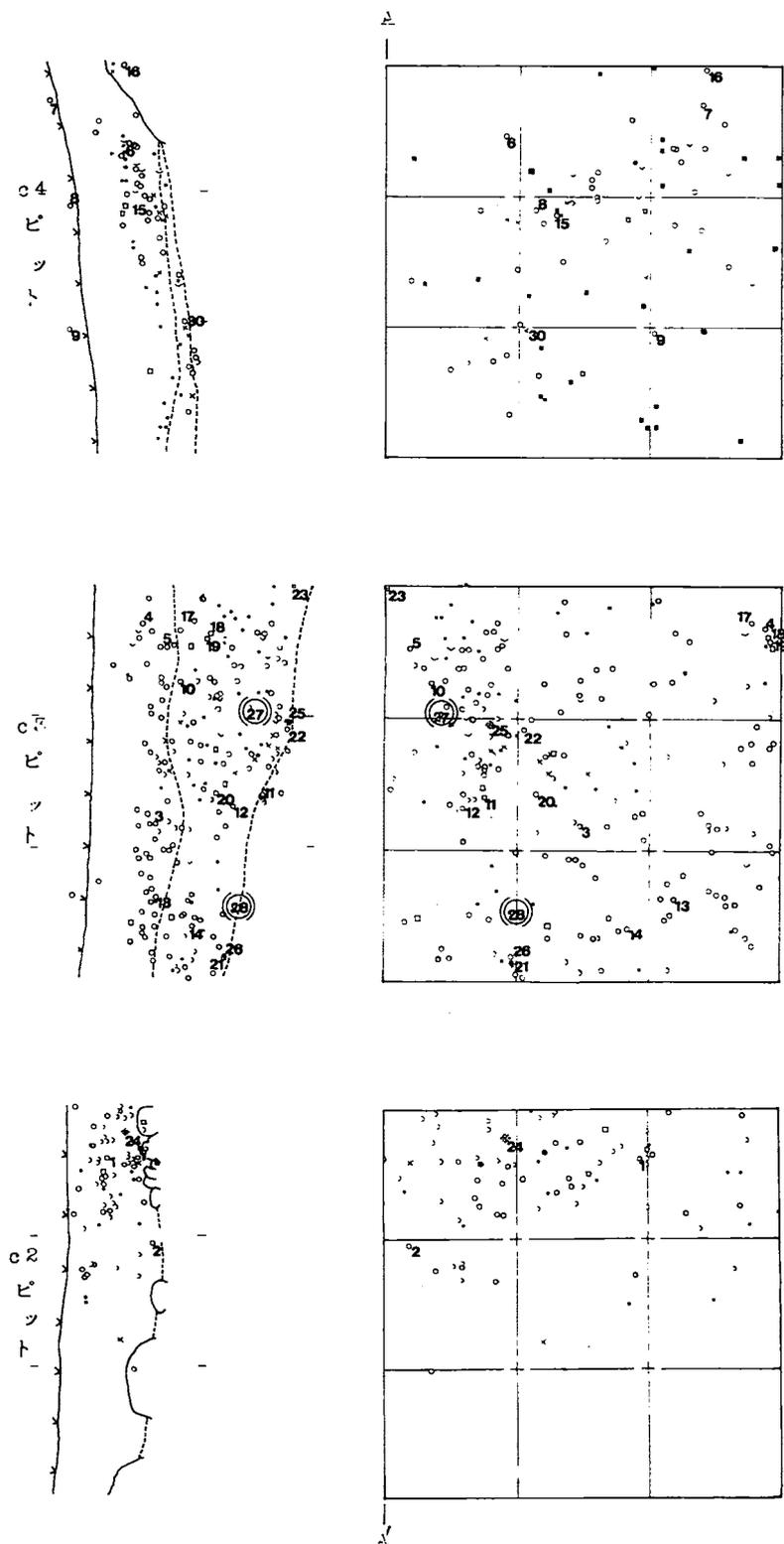
2. A地区・C地区層序断面実測図



第6図 B地区cトレンチにおける『石列』実測図



第7図 B地区cトレンチにおける遺物分布図



説明.1

- (I層) 耕作土層出土
1. 前・中期系土器底部 (第17図-40)
 2. 前・中期系土器口縁部(第16図-28)
 3. 後期系土器底部
 4. 前・中期系土器口縁部 (第16図-27)
 5. ※爪形刺突口縁部
 6. ※くびれ平底
 7. ※平底
 8. ※平底
 9. ※肥厚口縁部
 24. うみぎく科製貝錘 (図版. 34-A1)

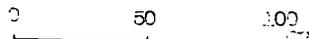
- (IIa層) 黒褐色土層出土
10. ※くびれ平底
 11. 後期系土器底部 (第20図-24)
 12. ※肥厚口縁部
 13. 前・中期系土器口縁部 (第16図-26)
 14. ※後期系土器口縁部
 15. 前・中期系土器口縁部 (第14図-8)
 16. ※平底
 25. いもがひ科製装飾品 (第35図-1)
 27. 貝だまり
 30. シカ? (図版. 14-7)

- (IIb層) 黄褐色混土礫層出土
17. ※丸底
 18. ※有文口縁部
 19. 前・中期系土器口縁部 (第16図-21)
 20. 後期系土器口縁部 (第20図-7)
 21. ※後期系土器口縁部
 22. 後期系土器口縁部 (第20図-2)
 23. 石斧状石器 (図版. 27-10)
 26. うみぎく科製貝錘 (図版. 34-A2)
 28. 貝だまり

注: ※印は出土遺物の詳細未検討

説明.2

- 土器
- 石器
- ※ 貝製品
- ◎ 貝だまり
-) 貝
- X 骨
- ∨ 魚骨
- 石材
- 焼土



B. 第二次調査

第二次調査は、B地区全面にグリッドを設定し(図版6-⑬)、遺物と層位の関連、遺構の有無、植物遺存体の検出など、いくつかの調査目標を設けて調査したが、調査員の不足と真夏の猛暑にはばまれ、調査は順調にいかなかった。さらに、第一次調査で層序を確認したa3ピットの壁面が、暴風雨により崩壊し、その露出作業を再度行なったが、この作業も意外と日数を要した。

以上のような理由で、予定した調査目標を達成することはできなかった。しかし、新資料の追加と若干の知見を得ることができた。以下はその予報的なものである。

aトレンチにおいては、先の第一次調査で発掘したa3ピットの壁面を露出し、再度、層位の検討と確認を行ない、さらにa4・a5ピットの調査を実施した。また、bトレンチにおいては、b2・b3・b4ピットについて調査を行なった。b2ピットの層序は、IIa層は露呈せず、I層・IIb層の順に把握された。IIb層以下は未発掘である。b3ピットのそれは、a3ピットの層序と同様であった。b4ピットでは、I層の耕作土層を除去すると、薄いマージの無遺物層が露出した。この無遺物層の直下にはIIa層の黒褐色土層が検出され、さらにその下より赤色土が露出した。この赤色土面と崩落した石灰岩塊に接するあたりで、1箇所『焦土』が確認された。この赤色土は、a3ピットにおいては確認できなかった堆積土であり、また『焦土』を伴っている点より生活面の疑いもたれ、その平面的広がりを追求めた。その結果、a4・a5ピットにおいても、赤色土は検出され、さらに『焦土』が一箇所確認された。この『焦土』近くの堆積土には全体的に人工遺物は少なく炭化物・焼土が多量に出土した。

この他bトレンチにおいて注目すべきことは、b3ピットII層から後期系の完形土器が1個出土したことである。

cトレンチのc2・c3・c4ピットは、先の第一次調査でIIa層まで発掘し埋め戻しされていたが、この土を除去し、あらためて層位や露出面について観察を加え他ピットとの関連を追求めた。c2・c4ピットIIa層の60~90cm深度では、炭化物や焼土が散在的に検出される状況ではあったが、赤色土は確認されず、a4・a5・b4ピットの状況とは明らかに異なっていた。

dトレンチにおいては、d2・d3ピットを調査しIIa層まで発掘したが、d3ピット下部よりIIb層と赤色土が同一深度で露出した。地形が南から北方に傾斜し、層の接触面にあたるためこのような状況を呈するのだろうかと推測された。

eトレンチにおいては、e3ピットのみを調査したが、I層・IIa層・赤色土の順に把握された。また、このトレンチの東壁側には人為的に積まれた『石積み』が確認されたが、本遺跡に伴う遺構であるか、十分に調査することができずに日程の都合で打ち切った。

いままで述べてきた赤色土については、まとまった広がりは見られず、散在している状態であったので、これが持ち込みによる人為的な土層であるのか、A地区の崖上からの流れ込みによるものであるのか、今回の調査では明らかにすることができなかった。これに関連して、先の第一次調査でc2・c3ピットにおいて露出した『石列』は、b2・b3・d2・d3ピットにおいても検出されたが、これも遺構であるのか、崩落した自然石の状態であるのか判然としなかった。

第二次調査は、以上のような状況で、多くの究明すべき問題点を把握したが、諸事情によって今後の調査に託された。なお、第二次調査については整理不十分のため本報告では石器や貝製品のみ扱った。その欠は、後日別の機会を検討したい。

c. 渡喜仁浜原貝塚の放射性炭素による絶対年代測定

第一次調査においてサンプル採集した絶対年代 (^{14}C 年代) 測定資料の結果は下記のとおりである。

B-a 3ピットII c層出土しゃこがい科 1130 ± 75 y B.P (1100 \pm 75 y B.P)

同 ピットIV 層120 ~ 150 cm深度出土しゃこがい科 2980 ± 70 y B.P (2900 \pm 65 y B.P)

年代は ^{14}C の半減期5730年 (カッコ内はLibbyの値5568年) にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数 (years B. P.) として示されている。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、 ^{14}C 年代がこの範囲に含まれる確率は約70%である。この範囲を2倍に上げると確率は約95%となる。

なお、測定は社団法人 日本アイソトープ協会による。

付記. 資料の整理

資料の整理は、県立博物館で行なった。その場合、調査中に出土した遺物は、食料残滓・土器・石器および石製品・貝製品・骨製品に大別し、発掘調査員でそれぞれの整理作業を分担した。また、調査中に作成した写真・作図とその他の資料の整理は全調査員で行なった。

執筆は、上記の分担にもとづき、直接整理作業に携わった調査員が起稿した。しかし、二・三の項目 (第3章の7、付章、地域と文化財) については、それを専門分野とする方々および関係者に依頼して原稿を寄稿していただいた。

報告書全般については調査責任者である新田が総括・補訂した。したがって、執筆内容・資料揭示については各執筆者と新田がその責を負うものである。

出土遺物の整理分担

食料残滓

獣類・魚類遺存体..... 與那覇朝則. 鮫島 伸.

貝類遺存体..... 呉屋 義勝. 池原喜美江. 比嘉 春美.

土器..... 中村 愿. 平良 睦子. 恩河 尚.

家田 淳一. 中村ひで子.

石器・石製品..... 米田 善治. 上原 静. 宮城 利旭.

貝製品..... 比嘉 春美.

骨製品..... 山田 正.

第1表 渡喜仁浜原貝塚出土遺物総集計表

—第1次発掘調査出土遺物—

(表中の数字は、上段に出土総数、下段に出土重量(グラム)を示した。)

		人工遺物				自然遺物								
		土器	石器	貝・製品	その他	食料残滓				石材	ペブル	その他		
						獸類遺存体	魚類遺存体	貝類遺存体	その他					
A 地区表採		1 10	2 220	0 0	0 0	0 0	0 0	未	0 0	4 575	13 803	0 0		
B 地区	表採	0 0	6	19	3	0 0	0 0	未	1 2	7 615	8 837	5 155		
	a3ピット層	I層	137 725	4	0	3	37 71	166 91	86 1,364	3 79	11 1,201	101 6,608	16 61	
		II層	a:黒褐色土層	165 1,077	17	0	0	8 12	2 3	62 1,042.5	0 0	8 941	30 3,342	9 41
			b:黄褐色混土礫層	107 1,035	2	8	1 12	14 22	63 85	242 6,195	2 29	1 10	13 438	3 10
			c:混貝土層	179 1,502	5	8	0	57 630	203 193	562 10,819.5	29 101	2 200	19 923	0 0
			d:混貝土層	273 2,483	25	11	1 58	37 114	202 190	1,316 24,764	41 44	10 120	643 11,249	9 71
	小計	724 6,097	49	27	0	116 778	470 471	2,182 42,821	72 174	25 2,223	196 16,567	21 143		
	III層	227 1,458	12	0	0	22 232	6 10	141 1,848	2 51	8 454	145 9,599	11 77		
	IV層	607 5,835	29	12	0	53 330	104 174	888 15,089.5	21 61	39 2,965	322 210,671	103 1,011		
	c2ピットI層		86 333	0	2	0	0 0	1 1	未	0 0	2 3	169 1,997	0 0	
	c3ピット層	I層	142 292	1	0	0	3 6	1 3	未	1 4	9 65	385 10,182	0 0	
		II層	a:黒褐色土層	433 1,336	7	2	0	5 28	2 1	未	3 29	6 268	25 331	0 0
b:黄褐色混土礫層			47 335	2	1	0	1 15	3 4	未	0 0	0 0	0 0	0 0	
小計		480 1,671	9	3	0	6 43	5 5	未	3 29	15 353	25 331	0 0		
c4ピット	I層	58 145	0	0	0	6 18	5 6	未	1 62	5 9	25 1,542	10 38		
	IIa:黒褐色土層	56 349	1	0	0	1 2	15 18	未	1 8	0 0	0 0	0 0		
C 地区		17,11 13,563	71	25	4	44 205	958 1,039	未	158 521	61 7,689	178 15,904	62 477.1		
D 地区表採		未	1	(3)	0	(19) (122)	(42) (50)	未	(7) (41)	1 860	4 823	0 0		

第3章 渡喜仁浜原貝塚の食料残滓

渡喜仁浜原貝塚出土の食料残滓の整理にあたっては、たんにその総目録と感覚的記述にとどまることなく、貝塚集団の利用した生活資料の詳細と生産活動を具体的に把握できるようにこころがけた。

これには、食料残滓としての獣類・魚類・貝類等の遺存体の数量的把握と、各遺存体間の組成把握を基とし、種々の基礎的作業を必要とする。すなわち、種の同定・個体数の算出・遺存体の体長計測および復元・肉量の算出・捕獲技術や食料利用の仕方を推察させる破損形態の観察等の作業である。

獣類遺存体中、イノシシの個体数算出は、顎骨の特徴をもっておこない、最多個体数・最少個体数で示した。前者は多く見積った個体数であり、後者は少なく見積った個体数である。その方法は上下および右・左顎骨の形状を比較したときに、それが他顎骨と明確に判別できるもの、あるいは、複数の顎骨であっても一個体として判別できるものは一個体として算出しその総和で最少個体数を求めた。また、その数値に不明瞭な顎骨数を加算することにより最多個体数を求めた。

魚類遺存体は、明確な個体数算出を行なうことができず、顎骨の全個数をもってそれを補った。また、体長の復元は、出土遺存体の特定部位の計測と現生種の同部位の計測との相関関係によって求めた。べら科・ぶだい科は吉野哲夫氏、ふえふきだい科は食料残滓班で行なった。

貝類遺存体は、出土殻のうち殻頂をもって一個体として数え、その総数を各層位の出土個体数とした。殻頂が殻の成長過程において不明瞭あるいは脆弱なために同部を残存し難い貝種については、別に個体数算出の規準（滑層部・殻口部等）を設けることによりそれを算出した。さらに、二枚貝類においては、その右・左殻の選別をおこない、多いものを各層位のそれとした。また、貝殻の採取肉量としてのむき身量を換算するための資料として、貝種別出土重量を求めた。破損形態については、他遺存体同様に細かな観察と統計処理によって把握した。

なお、獣類・魚類遺存体の骨格部位の計測と貝類遺存体の体長計測にあたっては $\frac{1}{10}$ mm目盛り副尺付き滑動計（ノギス）で計測した。

さらに、渡喜仁浜原貝塚出土食料残滓のなかで、大きな比重を占める魚類・貝類遺存体の棲息に関係の深い水域環境の復元には特別な関心をはらい上記の整理作業と並行して本遺跡周辺の海況調査（1977年1月4・5日）を実施した。その基礎資料（第11図）と渡久地健氏の寄稿を基に、本遺跡形成時の水域環境の一端が明らかになろう。

このような基礎的作業をつうじて、食料残滓が貝塚集団の利用した生活資料の内容として、また、生産活動の諸対象物として把握されると思う。その際、遺存体細目の生態学的知見と民俗学的知見（第1章第2節参照）が参考となる。ここに、渡喜仁浜原貝塚調査における食料残滓班の責は果たせよう。

なにぶんにも、整理に携わった班員に自然科学系の者がいないことから、論稿を進めるうえで不十分な点があると思われるが、御了承願いたい。ついでながら、難解な語句（専門用語）の説明と上記の詳細については綴じ込みを作成したので参照してもらいたい。

なお、渡喜仁浜原貝塚第一次・二次出土全遺存体の整理は、いまだ完了していない。従って、本稿においては現段階に整理の終了したもの一獣・魚類遺存体は第一次調査分、貝類遺存体はその内B地区a3ピット分一についてのみ報告したい。

1. 獣類遺存体

本遺跡出土獣類遺存体で同定を得られたのは、イノシシ・ケナガネズミの2種である。

A. イノシシ

イノシシは本遺跡で獣類遺存体の主体を占めている。イノシシの出土量および出土頻度（重量%）は第10表に示した。B-a3ピットの出土頻度を層位別に検討すると、I層4.9%、II層54.8%、III層16.6%、IV層23.6%であり、II層にイノシシの出土が多い。II層の中でもIIc層が44.8%でもっとも多く出土している。この高い比率はこの小層に、イノシシの顎骨が10個も出土したためである。

a. イノシシの顎骨について

イノシシのそれぞれの顎骨について計測を行ない、その保存状態と出土状況をB-a3ピットを中心に記述する。

混貝土層〔IIc層〕

IIc層には顎骨が10個出土し、そのうち対をなすものが3対あった。対をなすものの出土状況は、2対のイノシシがホラガイと集合し、そのホラガイの殻口部の方向は北側（海側）に向い、イノシシの牙の方向は南側（山側）に向かって出土していた。また、そのうちヤコウガイ製有孔製品と集合したのが、第1号遺物組成（図版11-4）の下顎骨である。この下顎骨は下顎骨前端部と第2小前臼歯（P₂）を欠くだけであり、保存状態は良好である。臼歯全体に摩滅が著しく、老獣であることが推定できる。P₂ ~ M₃ 7.6cm、M₃ 2.4cmの数値を示し犬歯は残存する。

第2号遺物組成の顎骨は、図版11-5の下顎骨である。右下顎骨においてP₂ ~ P₄、M₁、左下顎骨ではP₂、M₁の脱落がみられる。犬歯先端に破損が著しく、臼歯は丘陵歯を呈しており、成獣であることが推定できる。P₃ ~ M₃ 7.2cm、M₃ 2.5cmである。

図版11-6の下顎骨は対をなし、第2号遺物組成をなす。この顎骨は保存状態が非常に悪く発掘後の接合によって対をなしていることが判明した。臼歯の摩滅は著しく、老獣であることが推定できる。

第3号遺物組成の顎骨は図版11-1の右下顎骨である。この顎骨は第3大後臼歯（M₃）が完全に萌出せず、臼歯は丘陵歯を呈し、成獣であることが推定できる。P₃ ~ M₃ 7.0cm、M₃ 2.3cmである。

図版11-2はM₃がまだ萌出せず、犬歯の先端が頭をのぞかせており、臼歯は丘陵歯を呈す。若獣であることが推定できる。M₁ ~ M₂ 3.0cmの左下顎骨である。

図版11-3は臼歯の摩滅が著しく、老獣であることが推定できる。P₃ ~ M₃ 6.7cm、M₃ 2.6cmである。

残りの1個は臼歯の丘陵が著しい上顎骨である。

混土貝層〔IIa層〕

IIa層には顎骨が3個出土し、対をなす上顎骨がある。その2個は上顎骨と連結する頭部を欠くため破損が著しい。M₁の摩滅は顕著であるが、他ははまだ丘陵歯を呈し、成獣であることが推察できる。M₁ ~ M₃ 4.7cm、M₃ 2.2cmの上顎骨である。

残りの顎骨は臼歯が全部脱落し、破損が著しい下顎骨である。

石灰岩礫層上部〔Ⅲ層〕

石灰岩礫層上部から3個の顎骨が出土し、対をなす下顎骨がある。

図版11-7は対をなす下顎骨であり、両顎骨ともM₂の前より折れている。M₁に摩滅が著しく、M₃はやや丘陵歯を呈し、犬歯の破損は顕著である。M₂~M₃ 4.3cm、M₃ 3.8cmの下顎骨である。

図版11-8はM₃とそれを支える下顎体のみ出土でM₃の丘陵が著しい顎骨である。

淡黒褐色土層〔Ⅳ層〕

Ⅳ層30~60cm深度に3個の顎骨が出土している。

図版11-9および10は上顎鼻部である。9は門歯が残存し、10は門歯脱落で下方より火を受けた痕跡がある。他の1個は上顎骨でM₂~M₃が残存し、両臼歯とも著しい摩滅である。

Ⅳ層60~90cm深度には2個の顎骨が出土している。

図版11-12は幼獣と判別がつく左下顎骨でP₄~M₂が残存し、M₂は完全な萌出状態ではない。M₁下後方の体厚1.2cm、同体高1.8cmである。Ⅱ層のもっとも保存状態の良い顎骨(図版11-4)は、M₁下後方体厚2.0cm、同体高3.5cmで前者はこの顎骨の1/2倍の大きさである。

図版11-11は全臼歯の摩滅した老獣と推定できる右下顎骨である。

上記顎骨の臼歯の摩滅状態・大きさから、イノシシの個体数一すなわち、狩猟活動の結果として得られた捕獲頭数を割り出した。個体数は最少個体数・最多個体数をもってあらわした。その方法は前述したとおりで、形状のはっきり区別できるものは最少個体数としてあらわし、形状を詳細に観察しないと判別がつかない不明瞭なものは最多個体数であらわした。結果は下表のとおりである。

第4表 イノシシ顎骨の層別別出土状況

地区ピット	B-a3					小計	c-k15	c-k14	表採	計
	Ⅱ		Ⅲ	Ⅳ						
	混貝土層	混土貝層	石灰岩礫層上部	淡黒褐色土層						
			30-60	60-90						
顎骨	r $\frac{1}{4} \frac{0}{5} l$	r $\frac{1}{0} \frac{1}{1} l$	r $\frac{0}{2} \frac{0}{1} l$	r $\frac{1}{0} \frac{0}{0} l$	r $\frac{0}{1} \frac{0}{1} l$	r $\frac{3}{7} \frac{1}{8} l$	r $\frac{0}{0} \frac{1}{1} l$	r $\frac{0}{1} \frac{0}{0} l$	r $\frac{0}{1} \frac{0}{0} l$	r $\frac{3}{9} \frac{2}{9} l$
最少個体数	6	1	2	2	2	13	2	1	1	17
B-a3(%)	46.2	7.7	15.4	15.4	15.4	≒100				
全体(%)	35.3	5.9	11.8	11.8	11.8		11.8	5.9	5.9	≒100
最多個体数	7	2	2	3	2	16	2	1	1	20

顎骨の出土は全体で25個をかぞえ、最多個体数20、最少個体数17である。B-a3ピットでは上記した特徴により、最多個体数16、最少個体数13が割り出せる。最少個体数についてみると、B-a3ピットより出土した顎骨は全体の76% (個体数%) を占めている。さらに層別別に検討すると、Ⅱ層のⅡc層が46%でもっとも高く、他の層は平均的な値である。Ⅱ層出土の顎骨はM₃の萌出していない個体を除けば、他は成長したイノシシと思われる。この個体とⅣ層出土の幼獣を比較すると前者はM₁下後方体厚1.6cm

同体高2.7cm、後者は同体厚1.2cm、同体高1.8cmである。両顎骨の差は体厚0.4cm、体高0.9cm近くもあり、前者より後者が小さい個体であることがわかる(図版11-2・12を比較)。

顎骨以外の骨でⅡ層・Ⅲ層およびⅣ層の骨の大きさを比較してみると、尺骨の最大幅でⅡ層出土(図版12-A-右1)のものが3.2cm、Ⅲ層出土(図版12-A-右5)1.9cm、Ⅳ層出土(図版12-A-右6)1.8cmでもっとも小さい。肩甲骨でもⅣ層出土(図版12-A-左7下)に肩甲骨径0.9cmの小さい骨が出土している。このようにB-a3ピット下部では、Ⅱ層に比較して小なる骨が出土する。この点とⅣ層出土の幼獣は、狩猟の面で大きな意味をもつものと思われる。

b. 骨の割れ方について

イノシシの顎骨のほか、割れた長管骨がよく出土する。長管骨の一方の関節部が割れたものや両端の関節部が割れたもの、あるいは長管骨が砕けた骨片など、3形態の割れ方が認められた(図版12-B)。関節部を欠くものと骨片が多く、両端を欠くものは少なかった。図版12-B-1の上腕骨について検討すると、12例中Ⅲ層出土の1例を除いて他は上腕骨下部の関節部を完全に欠いている。これは骨髓摘出のために破壊したものと思われる。しかも上腕骨にかぎってみると、破壊する部位もさまざまである。また、本遺跡では完形で出土した頭骨はなく、脳髓摘出のためと思われる頭蓋の破壊がみられる。しかし、頭蓋の破壊は捕獲のための打撃による破壊とも考えられるために、今後の資料追加、生産用具の発見および解明をまって検討に付したい。

B. 小動物について

本遺跡出土の小動物で種が判名したのが、ケナガネズミ(図版14-c-8)である。ケナガネズミは子猫ほどの大きさで、樹上生活をしている。現在、沖縄本島北部山地に棲息し、今帰仁村には棲息していない(沖縄鳥類保護協会, 1975)。これは、B-a3ピットⅠ層より左下顎骨の出土である。なお計測値を付記しておく。単位mm。

全長36.2、枝高18.8、白歯長10.6、第1白歯下体厚5.0、同下体高11.0

他に種の判名しないネズミ類の顎骨2個がB-b3ピットⅡa層より出土している(図版14-c-10・11)。また、B-d2ピット表探では種不明の下顎骨がある。残存白歯は犬の白歯と異なり、猫の白歯と著しく類似する(直良信夫, 1972)。表探であるうえ後世の遺物とも考えられるが、今後の資料検討が必要な遺物である。全長57.4、下顎骨突起~関節突起間長8.8、残存白歯前下体高7.1、同後下体高9.4、同下体厚4.8、同白歯長7.2(図版. 14-c-9)。

なお、後者の3資料は第二次発掘調査分である。

2. 鳥類遺存体

本遺跡より出土した鳥骨は少ない。Ⅱd層、Ⅳ層の90~120cm、120~150cm深度、また、B地区表探のその地点より1個ずつ出土している。これらの鳥類遺存体の種は不明である。

3. 海獣類・甲殻類遺存体

海獣類遺存体はジュゴンが出土し、他にクジラの脊椎骨を利用した骨製品がある。

ジュゴンの骨は各層から出土している。肋骨はほとんど図版14-A-5・6のように割れており、完形で出土したのはⅡc層の肋骨のみである(図版14-A-1)。Ⅱa層の肋骨には鋭利なもので割ったと思われる傷跡があった(図版14-A-4)。肋骨以外に肩甲骨、脊椎骨〔琉球大学風樹館の骨格標本と比較した。〕、中手骨が得られたことは注目にあたいする。

甲殻類は未同定なためその種を知ることはできなかったが、カニにおかがに科の一種、わたりがに科の一種、ウニにながうに科のパイブウニとその一種がみられる。

爬虫類は陸ガメ・海ガメが出土しているが、その出土は非常に少ない。

4. 魚類遺存体

本遺跡出土の魚類遺存体で種の同定を得られたものは4科10種である。他に、形態上区別できるものが6種類ある。これらの種名はいずれも不明であるが、はた科に属すると思われる顎骨の出土がある(図版13-27)。種を決定しえた魚類は下記のとおりである。()は沖縄本島における種の俗称を示し、魚類の前番号は図版13の番号と一致する。

ぶだい科

- 10 ナガブダイ属 ナガブダイ
- 8.12 イロブダイ属 イロブダイ (アガチャー)
- 11 ブダイ属 タイワンブダイ
- 6 キツネブダイ属 ヒブダイ (アガイ)
- 7 キツネブダイ属 オジロブダイ
- 9.13 キツネブダイ属の一種 (大部分はハゲブダイ《アカー》と考えられる)

べら科

- 14~17 イラ属の一種 (クサビベラ《イノーマクブ》か、シロクラベラ《マクブー》と考えられる)
- 18 キュウセン属 ミツボシキュウセン

ふえふきだい科

- 22.23 フェフキダイ属の一種 (ハマフェフキ《タマン》と考えられる)

はりせんぼん科

- 20.59~63 ヒトズラハリセンボン

種が判明した魚類は、いずれもサンゴ礁域に棲息するものである。そのうちⅡ層出土のイロブダイは、他のブダイよりも深みに棲み、漁撈活動の面から注目される遺物である。他遺跡ではシマシヤーマ貝塚(沖縄貝塚時代後期)から出土している〔服部仁, 1976〕。

次にB-a3ピットの層位別出土頻度(重量%)を検討すると、Ⅰ層12.2%、Ⅱ層63.1%、Ⅲ層1.3%、Ⅳ層23.3%である。Ⅲ層には魚骨の出土がほとんどなく、Ⅱ層にその出土頻度が著しい。出土した魚骨の中で特に各科顎骨の出土状況に注意を払うと第5表のようになる。

第5表 魚類遺存体における各魚科の層位別出土状況

地区ピット	B-a3													B-c2	B-c3		B-c4		c-k15		c-k14	採	探	誌									
	層位	I					II					計	II	I	II		I	II	計	c	地区不明												
		耕作土層	黒褐色土層	黄褐色土層	赤褐色土層	赤褐色土層	赤褐色土層	赤褐色土層	赤褐色土層	赤褐色土層	赤褐色土層				赤褐色土層	赤褐色土層									赤褐色土層	赤褐色土層	赤褐色土層	赤褐色土層	赤褐色土層	赤褐色土層	赤褐色土層	赤褐色土層	赤褐色土層
ふえふきだい科	3/5 2/2		1/0 1/2	2/0 1/3	2/4 5/3	5/4 7/8		2/0 0/0		0/1 0/0	1/1 0/1	3/2 0/1	11/11 9/11	0/1 0/0		1/0 0/0	0/1 0/0	1/0 0/0	9/9 3/4	0/1 0/2	0/1 0/1	3/4 2/2	0/0 0/1	25/28 15/21									
左右判別不明			3	1	4 (45.9)							4 (22.2)											4										
べら科	0/1 1/3		2/0 2/0	2/1 0/0	2/3 2/1	7/4 4/1		4/1 1/1	1/0 0/0	0/2 0/0	0/1 0/0	1/0 0/0	10/9 8/4	10/9 8/15		1/0 0/0	2/0 1/0	0/3 0/2				2/1 1/0	1/1 0/0	25/14 15/7									
左右判別不明																																	
べら科	0/0 1		0/0 1	0/0 2	0/0 3	0/0 8		0/0 1		0/0 1	0/0 2		0/0 4	0/0 11		0/0 1	2/1 7					0/0 8	0/1 1	2/2 26									
ぶだい科	2/1 1/1		1/1 0/0	2/2 1/2	2/1 0/0	5/3 1/2		1/0 0/0	0/1 0/0	0/0 0/3	0/0 1/0		0/1 1/4	9/5 3/7		1/0 1/0	0/2 0/0	1/6 2/1				0/0 2/0		10/13 8/8									
左右判別不明					1	1 (19.7)							1 (22.2)			2		2					5										
ぶだい科	1/2 2	1/0 0	0/2 0	1/2 4	1/1 1	3/5 3		1/2 3		0/0 1	0/0 1		1/2 5	5/9 12		0/0 1	0/0 1	0/1 0		0/0 2	4/4 2	3/0 0	1/0 0	0/1 3	13/18 21								
その他	3		1	2	2	5 (8.2)	1	1					1 (3.7)	10		1	2				2	1	2	18									
計	31	1	14	30	35	80 (100%)	1	1	19	4	8	7	1	39 (100%)	152	1	1	2	3	3	13	71	10	3	28	9	286						

注. ※右上顎骨|左上顎骨 右上咽頭骨|左上咽頭骨
右下顎骨|左下顎骨 下咽頭骨

※II層、IV層の各科別出土頻度は咽頭骨を除外した。

顎骨および咽頭骨は、全地区より296個得られ、そのうちB-a3ピットが152個で約半数を占めている。咽頭骨を除外した顎骨の科別出土個数は、ふえふきだい科93個、べら科61個、ぶだい科44個でふえふきだい科が多い。さらに、B-a3ピットの層位別各魚科の出土個数を検討すると、II層でそれぞれ28個、16個、12個、IV層では6個、14個、6個出土した。べら科の出土個数はあまり変わらないが、ふえふきだい科はII層で著しく増加する。III層においてはぶだい科1個と不明魚科1個のみの出土で各科の層内遺物組成をみる事ができなかった。

次に、これらの顎骨、咽頭骨の性状と推定体長を記しておく。ぶだい科で種の判明しなかったキツネブダイ属の咽頭骨をみると、上歯板幅は2.2~6.4mmで4.0~5.0mmのものが多く、下歯板幅は5.3~11.1mmのものであり、これらの推定体長は15~40cmである。種の判明したぶだい科の中でもっとも多いものがイロブダイの55~60cmで、小さいものが20~25cmのオジロブダイである。また第6表-Bによるとべら科イラ属の体長は17~33cmであり、下咽頭骨の下歯板長は19~47mmで35~45mmのものが多く(以上の計測推定体長は吉野氏によるものである)。ふえふきだい科で計測できたb長は16.0~50.4mmで36.0~39.8mmのものが多かった。これらのb長をもつ顎骨は第7表-Bにより体長18~76cmであり、もっとも出土の多かったものの体長は50~56cmである。また体長40~56cmまでの出土頻度は54.3%を占めている。

脊椎骨の椎径の計測結果は第8表のとおりである。第8表-Aは本遺跡出土脊椎骨の椎径の大きさを比較するために、現生種ハマフエフキ(タマン)の椎径を計測したものである。これによると体長19cmで4~5mmの椎径が多いことがわかる。この計測結果を基準にして第8表-Bを検討すると、c-k15ピットNEサブトレッチ(水洗選別による資料)では、4mm以下のものが53.0%で多く19cm以下の魚も捕獲していたことがわかる。

魚類遺存体と漁撈活動

B-a3 ビット II層、IV層における顎骨の各科別出土頻度（個数%）を比較したのが第9表である。

第9表 各層位における魚類組成

		%				
		0	50	100		
IV層	ふえふきだい科 22.2	べら科 51.9			ふだい科 22.2	ふえふきだい科はIV層で22.2%を占めるが、II層では45.9%で増加する。ふだい科はIV層22.2%、II層19.7%と減少し、べら科においてはIV層51.9%、II層26.2%で著しく減少する。ここにIV層とII層に占める魚科の主体がべら科からふえふきだい科へと変化する。
II層	ふえふきだい科 45.9	べら科 26.2			ふだい科 19.7	
				その他		

これは非常に重要な意味をもつものと思われる。このような変化を考察する前に、各魚科の生態とふえふきだい科の体長についてふれておく。

ふえふきだい科のハマフエフキ（タマン）は岩礁の多い砂地を棲みかとするが、毎年5月ごろに、数十cmのものが群れをなして内湾にも入ってくる（具志堅宗弘，1973）。体長復元で得られたふえふきだい科の体長組成をみると40～56cmのものが54.3%を占めている。また、ふだい科はサンゴ礁の発達した所に多く、まばらな群れをなす。べら科のイラ属はサンゴ礁域の砂地上にみられ、群れをなさない。

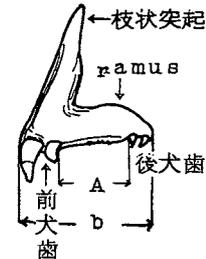
これらの生態学的知見から考察すれば、IV層のべら科からII層のふえふきだい科の主体の変化は、群れをなさない魚科から群れをなす魚科の変化とみることができる。これはII層とIV層の時期に漁撈具の変化があることを示唆するものであろう。本遺跡出土の漁撈具を検討すると貝錘はII層に14個、IV層に1個（貝錘の項参照）出土している。

以上のことから少なくともII層の時期には貝錘を使用した網漁が行なわれていたことが推察できる。しかも体長40～56cm級の魚群をねらった漁法であったと思われる。さらに漁を行なう場所は、出土した魚類はリーフ内に棲息するものがほとんどであることにより、漁場の範囲はリーフ内に限られ外海での出漁はほとんどなかったものと推定できる。なお、ジュゴンの断片骨の出土は、リーフ内に入ってきたものを偶然的に捕獲したものであろう。

第6表 魚類遺存体の体長復元I (べら科の例)

現生べら科・種のA長と体長の相関関係を formalin 液浸標本より測定し求める。

(なお、べら科挿表は吉野による。)



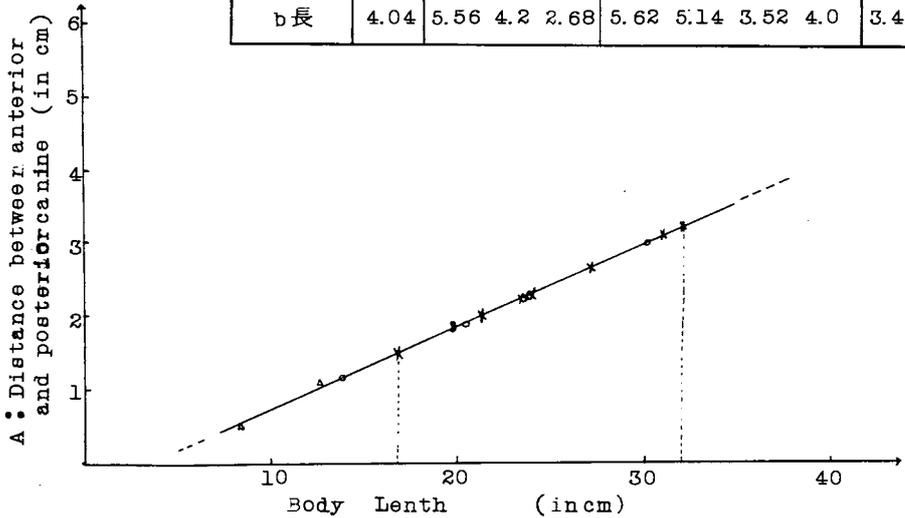
第9図 べら科計測部位および名称

現生べら科・種の体長とA長

種	△ C. Jordani		○ C. Zamboange		○ C. Schoenleini		
A長	5	11.0	18	19	12	19	30 (mm)
体長	7	12.8	20	20	14	20.8	30.5 (cm)

第6表-A 貝塚出土のべら科顎骨のA長とb長 (in cm)

地区 Pit	B-a 3			C-k15				C地区 表 採	
	II	IV							
A長	2.28	3.1	2.3	1.5	3.2	2.68	2.0	2.38	2.0
b長	4.04	5.56	4.2	2.68	5.62	5.14	3.52	4.0	3.46



第6表-B. 体長とべら科顎骨の相関関係、貝塚出土のべら科の体長(×印)

第7表 魚類遺存体の体長復元II (ふえふきだい科の例)

現生ふえふきだい科ハマフエフキ (タマン) のb長と体長を測定し相関関係を求める。



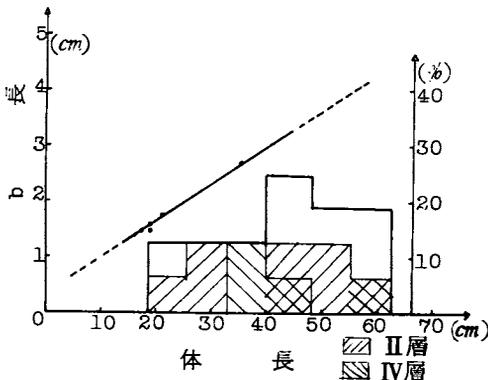
第10図 ふえふきだい科の計測部位

現生ふえふきだい科の体長とb長、ℓ長 (in mm)

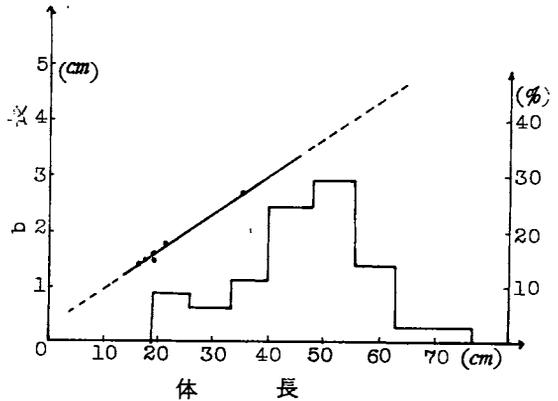
体 長	160	170	190	"	210	350
左右判別・計測部位	左	"	"	"	"	"
b 長	13.6	14.6	15.4	16.4	17.6	26.8
ℓ 長	16.4	17.9	20.6	20.0	20.6	36.0

第7表-A ふえふきだい科上顎骨地区別計測表および出土頻度 ()は個数%。単位mm

地区ピット	b 長	15~19.9	20~24.9	25~29.9	30~34.9	35~39.9	40~44.9	45~50.9	50~54.9	計
C-k15				2 (15.4)	3 (23.1)	4 (30.7)	2 (15.4)	1 (7.7)	1 (7.7)	13 (=100)
ハマc (表採)		1 (16.7)			2 (33.3)	3 (50.0)				6 (100)
B-a3	I 耕作土層	1 (6.3)			1 (6.3)	1 (6.3)	1 (6.3)			4 (25.0)
	II 混貝土層	1 (6.3)			1 (6.3)					2 (12.5)
	混土貝層		2 (12.5)		1 (6.3)	2 (12.5)	1 (6.3)			6 (37.5)
	IV 淡黒褐色土層			2 (12.5)	1 (6.3)		1 (6.3)			4 (25.0)
	小計	2 (12.5)	2 (12.5)	2 (12.5)	4 (25.0)	3 (18.8)	3 (18.8)			16 (=100)
計		3 (8.6)	2 (5.7)	4 (11.4)	9 (25.7)	10 (28.6)	5 (14.3)	1 (2.9)	1 (2.9)	35 (=100)



第7表-B B-a3ピットにおけるふえふきだい科のb長と体長の相関関係および出土頻度



第7表-C 全地区総合、貝塚出土ふえふきだい科のb長と体長の相関関係および出土頻度

第8表 貝塚出土脊椎骨の椎径計測および出土頻度

()は個数%。単位mm

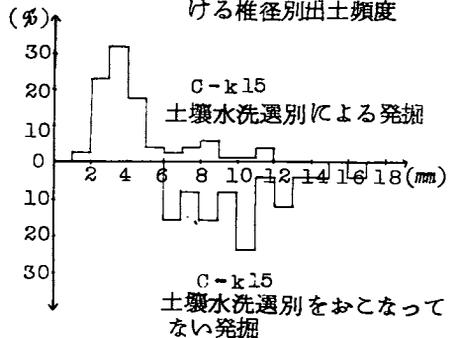
地区ピット	椎径長	1~1.9	2~2.9	3~3.9	4~4.9	5~5.9	6~6.9	7~7.9	8~8.9	9~9.9	10~10.9	11~11.9	12~12.9	13~13.9	14~14.9	15~15.9	16~16.9	計	
C-k15	I 125-145NE	2 (2.9)	16 (23.2)	22 (31.9)	12 (17.4)	3 (4.3)	4 (16)	2 (8)	4 (16)	2 (8)	6 (24)	1 (4)	5 (12)	1 (4)	1 (4)		1 (4)	25 (100)	
	II 125-145SE																	69 (=100)	
B-a3	I 耕作土層		1 (2.6)	3 (7.9)	4 (10.5)	2 (5.3)	1 (2.6)												11 (28.9)
	II 混貝土層					1 (2.6)	1 (2.6)	1 (2.6)								2 (5.3)		1 (2.6)	6 (15.8)
	混土貝層					4 (10.5)	2 (5.3)	1 (2.6)	2 (5.3)	2 (5.3)	1 (2.6)	1 (2.6)	1 (2.6)	2 (5.3)	1 (2.6)			2 (5.3)	18 (47.4)
	IV 淡黒褐色土層					1 (2.6)					1 (2.6)			1 (2.6)					3 (7.9)
	小計			1 (2.6)	3 (7.9)	9 (23.7)	6 (15.6)	1 (2.6)	4 (10.5)	2 (5.3)	1 (2.6)	1 (2.6)	1 (2.6)	3 (7.9)	3 (7.9)			3 (7.9)	38 (100)
計		2 (1.2)	16 (12.1)	23 (17.4)	15 (11.4)	12 (9.1)	6 (4.5)	12 (9.1)	5 (3.8)	8 (6.1)	5 (3.8)	4 (3.0)	4 (3.0)	4 (3.0)			4 (3.0)	132 (100)	

第8表-A 参考資料 現生ふえふきだい科椎径および椎長

単位mm

体長	部位	← 頭部											----- 尾部 →										
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
35cm	椎径	11	11	10	8.6	7.0	8.0	8.4	9.6	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	8.8	8.0	8.5	8.0	7.6	7.4	7.2	7.0
	椎長	6.0	7.0	7.0	8.0	9.0	9.0	9.4	10	10	10.4	11	12	11.4	12	12	11.0	10.0	9.0	8.4	8.4		
19cm	椎径	6	5	5	4.6	4.6	4.6	4.5	4.6	4.8	4.7	5.0	4.9	4.8	4.8	4.6	4.7	4.6	4.3	4.3	3.5		
	椎長	4.4	4.0	4.8	4.8	5.2	5.4	5.6	5.5	5.8	6.0	6.0	6.4	6.2	6.2	6.4	6.0	5.6	5.0	4.3	4.3	3.6	

第8表-B C-k15ピットにおける椎径別出土頻度



第10表 渡喜仁浜原貝塚における獣類・鳥類遺存体の出土構成表

獣類遺存体 (イノシシ)

地区ピット	B - a 3																																			
	層位	I				II				III				IV																						
		耕作土層	黒褐色土層	黄褐色混土礫層	混貝土層	混土貝層		石灰岩礫層		淡黒褐色土層																										
	数量	完破		重量		完破		重量		完破		重量		完破		重量		完破		重量																
完		破	重	量	完	破	重	量	完	破	重	量	完	破	重	量	完	破	重	量																
図版番号	骨格名																																			
図版11	顎骨					4	6	55	3	56					3	166							3	90	2	34										
	犬歯			1	1	1	10					1	12											1	2											
	門歯			1	1	8	11	1	1																											
	臼歯	1	1				1	1					2	1																						
	上腕骨																																			
図版12-B-1	大腿骨																																			
図版12-A-2	桡骨																																			
3	尺骨							1	15																											
4	脛骨																																			
5	中手骨																																			
6	中足骨																																			
7	肩甲骨																																			
8	寛骨																																			
9	基節骨																																			
0	末節骨																																			
11	肋骨																																			
	腕側手根骨?																																			
	中節骨																																			
	頭蓋骨																																			
	骨片																																			
	不明																																			
	計	3	32	69	1	7	2	12	22	14	40	62	6	1	29	95	5	15	3	14	220	1	4	12	21	80	1	13	133	1	7	92	7	14	3	11
	重量%	4.9			0.5		1.6		44.8	6.8		1.1	15.8	0.9	5.7	9.5	6.6	1.0	0.8																	
獣類遺存体 (小動物)																																				
図版14-C	顎骨	1	1	2				1																												
	不明				2	5	5	2	4	2	4																									
鳥類遺存体																																				
	不明											1																								

小 計	B-c3				B-c4				C-k14		C-k15		表 探								
	I		II		I		II		全 ピ ン ト 出 土 分	全 ピ ン ト 出 土 分	C地区	B地区	地区不明								
	耕作土層	黒褐色土層	黄褐色 粘土礫層	耕作土層	黒褐色土層	完	破	完					破	完	破	完	破	完	破		
個 数	重 量	個 数	重 量	個 数	重 量	個 数	重 量	個 数	重 量	個 数	重 量	個 数	重 量	個 数	重 量	個 数	重 量				
4	17.669							1	15	2	50	1	8								
3	23		1	2																	
11	15															2	4				
4	3											1	7								
5	65									1	21	1	2			3	42				
1	18		1	22												1	14				
1	1	6								1	4	1	15								
6	39				1	15						1	8								
3	60																				
1	2	12										1	5								
1	8											1	6								
5	15															1	36				
1	4																				
1	5																				
								1	1	1	1										
20	24									5	12	1	2								
1	2											1	1								
14	20															2	6				
105	156	3	6	2	2			5	8	1	2	1	1	14	31	8	17	10	20		
7	20			1	2			1	10												
27187	1396	3	6	5	28	1	15	6	13	1	2	1	2	17	24	118	1	15	70	19	122
≒ 100																					
2	1	2																			
2	9	13																			
3	2																				

注.

※ 表中の完・破は、完品・破片を示し、重量の単位はgである。

※ 獣類の骨の鑑定は、大城氏、川島氏が行なった。

※ 骨格部分で判断し難いものは、?で示した。

※ 出土のない層は除外した。

第11表 渡喜仁浜原貝塚における魚類・甲殻類・海獣類遺存体の出土構成表

魚類遺存体

地区ピット		B - a3																				小計														
		I		II						III				IV																						
		耕作土層		黒褐色土層		黄褐色混土層		混土層		石灰岩層		淡黒褐色土層																								
		完	破	完	破	完	破	完	破	完	破	完	破	完	破	完	破	完	破	完	破															
函版番号	骨格名	数量		数量		数量		数量		数量		数量		数量		数量		数量		数量		数量														
		完	破	完	破	完	破	完	破	完	破	完	破	完	破	完	破	完	破	完	破	完	破													
	類骨	17	840			5	630	15	666	19	1055	1	4	1	2	6	624	4	7	6	41	3	1	8	1	3	176	39	280							
	咽頭骨	6	14	1	2	1	2	15	6	334	4	2	34			4	3	12		2	9	3	8					26	11	127						
函版.13-29	主上顎骨	2	5			6	8	4	8							3	7												15	28						
30	上主顎骨	1	1			1	3	2	3	5	9									1	4	1	2						10	1	22					
31	舌顎骨							2	2	4	3					2	1			1	2	1	2						10	10						
32~37	関節骨	1	1			2	2	3	6	3	3	4				1	3					1	2						11	3	18					
38	下尾骨	2	2					2	2	2	1	3			1			1	1											8	4	8				
53~54	脊椎骨	14	3	4				6	1	6	14	5	16					1		1		1							37	9	26					
39	頷骨	1	1			1	2	2	1	6	6				1	1														1	10	11				
40~41	せつじゅ骨							1	1	2	2											1	1							4	4					
42~43	副楔骨	1	1	1	1	1	1	2	2	3	5																			8	10					
44	上鰓蓋骨					1	3	5	5	6						2	2													5	6	13				
45~46	前鰓蓋骨					1	2	2	2	3	7	2	12			4	4			1	2									15	4	23				
	鰓蓋骨類	11	39	13		30	18	44	24							7	14			2	2								11	122	71					
47~48	方骨					1	2	3	6	8	8			1	3	2	2													15	21					
55~63	棘類	28	32	9		3	2	2	22	23	11	22	21	8		5	6	4	1		1		3	1					82	87	35					
	頭骨片							1	2	3	6				1															5	8					
	骨片							4	5	10	50	12				7	3		4	3	2	1	1							109	29					
	不明							1	1	1	1																			1	1	2				
函版.12-E	鱗																																			
	計	83	86	91	2	3	19	44	85	154	193	35	107	190	1	4	2	3	6	27	32	76	7	4	11	13	4	60	11	5	24	1	3	327	419	746
	重量%	12.2		0.4		11.4		25.9		25.5		0.5		0.8		10.2		1.5		8.0		3.2		0.4										100		
甲殻類遺存体																																				
函版.12-D	カニ			1	3			1	6	9	36	10	33					1	1			2	7										24	86		
	ウニ									18	6	30	11									1	3											49	20	
海獣類遺存体																																				
函版.14-A	肋骨			1	38					1	58					1	23			1	1							2	6			6	126			
	脊椎骨																																			
	中手骨																					3	14											3	14	
	肩甲骨															1	28					1	3		5	17							1	6	48	
	不明			1	38			1	23																									2	61	
	種不明骨片																																			
	計			2	76			1	23	1	58					1	1	51		3	14	1	1	1	3	5	17	2	6			2	16	249		
	海ガメ?																			1	5													1	5	
	陸ガメ?							1	1																									2	3	

5. 貝類遺存体

渡喜仁浜原貝塚第一・二次調査において出土した全貝類遺存体の整理は、いまだ完了していない。従って、本稿では現段階において整理の終了した第一次調査のB地区a3ピット出土貝類遺存体についてのみ報告したい。その場合、貝製品あるいはそれと推測されるものについては除外した。

A. 貝塚の貝類

渡喜仁浜原貝塚B地区a3ピット出土貝類は、第16表および図版15・16に示すように3綱47科143種である。斧足綱（二枚貝類）は、19科62種が確認され、これらのうちには種名同定になお時間を要するものが6種含まれる。また、水深50～300mに棲息するベッコウガキ11個体が出土している。腹足綱（巻貝類）としては28科80種が確認された。それらのうちには種名同定になお時間を要するもの3種と、微小貝のために食用不適と思われるもの4種—クンジャンケマイマイ・きせるがい科の一種・テリタマキビガイ・ヒメヨウバイが含まれる。さらに、前記ベッコウガキ同様に水深10mの砂地に棲息するスイショウガイが3個体、同20～50mの岩場に棲息するハリサザエが1個体出土している。はたして、それらの出土貝類は、当該棲息地から潜水等の採取技術によって獲得されたものか、あるいは他の要件によるかは、今後の追加資料からの検討が必要である。

他に、多板綱の殻が3個出土したが、科・種同定にはいたらなかった。

B. 貝層の形成

II層からIV層に互る3枚の層およびII層内の各小層に含まれる貝類は、組成（第12表参照）のうえて異なる傾向を示す。以下、おのおのの層について略述するが、文中の%表示の⑧・⑨は第12表注1によった。

a. II 層

B地区a3ピット出土個体総数3,297個体のうち、本層からはその66.1%に相当する2,182個体が得られた。殻数・重量にして3,976殻—42,821グラムをなし、その種別構成は3綱43科121種である。黒褐色土層（IIa層）：出土貝類は、きわめて少なく僅かに102殻が出土し62個体を算出するのみである。また、本小層の貝類組成は他のII層小層と比較して陸産貝類が⑧19.3%を示すなど著しい変化がみられる。しかし、この組成については、本小層出土の潮間帯岩場に棲むアマオブネの殻13個体中5個体にヤドカリの宿貝の痕跡を残すことや、陸産貝類に小型の殻を多く含むことは、当該貝類が本小層中に自然的混入した結果、自然死したものと想定されること、あるいは出土絶対数の僅少さから貝塚集団の貝採取活動によって生じた比率とは認めがたい。

黄褐色泥土礫層（IIb層）：463殻—6,195グラムを出土し242個体が算出された。そのうち、海産貝類は201個体（⑧83.0%）を占め、内実は他のIIc・d層と比較して潮間帯の貝が119個体（⑨59.2%）と少なく、それに反し潮間帯下の貝が多い（⑨18.9%）傾向にある。また、河川の貝類も多産している。

混貝土層（IIc層）：1,017殻—10,819.5グラムを出土し562個体が算出された。アラスジケマンガイ95個体・イソハマグリ72個体をはじめとして潮間帯砂地性貝類が、海産貝出土個体総数511個体のうち212個体（41.4%）ときわめて多く出土している。次いで同岩場性貝類が109個体（⑨21.3%）を出

第12表 渡喜仁浜原貝塚B地区 a 3ピットの貝類組成比較

産所 層位	陸産の貝		河川の貝		海産の貝								総計								
					潮間帯		潮間帯～潮間帯下		潮間帯下		不明	小計									
					砂地	岩場	砂地	岩場	砂地	岩場											
I 層	23	26.7	3	3.4	20	—	18	—	9	—	3	—	3	—	6	—	1	—	60	69.7	86
	37	—	96	—	101	33.3	49	30.0	150	15.0	148	5.0	68	5.0	399	10.0	269	1.6	1,184	100	
II a 層	12	19.3	4	6.4	19	—	15	—	10	—	0	—	2	—	0	—	0	—	46	74.1	62
	15	—	144	—	115	41.3	160	32.6	145	21.7	50	0.0	47	4.3	195	0.0	142	0.0	855	100	
b 層	11	4.5	30	12.3	82	—	37	—	21	—	21	—	20	—	18	—	2	—	201	83.0	242
	19	—	519	—	465	40.7	1,274	18.4	360	10.4	668	10.4	428	9.9	2,285	8.9	119	0.9	5,600	100	
c 層	15	2.6	36	6.4	212	—	109	—	85	—	32	—	45	—	17	—	11	—	511	90.9	562
	18	—	734	—	1,250	41.4	1,404	21.3	1,262	16.6	2,109	6.2	845	8.8	2,046	3.3	1,011	2.1	9,928	100	
(d) 層	5	2.0	15	6.0	79	—	49	—	57	—	10	—	21	—	8	—	2	—	226	91.6	246
	8	—	276	—	448	34.9	978	21.6	883	25.2	365	4.4	182	9.2	979	3.5	485	0.8	4,322	100	
d 層	47	4.3	48	4.4	399	—	206	—	173	—	61	—	89	—	39	—	8	—	975	91.1	1,070
	73	—	804	—	1,919	40.9	3,656	21.1	3,433	17.7	2,923	6.2	2,154	9.1	3,311	4.0	1,207	0.8	18,604	100	
小計	90	4.1	133	6.0	791	—	416	—	346	—	124	—	177	—	82	—	23	—	1,959	89.7	2,182
	134	—	2,477	—	4,198	40.3	7,473	21.2	6,083	17.6	6,116	6.3	3,657	9.0	8,817	4.1	2,965	1.1	39,310	100	
III 層	62	43.9	7	4.9	28	—	13	—	2	—	8	—	2	—	15	—	3	—	71	50.8	141
	79	—	95	—	83	39.4	78	18.3	20	2.8	47	11.3	2	2.8	1,086	21.1	196	4.2	1,812	100	
IV 層	185	20.8	108	12.1	345	—	71	—	33	—	76	—	31	—	25	—	13	—	594	65.8	888
	344	—	1,522	—	1,182	56.0	1,446	11.9	625	5.5	2,694	12.7	694	5.2	3,247	4.2	2,612	2.1	12,560	100	

注. 1 個体数 ①: 出土個体総数に占める出土頻度(%)

重量 ②: 海産貝の出土個体総数に占める出土頻度(%)

. 2 重量の数値末尾に付した(.)は、余数(.5)に相当する。

土し、これら潮間帯の貝類で①68.8%を占める。また、貝種別にみると前2種に加えてマガキガイ85個体・アマオブネ71個体が多く出土し、これらの4種で本小層の①57.4%を占めている。

レンズ状石灰岩礫層〔II〔d〕層〕: 468殻-4,672.5グラムを出土し246個体が算出された。本小層の貝類組成は、II層を上下に区分できる性格を帯びる。すなわち、海産貝類の占める比率が①91.8%と高く、さらにII層よりIV層に互る貝類組成変化のうえからも、潮間帯砂地・潮間帯～潮間帯下岩場および潮間帯総計の貝類が最小比率を、潮間帯岩場・潮間帯～潮間帯下砂地および潮間帯～潮間帯下総計の貝類が最大比率を示すことによる。

混土貝層〔Ⅱa層〕：本小層より1,926殻-20,091.5グラムを出土し、1,070個体が算出された。その貝類組成はⅡc層と類似するが、陸産貝類と河川の貝類は相反する様相をなす。さらに、貝種別にみるとごく限られた貝種が多産する傾向はⅡc層より強く、イソハマグリ180個体・マガキガイ173個体の2種で本小層の32.9%を占めている。なお、本小層の上部と下部を区分するとき、貝類組成は異なる様相を示した。すなわち、上部においては潮間帯砂地性貝類が348個体（上部中 $\text{\textcircled{44.5}}\%$ ）・河川の貝類が44個体（同 $\text{\textcircled{5.1}}\%$ ）を占めるが、下部においてはそれぞれ51個体（下部中 $\text{\textcircled{26.2}}\%$ ）・4個体（同 $\text{\textcircled{1.9}}\%$ ）を占めることによる。上部出土貝類は1,535殻-16,377.5グラム、860個体、下部出土のそれは391殻-3,714グラム、210個体である。

b. III 層〔石灰岩礫層〕

本層出土の貝類は、2綱27科39種、256殻-1,848グラムを検出し、141個体が算出された。そのうち陸産貝類が62個体（ $\text{\textcircled{43.9}}\%$ ）ときわめて高い比率を示すが、貝種はオキナワヤマタニシ・パンダナマイマイ・クンチャンマイマイの3種に限られ、上記2種のみでその95.1%を占める。また、海産貝類は $\text{\textcircled{50.3}}\%$ と小率だが、その内実はⅡ層からⅣ層に亙る貝類組成変化のうえから、潮間帯～潮間帯下砂地・潮間帯下砂地および潮間帯～潮間帯下総計の貝類が最小比率を、（潮間帯～潮間帯下岩場）・潮間帯岩場および潮間帯下総計の貝類が最大比率を示し、Ⅱ〔a〕層と相関関係をなす。貝種別にみると、オキナワヤマタニシ39個体・パンダナマイマイ20個体・イソハマグリ15個体・チョウセンサザエ9個体が多産した貝種である。

なお、本層出土の貝類にもアマオブネの殻4個体中2個体・ニシキアマオブネの殻2個体中2個体・インダタミの殻1個体中1個体にヤドカリの宿貝の痕跡を残すことから、本層の貝類組成は貝塚集団の貝採取の結果生じた比率とは些か様相を異にすると思われる。これら各貝種の出土個体数に比較してヤドカリの宿貝した個体数の多寡は、それを示すⅠ～Ⅱa層・Ⅲ層において渡喜仁浜原貝塚集団が本遺跡を放棄した結果、ヤドカリがその堆積土に自然的混入したことに起因すると考えられる。その想定は、調査団土器班の型式編年の位置づけとも一致する。

c. IV 層〔淡黒褐色土層〕

本層出土の貝類は、Ⅱ層より34科少ない2綱37科87種を同定した。その数量は1,705殻-15,089.5グラム、888個体である。海産貝類が594個体（ $\text{\textcircled{66.8}}\%$ ）、陸産貝類が185個体（ $\text{\textcircled{20.8}}\%$ ）、河川の貝類が108個体（ $\text{\textcircled{12.1}}\%$ ）得られたが、前者の内実はイソハマグリ96個体・イボウミナ90個体・リュウキュウマスオガイ52個体・ウミナ48個体をはじめ潮間帯砂地性貝類が345個体（ $\text{\textcircled{58.0}}\%$ ）も出土し、同岩場性貝類を含めると $\text{\textcircled{70.0}}\%$ である。また、キクザルガイ45個体を含め潮間帯～潮間帯下および潮間帯下岩場性貝類も101個体と比較的多産の傾向にある。

本層の深度別状況は、0～30cmが510殻-4,599グラム・248個体、30～60cmが374殻-2,623グラム・201個体、60～90cmが407殻-4,264.5グラム・225個体、90～120cmが350殻-3,268.5グラム・206個体、120～150cmが64殻-334.5グラム・44個体である（なお、各深度の個体数の総和とⅣ層出土個体総数は個体数算出の層位別方法より一致しない）。各深度別については貝類組成の変化はみられなかった。

c. 貝類遺存体の特徴

(文中、貝殻各部位の計測値はmmで現わす。)

a. 小型巻貝類

本遺跡出土のかわにな・うみにな科の破損には、一般的特徴として二形態が認められる。すなわち、殻の殻口部全体を欠落するものもあるが、多くは殻口外唇部を破砕あるいは穿孔したもの：I類(図版. 17-2-B・D)と、殻頂部を不規則に欠落したもの：II類(図版. 17-2 A・C・D・E)である。これら破損形態相互の関連と貝種との関係は、第13表-①からも明らかなように殻の厚いマドモチウミナ・オオヘナタリにはI類のみが、その他殻の脆弱な貝科種にはI・II類の複合形態が、多くみられる。このことは、当初I類処理によって前列記貝種のむき身を抜き取り、取れないものについては、殻頂部を折り取ること(II類処理)によってむき身を吸い出したことを示す例であろう。

あまおぶねがい科・インダタミは、完全殻を保つものが多い。しかし、それに比較して出土比率は小さいながらも特徴的な破損形態がみいだせる。その破損形態と出土状況(第13表-②)を以下に示す。

I類：完形殻であるが、殻口内のキバ状突起と滑層部を摩滅するもの。

II類：殻頂部、あるいはその近接部を欠損するもの。

III類：殻口外唇部、あるいは殻口滑層部に剝離痕を有するもの。

第13表-① うみにな・かわにな科の

破損形態別出土殻数表

貝種	層位	破損形態			注. 個体 総数
		I類	II類	複合	
マドモチウミナ	II	7	0	0	5
	IV	5	1	1	7
オオヘナタリ	II	0	0	0	0
	IV	3	0	0	3
かわにな科	II	15	1	8	24
	IV	14	0	5	21
ウミニナ	II	2	0	0	3
	IV	13	11	20	48
イボウミニナ	II	2	0	0	3
	IV	32	10	36	80
総計	II	26	1	8	35
	IV	68	22	62	159

第13表-② アマオブネ・インダタミの

破損形態別出土殻数表

貝種	層位	破損形態			※	個体 総数
		I類	II類	III類		
アマオブネ	I	5	1	0	1	9
	II	38	7	8	7	231
	III	2	1	1	0	4
	IV	3	6	1	1	24
	計	48	15	10	9	268
インダタミ	I	0	1	0	0	2
	II	3	3	10	0	26
	III	1	0	0	0	1
	IV	1	0	0	0	1
	計	5	3	10	0	30
総計		53	18	20	9	298

※ 破損形態の項の表示数値内において、I

注. 層位内出土の殻口滑層部を出土個体総数とした。 類と他類が複合した殻数を示す。

I類はヤドカリが宿貝することによって生じた痕跡であり、II・III類はむき身を抜き取るための処理痕であろう。また、I類殻にはII・III類の破損形態も伴うことから、ヤドカリも食用に供されたと思われる。しかし、I層出土殻については、その出土個体総数に比較してI類殻の多いことから、I層堆積土にヤドカリが自然的混入した結果、その層位内で自然死したものとして考えたい。II a層およびIII層についても、前述したようにその方向からの想定が必要である。

なお、かわいな・うみにな科の破損形態I類と同じく、殻口外唇部に穿孔されたものが陸産貝類にも認められた(図版. 17-3)。II層出土殻5例・IV層出土殻16例が、それに相当する。また、アマオブネ・インダタミの破損形態は、ニシキアマオブネ・ヒラマキアマオブネ・インダタミアマオブネ等の他小型巻貝類にも確認された。

b. 二枚貝類

B地区 a 3ピット出土の二枚貝類の殻には、むき身を取り出すため、こじあけることによって生じたと推察される剝離痕および殻内部に抉り痕を有するものが、ほとんどの貝種に認められる。

シレナシジミ：本種は、他の二枚貝類と様相を異にし、殻の破損が著しくII～IV層出土殻数399殻のうち245例が殻の一部を破損して出土した。また、完形殻も同じく、むき身を取り出すために生じたと思われる剝離痕を有するものが多い(同154殻中69例が相当する)。ちなみに、その破損形態と出土状況(第13表-③)は、以下のとおりである。

I類：完形殻であるが、殻周縁の一部に一箇所ないし数箇所剝離痕を有するもの。剝離痕は、後縁部に多い。

II類：殻の一部のみを残すもの。この類は、さらに

第13表-③ シレナシジミの破損形態別出土殻数表

層位	破 損 形 態					完形殻数	
	I 類	IIイ類	IIロ類	IIハ類	小 計		
II層	a	2-2	1-0	0-0	1-4	2-4	5
	b	6-6	4-3	1-0	7-9	12-12	33
	c	9-5	0-4	2-3	15-9	17-16	43
	(d)	2-1	1-1	1-1	1-1	3-3	9
	d	5-6	6-2	2-1	11-9	19-12	18
層計	24-20	12-10	6-5	35-32	53-47	108	
III層	1-1	1-4	0-0	0-6 (不明4)	1-10 (不明4)	3	
IV層	8-15	12-34	1-2	35-46	48-82	43	

注. 表示数値は、左項に左殻、右項に右殻の殻数を示す。

次の三種に区分される。

イ. 腹縁部のみを欠損するもの。

ロ. 殻頂部と背縁部のみを残し、他は欠損するもの。

ハ. 殻頂部、背縁部、腹縁部のいずれか一部のみを残すもの。

破損形態I類(図版. 17-4)と体長組成との関係は、II層出土の体長計測総数108殻中40例がその類に相当するが、それらは殻長60.0、殻幅14.0×2以上の殻に多く(40例中27例)認められる。IV層出土殻については、体長と関係なく計測総数39殻

中18例が相当する。また、出土殻のうち殻に火傷を受けて生じたと思われるねずみ色に変色した殻が、Ⅱa層から1例得られた。他種例は、アラスジケマンガイが、Ⅱ〔d〕層に1例、Ⅴa層に1例、イソハマグリがⅢ層下部に1例である。

なお、シレナシジミの破片殻の多さは、何か特別な利用（保存食等）のために、採取した本貝種を石器等で叩き割り生のむき身を取り出したことに由来すると思われる。

イソハマグリ：剝離痕を有する殻（図版．17-5A）は、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層共に右・左殻ほぼ同数の比率で出土した。剝離痕の部分は一定していないが、腹縁部に多い傾向にある。本種の体長組成は、第14表-1に示す。Ⅱ層出土殻中、殻高11.5が最小を、同高25.3が最大体長をなす。Ⅳ層出土殻については、それぞれ11.0、24.8である。

スタレハマグリ：Ⅱ層出土の殻は、殻高19.3が最小を、同高40.2が最大体長をなし、多くは同高33.0～39.0（計測総数29殻中20例が相当する）である。また、この体長分布とは関係なく、剝離痕と抉り痕を有するもの（図版．17-5D）が14例確認された。その傷は、すべて後縁部にある。Ⅳ層出土殻は、計測総数4殻中3例が同高42.0台の大形殻であった。

ヒメアサリ・アラスジケマンガイ：両貝種共に、Ⅱ層出土殻の体長組成は、Ⅳ層出土のそれより小さくなる傾向を示す（第14表-2、第15表-8）。また、こじあけによる剝離痕は、ヒメアサリの場合、Ⅱ層出土殻数159殻中54例に、Ⅳ層出土殻数30殻中7例に認められた。その傷は、後縁部にもっとも多い。アラスジケマンガイについても同様（図版．17-5B）である。

ヌノメガイ：Ⅱ層出土殻数25殻中、完形殻は僅かに9殻であり、そのうち、こじあけによる剝離痕を有するものが5例出土している。その体長分布は、殻高25.2が最小を、同高66.2が最大体長をなし、多くの殻は同高50.0～58.0である。その破損傾向は、アラヌノメガイ・オオヌノメガイについても同様である。ダテオキシジミガイ：本貝種は、Ⅳ層のみから出土し、殻高28.5、殻長29.7が最小を、同高46.4、同長46.3が最大体長に相当する。出土殻数20殻中6例に、こじあけによる剝離痕・抉り痕（図版．17-5E）を有する。

リュウキュウマスオガイ：上記種と同じく、こじあけによる傷を有するが、その判別は本殻の周縁部が脆弱なために困難である。

ヒメジャコガイ：本貝種は、前列記種とは異なり、採取時に欠損したと推定される傷（図版．17-8）が前背縁部あるいは後背縁部に認められる。それは、Ⅱ層出土殻数9殻中3例（すべて右殻である）が相当する。また、ヒレジャコガイにも同様な破損形態がみられた。なお、ジャコガイ科総種を比較するとき、完形殻にくらべて破片殻がきわめて多かった。これも、シレナシジミと同じく、何か特別な利用の仕方があったのではないかと思われる。

キクザルガイ・うみぎく科各種：本貝類の殻周縁には、剝離痕および抉り痕をとどめるもの（図版．17-7）が認められる。しかし、その傷が、採取時によるものか、それとも調理時によるものかは即断し難い（すなわち、昨今における本貝類の採取方法が、満潮時の殻の開く際を見計らって、殻をこじあけることによる、とされるからである、今帰仁村にて聴取）。

キクザルガイのそれ（図版．17-7A）は、Ⅱ層出土殻数11殻中9例、Ⅳ層出土殻数79殻中36例が相当し、傷はもっとも後背縁部に多い。

うみぎく科の場合（図版．17-7B）は、Ⅱ層出土殻数31殻中5例、Ⅳ層出土殻数26殻中1例が相当

し、傷はもっとも前背縁部に多い。また、本貝科も破片殻が多く（Ⅱ層17殻、Ⅳ層15殻）出土した。
アコヤガイ：本貝種は、殻自体が脆弱なために、発掘・整理ミスによる破損殻が目立ち、実際の出土状況の把握が困難である。試みに、現在（整理作業終了時）の完形殻として、Ⅱ層出土殻数218殻中55殻が、Ⅳ層出土殻数10殻中4殻が相当する。その体長組成は、Ⅱ層出土殻の場合、絞線長15.5が最小を、同長59.9が最大体長をなし、多くの殻は同長17.5～23.5（計測総数75殻中44例が相当する）である。Ⅳ層出土殻のそれは、同長18.3が最小をなし、多くの殻が100.0以上（計測総数8殻中5例が相当する）であった。

ソメワケグリガイ：Ⅱ層出土の殻は、殻高19.2が最小を、同高42.7が最大体長をなし、その詳細な組成は第14表-4に示す。また、本層から剝離痕を有する殻（図版、17-5C）が30例出土したが、その多くは同高31.0～38.0（計測数26例中18例が相当する）の大形殻であった。その傷は、右・左殻ほぼ同数の比率で出土し、もっとも後背縁側に多い。また、Ⅳ層出土殻は、同高28.9が最小を、同高39.4が最大体長をなし、最小体長殻を除き他はすべて同高30.0以上である。

リュウキュウザルボウガイ：渡喜仁浜原貝塚出土の本貝種は、現生のものと比較してやや様相を異にする。すなわち、本遺跡出土の殻は現生のそれより殻自体も厚く、よくふくらみ、後縁が伸びるという特徴を有している。Ⅱ層出土の完形殻それぞれの殻高一殻長は、52.1-68.2、66.2-82.4、52.4-61.0、57.5-80.4、59.9-81.5（以上右殻）、62.0-84.7（左殻）である。また、Ⅳ層出土殻のそれは、48.0-55.3、52.7-66.2、56.0-72.7、56.1-67.2、60.9-77.4（以上右殻）、60.8-77.6（左殻で左記の殻と同一個体）である。今後の精査が必要とされる。

カワラガイ・リュウキュウザルガイ：両貝種ともに、Ⅱ層のみから出土した。カワラガイの体長分布は、殻高30.7が最小を、同高55.0が最大体長をなし、多くの殻は30.0台（計測総数11殻中7例が相当する）である。リュウキュウザルガイのそれは、同高35.6が最小を、同高50.7が最大体長をなし、多くは40.0台（計測総数11殻中7例が相当する）である。

0. 大型巻貝類

この類に属するものは、破損形態の顕著なものが多い。すなわち、クモガイ・スイジガイは、完形殻を残すものが1例のみ出土し、他は体層部に穿孔されたものと、4本の突起部分を残すものである。たからがい科の各種もそれと同じように、ハナムルユキとハナビラダカラに2例の完形殻を残すのみで、他はすべて伊波貝塚例〔大山、1922. P44〕と同じく、殻の背面部を欠損する。また、ホラガイは、体層部に穿孔がなされたものと殻頂部のみを残すものが比較的多い。

サラサバテイ：本種は、貝塚中より78殻出土し、そのうち独自の破損形態から分類できる殻が17例を数える。そのうちわけは貝殻の体層部に穿孔がなされたもの（図版、16-1A）：Ⅰ類と、殻底の周縁一部分を欠損するもの（同図版-1B）：Ⅱ類、および殻頂部を欠損するもの（同図版-1A・B）：Ⅲ類である。他に、同図版-1Cのように殻口外唇部に穿孔されたものが認められる。Ⅰ層出土の1例の他はすべてⅡ層から出土し、そこからⅠ類1例、Ⅱ類12例、Ⅲ類2例が得られた。なお、Ⅰ類は伊波貝塚〔大山、1922. P44〕に類例品がみられる。

チョウセンサザエ：本種は、破損形態が特徴的で、体層部分に穿孔が認められるものと、殻頂部のみを残すものの二形態に区分できる。両形態共にⅡ・Ⅲ層のみ出土し、前者はⅡ層に2例、後者はⅡ層に9

例・Ⅲ層に5例認められた。また、本種の蓋がⅡ層より10個・Ⅳ層より4個得られた。

マガキガイ：本種の体長組成は、第14表-3に示すとおりであるが、その破損部分により破損形態を区分すると3形態に分類できる。各分類の説明とその層位別出土状況（第13表-④）を以下に示し、考察を加える。

I類：体層部に孔があいたもの（図版17-6A）。

II類：殻口外層部を破砕するもの（同図版-6B）。

発掘ミスによるものが目立つが、それについては集計より除外した。

III類

イ. 殻軸のみを残し、殻口部を欠損するもの。

ロ. 殻頂部のみを残すもの（同図版-6D）と、水管のある水管溝の部分のみを残すもの（同図版-6C）。

I類は、浜崎貝塚（名嘉真他，1976. P15）と古宇利原B遺跡（松本他，1970. P17）において貝製錘として解するか、あるいは、それを想定している。しかし、これらの遺物は実見していないが、以下のことより推して貝製錘として把えることには支持し難い。すなわち、本遺跡出土殻の穿孔部は、II類と同じように意識的な剝離痕の重なりは認められず、II類と範疇を同じくするものであることや、網の沈子網による擦りへり痕などが認められないこと、そして殻自体が脆弱

であることから、錘として判断するよりも、むしろおもに貝のむき身を抜き出すことによって生じた痕跡として考えたい。なお、古宇利原B遺跡例の貝種は「イボカバイモ」とされる。

また、破損形態I類は、貝塚埋存時においても同様な破損をみるのが、第二次調査II a層出土の資料によって確認された。すなわち、欠損した体層部分が、散逸せずに本殻の体層部至近から出土したことによる。

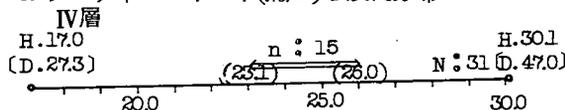
以上、破損状況および体長組成を中心に各貝科種の特徴を略述したが、そのうち体長組成については、渡喜仁浜原貝塚各層位期に互って多く出土する貝種を抽出し、その体長分布をとうして、貝塚集団の貝採取活動の具体的内容およびそれが棲息貝類に与える要件と水域環境の変化を把握する目的で、第14・15表を作成した。第14表の作表にあたって、1・2・4は1mmごとく△.0から△.9の範囲で出土した体長計測可能殻数を示し、3は△1.0から△5.9、△6.0から△0.9の範囲で出土したそれを5mmごとに示した。第15表は凡例によった。

第13表-④ マガキガイの破損形態別出土殻数表

層位	破 損 形 態				完全 殻数	
	I類	II類	IIIイ類	IIIロ類		
II層	a	2	5	0	0	3
	b	0	10	0	3	11
	c	1	26	0	4	43
	(d)	7	32	1	9	17
	計	19	143	5	33	149
III層		0	1	0	0	0
IV層		4	14	0	1	16

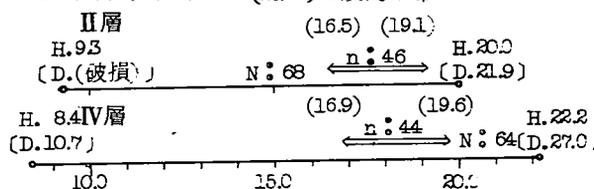
第15表 渡喜仁浜原貝塚出土貝類の体長組成(2)

5. クンチャンマイマイ(No.1)の殻高分布



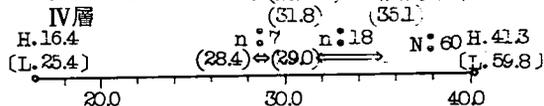
IV層出土のH.24.3、D.37.0より小さい殻の内14例が殻口外唇部を破損する。また、その数値以上の殻(9殻)にはその破損形態が僅かに1例しか確認されていない。それからして、その破損は種の成長過程による脆さが大きく影響したと思われる。

6. オキナワヤマタニシ(No.5)の殻高分布



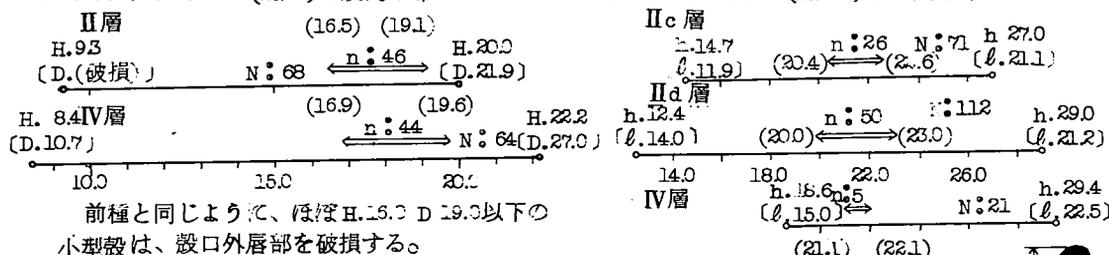
前種と同じように、ほぼH.15.0 D.19.0以下の小型殻は、殻口外唇部を破損する。

9. リュウキュウマスオガイ(No.32)の殻高分布



II層出土殻の計測総数23殻の内、H.18.2が最小に、H.40.0が最大体長に属する。その分布は一様である。

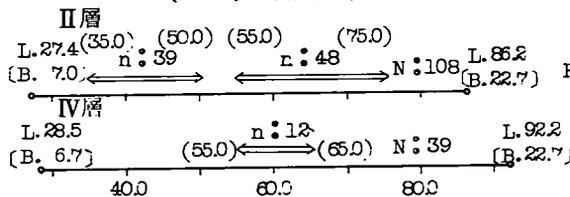
10. アマオブネガイ(No.47)のh長分布



計測部位については右図のとおりである。

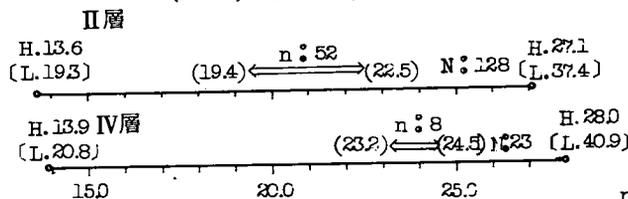


7. シレナジミ(No.16)の殻長分布



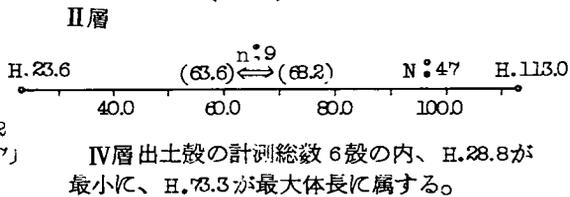
II層出土殻はL.35.0より75.0に至るまで一様な体長分布を示す。そこで、最多出土体長殻数を便宜上2つに区分した。なお、L.40.0~50.0が18例で最も多く、L.70.0~L.75.0の15例がそれに次ぐ。

8. ヒメアサリ(No.22)の殻高分布



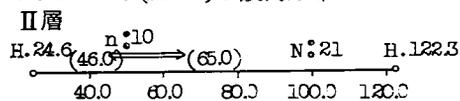
アラスジケマンガイ・ソメワケグリと同じように時期が下るに従い、殻高分布は小さくなる傾向を示す。

11. ヒメジャコガイ(No.78)の殻高分布



IV層出土殻の計測総数6殻の内、H.28.8が最小に、H.73.3が最大体長に属する。

12. サラサバテイ(No.85)の殻高分布



本種は貝塚中より78殻出土したが殻高測定可能殻はII層に21殻、IV層に3殻である。

凡例
 n:最多出土体長殻数 (nの範囲)
 最小殻体長 ← 最大殻体長
 H. 殻高
 L. 殻長
 B. 殻幅 (×1/2)
 D. 殻径
 単位: mm

注. 貝種石Noは第16表の表示番号と一致する。

III 層			IV 層												採 息 地	備 考												
石灰岩硬層			炭 黒 褐 色 土 層																									
0~30cm			30~60cm			60~90cm			90~120cm			120~150cm					小 計											
重量	個数	頂部数	重量	個数	頂部数	重量	個数	頂部数	重量	個数	頂部数	重量	個数	頂部数	重量	個数	頂部数	重量	個数	頂部数								
7.	4	0(3)	52	30	13 (24)	36	21	8(16)	38	19	7(15)	55	25	10(22)	9	5	2 (4)	190	100	40(79)	石灰岩地の林叢内	()内は殻口層部数						
-	-	-	2	1	1	-	-	-	0.	1	1	2	2	2	1.	2	2	6	6	6	海岸部より山間部							
23.	21	20	3.	2	2	10.	7	7	3	3	3	5	4	3	-	-	-	22	16	15	海岸部より山間部							
-	-	-	-	-	-	3	4	2(4)	1	2	2(2)	3	6	3(5)	-	-	-	7	12	7(11)	(肉は軟かく美味)	()内は殻口層部数						
48	41	39	44	28	23	15	13	10	21	14	12	34	26	24	3.	2	2	117	83	71	落葉下							
-	-	-	0.	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.	1	1		食用不適?						
-	-	-	0.	1	1	-	-	-	-	-	-	0.	1	1	-	-	-	1	2	2		食用不適?						
-	-	-	-	-	-	4	1	1(1)	5	1	0(1)	14	4	3(4)	8.	1	1(1)	32	7	5(7)	河口の主にマン	()内は殻口層部数						
-	-	-	-	-	-	7.	2	1(2)	-	-	-	11	3	1(1)	-	-	-	19	5	2(3)	グロブ林的の泥池	上 同						
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		上 同						
-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1								
-	-	-	4	1	1 (1)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	1(1)	マングロブ林内	()内は殻口層部数						
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	河口の岩に付着							
-	-	-	2.	2	2	2	1	1	1	1	1	0.	1	1	-	-	-	6	5	5								
-	-	-	5	4	3 (4)	5.	5	4 (5)	11	7	5(7)	8.	5	4 (5)	-	-	-	30	21	16(21)		()内は殻口層部数						
95.	21	10	右7 左3	327.	54	右22 左8	385	46	26	右17 左5	501.	47	34	右22 左12	172	20	11	右5 左6	38	6	右4 左0	1629	73	105	右70 左35	河口の泥池		
28	28	28	右15 左13	62.	52	右23 左29	49	46	4	右28 左20	52	44	44	右26 左18	37	28	26	右15 左13	8.	8	右8 左2	209	178	178	右96 左82	砂 地		
-	-	-	2	1	1	右0 左1	2	1	1	右0 左1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	2	2	右0 左2	内湾奥の泥池		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	砂 泥 池		
Q	1	0	-	-	-	13.	1	1	右1 左0	14.	2	2	右1 左1	12	2	1	右0 左1	-	-	-	40	5	4	右2 左2	上 同			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	上 同		
-	-	-	18	12	11	右5 左6	2.	3	3	右1 左2	6	5	5	右1 左4	9	8	8	右4 左16	3	2	2	右2 左0	38	30	29	右13 左16	外洋に面する小石池	
33.	6	5	右0 左5	46	11	右3 左5	3.	2	1	右0 左1	88	21	21	右9 左12	16.	4	4	右1 左3	27	3	3	右1 左2	181	41	37	右14 左23	砂 地	
-	-	-	1	1	1	右0 左1	5.	3	3	右2 左1	12	5	5	右1 左4	2.	2	2	右2 左0	-	-	-	21	11	11	右5 左6	砂 泥 地		
-	-	-	18	9	6	右1 左4	5	3	1	右1 左0	7	2	2	右1 左1	8	3	2	右1 左1	4	2	0	42.	19	11	右5 左6	上 同		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	上 同		
2	1	0	-	-	-	24	1	0	36	2	1	右0 左1	-	-	-	-	-	-	-	-	60	3	1	右0 左1	砂 地			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	32	1	1	右0 左1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	32.	1	1	右0 左1	珊瑚礁の白砂地		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	砂 地		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	白 砂 地		
-	-	-	14	3	3	右2 左1	14	4	4	右3 左1	29	5	4	右2 左2	36	7	7	右3 左4	8	1	1	右1 左0	102	20	19	右11 左8	砂 泥 地	
16	8	7	右5 左2	102.	38	右15 左14	49	20	20	右13 左7	93	24	20	右11 左9	84	25	21	右12 左9	14	4	4	右1 左3	342	111	94	右52 左42	砂や小石の海底	
1	1	1(1)	10	11	3(11)	11.	15	3 (15)	3.	6	4 (6)	17	16	6 (16)	-	-	-	-	-	-	42	48	16 (48)	-	-	砂や小石地	()内は殻口層部数	
0.	1	0(1)	20.	25	3(24)	13.	19	10 (19)	7.	9	3 (9)	23.	29	12 (28)	-	-	-	-	-	-	65	82	34 (80)	-	-	砂 泥 地		
1.	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.	1	1	-	-	-	-	-	-	1.	1	1	-	-	岩や小石の間		

No.	和名 俗名		層位																									
			I 層			II 層																						
			耕作土層 (0~30cm)			a:黒褐色土層 (0~80cm)			b:黄褐色混土礫層 (60~100cm)			c:混貝土層 (100~130cm)			(d):レンズ状 石灰岩礫層			e:混土貝層 (130~160cm)			(160~180cm)							
重量	個数	頂部数	重量	個数	頂部数	重量	個数	頂部数	重量	個数	頂部数	重量	個数	頂部数	重量	個数	頂部数	重量	個数	頂部数	重量	個数	頂部数					
B a. 潮間帯~潮間帯砂地の貝																												
80	マガキガイ	キラジャー	150	12	9	145	10	10	360	25	21	126	93	85	983	69	57	2,042	134	124	891	58	49					
81	タケノコガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
82	ロウソクガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	50	1	0	-	-	-	-	-	-		
B b. 潮間帯~潮間帯岩場の貝																												
83	コモンダカラガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
84	オニコブソガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	50	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
85	サラサバテイ	ナビトウガヤ タカヅリ	105	1	1	50	2	0	349	4	2	1,845	11	6	160	4	0	1,880	19	7	803	13	5					
86	キクザルガイ		35	2	右1 左1	-	-	-	20	1	1	右1 左0	60	4	右2 左2	28	3	4	右1 左3	42	2	右1 左1	21	2	右2 左0			
87	シマザルガイ		-	-	-	-	-	-	52	1	1	右1 左0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
88	ヒレインコガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
89	ソメワケガンラガイ		-	-	-	-	-	-	22	1	1	右0 左1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
90	ノコギリガキ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	0	-	-	-	-	-	-		
91	コロビガキ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20	1	1	右1 左0	-	-	-	-	-		
92	いたげがき科の一種		-	-	-	-	-	-	16	1	1	右0 左1	-	-	-	-	-	12	1	1	右1 左1	-	-	-	-	-		
93	オオミノエガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	1	1	右1 左0	-	-	-	-	-	-	-	-		
94	リュウキュウヒバリガイ	(ウシヌホーミ)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	1	右1 左1	-	-	-	-	-		
95	ハネガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
96	ミノガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
97	シュモクアオリガイ		-	-	-	-	-	-	6	2	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
98	アコヤガイ		7	1	右1 左0	-	-	-	203	41	25	右10 左15	56	68	40	右17 左23	67	13	9	右3 左6	118	84	80	右41 左39	15	12	右6 左5	
C a. 潮間帯下砂地の貝																												
99	スイショウガイ		-	-	-	-	-	-	25	1	1	-	-	-	28	1	1	28	1	1	-	-	-	-	-	-	-	
100	クロフモドキ	アセクスパー	48	3	0	-	-	-	198	3	1	307	4	0	1	1	0	946	12	2	65	3	0					
101	ハボウキガイ		-	-	-	13	1	0	6	1	0	8	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
102	タイワンシラオガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	1	右1 左0	36	5	5	右3 左2	-	-	-	-	-		
103	カワラガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	26	4	4	右3 左1	15	3	3	右2 左1	36	6	4	右4 左0	35	2	右2 左0		
104	リュウキュウザルガイ	マースケーミナ	-	-	-	-	-	-	36	4	4	右2 左2	26	4	4	右2 左2	14	2	2	右1 左1	-	-	-	-	-	-		
105	オイノカガミ		-	-	-	-	-	-	3	1	1	右0 左1	4	1	1	右0 左1	6	1	1	右1 左1	-	-	-	-	-	-		
106	ソメワケグリガイ		20	4	4	右3 左1	4	1	右1 左1	99	18	18	右10 左8	294	55	55	右28 左29	108	21	21	右12 左9	489	88	88	右45 左43	137	24	右9 左15
107	リュウキュウザルボウガイ	キーミナ	-	-	-	22	1	1	右1 左0	51	1	1	右1 左0	104	2	2	右2 左0	-	-	-	351	6	6	右4 左2	-	-		
108	サメザラガイ		-	-	-	8	1	0	6	1	1	右0 左1	59	3	3	右1 左2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
109	ムラサキガイ		-	-	-	-	-	-	3	3	3	右2 左1	8	5	5	右3 左2	3	2	2	右0 左2	3	2	2	右1 左1	2	2	右1 左0	
110	ナミノコマスガイ		-	-	-	-	-	-	0	1	1	右0 左1	1	2	2	右2 左0	1	2	2	右1 左1	4	9	9	右4 左5	0	1	右1 左0	
111	ベッコウガキ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	2	1	右1 左0	-	-	-	13	3	3	右3 左0	6	2	右2 左0			
C b. 潮間帯下岩場の貝																												
112	ヒメヨウバイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	1	-	-	-	-	-	-		
113	コオニツノガイ		0	1	1	-	-	-	-	-	-	4	2	2	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
114	オキニシ		10	1	1	-	-	-	-	-	-	5	1	1	-	-	-	45	4	2	20	2	2					
115	ガンセキボラ		-	-	-	-	-	-	33	1	1	30	1	1	30	1	1	126	6	4	10	1	0					
116	オニツノガイ	マヤーミナ	-	-	-	-	-	-	50	2	2	45	1	1	-	-	-	77	3	3	18	1	1					

Ⅲ 層			Ⅳ 層															採 息 地	備 考				
石灰岩 礫層			黄 黒 褐 色 土 層																				
			0 ~ 30 cm			30 ~ 60 cm			60 ~ 90 cm			90 ~ 120 cm			120 ~ 150 cm					小 計			
重量	個数	設頂部数	重量	個数	設頂部数	重量	個数	設頂部数	重量	個数	設頂部数	重量	個数	設頂部数	重量	個数	設頂部数	重量	個数	設頂部数	重量	個数	設頂部数
20	2	2	86	4	4	53	3	3	330	19	17	88	6	6	28	2	2	585	34	32	砂や小石の所		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	40	1	1	-	-	-	-	-	-	40	1	1	潮間帯より 水深20mの間		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
-	-	-	5	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	1	0	珊 瑚 礁		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	リーフ近く		
-	-	-	165	13	1(6)	5	1	0	163	4	2(1)	74	4	0(2)	13	2	0(4)	420	24	2(13)	干潮線付近の珊瑚礁		
14	2	2	522	24	25	18	17	17	473	21	22	485	14	15	25	3	3	1723	79	82	潮間帯より 水深10mの間		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	180	1	1	-	-	-	180	1	1	上 同		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	22	1	0	-	-	-	22	1	0			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	1	0	-	-	-	-	-	-	8	1	0	潮間帯付近の岩礁		
-	-	-	10	1	0	17	1	1	9	1	0	23	1	1	-	-	-	59	4	2	右1 左1		
-	-	-	22	2	1	8	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	30	3	2	右1 左1		
-	-	-	8	2	1	-	-	-	8	1	1	0	1	1	2	1	1	19	5	4	右1 左1		
2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	岩 場 に 付 着		
-	-	-	0	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	1	潮間帯より 水深50mの間		
3	1	0	8	1	1	-	-	-	13	2	2	13	1	1	-	-	-	35	4	4	潮間帯付近の岩や小石		
20	2	1	2	1	1	2	1	0	35	4	4	-	-	-	-	-	-	39	6	5	右3 左2		
7	7	6	52	2	2	6	1	1	41	5	5	46	1	1	6	1	1	151	10	10	右5 左5		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	岩 場 に 付 着		
-	-	-	-	-	-	168	2	1	40	2	0	-	-	-	-	-	-	208	4	1	水深10mの砂地		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	砂 地		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	砂 泥 地		
-	-	-	8	2	2	10	2	2	-	-	-	-	-	-	6	1	1	24	5	5	右3 左2		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	砂 泥 中		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	砂 地		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	砂や小石の中		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	砂 地		
-	-	-	-	-	-	9	2	2	27	4	4	22	3	2	-	-	-	58	9	8	右4 左4		
-	-	-	-	-	-	114	2	2	207	4	4	-	-	-	-	-	-	321	6	6	右5 左1		
-	-	-	8	1	1	3	1	0	22	1	1	-	-	-	-	-	-	33	3	2	右1 左1		
2	2	2	6	6	6	4	2	2	2	2	2	12	5	5	0	1	1	25	16	16	右11 左5		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	1	-	-	-	-	-	-	0	1	1	右1 左0		
-	-	-	11	2	2	-	-	-	1	1	1	4	1	1	8	1	1	24	5	5	右5 左0		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	水深50~300mの 砂地		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	食 用 不 適 ?		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	珊 瑚 礁		
25	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	上 同		
-	-	-	20	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20	1	1	上 同		
35	4	3	14	1	1	20	1	1	-	-	-	-	-	-	5	1	1	39	3	3	上 同		

117	チョウセンサザエ	マンナグラー	85	2	2	-	-	-	455	10	3	452	8	4 (3)	220	8	1 (2)	354	7	3 (2)	260	11	4 (3)	
118	ニシキウズガイ		-	-	-	-	-	-	42	5	2	66	20	2	-	-	-	97	25	2	20	7	0	
119	ハリサザエ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	1	1	3	1	0	
120	ヤナギシボリイモガイ		-	-	-	-	-	-	35	7	0	30	5	0	60	13	0	102	9	1	125	12	0	
121	スイジガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	132	1	1	-	-	-	
122	クモガイ	ビロウビナー	30	1	0	120	1	0	395	8	0 (5)	200	6	0 (1)	265	5	0 (2)	223	3	0 (3)	145	2	0 (2)	
123	ホンダカラガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	40	1	0	32	1	0	-	-	-	
124	ヒメホンダカラガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	1	0	-	-	-	-	-	-	
125	ホラガイ	ブラミナー	-	-	-	75	1	0	580	1	1	780	5	2	-	-	-	150	1	1	-	-	-	
126	テングガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	675	1	1	-	-	-	
127	イタボガキ		-	-	-	-	-	-	9	1	1	右0 左1	2	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	
128	オオタカノハガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
129	オオカリガネガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	58	2	2	右1 左1	-	-	
130	チサラガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
131	リュウキュウオオギガイ		-	-	-	-	-	-	26	3	2	右1 左1	-	-	-	-	-	-	5	1	1	右0 左1	-	
132	シヤコガキ		131	1	1	-	-	-	-	-	-	-	76	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	
133	ジャゴウ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	144	1	1	右0 左1	-	-	-	-	-	
134	ヒレジャコ	ニナシ	142	1	1	右0 左1	-	-	669	4	4	右1 左3	356	5	4	右1 左3	220	1	1	右1 左0	610	6	6	右4 左2
135	オトメイモガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20	1	1	-	-	-	
136	シロアンボイナガイ		-	-	-	-	-	-	10	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

D a. 種不明貝 (厩137は3種に区分可能、厩141は棲息地区分不可能)

137	うみぎく科	ガテ	22	1	1	右0 左1	-	-	22	2	1	右0 左1	193	9	8	右2 左6	24	2	1	右0 左1	212	12	4	右2 左2	92	6	3	右1 左2
138	にっこりがい科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
139	きくざるがい科		4	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
140	多板綱		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	2	-	-	-	0	1	1	-	-	-	-	-	-	-
141	アナアキウズガイ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

D b. 破損が著しく個同定が不可能な貝

142	しっこりがい科		133	7	0	142	4	0	32	2	1	右1 左0	653	15	3	右3 左0	209	6	2	右1 左1	549	10	1	右1 左0	100	5	0	-
143	いとまきほら科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	45	3	1	-	-
144	いもがい科		100	5	0	-	-	-	45	9	0	108	17	0	230	47	0	40	2	0	82	14	0	-	-	-	-	-
145	そでがい科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	55	1	0	-	-	-	11	1	1	-	-	-	-	-	-	-
146	あくきがい科		10	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	1	0	-	-	
147	にしきりずがい科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	2	0	15	3	0	-	-
148	たからがい科		-	-	-	-	-	-	20	2	0	-	-	-	-	-	22	4	0	-	-	-	40	3	0	-	-	

破損が著しく細分不可能な貝

149	二枚貝類		16	3	0	6	2	0	3	1	0	33	5	0	19	1	0	2	2	0	-	-	-	-	-	-	-	-
150	巻貝類		30	4	0	21	3	0	53	8	0	105	15	0	47	20	0	529	32	0	78	15	0	-	-	-	-	-

注. 1 本表作成にあたり、各貝種の棲息地区分・棲息地の項は、①平田敬浩外、1973、「神繩の貝・カニ・エビ」、②沖縄生物教育研究会、1976、「神繩の生物」、③波部忠重外、1967、「貝」、④吉良哲明、1963、「原色日本貝類図鑑」を参考とした。なお、各文献に解説の相異があるときは、上記の順に採用した。

2 貝俗名の項は、第二次発掘調査と今帰仁村産業祭りに催した「考古展示」のアンケートを基に作成し、その隔れは、北山高校生平安山良弘君に補ってもらった。()内俗名は平田、1973による。いままお、その隔れは著しいが空白箇所を研究者諸氏で埋めてもらうことを願いたい。

3 重量(単位: g)の数値末尾に付した()は、余数(.5)に相当する。殻頂部数の(右、左)は、斧足綱における(右殻、左殻)の区別である。

4 種別番号と図版内番号とは相等しい。

645	22	9(2)	185	6	0(2)	86	3	0(2)	100	2	0	84	1	1	-	-	-	455	12	1(4)	岩 場	()内は蓋の数	
1	1	0	107	7	2	11	4	1	10	4	0	77	7	1	-	-	-	205	22	4	上 同		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	1	0(1)	5	1	0(1)	水深20-50mの岩場		
10	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	岩 場		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	岩 礫 地	
370	4	0(1)	365	4	0	255	7	0(2)	503	13	0(2)	187	4	0(1)	18	2	0	1328	30	0(5)		()内は4本の突起を 残す数	
-	-	-	75	1	0	70	1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	145	2	0	岩 場		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	上 同	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	25	1	0	-	-	-	25	1	0	-		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	内海や内湾の 岩や小石の間	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	1	右0 左1	-	-	-	8	1	右0 左1	岩 礫 地		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	-	-	-	22	1	右1 左0	23	1	右0 左1	-	-	-	-	-	-	45	2	右1 左1	珊瑚礁に付着		
-	-	-	6	3	0	-	-	-	14	1	右1 左0	14	2	右1 左0	-	-	-	34	6	右2 左0	-		
-	-	-	522	3	0	-	-	-	-	-	-	328	1	右0 左1	-	-	-	850	4	右0 左1	-		
-	-	-	-	-	-	13	1	右1 左0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	1	右1 左0	-		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	73	1	右1 左0	-	-	-	-	-	-	73	1	右1 左0	サンゴ礁に付着		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
33	9	右2 左0	248	12	7 右5 左2	60	5	右2 左2	30	3	右3 左3	93	7	右3 左3	12	1	0	443	28	右7 左10			
7	1	右1 左0	4	1	0	-	-	-	-	-	-	10	2	右1 左1	-	-	-	14	3	右1 左1			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	1	1	-	-	-	-	-	-	10	1	1	-		
73	5	0	565	11	右1 左0	283	14	0	212	6	右0 左1	607	9	0	38	1	0	1705	41	右1 左1			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	0	-	-	-	-	-	-	2	1	0	-		
72	4	0	170	10	0	47	6	0	82	4	0	47	5	0	10	1	0	356	26	0			
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
11	1	0	48	4	0	17	5	0	48	6	0	7	3	0	22	3	0	142	21	0			
31	25	右1 左1	17	10	0	45	24	右0 左2	2	1	0	31	18	右1 左0	-	-	-	96	53	右1 左0			
130	7	0	165	60	0	126	19	0	252	29	0	23	10	0	1	1	0	567	119	0			

6. 植物遺存体

渡喜仁兵衛氏探第二調査におけるⅡa層・Ⅱb層の「土壌水洗い選別作業」によって、12点の植物遺存体が検出された。出土地点はB地区b2・3ピットである。それらの遺存体は、多和田真淳氏の所見によれば、b3ピットⅡa層出土の炭化種子はカラスノエンドウマメ・スズメノエンドウマメ、b2ピットⅡb層出土のそれはイタジイである。これら遺存体は、さらに詳細な検討を要するために、平安博物館の渡辺誠氏を通じ同定を依頼中である。詳細は、それを持って報告したい。

7. 渡喜仁浜原貝塚周辺の海況

渡久地 健

第11図は、渡喜仁浜原貝塚周辺の海況を表わしている。現地での観察（1977年1月4日～5日）と国土地理院発行の空中写真（巻頭図版）に基づき礁原の底質を区分した。

大井川の河口部にはサンゴ礁が発達していない。古宇利島の南西には深さ20～30mの水路がある。この二つのギャップによって区切られる礁原をひとつのまとまったものとして見る事ができる。

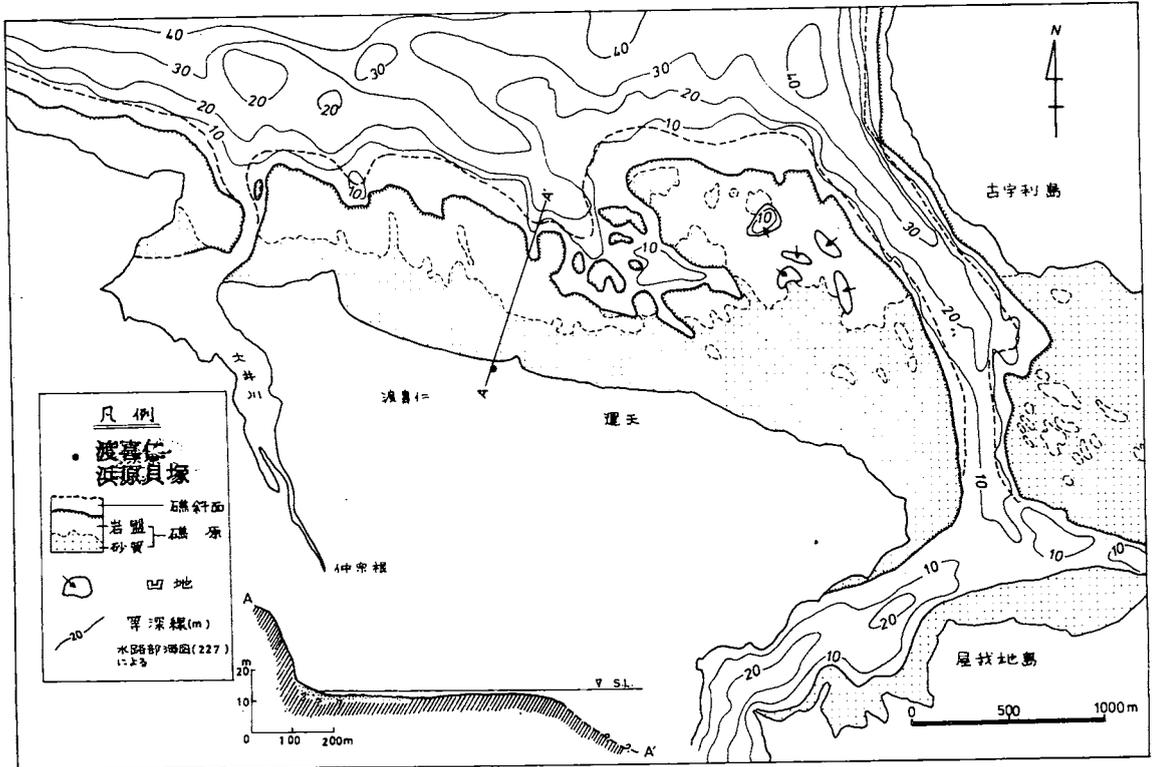
この礁原は、地形と底質によって、大きく内側礁原と外側礁原に区分することができる。礁原のレベルは、外側礁原が内側礁原に比較してわずかに高い。しかし、内側礁原・外側礁原ともに平均海水位以下にある。また、簡易測量から判断する限り、平均低潮時においてさえ、露出する面をほとんどもたないと思われる。底質は一般に、内側礁原が砂質に、外側礁原が岩盤にそれぞれ対応している。外側礁原の内側の部分には死滅したエダミドリイシ（枝状サンゴ）の群体が観察される。内側礁原の砂質の部分には、その破片が散在する。

礁原の面積は約28km²である。そのうち砂質の部分が約17km²で、全体の61.3%を占めている。

なお、運天海岸のサンゴ礁には、幅400～600m・奥行き約900m・深さ5～10mの切れ込み：Outer creek (Clausade, M. N. et al, 1971, P.37) が形成されているほか、数個のくぼ地が見られる。

第11図 渡喜仁浜原貝塚周辺の海況図

(渡久地 健氏 作成)



8. 食料残滓小結

渡喜仁浜原貝塚出土の食料残滓を、そのおのおの棲息条件より本遺跡形成時期の自然環境および渡喜仁浜原貝塚集団の利用した食料資源の様相を、模式的に示したものが第12図である。図にも示されるとおり、貝塚集団は大別して3区の食料生産領域を有することが窺える。すなわち、獣類・陸産貝類・堅果植物を産する林叢山地域と、多種多様な魚貝類（おそらく海藻類も！）を産するサンゴ礁を中心とした礁原域、そして、シテナンジミ等淡水産貝類を産するマングローブ林を中心とした河口域の泥地帯である。このように概念区分される3領域の設定については、基本的に本遺跡IV層期からII層期、さらに現在の地理的条件とはさして大きな変動はみられなかったと推察される。しかし、遺跡各層位期におけるそれらの利用度合（第17表参照）については、「大井川河口付近の沖積層の層序などをみても2,000～3,000y B. P. には、海水準は現在の海水準より約1～2 m低かったと想定される。」〔古川, 1976. P.128〕等の自然条件の変化や、狩猟・漁撈・採集技術の発展等に制約されて些か様相を異にする。

渡喜仁浜原貝塚IV層期は、海産貝類の潮間帯砂地性貝類と陸産貝類を主体貝類とし、サンゴ礁地帯の砂地性単独魚（べら科イラ属）を多産する時期である。また、獣類もイノシシが最小個体数でB地区 a 3ピットより4個体出土している。このことは、魚類の組成内容を除き沖繩貝塚時代前期に共通するところである。そして、単独魚の多寡は、荻堂貝塚〔松村, 1920. P.28〕、嘉手納貝塚〔新田・嵩元, 1961. P.49〕において骨製銚が出土することから推して、この時期に突き漁が活発であったと想定させる。

III層期は、獣魚類の殆どみられない、陸産貝類を主体とする時期である。一般に、この時期（中期）の多くの遺跡が貝類や獣魚類の遺存体が少量あるいは皆無であることを考えると、本層の貝類埋存の様相は注目に値する。ほかに、本層の埋存状況と類似する中期遺跡としては、「貝層にみられる貝殻の量は極めて少量であるが、その中において特に顕著なのはオキナワヤマタニシの陸産マイマイであった。海産の貝類は稀で、一見オキナワヤマタニシだけによる貝塚のような印象を受けた」とする山川貝塚〔高宮, 1968. P.274〕、「本遺跡ではマイマイ類を主体とする混土貝層がみられ、この層が遺物包含層となっている」とする巣銅原貝塚〔新田, 1972. P.33〕があげられる。そして、本層の形成末期になると、ヤドカリの宿貝殻の多さから推察されるように、本遺跡は放棄されるのである（第4章参照）。

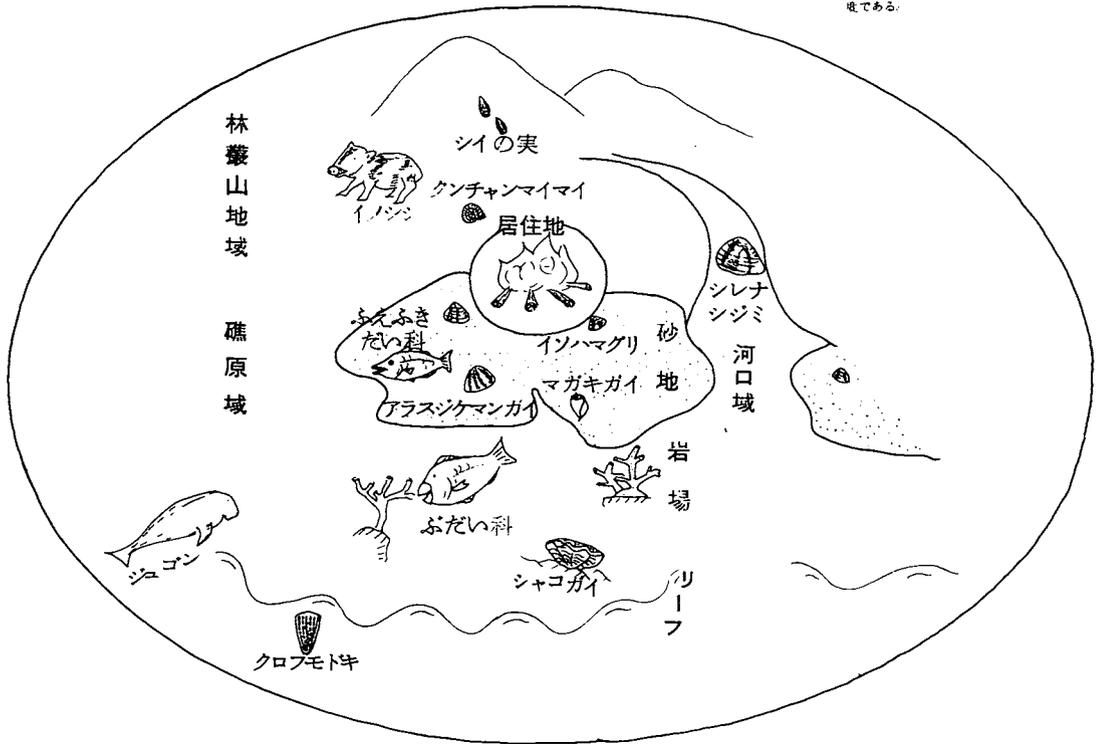
II層期は、潮間帯砂地性貝類を中心とした海産貝類、群れ魚（岩礁の多い砂地棲息のふえふきだい科と岩場棲息のぶだい科）の多産する時期である。このことは、IV層期の比較的容易に採取できる貝類の採捕活動から潮間帯下貝類を潜水技術によって採取する等、礁原域あるいは外洋域の積極的な採捕活動へと移行したこと、あるいは、単独魚を捕る漁撈技術から群れ魚を捕るそれ（網漁が想定される。第6章参照）へ展開したこととして把握される。また、獣類は、イノシシがB地区 a 3ピット内より最小個体数で7個体出土し、1例を除きすべて成獣である。従って、本層期における狩猟活動は、IV層期に無雑作に幼獣も捕獲したことと比較して、適正捕獲の可能性が強い。そして、これらイノシシの顎骨が、ホラガイ・貝製装飾品と集合していたことは、何らかの儀礼的側面あるいは山幸・海幸のシンボルを示唆すると思われ興味深い。さらに、検出されたシイの実等から推して植物性資源も食料に多く供与されたであろう。このように、この時期の特色は、狩猟・漁撈・採集などの各部門の生産を、自然的分業に基づいて多角的に結びつけて営んでいたものといえる。しかし、そこには、本層出土のアラスジケマンガイ・ソメワケグリガイ・ヒメアサリの殻高分布に示されるとおり、既に乱獲を示す徴候が想定されるが、

イソハマグリとのそれと考え合わせて、今後の十分な検討が必要である。なお、II層内の各小層をみると、IV層期に主体種を占めていたイソハマグリがIIc層に至りマガキガイに移り替わることや、ふえふきだ科とぶたい科が相関関係を示すことなど、動物遺存体の変異がみられるが、その詳細は今後の検討に委ねたい。

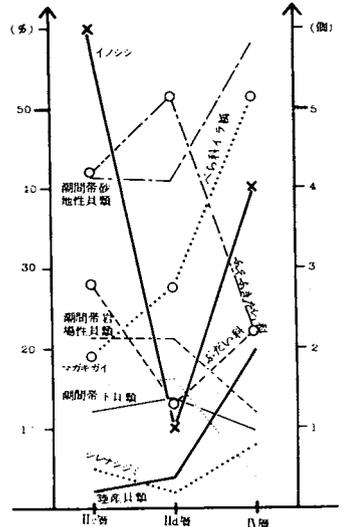
ところで、以上のような動物性・植物性資源を食料化する調理法についても獣貝類の破損形態から類推が可能である。すなわち、貝類には、壺焼きに相当する例は認められず、煮沸用具の容量の小ささ・可熱量の低さに起因するためか、大型巻貝類は煮沸以前に、小型巻貝類・二枚貝類は煮沸以後にむき身を抜き取ったと想定される傷を有した。シレナシジミは、その破片殻の多いさから保存食料に利用されたのではないかと推察される。また、獣類には、骨髄を食するためか、長管骨を破碎したものが出土している。

食料残渣の稿を終るにあたり、貝塚時代の食料残渣研究においては、なお一層の基礎的資料の蓄積が急務であることを喚起したい。

第12図 渡喜仁浜原貝塚集団の食料資源



第17表 B地区 a3ピットにおける食料残渣出土組成



1. イソノシの長土数は、最小個体数である。
2. 魚類は、層位内出土総骨数に占める出土頻度である。
3. 陸貝別産貝類は層位別産貝出土個体数に、その地づ貝類は層位別出土個体数に占める出土頻度である。

第4章 渡喜仁浜原貝塚の土器

本遺跡の性格を解明するため土器については、2つの目的を設定した。すなわち、前期から中期、中期から後期への土器の変遷を把握することと、弥生系土器（移入土器）の登場時期を明らかにすることである。

本遺跡より出土した土器片は4,228片を数える。そのうち、B地区 a 3ピット出土分は1,695片であり、II層においては後期系土器が88%を占め、III・IV層においては前・中期系土器が97%を占めていた。そこで、上記の目的を果たすため、整理にあたっては、前・中期系土器はIII・IV層出土土器片を中心に、後期系土器はII層出土土器片を中心に整理・分析を行なった。

整理の規準は、前・中期系土器は混和材を基とした胎土分類に、後期系土器は器面調整痕に、それぞれ求めた。

報告は、次の順で行なう。はじめに、B-a 3ピットの前・中期系土器について述べ、次に後期系土器について述べる。その際、他ピット出土分及び表採品は、その補足的な位置に留めた。それらの稿の後移入土器片個々について記述していく。当初の目的は、最後に展開したいと思う。

なお、第二次調査分については、整理が終了しておらず、次回にその欠を補いたい。

1. 前期系・中期系土器について

—B地区 a 3ピット III・IV層を中心に—

A. B地区 a 3ピット出土前・中期系土器の胎土による層位的変遷

前・中期系土器片は、胎土分類を層序的に出土したB-a 3ピットの土器片で行ない、その層位的変遷を試みると同時に、口縁形態や文様との関連を検討してみた。前・中期系土器片は、III層・IV層に集中し、I層、II層からの出土は14.9%にすぎなかった。

胎土分類は第19表のように混和材を中心に行なった。それに基づき行なった集計結果は第21表に示すとおりである。

IV層（淡黒褐色土層）

本層は、第五群が優勢であり、その約半数が0~30cm深度に集中している。また出土地点の注記された土器片を調べてみた結果、第一群・第二群・第四群はIV層を通じて南側に出土する傾向があり、文様も百名貝塚〔注1〕や大山II・III類〔多和田・賀川、1959〕に類似したものが多く、その他にも有文土器片が多いことから、IV層は南側において前期的様相が強いと考える。この南側に多く出土する3群と第五群の深度ごとの比率は0~30cm深度では38.2対61.8%、30~150cm深度では、51.4対48.6%となり、30cm深度以下では前期的な3群が優勢を示す傾向にある（文中、3群は第一・二・四群の総称である）。

II層

本層の小層II a層（混土貝層）からII b層（黄褐色混土礫層）までの出土土器片数に占める前・中期

第18表 渡喜仁浜原貝塚出土土器一覽表

地区	ピント	分類 層位	前・中期系土器								後期系土器								移入土器			合計					
			口縁部		胴部		底部				口縁部		胴部		底部				口縁部	胴部	底部						
			有文	無文	有文	無文	尖底	丸底	平底	不明	有文	無文	有文	無文	尖底	丸底	平底	平底?									
B	a3	I				12										122		3							137		
						15											626		84							725	
			a	2	5		103						4	50					1							165	
			10	38		743						28	229					29							1077		
		b										7	95				3	1						1	107		
												58	822				55	30						70	1035		
		II	c		3		3					14	1	156			1	1								179	
					28		10					233	22	1076			90	43								1502	
		上部	d	1	5		2					3	13		172			11								207	
				5	95		5					80	146		1035			500								1866	
		下部		2	3		1						6		51		1	1							1	66	
				13	17		27						122		272		40	44							82	617	
		III		5	6	5	209		1						2											227	
				51	112	30	1230		15						20											1458	
		IV		15	44	7	512		4	4			2		16						2	1				607	
		214	955	未	4248		60	119			20		79						30	110				5835			
小計		25	65	12	842		5	4		3	46	1	664	1		20	4	1				2	152	1,695			
		293	1245	30	6278		75	119		80	607	22	4,159	40		802	103	110						14,115			
C	c2	I	1	2		50		1	1					31											86		
			8	20		167		3	3						132											333	
		II	I	2			80						1		57			2									142
				12			127						20		78			55									292
			a	8		3	233					1	5	1	182												433
				56		14	766					13	44	9	434												1,336
		b				9								1	37											47	
						64								11	260											335	
		I		1		27									28			2									58
				5		38									62			40									145
II a				54			1					1												56			
				333			14						2											349			
小計		11	3	3	453		1	2		1	6	2	336			4								822			
		76	25	14	1,495		3	17		13	64	20	968			95								2,790			
k 14					32						6	3	121			2						1		165			
					145						89	53	848			102						40		1,277			
k 15			2	1	22						26	7	419	1		5	3					1		487			
			12	7	193						325	125	3,218	11		205	45					10		4,151			
表探		8	11	5	183					1	32	7	777	6		23	3	1				2		1,059			
		120	120	34	1,770					20	272	69	4,492	195		781	95	11				160		8,135			
総計		44	81	21	1,532		6	6		5	116	20	2,317	8		54	10	2			2	4		4,228			
		489	1,402	85	9,881		78	136		113	1,357	285	13,685	246		1,985	243	121			50	312		30,468			

注：表中の数字は上段が片数、下段が重量(g)を表わす。また、この表を含め本欄における口縁部は全て口唇を有するものである。

系土器片数は、3.6%にすぎない。

第19表 前・中期系土器の胎土分類規準表

しかし、II a層（黒褐色土層）は前・中期系土器が68.7%を占め、前期的な3群と第五群の比率がIV層に近似している。

a. 口縁形態と胎土

次に前述の胎土との関連の中で、口縁部における形態と文様を検討してみる。

III・IV層出土の口縁部は、概して胎土に関係なく、肥厚したものが多かった。その中で肥厚部の断面形態をみると、第一群では、大山III類〔多和田・賀川, 1959〕にみられるやや外反した平口縁が2片、第二群では直角に近い強く外反した有文口縁部（第15図-4参照）、第四群はカヤウチバンタ式肥厚口縁部が、3片で約20%にあたりうち1片は有文であった。第五群は、宇座浜式型態が丸みのあるカマボコ状に肥厚しており、カヤウチバンタ式の肥厚はみられなかった。

b. 文様と胎土

文様と胎土の関係を、IV層を中心に第20表にまとめた。

III・IV層の有文土器片をみると、第一群・第二群・第四群であり、これらは、混和材が均一で細かいという点で共通している。またこの3群の有文と無文の比は、1対1である。第五群は無文口縁である。

IV層における文様構成は、肥厚部分直下に横捺文で区切った間を、細沈線の鋸歯文・綾杉構成でうめたものと、横捺文を1条ないし2条施したものが主であった。前者の横捺は、後者に比べ幅のせまい施文具によって施されている。

第七群は口縁部片が得られなかったが、胴部片で2cm程度の小さな外耳状の突起のある土器（第15図-8参照）がある。

群	混和材	備考
第一群	均一なサンゴ細砂を、多く含み、石英や雲母を含むものもある。	粗い砂質の粘土を用い、ポロポロとくずれる脆弱な土器で、暗赤褐色を呈する。
第二群	サンゴ細砂と、貝殻碎粉を含む。	砂質でやや脆弱な土器。
第三群	貝殻碎粉のみを含む。	硬質で焼きのよい土器 本遺跡出土例稀少（2例）。
第四群	均一な細かい石英・長石等・古生層中の異質岩片・チャート碎粉を含む。	砂質粘土で、概して器面保持のよい、焼きもよい土器。
第五群	石英・長石・粘板岩等、古生層中の異質岩片の粗い碎粉を多量に含む。	器面の保持が悪く、焼きがやや弱い。概して明燈色を呈している。
第六群	精選された雲母・石英・角閃石等の鉱物を含む。	硬質の焼きのよい土器。
第七群	混和材なし。	ニベ質の細かい砂質粘土で、稀に粘土自体に微粒の雲母が含まれる精選された粘土である。

Ⅲ層は、口縁部片が10片と少なく、その半数は第五群の無文肥厚口縁土器であった。有文片の中で嘉手納貝塚〔萬元・新田, 1960〕にみられる、口縁が弱いふくらみをもった山形をなし、二又状施文具による連点文を口唇と山形の下に縦に施した土器片が1片〔第14図-10〕、これは破片が小さく胎土分類に不適切で除外した。また胴部片であるが、平安名第二貝塚〔萬元, 1973〕や面縄貝塚〔国分・三友, 1959〕で類例品が出土している外耳状の把手を有するものが2片〔第14図-16・17〕。細い突帯が縦に施された土器が1片出土している。

c. 底部と胎土

底部は形態把握可能なものが9片あり、そのうち4片はやや尖底的な丸底で、ほかの4片は平底であった。これらの底部の形態と胎土との関連の追求は不充分であったのでここでは省略し次回に報告の機会を持ちたい。

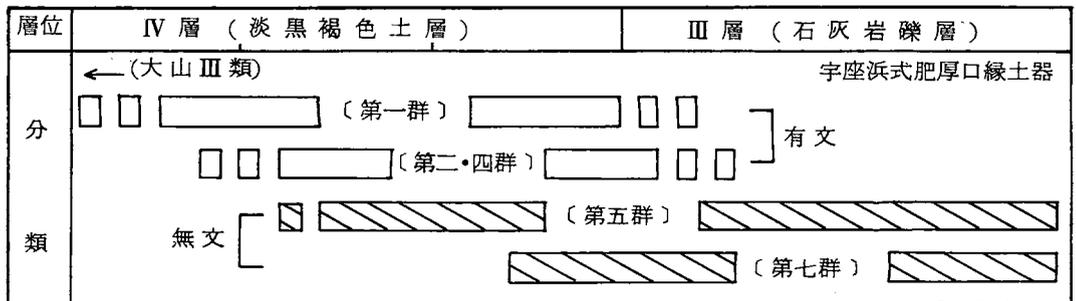
このようなことから、第13図のように、胎土・文様との関連で土器の層位的変遷をまとめた。

これにより胎土は、第一群、第二・四群、第五群、第七群と変化し、口縁形態よりすれば、無文宇座浜式土器に有文字座浜式が先行することが押えられた。文様は、宇宿貝塚のⅡ-a類〔国分他, 1959〕に類似し、これは嘉徳Ⅱ式や後述の表採にみられる面縄西洞式・大山Ⅲ類等の細線刻文の要素と、大山Ⅱ類にみられる横捺文が主だった。

第20表 前・中期系土器の胎土分類別文様構成

胎土	文 様
第一群	大山Ⅲ類(細線刻文土器)類例品1片(第15図-3参照)。 幅広の沈線で、肥厚部の下に段差をなしている(第15図-2参照)。
第二群	平安名第2貝塚で類例品が出土している。強い外反の口唇とその直下に横捺文を施し、その下に細沈線で、格子文を施した土器(第15図-4参照)。
第三群	面縄貝塚出土の宇宿上層式無文土器に類例品が出土している。深鉢形土器(第14図-24参照)。
第四群	キャウチバンタ式肥厚部に幅の狭い横捺を施し、その下に細沈線を施した土器(図版18-7参照)。宇座浜式口縁肥厚部直下に、横捺十細沈線文、横捺を1~2条施した土器。
第五群	無文の宇座浜式、カマボコ状肥厚の土器。内外両器面に貝殻条痕が走り、板積みの接合部分にそって指圧痕のある壘型の土器(第15図-31参照)。
第六群	無文。

第13図 前・中期系土器における胎土の変遷図解



第21表 B地区a3ピット胎土分類別胸部集計表

分類	第一群		第二群		第三群		第四群		第五群		第六群		第七群		合計					
文様	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文				
I 層	12															12				
II 層	a 層	15		1				27		46		14				103				
	b 層																			
	c 層	3																	3	
	d層上部																2			
	d層下部																1			
	小計	18		1				30		46		14				109				
III 層	上 部	1	6	9				3	3	85		5		8		4	116			
	下 部	1	4	6				8		55		14		6		1	93			
	小計	12 / 5.6		15 / 7.0				14 / 6.5		140 / 65.4		19 / 8.9		14 / 6.5		214 / 100%				
IV 層 (cm)	0~30	1	55	11				1	5	1	129	9		6		3	215			
	30~60	1	17	5				2	38	29		3		1		3	93			
	60~90	16		13				1	47	36		3				1	115			
	90~120	3		2						43		3				51				
	120~150	2		1		1		1		33						38				
	小計	95 / 18.3		32 / 6.2		1 / 0.2		95 / 18.3		271 / 52.2		18 / 3.5		7 / 1.3		519 / 100%				

第22表 B地区a3ピット胎土・文様別口縁部集計表

分類	第一群		第二群		第三群		第四群		第五群		第六群		第七群		合計									
文様	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文								
I 層																								
II 層	a 層	1	2																1	3	2	5		
	b 層																							
	c 層																2	1	3					
	d層上部																3	1	2	1	5			
	d層下部																2		3	2	3			
	小計	3 / 14.3						5 / 23.8		13 / 61.9						21 / 100%								
III 層	上 部	3																	1		3		4	3
	下 部																1		2	1	2			
	小計	3 / 30.0																	1 / 10.0		6 / 60.0		10 / 100%	
IV 層 (cm)	0~30	4	4	2	1	1		1	4	14		2				7	26							
	30~60																							
	60~90	1	1																	1	5	2	6	8
	90~120																2	2	4	1	2	7		
	120~150																1		2	3				
	小計	9 / 15.3		4 / 6.8		1 / 1.7		15 / 25.4		25 / 42.4		5 / 8.5				59 / 100%								

B. B地区cトレンチ及び表採品

ここでは、B-cトレンチ及び表採で得られた遺物を概述するとどめる。

B地区c2・c3・c4ピット出土の前・中期系土器は、出土数の57.5%にあたり、a3ピットのII a層（黒褐色土層）に類似している。各ピット別にみると、北側のc4ピットは第一群が多く、c3ピットでは第五群が多い（第23表参照）。c2ピットはII b層上部が掘り下げ面であるため、出土土器は少ない。

有文の土器片は4片と少なく、c3ピット出土の大きな有文口縁部（第16図-21）で、肥厚しておらず、長い横捺文で区切った間を広い間隔で細沈線を“くの字”のように施した第四群の土器片があった。

C地区k14・15ピットは、B地区より崩れ落ちた攪乱層であり、また前・中期系土器は8%と少ないために、表採品と一括して特記的な遺物の紹介に止める（第17図参照）。

同挿図-1はやや外反した第五群の胎土の土器で、口唇は押し引きによる施文で、下は刺突による施文である。同挿図-2は、やはり第五群で、肥厚部の直下に、細い棒状のもので点々と刺突し、その下に幅の広い横捺文を施している。同挿図-6は、山形の口縁で、二叉状施文具による連点文である。同挿図-8は刺突を施した突帯の上に、不規則な細沈線を施してあり、整形がていねいに行なわれている。類例品が百名貝塚〔注1〕より出土している。同挿図-9は山形の口縁部で、刺突を施した突帯で上下を区切り、その間を細沈線を斜めに施してうめている。無混和に近いサラサラした胎土で、焼成もよいと思われた。この2片の文様構成は、奄美の面縄西洞式〔河口, 1974〕と類似している。図版21-25は山形の口縁で、山形の部分はこぶ状にもりあげその頂点は押圧によってぼんでおり、そこに深い刺突を施し、その下に縦位の沈線を施している。その他に、胴部の小片で二叉状施文具による連点文や短線の鋸齒文の施されているものがあった。

第23表 表採・B-cトレンチ・C-kトレンチ胎土分類別集計表

			第一群	第二群	第三群	第四群	第五群	第六群	第七群	合計
B地区	c2	I層	2			6	12		1	21
		II a層	11	1		3	40	2	1	58
	c3	I層	4							4
		II b層					5			5
	c4	I層	2	1						
II a層		35	1		6	3	1			46
C地区	k14ピット		3				28	1		32
	k15ピット		5			5	14	1		25
表採			47			93	182	13	2	337

2. 後期系土器について

— B地区 a 3ピット II層を中心に —

本遺跡全地区出土の後期系土器の総数は2,530片であった(第18表)。これらは下記の特徴を有している。

- イ. 色調は、暗褐色・赤褐色を主体に黒褐色・茶褐色を帯びるものがある。
- ロ. 焼成は良く、硬い泥質粘土を主とする。
- ハ. 完形土器の出土はなく、多くが小片で器型の復元可能なものが少ない。
- ニ. 器壁の保持は良いが、その厚さは一定していない。
- ホ. 大半は混和材が殆どみられず、混和材を用いたものでもそれらが微小のため種類の判別できるものは僅かである。
- ヘ. 文様は、殆ど無文である。

以上の点より、器壁の厚さ・文様構成あるいは胎土による分類法で出土土器をみていくことは困難であった。そのため、器面調整痕のあり方及びそれと器型との関係を知ることにより、土器の時期的特徴の把握を試みた。その作業として土器各部における器面調整の手法を調べ、それと並行して一般に後期土器に含まれている「赤粒」と器型を調べることにより、器面調整痕との相互関係を押えることに留意した。なお、B-a 3ピットにおける後期系土器片はII層に集中し、III層・IV層からの出土は各層位の総出土土器片中それぞれ0.9%、3.3%に過ぎなかった。

器型と器面調整痕の分類を下記する。

A. 器型

口縁部の器型分類は、器型判別可能な個数が少ないながらも、口唇形態・口縁形態を含め第24表のように行なった。また、それに基づいた層位の変化の把握は、B-a 3ピットで試みた。

底部は、尖底と平底に大別した。

第24表 後期系土器の口唇形態分類規準表

器型	甕型 A		鉢型 B		壺型 C	器型不明						
	外反	撫で細口唇	外反	直口		外反	外反		直口		内湾	
口縁形態	丸口唇	撫で細口唇	丸口唇	丸口唇	丸口唇	平口唇	丸口唇	撫で細口唇	平口唇	丸口唇	撫で細口唇	平口唇
記号	A _I	A _{II}	B _I	B _{II}	C _I	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト

丸口唇：口唇部の断面の形が、ヘラ撫でなどによって舌状に丸みを帯びているもの。

撫で細口唇：口唇部の断面の形が、ヘラ撫でなどにより尖がったもの。

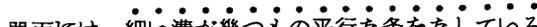
平口唇：口唇部の断面の形が、ヘラ撫でなどにより平たくなったもの。

B. 器面調整痕

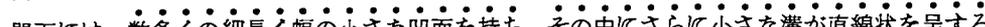
a. 器面調整痕の手法分類

器面調整痕は、その工具と手法によって次の6タイプが抽出された。

(1) 貝殻条痕 (図版25-1)

器面には、 細い溝が幾つもの平行な条をなしているのがみられる。このような特徴を有する器面調整痕を『貝殻条痕』とした。本遺跡出土土器には、土器片全面に亘って『貝殻条痕』がみられるもの、あるいは後述する『撫で痕』によって『貝殻条痕』が部分的に消されているものが観察できた。後者の例は、後の『ヘラ撫で』などによって土が『貝殻条痕』の上を覆っている。このことから、『貝殻条痕』は土器製作過程において、貝殻による掻き取りが行なわれたことを示すものと思える。なお、掲載図版は前者の例である。

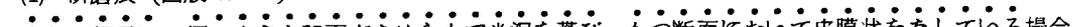
(2) ヘラ削り痕 (図版25-2)

器面には、 数多くの細長く幅の小さな凹面を持ち、その中にさらに小さな溝が直線状を呈する特徴を示すものがある。直線上の小さな溝は土を削り取る際、胎土中の混和材などが工具によってひきずられてできた移動の跡である。溝は、ひきずり始めは深く、漸次浅くなっていき、混和材などがとれた箇所では、溝がなくなっているのが普通である。この混和材などの移動の跡を本稿では『擦痕』としたい。このような特徴から筥状工具の使用が考えられ、それは主に「土器の表層を削り取る時に用いられた」〔佐原・他、1964〕とされる。また、前述の『貝殻条痕』と同様、『ヘラ削り痕』の上に土が覆っている土器片がみられることから、『ヘラ削り』の後、『撫で』が行なわれていることが判った。本遺跡出土の『ヘラ削り痕』を有する土器片は、全て後に『撫で』が行なわれており、器面全体に『ヘラ削り痕』がみられる土器片はなかった。

(3) 撫で痕 (図版25-3)

器面にみられる数多くの細長い、幅の小さな凹面を『ヘラ撫で痕』とした。前記『ヘラ削り』によるものとの違いは、『ヘラ撫で』の場合、凹面がなめらかであり、『擦痕』を伴わない。図版25-2にみられるように、『ヘラ撫で痕』は『ヘラ消り痕』を消すかたちでその上を土で覆う。すなわち、『ヘラ撫で』は『ヘラ削り』の後に行なわれたことが判る。なお、本遺跡出土土器片には器面全体が一様になめらかで、ヘラ状工具の調整痕(前記の小さな細長い凹面)の見い出せないものがあつた。それらが異なる手法によるのか、あるいは『ヘラ撫で』を丁寧に行なった結果その痕跡が見い出せないのか不明である。それらは下記する『研磨痕』の特徴である光沢や皮膜状を有しないこと、あるいは『ヘラ削り』による『擦痕』がみられない点をもって、『ヘラ撫で』と共に『撫で』という手法で一括した。さらに『撫で痕』は、 数条の細溝を伴う場合がある。細溝の幅は、『貝殻条痕』より狭く、直線状あるいは弧状をなす。大山貝塚〔多和田・賀川、1959. P84〕の「刷毛状の擦過痕」が『撫で』による痕跡として把握されることに習い『刷毛目痕』として用いる。その調整用具は不明である。しかし、弥生式土器にみられる『刷毛目』は、「鉄の普及にかかわる技法」とされている〔佐原、1976〕。

(4) 研磨痕 (図版25-4)

 多数の細長い、幅の小さな凹面がなめらかで光沢を帯び、かつ断面において皮膜状をなしている場合を『ヘラ磨き痕』とした。それらの面は、『ヘラ削り』や『ヘラ撫で』のものとは異なって複雑に交錯しており、主にその方向に一定性がない。『ヘラ撫で』を幾度も行なった結果生じたものであろう。さらに本遺跡の出土土器片には、光沢や皮膜状を有するにもかかわらず、『ヘラ磨き痕』のような多くの凹面がみられないものがあつた。器面がなめらかに調整されていることから、上記『ヘラ磨き痕』を残す工

具とは異なるものを用いたと思われる。その工具は不明であるが、器面の有する特徴より『ヘラ磨き痕』と共に、両者を一括し『研磨痕』とした。「土器が生乾きの段階から乾ききるまでに、表面の滑らかなもので撫でつくと、器表付近の砂粒は沈み、緻密な薄層を形成する。磨研によって器表は光沢をおび、美的効果をうむと同時に多孔性を減じる」〔佐原，1976〕ことを目的とするものであろうか。

(5) 木目痕？ (図版.25-5)

本遺跡の出土土器片には、『貝殻条痕』のように幾つもの条痕が、それよりもさらに細かい凹凸の筋を伴って器面にみられた。しかし、それら条痕間の間隔は『貝殻条痕』とは異なって一定していない。弥生式土器でいう『刷毛目』に類似する〔佐原，1976〕。その出土例は稀であるが、前述した『ヘラ撫で痕』や『ヘラ削り痕』を残す工具とは異なったものである。

(6) 雑仕上げ (図版.25-6)

器面が凹凸をなし、一見すると土器表層がとれたようなものをいう。しかし、『ヘラ撫で』などの跡がみられることから簡略な器面調整を行なった結果生じたものと思える。ただし、表層がとれたものとの混同を避けるため、器面の保持が悪い砂質の胎土を有する土器はこの分類から除外した。土器内器面に殆どこの器面調整痕はみられた。

b. 器面調整痕による後期系土器分類

上記6タイプの器面調整痕の組み合わせは、土器内器面のあり方と、土器の外器面における組み合わせによって32のパターンがみられた。

口縁部・胴部 (第25表参照)

器面調整痕の組み合わせは、土器内器面の器面調整痕に、外器面のそれを組み合わせる形をとった。土器外器面では、『研磨痕』と『撫で痕』及び『貝殻条痕』の3タイプの器面調整痕がみられた。『撫で痕』は、前述のように『貝殻条痕』と『ヘラ削り痕』の後に調整されたもの及びそれ以前の器面調整痕が不明なものがみられた。また、『研磨痕』はそれ以前の器面調整痕は認められず『木目痕？』と『雑仕上げ』は、土器外器面ではみられなかった。

底部

土器底部については、下記のような各器面調整痕の組み合わせが認められた。

尖底

- ㉗ 内外両器面とも、『撫で痕』を示す。
- ㉘ 内器面には『貝殻条痕』を有し、外器面は『撫で痕』を示す。ただし、内底面部は『撫で痕』を示す。

平底

- ㉙ 内器面は『貝殻条痕』を有し、内器面の底の部分や外器面は全て『撫で痕』を示す。
- ㉚ 内外両器面とも全て『撫で痕』を示す。
- ㉛ 内器面は『貝殻条痕』を有し、外器面は『撫で痕』を示す。
- ㉜ 内器面は『雑仕上げ』で、外器面は『撫で痕』を示す。
- ㉝ 内器面は『研磨痕』を有し、外器面は『撫で痕』を示す。

なお、底部の器面調整痕による分類は、平底と想定されるものも含めて行なった(第28・34・35表)。

第25表 後期系土器の器面調整痕の手法分類

土器内器面		土器外器面	記号
研 磨 痕 (a)		『研磨痕』 『撫で痕』以前の調整痕が不明なもの 『撫で痕』以前に『貝殻条痕』がみられるもの 『撫で痕』以前に『へら削り痕』がみられるもの 『貝殻条痕』が全面にみられるもの	a イ a ロ a ハ a ニ a ホ
撫 で 痕	『撫で痕』以前の調整痕が不明なもの (b ₁)	『研磨痕』 『撫で痕』以前の調整痕が不明なもの 『撫で痕』以前に『貝殻条痕』がみられるもの 『撫で痕』以前に『へら削り痕』がみられるもの 『貝殻条痕』が全面にみられるもの	b ₁ イ b ₁ ロ b ₁ ハ b ₁ ニ b ₁ ホ
	『撫で痕』以前に『貝殻条痕』がみられるもの (b ₂)	『研磨痕』 『撫で痕』以前の調整痕が不明なもの 『撫で痕』以前に『貝殻条痕』がみられるもの 『撫で痕』以前に『へら削り痕』がみられるもの 『貝殻条痕』が全面にみられるもの	b ₂ イ b ₂ ロ b ₂ ハ b ₂ ニ b ₂ ホ
	(b) 『撫で痕』以前に『へら削り痕』がみられるもの (b ₃)	『研磨痕』 『撫で痕』以前の調整痕が不明なもの 『撫で痕』以前に『貝殻条痕』がみられるもの 『撫で痕』以前に『へら削り痕』がみられるもの 『貝殻条痕』が全面にみられるもの	b ₃ イ b ₃ ロ b ₃ ハ b ₃ ニ b ₃ ホ
『貝殻条痕』が全面にみられるもの (c)		『研磨痕』 『撫で痕』以前の調整痕が不明なもの 『撫で痕』以前に『貝殻条痕』がみられるもの 『撫で痕』以前に『へら削り痕』がみられるもの 『貝殻条痕』が全面にみられるもの	c イ c ロ c ハ c ニ c ホ
雑 仕 上 げ (d)		『研磨痕』 『撫で痕』以前の調整痕が不明なもの 『撫で痕』以前に『貝殻条痕』がみられるもの 『撫で痕』以前に『へら削り痕』がみられるもの 『貝殻条痕』が全面にみられるもの	d イ d ロ d ハ d ニ d ホ
木目痕 ? (e)		『研磨痕』 『撫で痕』以前の調整痕が不明なもの	e イ e ロ

c. 本遺跡出土の後期系土器の特徴

次に、本遺跡出土の後期系土器の特徴を、器型および文様等の点から詳述したい。

a. 器型

前述の如く口縁部の器型分類は、B-a3 ビット出土土器片のみ行なった (第26表)。本ビットより甕型5片、鉢型4片、壺型1片の出土をみ、さらに全地区出土土器片についても甕型主体であり、壺型は稀にみられた。また、口径復元可能な破片は少なく、一部の土器片に限られるが、甕型 (第18図-1・

5・6、第19図-6、図版22-8・10・11・12) 及び鉢型(第18図-7、第19図-1、図版22-9・14)には大小2つのタイプがみられた。甕型土器の推定口径は、大型19~20cm、小型11~13cmで、鉢型土器は大型18~19cm、小型14~15cmであった。

第18図-6(図版22-11)は、小型甕型土器で、赤褐色を呈し稀に1mm前後の貝殻碎片を含む。その胴部内器面は『ヘラ削り』が行なわれ、『擦痕』がみられた。また、外器面には、口縁部において『ヘラ撫で』による『刷毛目痕』がみられ、胴部では板積みの接合部を『指撫で』を行なうことにより調整している。接合部における同様な手法は、具志川グスク出土遺物〔新田、1974〕においてもみられた。「A_I」口唇形態(第24表)を示す。

同挿図-10(同図版-13)は、本ピット出土土器口縁部中、唯一の壺型土器である。焼成は良く硬い泥質を示し、色調は赤褐色である。砂粒を含むが稀にみられる程度である。口径は約5cmで形態からすると、具志原貝塚出土の壺型第2タイプ〔友寄・高宮、1968〕に類似すると思われる。

第19図-3・10(図版22-5・6・15)は、山形状の突起を有する口縁部で、第20図-4・5(図版23-8・9)とともにフェンサ下層式〔友寄・嵩元、1969〕に属する土器片である。

底部は平底と尖底とに大別したが、平底が卓越する(第18表)。尖底は総数8片を得たが、内2片は乳房状をなし(第17図-42・43)、他は砲弾状である。乳房状をなす2片は表採品である。平底は殆どが外縁部においてくびれているが、くびれ部を有してないもの(第21図-3・7・11)もみられた。底径、最大約9cm(同図-10・18)、最小約5cm(同図-1~3・5)で、6~7cmが最も多い。

その他、内底面部の中央部分のみ盛り上がりを示すもの(第20図-32・34、第21図・11)、内底面が平坦もしくは凹状をなすもの(第20図-24~26・29・33、第21図-1~5・7・12・15・16)もみられた。

第20図-35、第21図-18(図版23-16)は、外底面に葉痕がみられるものである。2片とも表採で焼成は良く、色調は外器面が茶褐色を呈し、内器面は灰褐色である。黒雲母・角閃石を含む砂質胎土をなし、指で触れると粉末がつく。胴部に向かい強く外反する。後期に位置する遺跡から、底部に葉痕を有する土器の報告例はなく、稲福遺跡〔琉球考古学研究会、1974〕・伊祖グスク〔県立博物館、1976〕などグスク時代の遺跡には、一般的にみられる。なお、奄美諸島では、「兼久式土器」に伴う傾向にある〔河口、1974〕。

第21図-6(図版23-15)は、外底面に豆粒状の粘土を貼り付けることにより、高台状をなすものである。内外両器面とも色調は赤褐色を呈し、1mm前後の砂粒を含む。硬い泥質の胎土をなし、外器面では『貝殻条痕』がみられ、内器面は『研磨』が施され光沢を帯びている。ただし、外器面の『貝殻条痕』は後に『撫で』が行なわれており、挿図中底部に『貝殻条痕』がみられるのは、全てこの類である。

以上、これら諸型式を示す底部を詳述したが、層中からの出土は僅かであり、その層位的変化を把握することは、今回、断念せざるを得なかった。

b. 文様

次に文様について触れてみたい。

有文土器片は、総数25片得られた。内4片を除き、他は全て浮文(突帯文)である。沈文は、沈線文(第17図-10、図版26-8)とツメ形文(第20図-7・9・10、7は図版23-3)の4片みられたが、2片は突帯文の下に施文されている。

浮文は、その形態から、弧状（U字形）をなすもの、横位をなすもの、両者を組み合わせたもの、あるいは縦位をなすものなどがみられ、突帯上には、殆ど刺突もしくは刻目が施されている。

弧状をなすもの

第18図-11・12（図版22-1・2）をさす。突帯は口唇部において、山形上の突起をなし、その部分に先端の鋭利な工具により刺突が施されている。両者は、色調及び胎土に違いはみられない。すなわち2片とも色調は、内外両器面が暗褐色を呈し、胎土は硬い泥質である。混和材は、1mm前後の長石を含むが、稀にみられる程度である。外器面において、『ヘラ撫で』の痕跡が共に顕著であるが（第22図-B参照）、11は『研磨』状をなし光沢がある。第19図-4（図版22-3）は、突帯が下方において欠損しその全形を窺えないが、突帯が断絶してないことから上記2片と同様な文様構成を有するものと思われる。なお、熱田貝塚〔高宮，1969〕津堅第一貝塚〔高元，1961〕で刺突は施されていないが、同様な形態の突帯を有する口縁部が、それぞれ1片報告されている。

横位をなすもの

突帯が横位をなすものは、5片得られた（図版23-10・11・13，図版24-6・7）。ただし図版23-11は、図版では斜位に写る。この1片を除いて、残り4片は全て突帯上に刺突もしくは刻目が施されている。図版23-11は、突帯がコブ状をなして断絶しており、図版24-6もこの類である。これらの色調・胎土をみると、図版23-10・13および図版24-7は内外両器面とも赤褐色を帯び、混和材の確認できるものはみられない。図版23-11は、内外両器面とも黒褐色を呈し、長石・砂粒を含む。内器面には『貝殻条痕』がみられる。図版24-6は、内外両器面とも茶褐色を呈し、1mm前後の砂粒を含む。

横位の突帯に弧状をなす突帯の組み合わせだったもの

第20図-3（図版23-6）および同図版-12がこの例である。2片とも突帯上には、半截竹管状の工具により刺突が施され、ツメ形状をなしている。色調はともに赤褐色を呈する。同図版-6は硬い泥質の胎土をなし、混和材はみられない。内外両器面とも『研磨』が施され、いわゆる「a_i」調整痕（第25表）を示すものである。同図版-12は、泥質で1mm前後の長石と砂粒および白色の鉱物片を含む。同様な文様構成を有する土器片は、具志原貝塚においてみられる〔友寄・高宮，1968〕。

縦位をなすもの

突帯が縦位をなすものは、6片得られた（第20図-2，図版24-1～5）。同挿図-2および同図版24-2・4・5は口縁部である。同挿図-2を除き、他は突帯が口唇部において断絶している。同図版-1・2は突帯上に刺突ないし刻目は施されていない。同挿図-2の2条の突帯は、下部を欠損するがほぼ平行に貼りつけられており、第18図-11・12のごとく、下部において連続しないものと思われる。突帯の形態のみからすると、アカジャンガー遺跡出土土器の第Ⅲ類の第二種に類似すると思われる〔高宮，1960〕。なお、同挿図-2はアカジャンガー遺跡の例のように、口唇上に刺突は施されていない。これらの色調・胎土をみると、図版24-1・3・5は、内外両器面ともに茶褐色を帯び、混和材はみられない。泥質の胎土を有した。同図版-2・4は赤褐色を呈する。同図版-2は1～2mm前後の砂粒を含む、砂質の胎土をなす。同図版-4は、混和材はみられず、泥質の胎土である。第20図-11は、突帯がイカリ状をなすものである。焼成は良好で赤褐色を呈し、混和材は含まれない。硬い泥質の胎土をなす。外器面において『研磨』が施され光沢を帯びる。

横位の突帯に、縦位の突帯が組み合わせだったもの

第19図-5 (図版.20-7) をさす。土器が欠損しその全形は窺えない。よって、突帯は縦・横一条を確認できるのみである。突帯上は一定間隔に指で押圧されている。内外両器面とも黒褐色を呈する甕型土器で、黒雲母を含む。砂質の胎土をなし、器面はザラザラしている。

沈文は前記したように、ツメ形文と沈線文とがみられた。

ツメ形文

第20図-7 (図版.23-3) ・9・10の3片である。半截竹管状の工具により刺突が施され、縦位もしくは横位にツメ形文がみられる。同挿図-7は突帯の下に施文され、9及び10は、いわゆる南下層式土器に属するものである〔嵩本・高宮・新田, 1966〕。

沈線文

沈線文を有するものは、1片のみ得られた (第17図-10, 図版.24-8)。突帯文と沈線文が組み合わさったものである。突帯上は、ヘラ状工具により刻目が施され、沈線はその下に、土器片中5条縦位に走る。内外両器面とも赤褐色を帯び、混和材は含まれない。泥質の胎土をなす。

c. その他

有孔土器と外耳土器がみられた。有孔土器 (第19図-14, 図版.22-4) は1片の出土で口唇部より約1.5 cm下方に孔が穿たれ、外器面からみて上方に抉りがみられる。暗褐色を呈し、混和材はみられない泥質の胎土をなす。有孔土器は、具志原貝塚に報告例が多い〔友寄・高宮, 1968〕。

外耳土器は2片得られた。第19図-12 (図版.20-30) は、外器面は赤褐色を帯び、内器面は茶褐色である。砂質土器で1 mm前後の砂粒を含むが稀にみられる程度である。図版.23-14は、内外両器面ともに赤褐色を呈する。砂質の胎土をなす。外耳の形状は、両者とも同様である。すなわち器表面において弧状をなし、断面では山形状をなす。その形態は、天久遺跡の弧状突帯文土器に類似する〔高宮, 1968〕。

以上、本遺跡出土の後期系土器諸片について詳述してきたが、これらの出土地点は挿図中に記す。

c. 考 察

a. 器型と層序

第26表は、B-a 3ピット出土の口縁部49片を第24表の分類規準に従い、各層位ごとに配したものである。無文口縁部が主体を占め、有文口縁部は3片のみ得られた (前記のU字形突帯を有するものである。図版.22-1~3)。3片とも、「口」口唇形態を示す。各層の出土状況を見ると、IV層の2片を除いて他はII層からの出土である。これから、IV層出土土器片2片は、II層からの落ち込みと考える。またII層小層中においては、II c層とII d層に集中し、特にII c層は多種類の口唇形態がみられる。器型まで窺える大型破片 (A_I~C_I) を出土するのもこの層位からである。II d層上部において、器型は不明だが「口」口唇形態を示す土器片が16片中、9片出土している。そして、この層を境に下層からは、直口もしくは内湾する口唇形態を有する土器片が、その口唇形態を問わず出土しない。このことは、何らかの器型の層位的変化を意味するものであろうか。次に底部をみる (第18表)。底部も出土数が少なく、その形態を細分することにより、それらの層中における先後関係を調べることは断念せざるを得なかった。平底と尖底とで大別する限り、平底が多く総数21片中、尖底は1片のみの出土であった。平底は20片中11片が、II d層上部からの出土で、他は各層に散在した。尖底は、II層最下層のII d層下部から出

第26表：B地区a3ピット出土後期系土器口縁部の口唇形態による分類表

口唇形態 層位		A _I	A _{II}	B _I	B _{II}	C _I	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	計
I 層														
II 層	a 層							$\frac{1}{2} : \frac{1}{2}$	$\frac{1}{10} : \frac{1}{10}$		$\frac{1}{7} : \frac{1}{7}$	$\frac{1}{9} : \frac{1}{9}$		$\frac{4}{28} : \frac{4}{28}$
	b 層						$\frac{1}{4} : \frac{0}{0}$	$\frac{3}{10} : \frac{0}{0}$		$\frac{3}{44} : \frac{0}{0}$				$\frac{7}{58} : \frac{0}{0}$
	c 層	$\frac{3}{160} : \frac{2}{120}$		$\frac{1}{25} : \frac{0}{0}$		$\frac{3}{13} : \frac{1}{2}$	$\frac{1}{3} : \frac{0}{0}$	$\frac{3}{16} : \frac{1}{6}$		$\frac{1}{4} : \frac{0}{0}$	$\frac{1}{2} : \frac{0}{0}$	$\frac{1}{10} : \frac{1}{10}$		$\frac{14}{233} : \frac{5}{138}$
	d 層上部		$\frac{1}{26} : \frac{1}{26}$	$\frac{2}{26} : \frac{1}{16}$			$\frac{9}{117} : \frac{4}{53}$	$\frac{4}{57} : \frac{1}{14}$						$\frac{16}{226} : \frac{7}{109}$
	d 層下部		$\frac{1}{25} : \frac{1}{25}$	$\frac{1}{43} : \frac{0}{0}$		$\frac{1}{40} : \frac{0}{0}$		$\frac{2}{4} : \frac{0}{0}$	$\frac{1}{10} : \frac{1}{10}$					$\frac{6}{122} : \frac{2}{35}$
III 層														
IV 層										$\frac{2}{20} : \frac{0}{0}$				$\frac{2}{20} : \frac{0}{0}$
計		$\frac{3}{160} : \frac{2}{120}$	$\frac{2}{51} : \frac{2}{51}$	$\frac{2}{68} : \frac{0}{0}$	$\frac{2}{26} : \frac{1}{16}$	$\frac{1}{40} : \frac{0}{0}$	$\frac{4}{17} : \frac{1}{2}$	$\frac{16}{136} : \frac{5}{55}$	$\frac{9}{93} : \frac{4}{40}$	$\frac{3}{44} : \frac{0}{0}$	$\frac{4}{31} : \frac{1}{7}$	$\frac{2}{11} : \frac{1}{9}$	$\frac{1}{10} : \frac{1}{10}$	$\frac{49}{687} : \frac{18}{310}$

注：挿表中の数字は、上段は出土片数下段はその重量を表わす。また、右欄は出土土器片のうち「赤粒」を含むものの片数・重量をそれぞれ表わす。

土し上層にはみられない。平底1片と共伴するが、II d層上部における平底の出土数を考慮すると、沖繩貝塚時代における両者の先後関係に一致すると思われる（国分他，1957、国分，1959参照）。

今回は、口縁部・底部ともに出土数が少なく、口縁部は小片が多いことも合わせて、明確な器型分類あるいはそれらの先後関係の有無を調べることはできなかった。また、II層からは口縁部1片、底部2片の移入土器を得たが、これらについては後述する。さらに挿表中における右欄の数字は、出土土器片中「赤粒」を含むものの個数及び重量を表わしたものである。当初、「赤粒」と器型等との相関関係の有無を調べる予定であったが、都合により中断した。これについては、今後その欠を補うこととして今回は資料のみ提示したい。

b. 器型と器面調整痕

第27表は、B-a3ピットII層出土の口縁部を、その口唇形態および器面調整痕からみたものである。横軸に口唇形態、縦軸に層序と器面調整痕を示す。表からも明らかのように、いずれの口唇形態も2・3の器面調整痕を示し、また特定の口唇形態が固有な器面調整痕を有しない。胴部のように（第29表）、多種類の器面調整痕はみられず、4パターンに限られている。これらの器面調整痕は「b₁ハ」を除く

第27表 B地区a3ピットII層出土後期系土器口縁部の口唇形態と器面調整痕

層位	器面調整痕	口唇形態											計	
		A _I	A _{II}	B _I	B _{II}	C _I	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ		ト
II a 層	a イ							$\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{2}$			$\frac{1}{7} \cdot \frac{1}{7}$			$\frac{2}{9} \cdot \frac{2}{9}$
	b ₁ イ							$\frac{1}{10} \cdot \frac{1}{10}$						$\frac{1}{10} \cdot \frac{1}{10}$
	b ₁ ハ										$\frac{1}{9} \cdot \frac{1}{9}$			$\frac{1}{9} \cdot \frac{1}{9}$
II b 層	a イ							$\frac{1}{3} \cdot \frac{0}{0}$						$\frac{1}{3} \cdot \frac{0}{0}$
	b ₁ ロ						$\frac{1}{4} \cdot \frac{0}{0}$	$\frac{2}{7} \cdot \frac{0}{0}$			$\frac{3}{44} \cdot \frac{0}{0}$			$\frac{6}{55} \cdot \frac{0}{0}$
II c 層	a イ			$\frac{1}{25} \cdot \frac{0}{0}$								$\frac{1}{2} \cdot \frac{0}{0}$	$\frac{1}{10} \cdot \frac{1}{10}$	$\frac{3}{37} \cdot \frac{1}{10}$
	b ₁ イ	$\frac{1}{50} \cdot \frac{1}{50}$				$\frac{2}{12} \cdot \frac{1}{2}$								$\frac{3}{62} \cdot \frac{2}{52}$
	b ₁ ロ	$\frac{2}{110} \cdot \frac{1}{70}$				$\frac{1}{1} \cdot \frac{0}{0}$	$\frac{1}{3} \cdot \frac{0}{0}$	$\frac{3}{16} \cdot \frac{1}{6}$			$\frac{1}{4} \cdot \frac{0}{0}$			$\frac{8}{134} \cdot \frac{2}{76}$
II d 層	上 部	a イ									$\frac{1}{14} \cdot \frac{1}{14}$			$\frac{1}{14} \cdot \frac{1}{14}$
		b ₁ イ								$\frac{2}{40} \cdot \frac{2}{40}$				$\frac{2}{40} \cdot \frac{2}{40}$
	下 部	b ₁ ロ	$\frac{1}{26} \cdot \frac{1}{26}$		$\frac{2}{26} \cdot \frac{1}{16}$				$\frac{7}{77} \cdot \frac{2}{13}$	$\frac{3}{43} \cdot \frac{0}{0}$				$\frac{13}{172} \cdot \frac{4}{59}$
		b ₁ ロ	$\frac{1}{25} \cdot \frac{1}{25}$	$\frac{1}{43} \cdot \frac{0}{0}$		$\frac{1}{40} \cdot \frac{0}{0}$		$\frac{2}{4} \cdot \frac{0}{0}$	$\frac{1}{10} \cdot \frac{1}{10}$					$\frac{6}{122} \cdot \frac{2}{35}$

注. 第26表に準ずる。

と『研磨痕』と『撫で痕』の組み合わせとなっている。また、「b₁ハ」調整痕は、後に『撫で』が行なわれて、『貝殻条痕』はその痕跡を残すに過ぎない。口縁部全面に『貝殻条痕』を有するもの、あるいは『雑仕上げ』を示す例はみられない。同様なことはB-a 3ピットに限らず、本遺跡出土の全ての後期系土器口縁部に概ね共通している(第31~33表参照)。第18図-1・6(図版.22-12・11)および第19図-1・6(同図版,-10)は、口縁部から胴部までを残す大形破片である。内器面における器面調整痕をみると3片とも『貝殻条痕』を胴部に有するが、口縁部においてはみられない。これらのことから、器型もしくは胴部の器面調整のあり方とは直接関係なく、口縁部は丁寧に器面調整を行なっていることがわかる。なお、「b₁ハ」・「b₂ロ」および「b₂ハ」調整痕を有する口縁部が、出土していることは注目し

たい(第27・31～33表参照)。「ハ」及び「b2」調整痕は、『撫で痕』以前の『貝殻条痕』がみられるものである。これは、口縁部においても胴部と同様に、貝殻を用いて土の掻き取りが行なわれたことを示すものであろう。

第28表 B地区a3ピット出土後期系土器底部の器面調整痕による分類表

底部は前述したように器面調整痕のあり方によって、尖底2、平底5のパターンがみられた。第28表は、B-a3ピット出土の後期系土器平底をそれに行なわれた器面調整痕の組み合わせにより各層位ごとに配したものである。「い」調整痕を有する土器片の出土が最も多く、次に「え」調整痕を有する土器片が続いている。同様なことは、B-a3ピットに限らず出土した全ての後期系土器平底に共通している(第34・35表参照)。なお、表採で「お」調整痕を有する土器片が2片得られた

器面調整 層位		あ	い	え	不明	計
I 層			$\frac{1}{20} : \frac{1}{20}$	$\frac{1}{60} : \frac{0}{0}$	$\frac{1}{4} : \text{未}$	$\frac{3}{84} : \frac{1}{20}$
II 層	a 層			$\frac{1}{29} : \frac{1}{29}$		$\frac{1}{29} : \frac{1}{29}$
	b 層		$\frac{3}{55} : \frac{0}{0}$		$\frac{1}{30} : \text{未}$	$\frac{4}{85} : \frac{0}{0}$
	c 層	$\frac{1}{90} : \frac{0}{0}$			$\frac{1}{43} : \text{未}$	$\frac{2}{133} : \frac{0}{0}$
	d 層上部		$\frac{6}{380} : \frac{3}{130}$	$\frac{2}{72} : \frac{1}{39}$	$\frac{3}{48} : \text{未}$	$\frac{11}{500} : \frac{4}{169}$
	d 層下部		$\frac{1}{44} : \frac{0}{0}$			$\frac{1}{44} : \frac{0}{0}$
III 層						
IV 層					$\frac{2}{30} : \text{未}$	$\frac{2}{30} : \frac{0}{0}$
計		$\frac{1}{90} : \frac{0}{0}$	$\frac{11}{499} : \frac{4}{150}$	$\frac{4}{161} : \frac{2}{68}$	$\frac{8}{155} : \text{未}$	$\frac{24}{905} : \frac{6}{218}$

注。第28表に準ずる。なお、計の「赤粒」欄には分類不可を含まず。

ことは、注目したい(第35表)。うち、1片は前記した外底面に豆粒状の粘土を貼り付けたものである。この土器片は、粘土を貼り付けることにより土器を安定させたと推察され、また内器面に『研磨』が施されていることから、液体の貯蔵に用いられたものではなかろうか。いずれにしても、底部内器面に『研磨』を施すことにより、単に装飾的意味のみをもつとは考え難い。何らかの、機能的意味を有すると思えるが、今後の類似資料の追加を待って検討したい。

尖底は、8片中6片が「ア」調整痕を示し、「イ」調整痕は表採の2片である(第35表)。B-a3ピット出土の1片及び前記乳房状をなすものも「ア」調整痕を示した。なお、尖底では平底における「え」および「お」調整痕、すなわち『雑仕上げ』や『研磨痕』はみられない。これは、尖底の出土数が少ないことに起因するのか、あるいは両者間の時間的幅に影響するものか不明である。また、尖底における「イ」調整痕(第21図-17)、平底の「あ」調整痕(第20図-25、第21図-7など)は、共に内底面のみ『貝殻条痕』が撫で消されている。その出土数が割合多いことから、偶然の結果とも考え難い(第35表、第29表)。それらのもつ意味は不明であり、上記のことと共に今後の課題としたい。

c. 器面調整痕と層序

前項でみてきたように、先後関係のある尖底と平底では、その出土数が少ないため明確な器面調整痕の違いは認められなかった。次にB-a3ピットII層出土の後期系土器胴部により、器面調整痕の先後関係の把握を試みた(第29表)。

第29表は、各調整痕を有する土器片の出土数が、層位ごとに占める割合をグラフにしたものである。横

第29表 B地区a3ピットII層出土後期系土器胴部の器面調整痕による分類表

%	研 磨 痕 (イ)					撫 で 痕 (ロ)					貝殻条痕 (ハ)					へら削り痕 (ニ)					全面に貝殻条痕がみられるもの (ホ)					土器内器面 土器外器面				
	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層上部	II d 層下部	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層上部	II d 層下部	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層上部	II d 層下部	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層上部	II d 層下部	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層上部	II d 層下部					
20	0/0 (4)	2/50 (100)	3/14 (84)	1/6 (37)	2/30 (32)	0/0 (6)	0/0 (8)	0/0 (5)													※1. (127) 10/53	5. (168) 3/9					研 磨 痕 (イ)			
10	(1) 2.0	(4) 4.2	(9) 5.8	(6) 3.5	(3) 5.9	(1) 1.1	(2) 1.3	(1) 0.6																						
100	4/51 (101)	9/80 (194)	5/30 (50)	5/36 (44)	※1 (33) 66.0	※2 (49) 51.6	※3 (65) 41.7	※4 (106) 61.6	※5 (37) 72.5	0/0 (16)	1/27 (39)	1/10 (10)	1/3 (3)								1/5 (15)	0/0 (2)							撫 で 痕 (b1)	
50	(12) 12.6	(23) 14.7	(10) 5.8	(6) 11.8	(3) 6.0	(11) 11.6	(5) 3.2	(11) 6.4	(3) 5.9	(2) 4.0	(3) 3.2	(1) 0.6	(1) 0.6								(3) 1.9	(1) 0.6								
20	1/4 (4)	0/0 (10)	1/58 (58)		1/6 (12)	※6 (11) 11.6	0/0 (16)	8/80 (118)	3/19 (19)	0/0 (12)	1/20 (20)										1/8 (8)								貝殻条痕 (b2)	
10	(1) 2.0	(2) 2.1	(1) 0.6		(3) 6.0	(5) 3.2	(11) 6.4	(3) 5.9		(1) 1.1	(1) 0.6										(1) 2.0									
20		1/5 (5)				1/2 (2)																							へら削り痕 (b3)	
10																														
20	1/10 (10)	3/108 (118)	3/30 (82)		4/25 (25)	1/5 (14)	※7 (17) 10.9	※8 (23) 13.4	2/9 (9)	1/5 (5)	1/20 (52)	1/8 (8)									0/0 (20)								全面に貝殻条痕がみられるもの (c)	
10	(1) 2.0	(4) 4.2	(12) 7.7		(4) 8.0	(3) 3.2	(17) 10.9	(23) 13.4	(2) 3.9	(1) 2.0	(7) 4.5	(1) 0.6									(1) 1.1									
20	1/2 (2)	2/35 (47)	1/10 (10)		2/3 (9)	3/28 (28)	1/8 (12)			1/1 (1)	1/9 (9)										1/1 (1)								雑仕上げ (d)	
10	(1) 1.1	(3) 1.9	(1) 0.6		(3) 3.2	(4) 2.6	(3) 1.7			(1) 0.6	(1) 2.0										(1) 0.6									
20																														木目痕? (e)
10					0/0 (4)	2/14 (14)																								
0					(1) 2.0	(2) 1.3																								
	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層上部	II d 層下部	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層上部	II d 層下部	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層上部	II d 層下部	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層上部	II d 層下部	II a 層	II b 層	II c 層	II d 層上部	II d 層下部					
	研 磨 痕 (イ)					撫 で 痕 (ロ)					貝殻条痕 (ハ)					へら削り痕 (ニ)					全面に貝殻条痕がみられるもの (ホ)									

注. 挿表中の数は各層位における「器面調整痕の相互の組み合わせ」の頻度を表わしたものである。なお、()内の数は出土片数を表わす。
 ()内の数はその重量(単位:グラム)を表わす。また、分數欄は出土土器片のうち「赤粒」を含むものの片数(上段)・重量(下段)を表わす。
 . 分類不可能な土器片が、II a層に1個-5グラム・II b層上部に5個-16グラムある。

軸は層序と土器外器面における器面調整痕を示し、縦軸に土器内器面における器面調整痕を示す。()内の数字は、その出土数を表わしたものである。各層とも「b₁□」調整痕を有する土器片の出土率が最も高い。その層位の変化をみると、IIc層で最も減少し、上層に向い、また増加する。II層小層を通じて一貫した減少傾向、あるいは増加傾向はみられないが、II層において最も普遍的に行なわれた器面調整の手法と思える。

他の器面調整痕をみると、『研磨痕』を有する土器片の出土率が、上層に向かい多少減少傾向を示すIIa層上部と下部を一括すると、この傾向は更に明瞭になる。これに対し、「d□」調整痕を有する土器片の出土率は、僅かながら増加する傾向にある。ただし出土数の上では、変化がみられない。出土数が少なくこれらが層位の変化を示すものとは一概にいえず、今後十分な検討を要したい。また、これら20余の器面調整痕の組み合わせは、土器口縁部・胴部・底部の各部分における器面調整痕の違いにより、重複する可能性を若干もつ。すなわち、既にみてきたように口縁部・底部は数タイプの器面調整痕を示すに限られるが、胴部では多くのタイプの器面調整痕がみられる。土器の破損箇所により、同一個体が異なる分類に組み入れられる恐れをもつわけである。よってこれらの器面調整痕の組み合わせは、上記のこととも照らし合わせ、今後他の遺跡との十分な比較・検討を必要とする。

第30表 B地区C2・4ピット出土後期系土器胴部の器面調整痕による分類表

地点	層位	器面調整痕								分類不可	計
		aI	b ₁ I	b ₁ □	b ₂ I	b ₂ □	c□	d□	e□		
B地区	C2	I層		$\frac{11.5}{50.4}$		$\frac{3.1}{14.5}$	$\frac{2.0}{16.0}$	$\frac{1.1}{20.20}$	$\frac{1.1}{14.14}$	$\frac{13.未}{18.未}$	$\frac{31.8}{132.43}$
		I層	$\frac{2.2}{5.5}$	$\frac{16.5}{46.17}$	$\frac{1.1}{2.2}$					$\frac{9.未}{9.未}$	$\frac{28.8}{62.24}$
	C4	IIa層	$\frac{1.0}{2.0}$								$\frac{1.0}{2.0}$

注. 第26表に準ずる。なお、計の「赤粒」欄には分類不可を含まず。

第32表 B地区c3ピット出土後期系土器の器面調整痕による分類表

部位	層位	調整	a1	a□	b1f	b1□	b1^	b1ホ	b2f	b2□	c□	e□	分類不可	計	
		文様													
口 縁 部	I 層	有文													
		無文								$\frac{1}{20} : \frac{0}{0}$				$\frac{1}{20} : \frac{0}{0}$	
	II 層	a 有文				$\frac{1}{13} : \frac{0}{0}$								$\frac{1}{13} : \frac{0}{0}$	
		無文				$\frac{5}{44} : \frac{1}{2}$								$\frac{5}{44} : \frac{1}{2}$	
	層	b 有文													
		無文													
胴 部	I 層	有文													
		無文			$\frac{1}{1} : \frac{0}{0}$	$\frac{44}{63} : \frac{8}{18}$		$\frac{1}{1} : \frac{0}{0}$	$\frac{1}{1} : \frac{1}{1}$	$\frac{1}{1} : \frac{0}{0}$			$\frac{9}{11} : \text{未}$	$\frac{57}{78} : \frac{9}{19}$	
	II 層	a 有文				$\frac{1}{9} : \frac{1}{9}$								$\frac{1}{9} : \frac{1}{9}$	
		無文			$\frac{3}{29} : \frac{0}{0}$	$\frac{134.49}{232} : \frac{195}{195}$				$\frac{7}{66} : \frac{4}{25}$	$\frac{7}{47} : \frac{3}{9}$	$\frac{1}{24} : \frac{1}{24}$	$\frac{30}{36} : \text{未}$	$\frac{182.57}{434} : \frac{57}{253}$	
	層	b 有文	$\frac{1}{16} : \frac{0}{1}$												$\frac{1}{11} : \frac{0}{0}$
		無文	$\frac{3}{16} : \frac{1}{1}$	$\frac{2}{11} : \frac{1}{1}$	$\frac{1}{62} : \frac{1}{62}$	$\frac{15}{87} : \frac{7}{48}$	$\frac{2}{19} : \frac{0}{0}$		$\frac{1}{20} : \frac{0}{0}$	$\frac{3}{15} : \frac{1}{5}$	$\frac{5}{25} : \frac{5}{25}$		$\frac{5}{5} : \text{未}$	$\frac{37}{260} : \frac{16}{142}$	

注. 第26表に準ずる。なお、計の「赤粒」欄には分類不可を含まず。

第33表 C地区k14・15ピット出土後期系土器の器面調整痕による分類表

ピット	調整	文様	a1	a□	b1f	b1□	b1^	b1ホ	b2f	b2□	b2^	b3f	b3□	c1
c I k 14 部	口 縁 部	無文				$\frac{5}{74} : \frac{1}{16}$								$\frac{1}{15} : \frac{0}{0}$
		有文				$\frac{1}{32} : \frac{1}{32}$				$\frac{2}{21} : \frac{2}{21}$				
	胴 部	無文	$\frac{10}{69} : \frac{5}{37}$	$\frac{3}{15} : \frac{0}{0}$	$\frac{21}{220} : \frac{5}{87}$	$\frac{48}{249} : \frac{5}{28}$	$\frac{5}{22} : \frac{2}{6}$	$\frac{1}{6} : \frac{1}{6}$	$\frac{7}{66} : \frac{2}{15}$	$\frac{7}{62} : \frac{1}{2}$	$\frac{2}{14} : \frac{0}{0}$	$\frac{1}{9} : \frac{1}{9}$	$\frac{1}{12} : \frac{1}{12}$	$\frac{1}{26} : \frac{0}{0}$
c I k 15 部	口 縁 部	無文			$\frac{1}{8} : \frac{1}{8}$	$\frac{23}{309} : \frac{8}{125}$	$\frac{1}{4} : \frac{0}{0}$				$\frac{1}{4} : \frac{0}{0}$			
		有文			$\frac{1}{9} : \frac{1}{9}$	$\frac{6}{116} : \frac{2}{57}$								
	胴 部	無文	$\frac{29}{167} : \frac{16}{79}$	$\frac{7}{12} : \frac{1}{1}$	$\frac{73}{559} : \frac{33}{296}$	$\frac{212}{1361} : \frac{37}{273}$	$\frac{5}{78} : \frac{3}{68}$	$\frac{3}{31} : \frac{0}{0}$	$\frac{25}{279} : \frac{8}{72}$	$\frac{22}{223} : \frac{7}{89}$	$\frac{1}{17} : \frac{0}{0}$			$\frac{16}{187} : \frac{9}{69}$

c□	c^	d1	d□	e1	e□	分類不可	計
							$\frac{6}{89} : \frac{1}{16}$
							$\frac{3}{53} : \frac{3}{83}$
$\frac{4}{24} : \frac{3}{22}$		$\frac{2}{17} : \frac{1}{15}$	$\frac{3}{12} : \frac{0}{0}$	$\frac{2}{10} : \frac{1}{6}$		$\frac{3}{15} : \text{未}$	$\frac{121}{848} : \frac{28}{245}$
							$\frac{26}{325} : \frac{9}{133}$
							$\frac{7}{125} : \frac{3}{66}$
$\frac{13}{155} : \frac{5}{108}$	$\frac{3}{51} : \frac{2}{15}$	$\frac{6}{72} : \frac{3}{12}$		$\frac{1}{6} : \frac{1}{6}$	$\frac{1}{1} : \frac{0}{0}$	$\frac{2}{19} : \text{未}$	$\frac{419}{3218} : \frac{124}{1108}$

注. 第26表に準ずる。なお、計の「赤粒」欄には分類不可を含まず。

第33表 表採後期系土器の器面調整痕による分類表

器面調整		aイ	a□	b1イ	b1□	b1^	b1=	b1ホ	b2イ	b2□	b2^
口縁部	有文	$\frac{1}{20} : \frac{0}{0}$									
	無文	$\frac{1.1}{2.2}$	$\frac{4.4}{40.40}$	$\frac{23.5}{207.45}$	$\frac{2.1}{17.9}$					$\frac{1}{3} : \frac{0}{0}$	$\frac{1.1}{3.3}$
胴部	有文	$\frac{6.2}{55.25}$									
	無文	$\frac{23.12}{243.93}$	$\frac{6.2}{60.9}$	$\frac{40.22}{372.209}$	$\frac{506.176}{1961.274}$	$\frac{10.2}{91.37}$	$\frac{2.2}{15.15}$	$\frac{1.1}{2.2}$	$\frac{10.6}{103.60}$	$\frac{59.15}{532.112}$	$\frac{5.0}{49.0}$

b3□	b3=	cイ	c□	c^	d□	eイ	e□	分類不可	計
									$\frac{1}{20} : \frac{0}{0}$
									$\frac{32}{272} : \frac{12}{99}$
								$\frac{1}{10}$ 未	$\frac{7}{65} : \frac{2}{25}$
$\frac{3.1}{48.28}$	$\frac{7.3}{79.21}$	$\frac{4.1}{70.30}$	$\frac{20.14}{230.185}$	$\frac{7.3}{155.60}$	$\frac{22.10}{142.62}$	$\frac{6.5}{63.55}$	$\frac{1.0}{19.0}$	$\frac{45}{258}$ 未	$\frac{777.275}{4492.1252}$

注. 第26表に準ずる。なお、計の「赤粒」欄には分類不可を含まず。

器面調整		い	え	分類不可	計
ピット					
c - k	14	$\frac{1}{12} : \frac{0}{0}$	$\frac{1}{90} : \frac{0}{0}$		$\frac{2}{102} : \frac{0}{0}$
c - k	15	$\frac{5}{205} : \frac{3}{100}$		$\frac{3}{45}$ 未	$\frac{8}{250} : \frac{3}{100}$

第34表

C地区 k14・15ピット出土後期系土器底部の器面調整痕による分類表

注. 第26表に準ずる。なお、計の「赤粒」欄には分類不可を含まず。

器面調整		あ	い	う	え	お	分類不可	計
形態								
平	底	$\frac{3.0}{150.0}$	$\frac{8.2}{393.98}$	$\frac{1.1}{28.28}$	$\frac{4.2}{120.63}$	$\frac{2.1}{50.20}$	$\frac{8}{135}$ 未	$\frac{26.6}{876.229}$
器面調整		ア	イ	計				
尖	底	$\frac{4.1}{155.22}$	$\frac{2.0}{40.0}$	$\frac{6.1}{195.22}$				

第35表

表採後期系土器底部の器面調整痕による分類表

注. 第26表に準ずる。なお、計の「赤粒」欄には分類不可を含まず。

3. 移入土器について

本遺跡出土土器片のうち、他地域より移入されたと思われる土器片は、口縁部2片、胴部2片、底部4片の合計8片が出土した。これらは沖繩貝塚時代の土着土器とは、器型・焼成・胎土等が明らかに異なる。その他に、移入土器片か土着の土器片か判別し難い口縁部が1片あり、一応この項でとり扱うことにした(図版26、第22図参照)。

図版26-1(第22図-4)は、B-a3ピットII層出土の丸口唇で外反した口縁の甕型土器である。重さは90g、器壁の厚さは9.5mmであった。色調は全体として灰白色を呈し、口縁部に黝黒色の煤らしきものが付着している。混和材としては主に、0.1~1mm程度の石英・角閃石等を含む。外器面には、外器面を外反させるために調整されたと思われる『指圧痕』と、撫でによる『刷毛目痕』がみられる。『刷毛目痕』を残す調整用具は不明である。また、内器面にも『指圧痕』がみられる。

同図版-2はc地区表採の口縁部で、重さは11gである。胎土に「赤粒」を含む。また器面の保持が悪く、器面調整痕はみられない。胎土・焼成・色調・器壁の厚さ(8mm)において、上記の口縁部と類似する。

同図版-3はO-k14ピットより出土した胴部で、重さは40gである。器壁の厚さが9mmで、0.5~2mm前後の石英・角閃石等を含み、灰白色を呈する。同図版-1・2同様に焼成は悪く、また器面保持も悪いため外器面の調整痕はみられない。しかし、O-k15ピットより胎土・焼成・色調において、これと類似する胴部が1片出土し、この器面調整痕は内外両器面とも『撫で痕』であった。

同図版-4(第22図-2)は、B-a3ピットIIb層出土の底部である。形状は、上から下へすぼまり、外底面部は中央がくぼみ脚台状をなす。底部の厚さは2.5cmで重さは70gである。色調は赤褐色を呈し、混和材としては、0.1~3mm前後の石英・長石およびその他の鉱物片である。

同図版-5・6(同挿図-5・6)は共に茶褐色を呈し、1~3mm前後の鉱物礫を多量に含んだ底部である。前者は表採で、破損のため器型・底部の厚さは不明である。後者はB-a3ピットIIa層下部の出土である。平底で底部の厚さ3.2cm、重さ82gである。この2片は、類似品が備瀬貝塚で報告されている(高宮, 1968, P12・14)。

同図版-7(同挿図-3)は、c地区表採の底部である。破損のため器型および底部の厚さは不明である。重さは40g、色調は内器面が暗灰色、外器面が茶褐色を呈する。混和材としては石英を中心に、長石・角閃石・黒雲母等が含まれている。

同図版-8(同挿図-1)は、B-a3ピットIV層0~30cm深度出土である。復元口径29cmできつい外反の口縁をもつ甕型土器である。器壁の厚さは8mm、重さ110gである。混和材は微細な石英粒等を含み、色調は灰白色を呈す。焼成は良好で、本遺跡出土土器中最も堅緻な土器片の1つである。器面調整痕は『指圧痕』や『貝殻条痕』と、調整用具は不明であるが、繊維状のもので撫でられたと思われる『刷毛目痕』がみられる。このような胎土・焼成・色調等の特徴を示す土器は、これまでに沖繩で報告されていない。しかし器型は沖繩貝塚時代後期にみられる甕型の土器に類似するため、移入土器、特に弥生系土器とおさえることは控えた。今後、十分な検討を加えたい。

4. 土器小結

最後に土器整理を終了し、その成果と、今後の課題を述べ、さらにB地区 a 3ピットIV層・III層・II層の時期比定と移入土器の移入時期の設定を行ない結びとしたい。

前・中期系土器は、混和材を中心とした胎土分類により、第二群と第四群間の先後関係を除き各群間の変遷過程は、大体押えられた。口縁形態は、断面が三角形の宇座浜式やカマボコ状の土器が主体であり、これは奄美の先史土器Ⅰ-a類(宇宿上層式土器)とⅡ-a類(国分・他, 1959)に類似するようと思われるが、胎土は地域的な差異のため大きく異なる。III層・IV層期の類例遺跡として地荒原貝塚〔多和田・外間・嵩元, 1962〕や平安名第二貝塚〔嵩元, 1973〕があげられる。なお、本遺跡ではカヤウチバンタ式肥厚口縁土器の出土は、稀であった。

IV層の土器は、大山Ⅲ類〔多和田・賀川, 1959〕・有文字座浜式土器が南側より集中して多く出土する傾向がある。無文字座浜式土器については、IV層0~30cm深度から増大し、III層については口縁部の出土が少なかったが、胎土の面から第五群が圧倒的であり、無文字座浜式土器主体の層と考える。このような層位的土器型式の変化は押えられるが、これを編年的な一線で区切り位置づけることは、今回土器の形態的变化のみからは成り難かった。

これに関しては、他の人工遺物・自然遺物との関連、類例遺跡との比較検討を加え、今後総体的な文化内容を把握した上で行なっていきたい。

後期系土器は、胎土・文様等からその層位的変遷・機能的特徴を把握することは困難であった。そのため、器面調整のあり方を観察することにより、その特徴の把握を試みた。しかし、従来若干の報告例を除き、器面調整痕による土器分析は行なわれておらず、比較資料を得ることはできなかった。また器面調整痕の資料化に多くの時間を費やしたために、その分析を十分に行なうことができず、したがって上記の目的を明確に把握しえなかった。これらは、今後追加資料を待つことにより、十分な検討を行ないたい。

なお、『木目痕?』を有する土器片については、その様相から推察すると、それを残した調整用具は、木本科の植物が妥当かと思われる。すなわち、『木目痕?』を残す調整のあり方が弥生式土器にみられる『刷毛目』に類似しており、この『刷毛目』については横山浩一氏の研究により、鉄による割板を土器面にあててひきずった痕跡と判明しているとされる〔佐原, 1976〕ことによる。それゆえ、『木目痕?』を残す調整用具は、石器以外の鋭利なもの(例えば、鉄器など)に求められないだろうか。さらに、多和田真淳氏は、渡久地洞窟〔多和田, 1956〕や川田原貝塚〔多和田, 1971〕より鉄滓を採集しておられるとのことであるから、鉄器使用の可能性はなきにしもない。しかし、本遺跡を含め沖縄貝塚時代後期遺跡の包含層中より鉄器の出土例はなく、『木目痕?』を残す調整用具と鉄器とを直接結びつけるわけにはいかない。今後の課題となろう。

後期系有文土器は文様構成からみると、殆どが突帯文をなし、突帯上には刺突あるいは刻目が施されていることから、具志原貝塚IV層出土の有文土器片に類似する。しかし、本遺跡において有文土器片の層中からの出土は少なく、B地区 a 3ピットにおける有文口縁部が、出土土器口縁部(口唇部を有する土器片)に対する割合は6%であり、著しく無文化が進んでいる。器型は甕型を主体として鉢型もみられた。また、壺型土器の層中よりの出土は、II d層上部からの1片のみである。II c層からは、口唇部

に山形状の突起を有するフェンサ下層式土器2片が得られた。これらのことからII層の主体をなす時期は熱田貝塚からフェンサグスクの形成期に比定されると思われる。

なお、今回は整理作業の第一段階として出土土器片を前・中期系と後期系土器とに大別したことおよび両者を異なる分類規準で観察したことにより、I層からIV層まで一貫した土器の変遷過程（両者の結びつき）を辿ることができなかった。また整理作業の容易さにむけて、各土器片の出土地点を押さえることに注意を怠り、その出土地点ごとの出土状況を把握することが不可能になった。したがってB-a3ピットにおける各層ごとの定量的観察のみを行なわざるを得なかった。ともに今回の反省点である。

移入土器（弥生式土器？）の層中からの出土は前述したように、3片で全てII層からの出土である。すなわち、本遺跡における移入土器の登場時期は、熱田貝塚からフェンサグスクの形成期に至るといえる。しかし既述のIV層0～30cm深度の土器片の検討如何によっては、本遺跡における移入土器の登場時期は、沖繩貝塚時代・前～中期に遡る可能性が考えられよう。

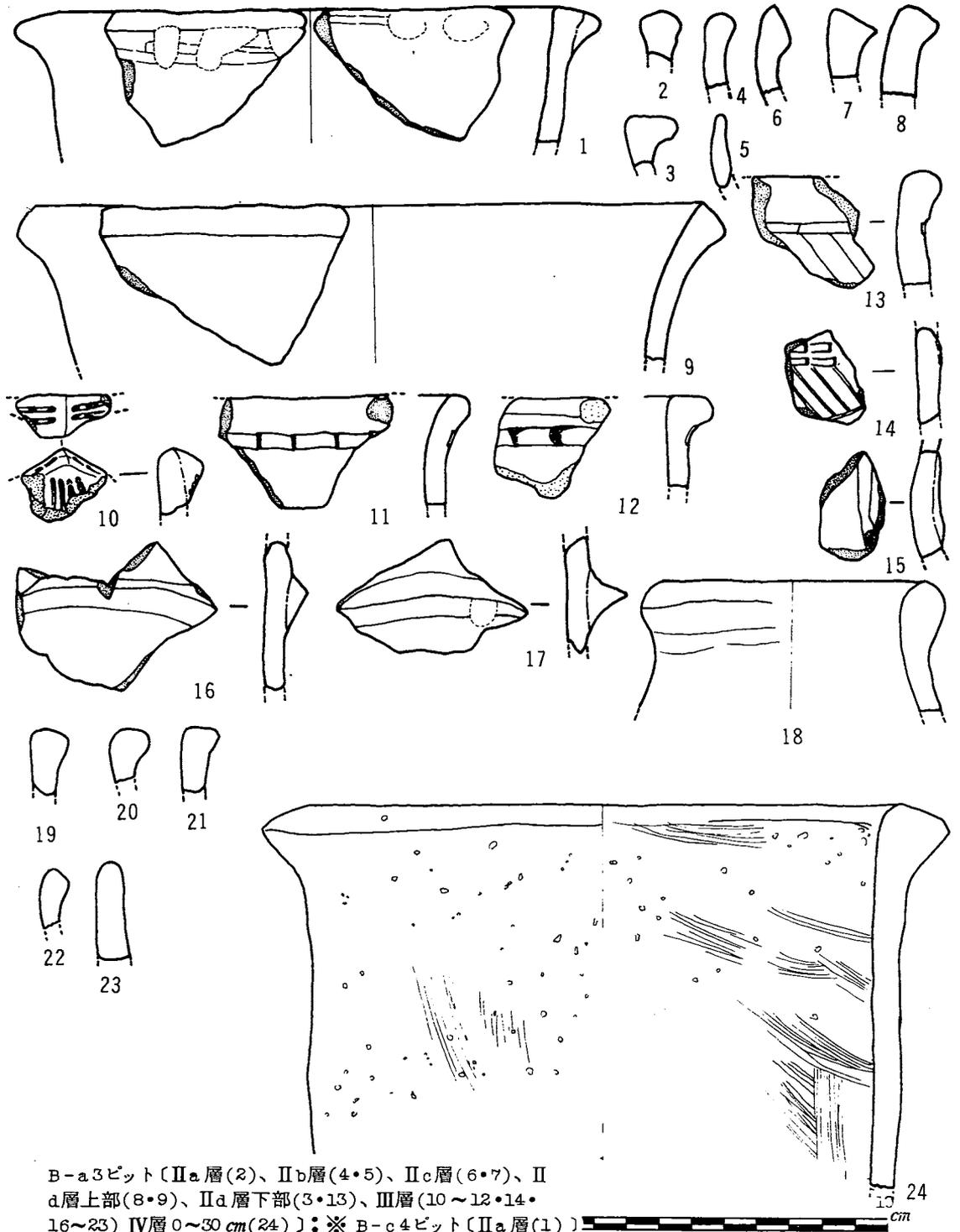
以上、第一以調査出土土器について記述してきたが、第二次調査ではB地区a3ピットII層から注目すべき土器が得られた（図版24-9）。この土器も含め第二次調査土器については前記したように、次回に行ないたい。

なお、出土土器の作図にあたっては、器面調整痕の状態をよりよく示すために、若干の記号を用いた（例言-10参照）。また、断面図の傾きについても、確かなものは断面の口唇から内側に向けて実線を付し、判然としないものは、当該土器片の形態および従来の研究成果より推測することにより求め、断面図と平面図の中位に実線を付した。断面図のみのものも後者と同様である。さらに、土器製作過程における粘土板の接合状態についても、それが判然としたもののみを断面図に一点鎖線を付し、示した。

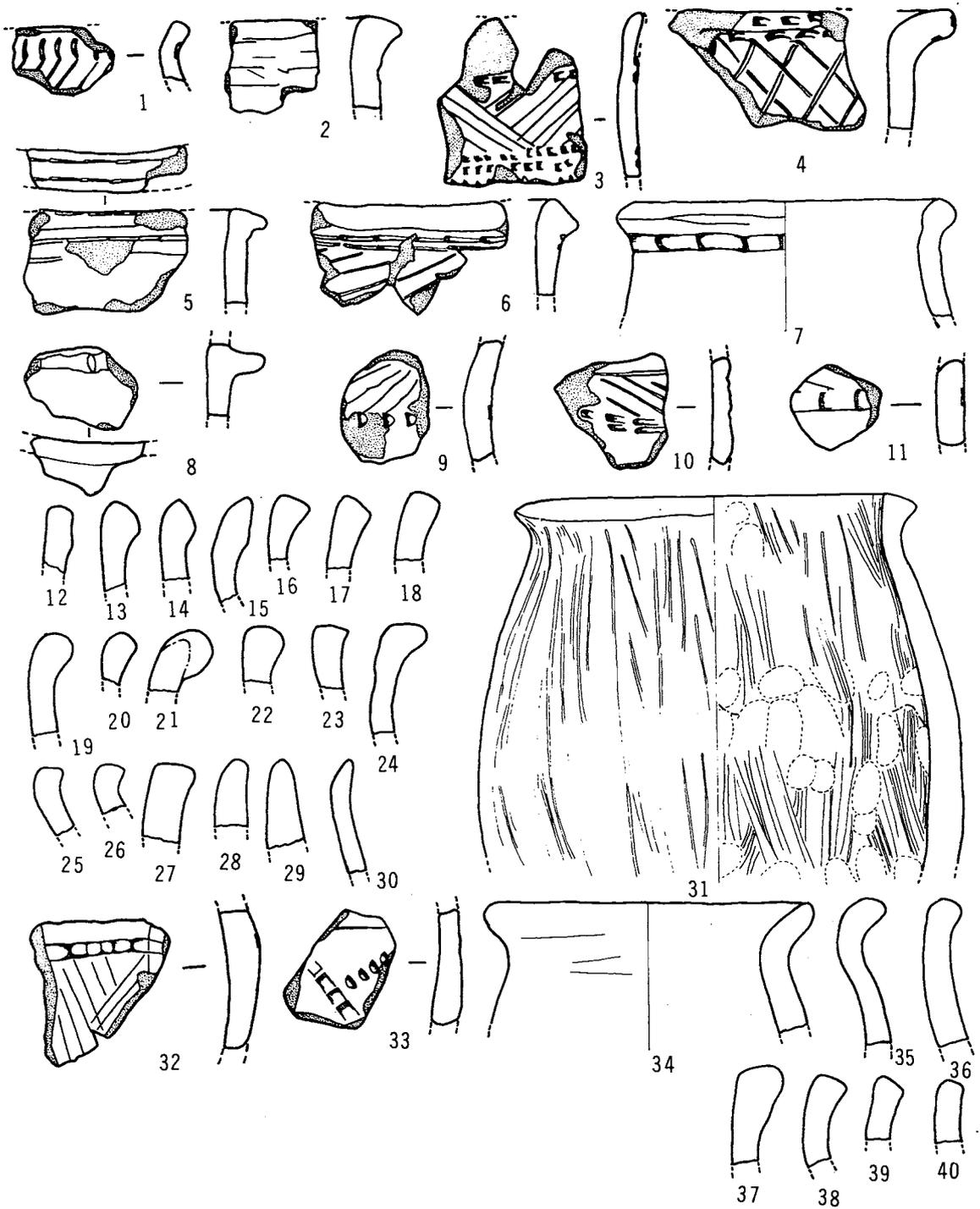
第36表 前・中期系土器の掲載遺物胎土別一覧

胎土	挿 図
第一群	第15図-1～3・10
第二群	第15図-4・5・32・33・35、第16図-1
第三群	第14図-24
第四群	第14図-11・12・14～18、第15図-6・7・9・11、第16図-2～6・11・12・16・17・21
第五群	第14図-19～23、第15図-12～26・34・36～40、第16図-7～10・13・15・18～20・22～29

注.1 琉大考古学研究会採集の未発表資料。

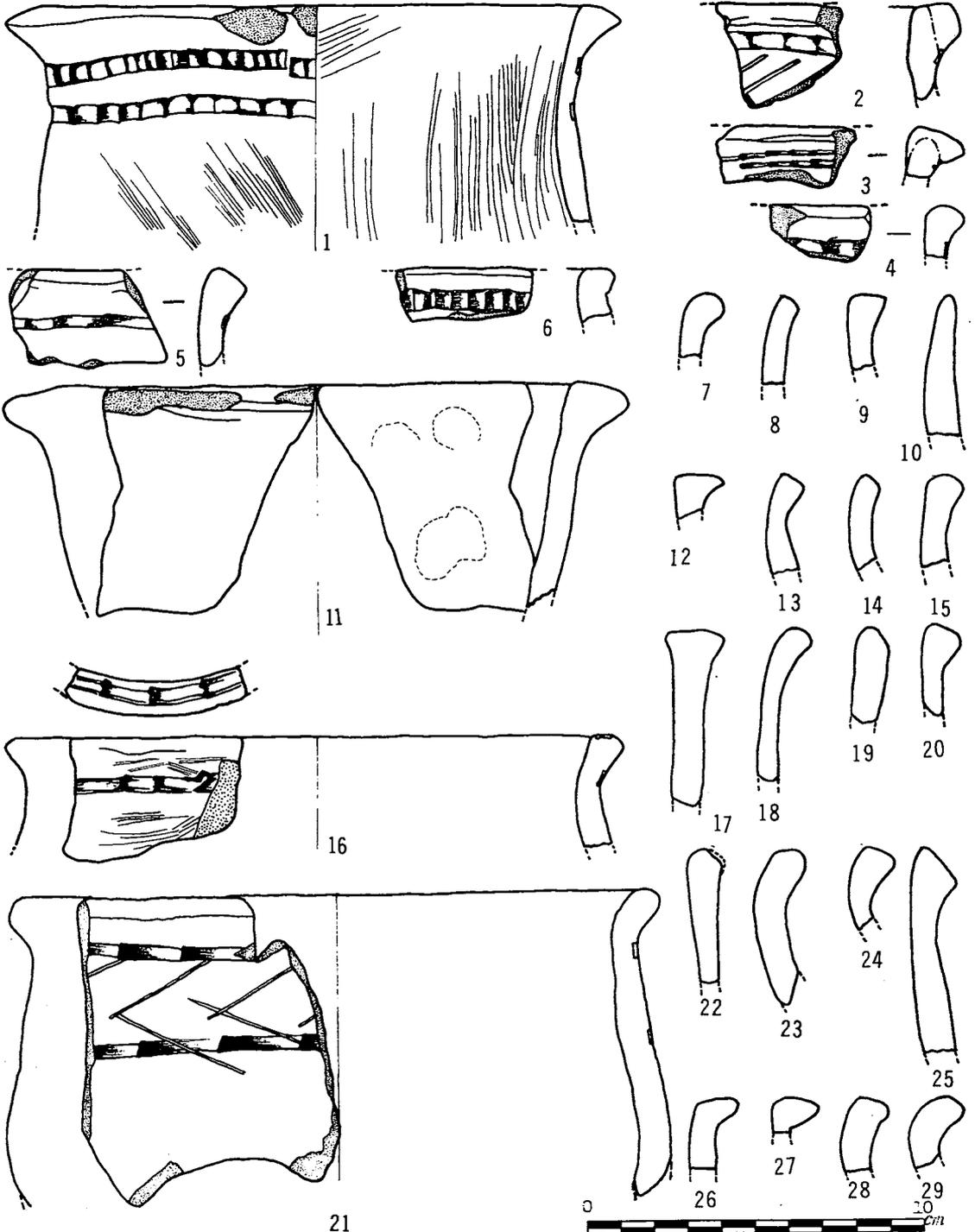


第14図 B-a3ピット出土の前・中期系土器実測図(1)



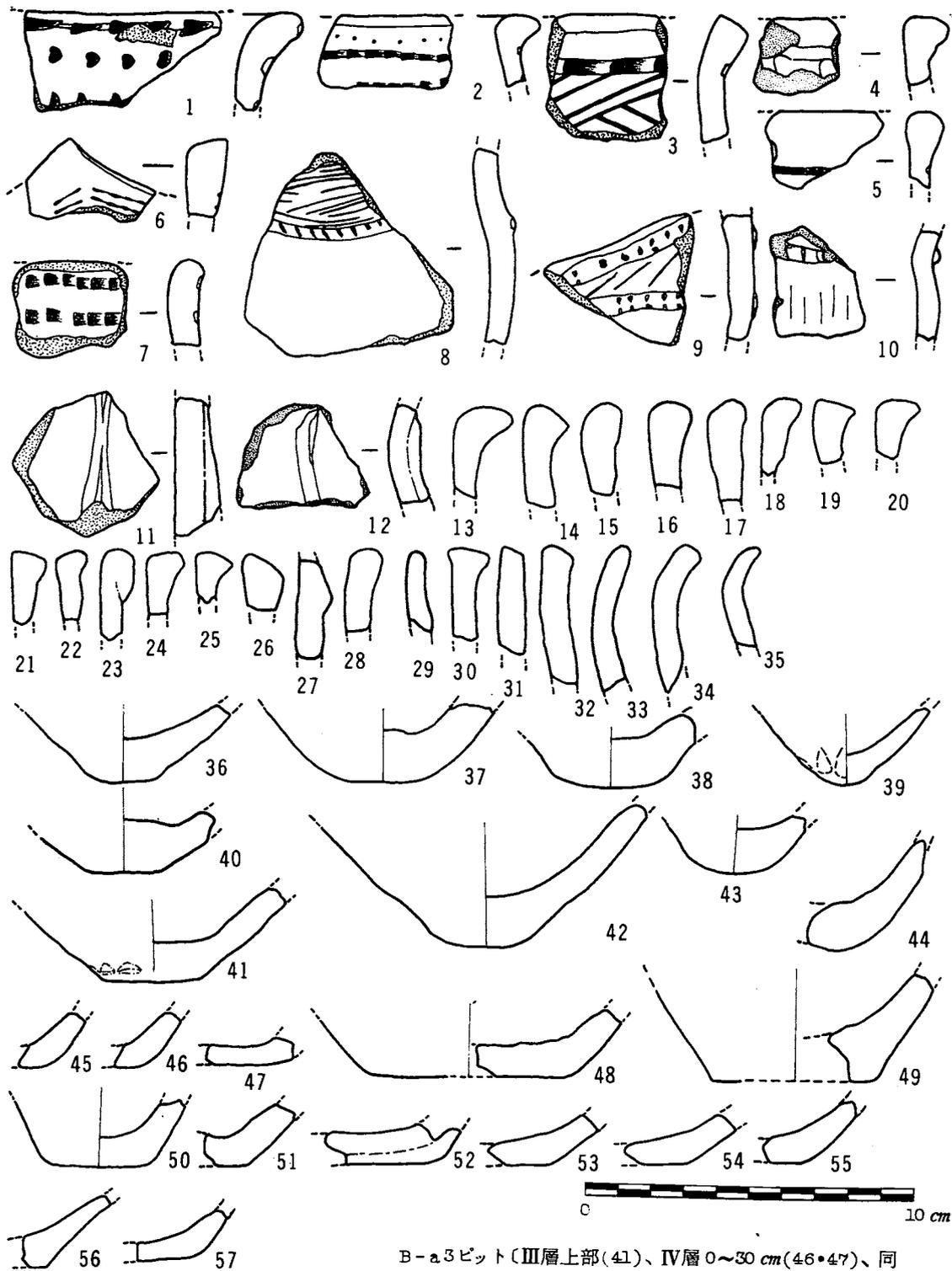
B-a3ピット(Ⅲ層(30)、Ⅳ層0~30cm(1~26)、Ⅳ層30~60cm(27~29・31~40))

第15図 B-a3ピット出土の前・中期系土器実測図(2)



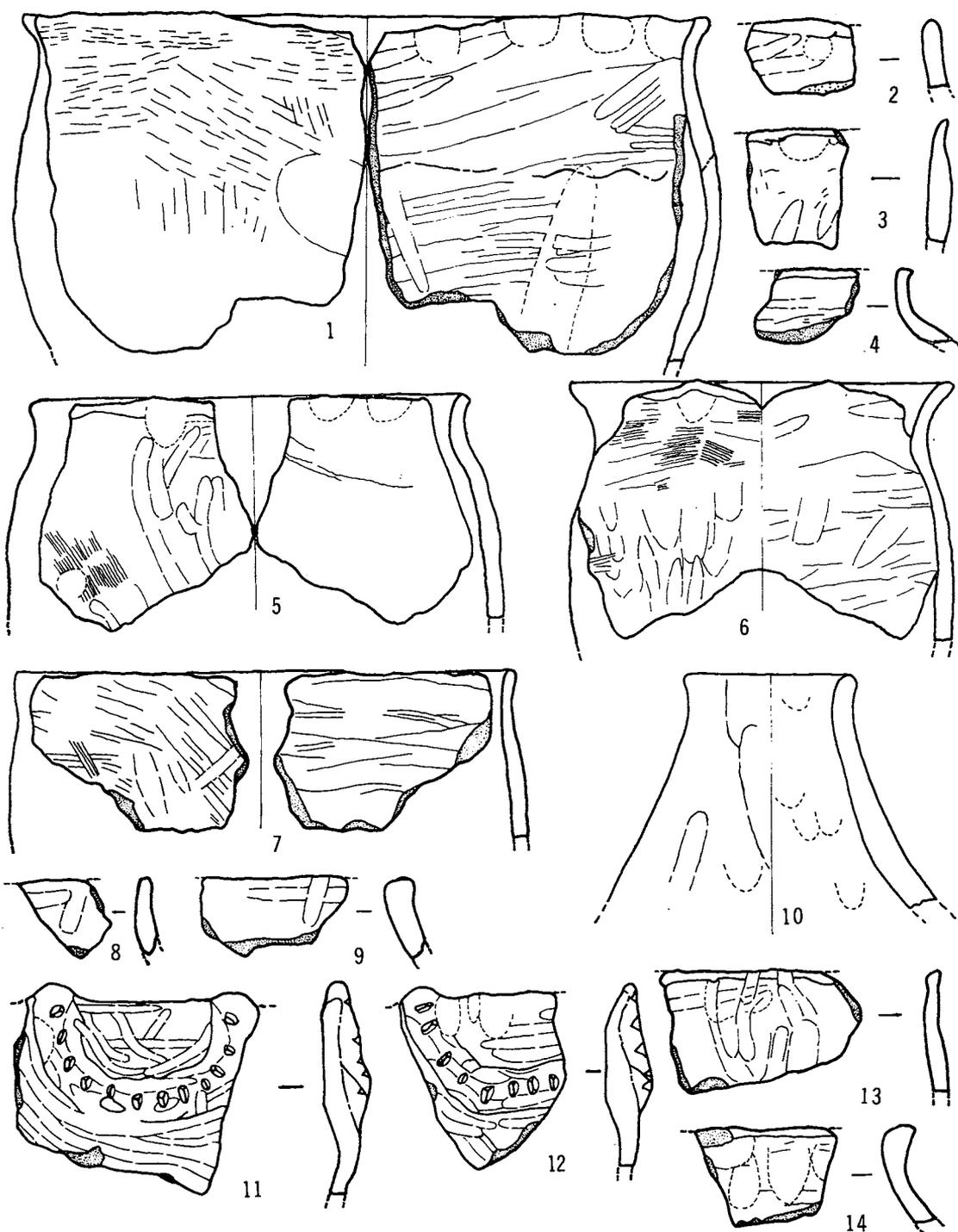
B-c2ピット〔I層(29)、IIa層(28)〕:B-c3ピット〔IIa層(26・27)、IIb層(21)〕:B-a3ピット〔IV層60~90cm(1~4・7~15)、同90~120cm(5・6・11・17~20・22・23)、同120~130cm(16・24・25)〕

第16図 B地区出土前・中期系土器実測図



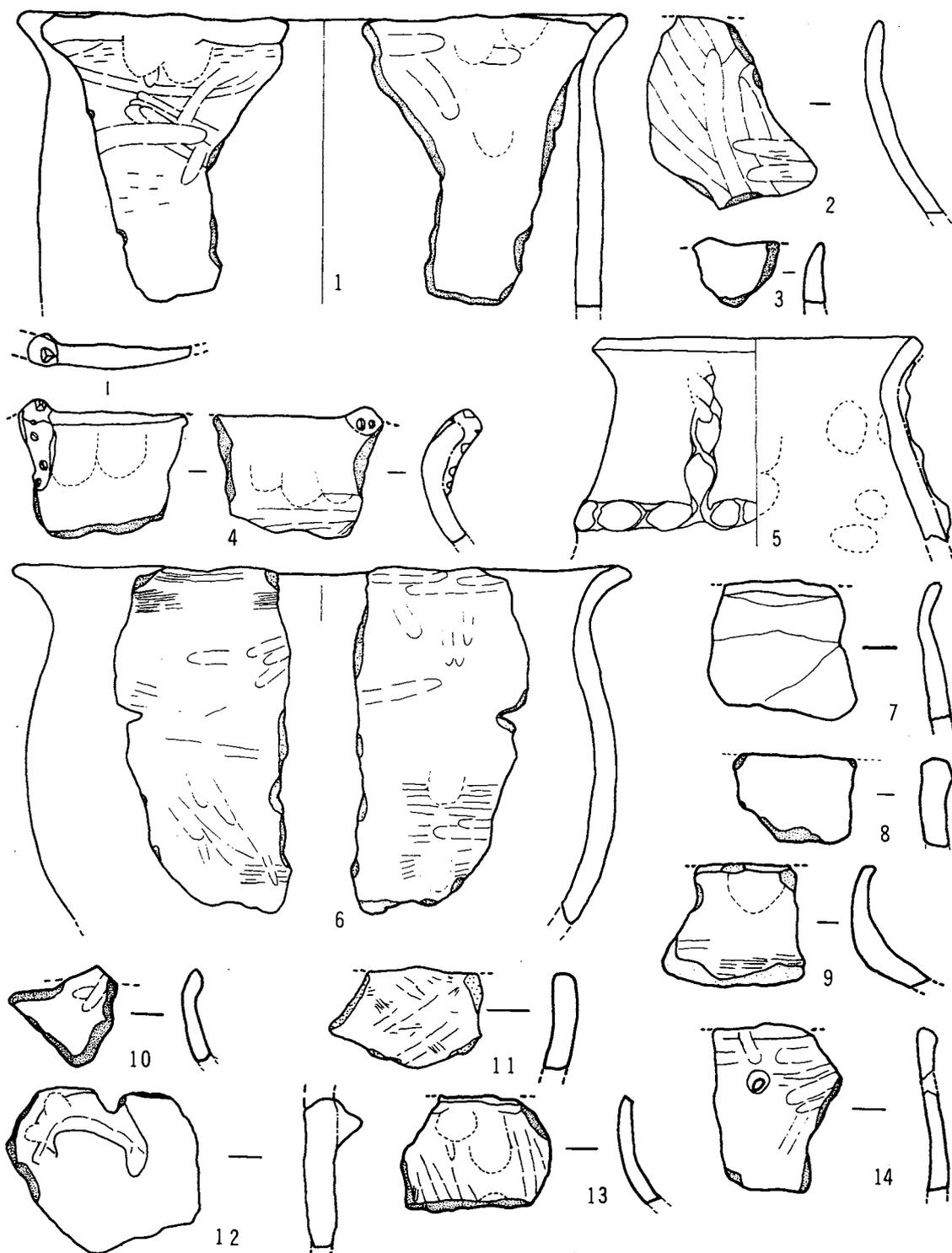
第17図 前・中期系土器及び底部実測図

B-a3ピット(Ⅲ層上部(41)、Ⅳ層0~30 cm(46・47)、同30~60 cm(48・49)、同90~120 cm(36・50~52))；C地区(1~9・11・13~35・37~40・44・45・53~57)※後期系土器(C地区(10・12・42・43))



〔Ⅱb層(4・9・13)、Ⅱc層(1・2・3・6)、Ⅱd層上部(7・11・12・14)、Ⅱd層下部(5・8・10)〕

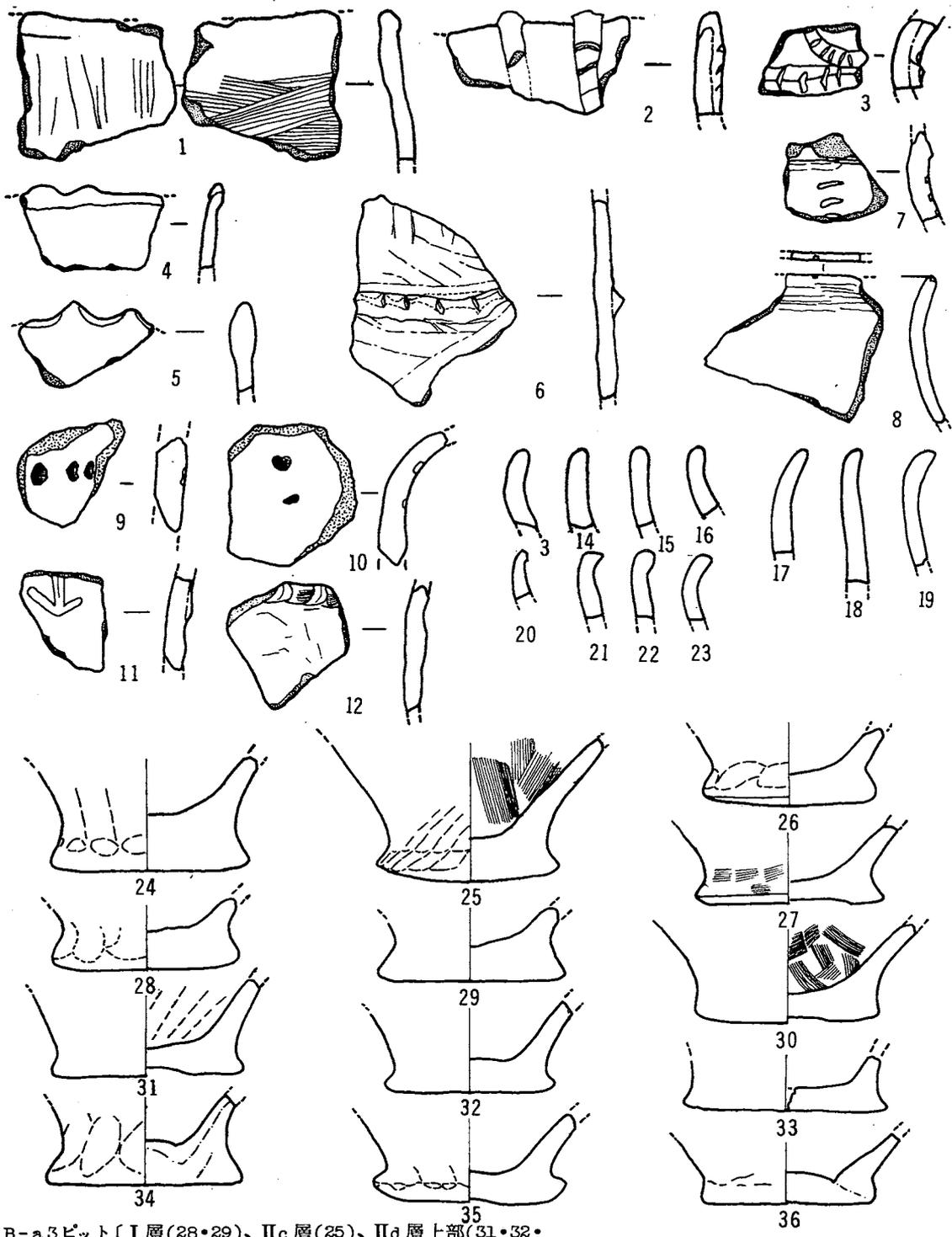
第18図 B-a3ピットⅡ層出土後期系土器実測図(1)



〔Ⅱb層(3・10・12)、Ⅱc層(6・8・11・13)、Ⅱd層上部(2・4・7・9・14)、Ⅱd層下部(1)〕※〔Ⅲ層下部(5)〕



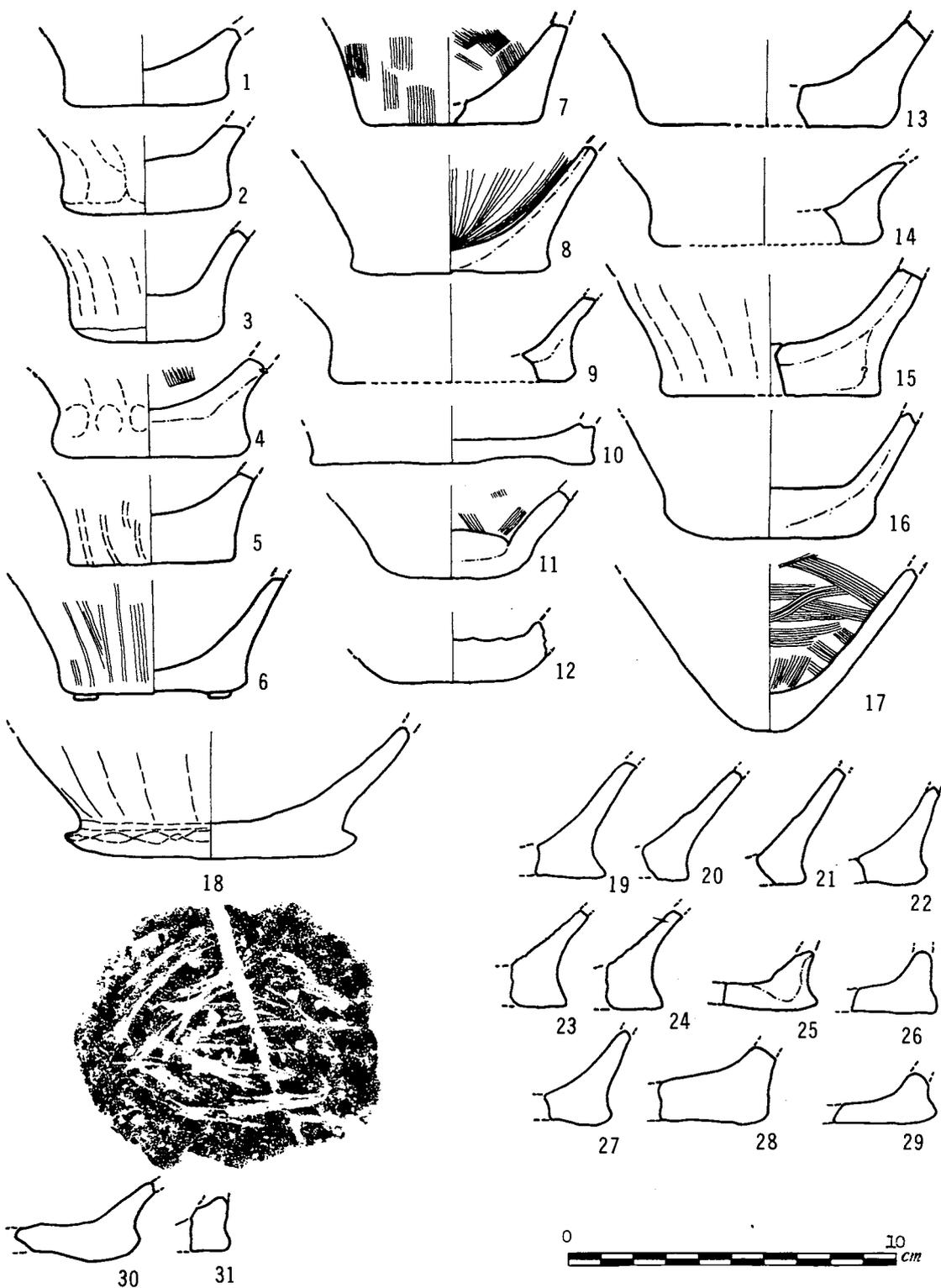
第19図 B-a3 ビットⅡ層出土後期系土器実測図(2)



B-a3ピット〔I層(28・29)、IIc層(25)、IIa層上部(31・32・36)、IV層0~30cm(14~16)〕：C地区〔1~13・17~24・26・27・30・33~35〕

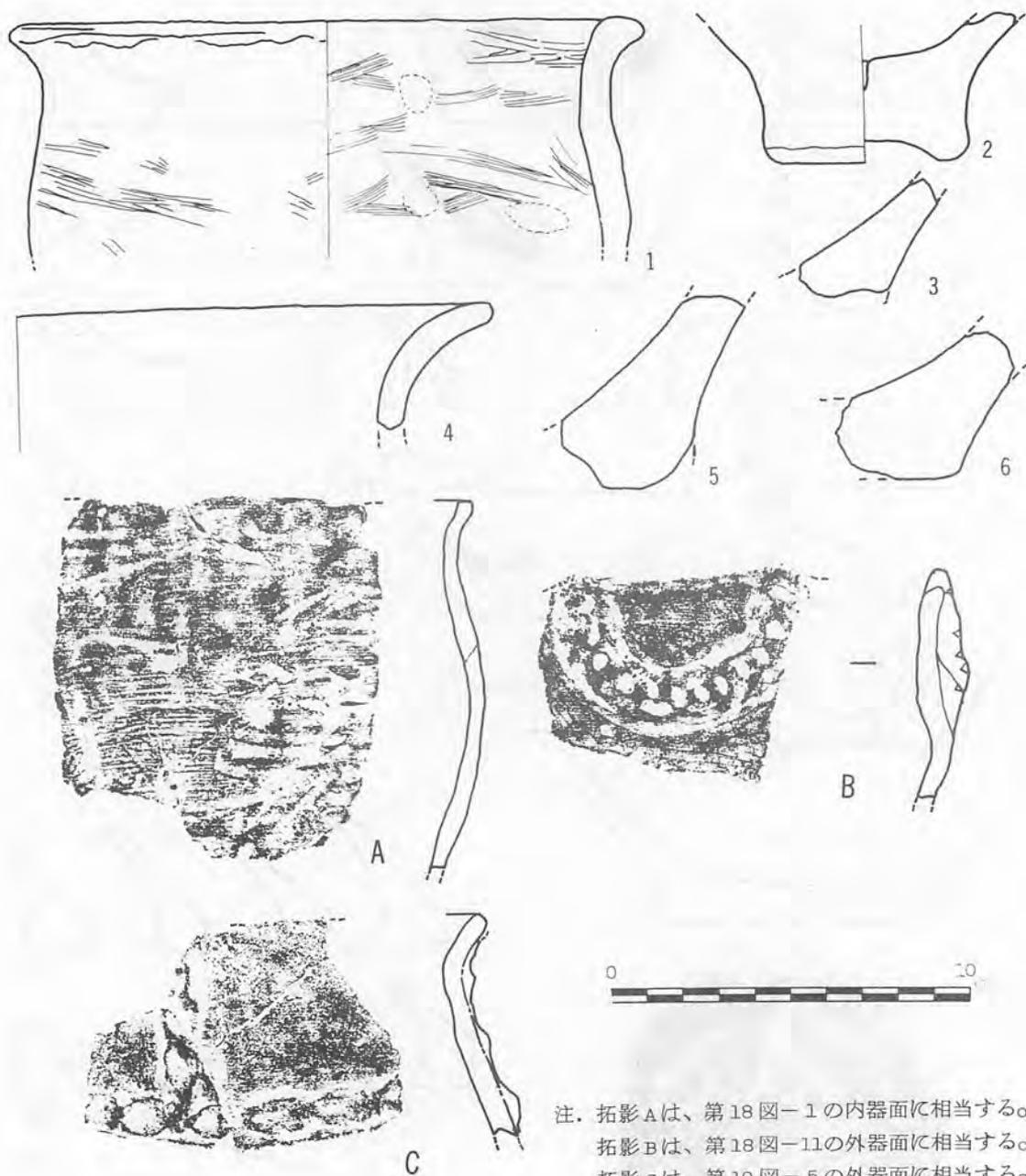


第20図 後期系有文土器及び底部実測図



第21圖 後期系土器底部実測図

B-a3ピット〔I層(1・9・21・30・31)、IIa層(14)、IIc層(10・12)、IId層上部(3・8)、IId層下部(13)〕:C地区〔2・4~7・11・15~20・22~29〕



注. 拓影Aは、第18図-1の内器面に相当する。
 拓影Bは、第18図-11の外器面に相当する。
 拓影Cは、第19図-5の外器面に相当する。

B-a3ピット(Ⅱb層(2)、Ⅱc層(A)、Ⅱd層上部(B) Ⅱd層下部(6)、Ⅱ層(4)、Ⅲ層下部(C)、Ⅳ層0~30cm(1)) : c地区
 [3・5]

第22図 移入土器実測図及び後期系土器拓影

第5章 渡喜仁浜原貝塚の石器・石製品

予備調査や一次・二次の発掘調査で出土した石器は、総数 206 点に達した。得られた石器のうち、形態がおおむね把握できたもの 114 点、小破片のためあるいは不定形なため形態が把握できなかったもの 92 点であった。本稿では、形態が把握できたものについて記述し、把握できなかったものについては概説するにとどめたい。

出土した石器はその機能と形状から、石斧状石器類・擦石類・敲石類・石うす（石皿）・砥石？・石鏟？・ナイフ状石器・石鏃・スクレイパー・皮なめし用石器？等に分類できた。その他パイプ状の石製品や未製品等が出土した。

石器の材質は火成岩・変成岩・堆積岩に大別された。火成岩は、粗粒玄武岩・斑岩の 2 種類、変成岩は、結晶片岩・チャートの 2 種類、堆積岩は、砂岩・礫岩・石英斑岩・琉球石灰岩の 4 種類であった。さらに、結晶片岩は黒色片岩・緑色片岩等に、砂岩はアルコース砂岩・粗粒砂岩・中粒砂岩・細粒砂岩・ワッケ砂岩・礫質砂岩・変成した砂岩・石灰質砂岩等に細分できた。しかしながら、本稿では石質と形態との関係の把握に主眼をおいたので、挿表などでは統計処理上、上記のような石質の細分をおこなわなかったところが多い。そのため、報文中の石質の呼称では、総称的な表現と具体的・個別的な表現とが混在している。

遺物の観察はふたつの視点からおこなった。ひとつは、機能的観察で、石器の使用痕の観察を通して機能の推察を試みた。他方は、型態的観察で、遺物の個別的な形状の観察を通して、機能との連関を探ってみた。

遺物はまず機能上の分類をおこない、機能的名称で呼称することを原則とした。次に形状の類似による分類をおこない、型態名を付して呼称した。従来の石器報文においては、機能的名称と型態的名称が不用意に混在しているものがあり、石器名称からくる語感と石器の機能的理解との間に齟齬をきたす場合があった。そのような反省を踏まえて本報告では、従来形状で称されていたものを一部機能的名称に改めた。たとえば、磨石を擦石とし、石皿を石うすとした。また、機能的にまだ理解されていない石器は型態的名称で称した。

記述にあたって、いくつかの用語の使い分けをおこなったので留意されたい。ひとつには、「形態」と「型態」とを使い分けた。前者は機能上の分類をさし、後者は形状の類似による分類をさす。また、使用痕もその形状によっていくつかに分類し、次のように用語を使い分けた（注 1）。

（ア） 部分的使用痕

- ① 擦痕 摩擦力により生じたとおもわれる擦過痕で、器面に条痕となってあらわれる。整形痕（調整痕）との区別がつけにくい。
- ② 擦りへり痕 前後方向の押圧摩擦力で形成されたとおもわれる。滑らかな平坦面をなす。
- ③ 環状擦痕 ある一点を中心にひねるように押圧力を加えて形成されたとおもわれる。同心円状に形成された擦痕である。
- ④ 研磨痕 摩擦力により形成されたとおもわれる。滑らかな曲面をなす。
- ⑤ 線状痕 石斧などの刃部に生じる線状の条痕で、打撃力によって生じるといわれている。条痕

は同一方向に形成される場合が多い。

- ⑥ 打痕 敲打によって生じたとおもわれるあばた状のおうとつ面である。整形痕との区別が困難な部分もある。
- ⑦ 剝離痕 打撃力によって生じたとおもわれる打ち欠き痕である。
- ⑧ 刃こぼれ 石斧などの刃部に生じる剝離痕。

(1) 全体的破損

打撃力などにより剪断されたりするなど、その石器の機能維持に支障をきたすほどの破損をうけること。

これらの使用痕がいかなる力学的作用の下に形成されたかは未解決の問題であり、このような概念区分自体これから検討されるべきものである。これらの使用痕概念は、渡喜仁浜原貝塚出土の石器の機能をできるだけ帰納的にとらえるため分析した結果にすぎない。

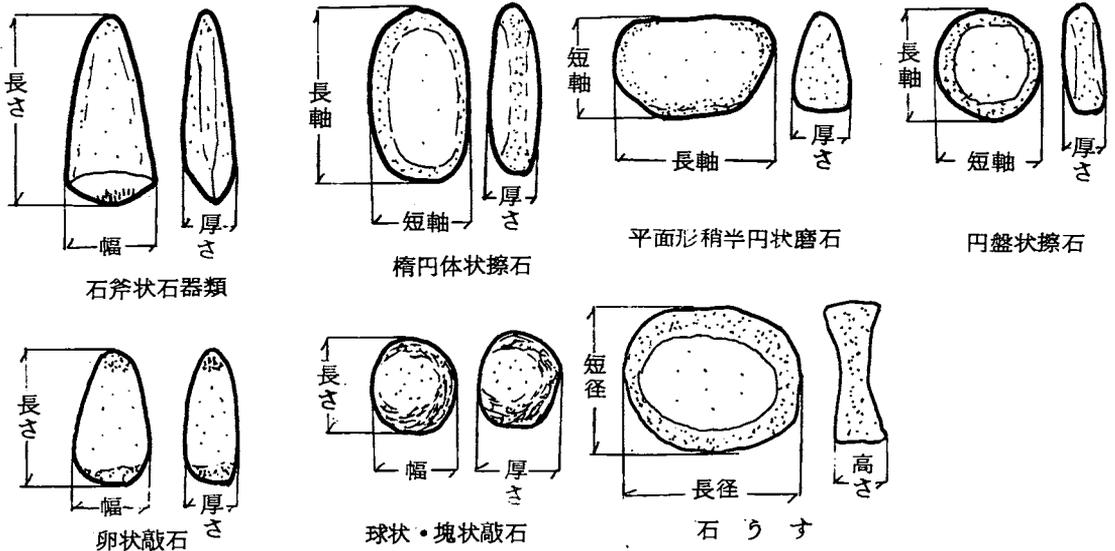
挿図の表示法について

挿図(第23図～第32図)は次のような注意をはらい作図した。輪郭線=太い実線、破損面=中太実線、小隆起=細い実線、明確な稜線=一点鎖線、不明確な稜線=二点鎖線、敲打痕=点描の集中、擦痕・環状擦痕=細い実線又は短線、研磨痕=無表示(空白部)、自然面=隙間の多い点描、ゆるやかな起伏・溝=点線。なお、輪郭線内の空白が作図の全面におよぶものは断面図である。但し、図104・105の断面図中には空間部を斜線で示してある。

石器の計測部位について

石器観察にあたって、石器各部の計測をおこなった。計測部位は次に示すとおりである。

—石器の計測部位—



第 37 表 渡喜仁浜原貝塚出土石器一覧表

地 点		B - a3					B - a4		B - b2		B - b3		B - b4		
分 類	層 位	I	II 層		III層	IV	小	I	II 層		I	II層		I	IIa
		層	a. b. c. d. #		上下	層	計	層	a. b. c.		層	a. b.		層	層
			⊕ ⊖		部部										
石斧状石器類			1	1	2	2	6		2	1	1		1		
擦石類	1		4	1 6 2	1	7	22	4					1		
敵石類			1	1 2 1		1	6								
石うす						3	3								
その他					注.1 (2)	注.2 3	5		注.3 1		注.4 1				注.5 1
分類不可	5		9	2 10 4	3 4	16	53	4		1		1 1	1	3	
計	6		15	2 4 18 6	3 7 (2)	32	95	10	1	1	1 2		3 1	1	4

B-c2	B - c3		B - c4		B-d2		B - d3		B - e3		B-z3		C C		全	その他の 石器補注	
I	I	II層		I	IIa	I	II層	I	IIa	III	IV	採	区	計			
層	層	a. b		層	層	層	a. b.	層	層	層	層	採	採	計			
					1		1					1	1	2	7	24	注.1 石 鍬 : 1 スクレ イパー : 1
		1							1				1	4	20	51	.2 砥石? : 1 未製品 : 1
		注.6 1			1			注.7 1						3	7	15	.3 石製品 : 1 4 未製品 : 1 .5 砥石? : 1
	1	6	1										2	4	13	92	.6 皮なめし 用石器? : 1 .7 ナイフ 状石器 : 1
	1	7	2		1	2		1	1		1	4	13	53	206	.8 砥石? : 2 石 錘? : 2 特殊石器 : 1	

なお、石器の各覧表中、擦石の法量の見出しで長軸・短軸とあるのはそれぞれ長さ・幅に相当し、どちらも最大長・最大幅を測定した。石うすの表記においては、鉛直方向の最大値を高さとし、水平方向の最大長を長径、最短長を短径と表現した。また、各石器の一覧表中、法量の項で()付の数値は破損をうけている部位までの値を示している。

1. 石斧状石器類

石斧・石斧に類する石器・ピラ型石器などを一括して石斧状石器類とした。石斧に類する石器とは、刃部を欠失するため石斧として断定できず、石のみなどの可能性が考えられるものや、型態上石くわなどの機能面が考えられるものなどである。ピラ型石器は、石斧以外の機能として論議の多いところである〔国分，1972〕。

石斧状の石器類は、総数24点出土した。これは分類し得た石器中21.1%を占めている。完形品は4点で、残りは何らかの全体的破損をうけていた。

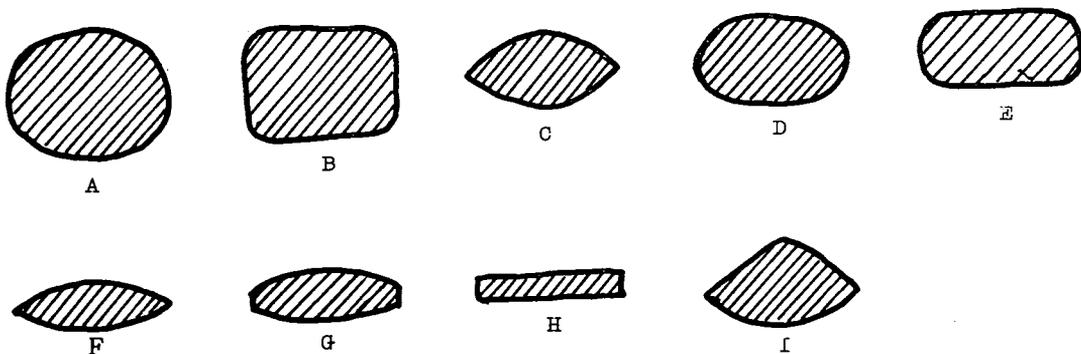
石質は5種類よりなり、それぞれの出土点数とその占める比率は第38表に示した。

石材の選別からみた特徴は、石材の種類が多岐にわたっていることと、出土した火成岩・変成岩のほとんどが石斧状石器類として用いられていることである。粗粒玄武岩・斑柎岩の2種は本石器類にのみ出現し、結晶片岩は他にナイフ状石器・砥石?として使用されている。本石器類の主体となる石材は41.6%を占める砂岩類だが、これらは他の石器類でも主体的である。火成岩・変成岩における各石器類の出現率をみるならば、これらがより石斧状石器類として選別される傾向が大きいといえる。とりわけ、結晶片岩の需用は高かったといえよう。

第38表 石斧状石器類石質組成表

成因	石質	点数	比率(%)
火成岩	粗粒玄武岩	3	12.5
"	斑柎岩	2	8.3
変成岩	結晶片岩	8	33.3
堆積岩	砂岩類	10	41.7
"	有津礫岩	1	4.2

—石斧状石器類の断面形態分類—



次に層位的出土状況を概観してみたい。B-a3ピットにおいては、Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層の各層位からそれぞれ2点ずつ出土した。貝塚時代後期相当のⅡ層と、貝塚時代前～中期相当のⅢ・Ⅳ層との出土比は1:2である。また、Ⅲ・Ⅳ層出土の石器はいずれも結晶片岩であった。

本石器類は長さ(大きさ)と型態の特徴から、おおむね次の5類型に分類できた〔注。2〕。

a:特殊大型石器, b:大型石斧状石器類(15cm以上), c:中型石斧状石器類(10cm~15cm未満), d:小型石斧状石器類(6cm~10cm未満), e:ピラ型石器類

また、断面型態からは、前図のように9種類に分類できた。

A:断面楕円形で、円筒斧状をなす。

B:角のとれた方形をなす。

C:厚みのあるレンズ状断面をなす。

D:Aよりやや偏平な楕円をなし、側面に不明瞭な稜線をつくる。

E:角のとれた厚みのあまりない長方形をなす。定角式に属する。

F:Cよりも薄手のレンズ状断面をなす。

G:平坦な側部をなすレンズ状断面で、これも定角式に属しよう。

H:ごく薄手の偏平な断面をなし、側部は平坦である。

I:角のとれた三角形をなす。

特殊な大型石器 №1は大型の粗製石器で、全面を敲打による整形後、研磨を全く施さず使用されている。剪断面付近には深い抉りがみられる。刃こぼれが著しい。石質は有津礫岩で脆弱であり、型態的にも特殊であることから、石斧としての用途には疑問である。本石器はクワ的な機能をもつものと想起せられたが、刃こぼれ以外の部分的な使用痕が判然としないことや、他に類例品の出土がないことなどから、本石器の機能を断定するには至らなかった。

大型石斧状石器類 №2・3は断面A類で、楕円筒斧の一部とおもわれる。№3は形がよく整っており、研磨も良好である。№4は断面B類で方柱状をなしている。研磨は悪くやや粗面をなす。これらはいずれも胴部中央付近で剪断されているため、大型としたのは推定長である。

中型石斧状石器類 №5は断面D類の両刃石斧である。形が非常に整っており美麗である。良好な研磨が全面に施されている。側部には不明瞭な稜線が数条認められる。同様の石斧が東ハンタ原遺跡から出土している〔琉球大学歴史研究会, 1967〕。№6は頭部が山形をなす偏平な石斧状で、断面E類である。側面は多面的な研磨がなされ、数条の稜線が認められる。№7は断面D類で、両面が研磨され、側面は敲打による整形痕が顕著である。№8は側部に稜線があり、断面が定角的な形状を示す。多くの擦痕が胴部に観察された。№9は断面E類で撻型をなす。研磨は片面と片側面のみおこなわれる。同様の石器が巢飼原遺跡から報告されている〔新田, 1972〕。№10は断面C類の粗製石斧で、全面に敲打による整形痕を残したままである。№11は断面B類で中央付近に抉りがある。№12は断面I類で側部に稜線が観察された。№13は側部に稜線が観察されることから断面G類に属するとおもわれる。

小型石斧状石器類 №13・14は断面F類の完形石斧で両刃である。№13は長軸方向に反り返りがみられ、刃部は片よって形成される。№15・16・17は断面G類で定角式である。№15は刃部と胴部の境界がはっきりしない。これらは、いずれも両刃石斧である。

第 80 表 石斧状石器類一覧表

石器 番号	地 点	層 位 名	深 度 (cm)	法 量 (cm・g)				石 質
				長さ	幅	厚さ	重量	
1	C-k14	—	—	(14.4)	9.1	3.0	432	有 津 礫 岩
2	C 地区	—	—	(9.9)	5.8	3.5	352	斑 粍 岩
3	C-k15	—	—	(9.7)	(6.0)	(3.9)	374	粗粒玄武岩
4	D 地区	—	—	(9.9)	5.9	4.1	400	粗粒砂岩
5	B-a3	黒褐色土層	IIa層 65	12.5	5.6	3.1	349	粗粒玄武岩
6	"	淡黒褐色土層	IV層 0~30	(6.2)	(5.9)	2.3	122	結 晶 片 岩
7	"	石灰岩礫層下部	III層 20~40	(10.7)	4.8	2.5	166	"
8	B-b2	黄褐色混土礫層	IIb層 80~100	(9.3)	5.8	3.1	242	"
9	B-a3	混土貝層上部	IIa層 130~160	(10.0)	(5.9)	2.6	222	変成した砂岩
10	"	石灰岩礫層下部	III層 20~40	(10.7)	4.8	2.5	166	結 晶 片 岩
11	B-z3	淡黒褐色土層	IV層	(10.5)	4.6	3.8	293	アルコース砂岩
12	B-a3	淡黒褐色土層	IV層 30~60	(4.9)	(5.0)	(3.0)	82	結 晶 片 岩
13	C 地区	—	—	9.8	4.6	2.1	140	粗粒玄武岩
14	"	—	—	8.6	4.4	1.6	101	変成した砂岩
15	"	—	—	(7.5)	4.2	1.5	95	"
16	B-d2	耕作土層	I層	(6.4)	4.3	1.8	90	"
17	C-k15	—	—	(4.6)	5.0	(1.5)	54	"
18	B-b3	黒褐色土層	IIa層	(6.7)	(4.8)	(3.0)		結 晶 片 岩
19	B-b2	耕作土層	I層	(8.9)	(6.0)	(1.6)	107	変成した砂岩
20	B-a4	黒褐色土層	IIa層	(3.0)	(3.5)	(2.4)	23	斑 粍 岩
21	B-d3	耕作土層	I層	(6.0)	(4.5)	1.6	63	結 晶 片 岩
22	C 地区	—	—	(5.8)	(3.9)	(1.2)	40	"
23	"	—	—	(8.7)	(4.1)	1.5	68	変成した砂岩
24	B-a4	黒褐色土層	IIa層	(9.9)	(3.6)	2.6	125	"

ピラ型石器 ピラ型石器は、緑色片岩製のものが2点出土した。どちらも断面H類に属するが、M21は片面が小丘をなしている。M21は片刃で刃部のみ研磨される。M22は刃部へ向かうにつれ厚さは薄くなり、幅も小さくなる。そのため刃部は非常に鋭利になっている。

これらの本石器類の大部分は何らかの全体的破損をうけていたため、剪断方向を観察する機会を得た。その結果、次の3方向におおむね剪断されていることがわかった。

- (1) 胴部中央付近から短軸方向へ剪断されているもの。この種が最も多い。
- (2) 刃部付近から垂直に又は斜向して剪断されるもの。

(3) 刃部から頭部へかけて厚さを切る方向へ剪断されるもの。

胴部中央付近から剪断される場合、その近くに抉りが観察されることが多かった。たとえばⅢ1・9・14・15には両側部に、Ⅲ2・3には片側部に抉りが観察された。

頭部にはⅢ2・13を除く他のものに打痕がみられ、中には強打により一部剝離痕を残すものもあった。これらは刃部を対象物にあて、敲石等で頭部へ打撃を加えて使用したことの証左でもあろうか〔注3〕。

また、石器型態と断面の形態には相関関係がみられた。大型石斧状石器類は断面A・B類、中型石斧状石器類は断面B・C・D・E類、小型石斧状石器類は断面F・G類を呈していた。ピラ型石器は断面H類であった。

2. 擦石類

使用面に擦痕や擦りへり痕、使用による研磨痕などが観察されるものを擦石類とした。擦石は敲石と兼用されているものが多く、その類別がはっきりとできたわけではないが、主たる使用状態により両者を区別した。また、縁部が打痕により形成されない擦石、打痕により形成される擦石として全体を二分し、型態との連関も調べてみた。

擦石類は総数51点出土した。これは分類の対象とした石器中44.7%を占めている。このうち、縁部に打痕を有する擦石20点、縁部に打痕を有しない擦石26点、不明又は未製品5点であった。しかしながら、分類の対象としなかった石器片92点のうち、擦痕や研磨痕を伴うものがかなりあり、擦石の出土点数はさらに増加するものとおもわれる。

石質は3種類よりなり、砂岩：45点(88.2%)、石英斑岩：3点(5.9%)、琉球石灰岩：3点(5.9%)であった。明らかに砂岩が擦石類の主体であり、とりわけ硬質の変成した砂岩が最も多かった。

B-a3ピットにおいては総数22点出土し、各層位における出土状況は第37表に詳しい。

擦石類は型態より楕円体状・方柱状・小円盤状・セッケン状・円盤状・三角柱状・円柱状・平面形稍半円状・その他に分類できた。

A. 縁部が打痕により形成されない擦石

楕円体状擦石 Ⅲ25~34までが属する。Ⅲ25は典型的なタイプで、三軸方向とも紡錘状の楕円形をなす。側面に若干の自然面を残すが上下面とも光沢を放つ程研磨痕が発達している。一方の頂部方向からの打撃で大きな剝離痕をのこす。Ⅲ26は中央に浅い盲孔がうがたれ小丘をなす。盲孔は直径1.4cm・深さ0.2cmである。Ⅲ27は側部が打痕で形成される部分と擦りへり痕で形成される部分に分離され、はっきりとした使いわけがみられた。Ⅲ28は厚みのある石器で、厚みを切る方向に大きく剪断されている。Ⅲ29は両頂部から打撃をうけ一部剝離した後、片方の剝離面は研磨痕をのこしている。Ⅲ30は片面が平坦面をなし、擦りへり痕が発達している。

楕円体状擦石は三軸方向とも長楕円形または角のとれた方形をなし、側部は明確な稜線で区画されずなだらかに形成される。上下面はよく研磨されているのが多く、擦痕や擦りへり痕などが観察され、盲孔を伴うことがある。両頂部や側部には打痕や剝離痕が形成される場合がある。大きさはほぼ一定しており、手に握りやすい大きさである。これらのことから本石器類は擦石としての機能を果すにとどまら

第40表 擦石類一覽表

石器 番号	地点	層位名	深 度 (cm)	法 量 (cm・g)				石 質
				長軸	短軸	厚さ	重量	
25	B-a3	黒褐色土層	II a層 0~80	14.9	9.2	5.4	1,045	変成した砂岩
26	C地区	—	—	(14.5)	10.3	4.6	820	"
27	B-a3	黒褐色土層	II a層 60~80	(14.5)	9.3	5.0	1,102	砂 岩
28	C-k15	—	—	(13.5)	9.3	(4.7)	792	"
29	B-a3	混土貝層上部	II d層 130~160	11.9	9.0	(5.2)	746	"
30	"	"	"	(8.0)	(8.6)	5.0	420	"
31	"	淡黒褐色土層	IV層 0~30	(6.2)	7.7	(3.6)	256	変成した砂岩
32	C地区	—	—	(7.4)	(10.4)	(5.5)	410	"
33	B-a3	混土貝層下部	II d層 160~180	(7.6)	(9.6)	(2.4)	202	砂 岩
34	"	混土貝層上部	II d層 130~160	(6.7)	(9.9)	(2.8)	248	"
35	C地区	—	—	(9.4)	7.6	4.1	452	変成した砂岩
36	B-a4	黒褐色土層	II a層	(6.7)	(5.9)	5.1	280	"
37	C地区	—	—	(9.0)	7.9	8.8	1,160	"
38	"	—	—	9.6	6.1	4.4	333	石灰質砂岩
39	"	—	—	(19.6)	(13.0)	6.4	1,780	琉球石灰岩
40	B-a3	淡黒褐色土層	IV層 60~90	(10.3)	(9.2)	(3.5)	464	砂 岩
41	"	"	IV層 120~150	(7.7)	(8.8)	(2.9)	210	石英斑岩
42	C地区	—	—	(9.7)	(6.5)	(2.0)	155	砂 岩
43	"	—	—	(10.1)	(8.5)	(3.8)	260	石英斑岩
44	"	—	—	(8.9)	(8.2)	(1.3)	155	砂 岩
45	B-b3	黒褐色土層	II a層 0~20	(4.4)	(9.5)	3.6	170	"
46	B-a3	淡黒褐色土層	IV層 90~120	(6.6)	(8.1)	(2.9)	162	"
47	"	黄褐色混土礫層	II b層 80~100	(6.6)	(6.2)	(7.0)	418	変成した砂岩
48	"	混土貝層下部	II d層 160~180	(8.3)	(7.8)	(4.5)	372	"
49	"	耕作土層	I層	(5.5)	(7.4)	(2.8)	115	砂 岩
50	"	黒褐色土層	II a層 65				200	細粒砂岩
51	C-k15	—	—				178	変成した砂岩
52	B-a3	黒褐色土層	II a層 0~80	(7.3)	8.8	2.0	168	"
53	C地区	—	—	(6.8)	(2.7)	(4.1)	130	"
54	"	—	—	7.9	7.6	3.9	382	"
55	B-a4	黒褐色土層	II a層	(10.4)	7.4	(3.0)	325	砂 岩
56	B-a3	淡黒褐色土層	IV層 0~30	(11.5)	(6.3)	5.2	450	変成した砂岩

石器 番号	地 点	層 位 名	深 度 (cm)	法 量 (cm・g)				石 質
				長軸	短軸	厚さ	重量	
57	C 地区	—	—	(13.4)	(11.3)	3.0	633	変成した砂岩
58	B-a3	淡黒褐色土層	IV層 30~60	10.6	8.2	4.4	500	砂 岩
59	"	石灰岩礫層下部	III層 20~40	(9.5)	(8.9)	(3.2)	256	アルコ-ス砂岩
60	"	淡黒褐色土層	IV層 90~120				130	砂 岩
61	C-k15	—	—	(13.3)	(9.2)	(4.8)	250	"
62	"	—	—				38	変成した砂岩
63	B-a3	混土貝層上部	II d層 130~160	(8.5)	(5.4)	(7.7)	545	"
64	C 地区	—	—	7.8	7.0	6.3	609	砂 岩
65	B-a3	混土貝層上部	II d層 130~160	8.9	5.5	5.8	380	琉球石灰岩
66	"	—	—	9.8	9.1	7.4	1,090	変成した砂岩
67	B-a4	黒褐色土層	II a層					琉球石灰岩
68	C 地区	—	—	18.9	9.6	6.1	1,778	礫質砂岩
69	B-a3	混土貝層上部	II d層 130~160	(11.9)	10.1	(6.0)	1,052	石英斑岩
70	C 地区	—	—	(15.7)	8.8	(3.8)	642	変成した砂岩
71	"	—	—	(14.8)	10.5	(2.8)	608	"
72	"	—	—	18.8	13.3	8.2	2,740	"
73	"	—	—	(2.4)	(11.2)	(5.3)	182	ワッケ砂岩
74	B-a4	黒褐色土層	II a層	(11.9)	(7.9)	(3.1)	255	変成した砂岩
75	C 地区	—	—	(6.5)	11.8	6.2	808	"

ず、敲石その他の多角的な利用法があったと考えられよう。

方柱状擦石 №35・36は直方体状の擦石である。№35の両側部には浅い抉りがある。№37は角のとれた方柱状をなし、片面はほとんど円柱状の弧をえがいている。№38は平面形をなすが長軸方向の断面がクツ型をなしている。

その他の擦石 №39は大型の石器片で、片面のみ研磨され側部や裏面は整形痕をのこし粗面を呈している。研磨面は平坦である。№40は大型の円盤状の擦石で縁部に打痕は形成されない。研磨面はゆるやかな曲面をなす。この2点は大型の研磨痕を伴う石器である。もし、擦石が手に持って使用せられるならばこの2点は手にあまる程大きいので擦石とは考え難く、他の機能を想定する必要がある。№41~52の石器はいずれも小破片のため全型を推察し難いもので、縁部が打痕により形成されないものである。

B. 縁部が打痕により形成される擦石

小円盤状擦石 №53・54は縁部が打痕により形成された擦石である。№54はそのティピカルなタ

イブで、上下面と縁部が明確な稜線でしきられ磨痕部と打痕部の機能的分化がみられる。上下面はやや膨らみ小丘をなしている。

その他の擦石 №56は型態的には楕円体状擦石に類するとおもわれる。縁部が明確な稜線でしきられ打痕により形成されている。№57は大型の円盤状の石器で、縁部には明確な稜線はないが、打痕で形成される。型態は№40に類似する。№58は縁部の一部に打痕が形成され、平面形がやや円形をなす擦石である。打痕に接続する両平面部には擦りへり痕が観察される。断面型態は複雑である。№59～63は形状不明な縁部に打痕を伴う擦石類である。№61は小円盤状擦石に類似するものであろうか。№63は打痕部と磨痕部との境界ははっきりしているが稜はなさない。研磨の度合いはかなりよく、光沢を放っている。

№64～66は型態的には敲石の範疇に属するものであるが、最終的な機能が擦石として用いられているため一応擦石類として扱った。№64は丸みのある三角柱状で、底部の三隅には打痕が発達している。頭部を除く四面は擦石として使用されている。頭部は丸みを帯び不明瞭な稜線で他面としきられる。一時期敲石として用いられ打痕を形成した後、それを打ち消すように磨痕が重なって形成されている。№65は琉球石灰岩製の円柱状擦石である。胴部中央に大きな盲孔がうがたれている。盲孔の大きさは、直径30mm・深さ5mmである。底部は擦りへり痕が発達し、平坦な面をなす。頭部には敲打痕が観察される。№66は自然石利用の石器で型態的には自然石利用の敲石類に含まれるべきものである。使用痕は底面にのみ存し、一度敲打痕を形成したのち研磨痕が折り重なって形成される。他はすべて自然面で一切の整形痕をのこさない。

№67は円すい状の石器で、頂部に打痕と剝離痕が発達し、底部に若干の磨面がみられる。琉球石灰岩製で№65に類似する。

平面形稍半円状磨石 平面形が半円状をなし、短軸方向の断面が卵形をなす大型石器で、全形が「むきみかん状」を呈する。本石器類はすでに高宮廣衛氏によって注目され、擦石としての用途の他石杵や凹石としての機能が推定されている〔高宮、1960〕。なお、名称は高宮氏に倣った。本石器類は総数8点出土した。

石質は2種類で、砂岩類・石英斑岩よりなっている。とりわけ変成した砂岩は5点出土し、本石器類の中心をしめている。層位中より出土したのは2例で、いずれもⅡ層一貝塚時代後期相当の出土であった。

№68は典型的な石器で完形品である。底部中央の両脇に袂り状の凹みがある。また頂部中央の両脇にも袂りが形成される。使用による研磨面はみあたらず、擦りへり痕もない。全面が敲打により整形された後、かすかに研磨を施し整形を完成させている。使用痕は縁部から底部へかけて打痕のみが確認された。№69は縁部から底部にかけて、打痕が発達している。擦りへり痕は観察されない。№70は底部がストレートな面で形成され、擦りへり痕が発達している。縁部には打痕が多くみられる。№71は縁部方向からの打撃で剪断され大きく破損している。№72はひとまわり大きな石器で底部に擦りへり痕が斜向して形成される。これも縁部方向からの打撃で破損を受けている。№73は縁部に打痕の観察される剥片である。№74は底部に打痕が観察される。№75は底部が平坦な面で形成され擦りへり痕が観察される。頂部は丸みを帯びている。

本石器類は縁部・底部が打痕により形成されるものと、縁部が打痕、底部が擦りへり痕により形成さ

れるものと二分された。また縁部より打撃を受け、剝離痕をのこすのが多くみられた。

3. 敲石類

使用面が敲打痕のみにより形成されている石器は総数17点出土した。しかしながら擦石類として分類したもののうち、縁部に打痕を有する擦石のように敲石として機能するものを含めるとその総数はさらに増加する。敲石類は分類の対象とした石器のうち14.9%を占めている。

石質はすべて砂岩類であった。とりわけ変成した砂岩は12点(70.6%)を占め、敲石類の主体をなしている。

B-a3ピットにおける層位的出土状況は、II層……5点、III層……0点、IV層……1点で、II層に集中していた。またII層のものは5点中4点までが自然石利用の敲石であった。

敲石類は型態の特徴から、球状敲石・卵状敲石・塊状敲石・自然石利用敲石・方柱状敲石の5型態に分類できた。

球状敲石 No.76は完形品で全面に敲打痕が観察された。3箇所にて直径5mm程の円状の擦りへり痕がみられ、そのうちの1箇所を中心に同心円状の擦痕が形成されている。これは擦りへり痕を中心に、

第41表 敲石類一覧表

石器 番号	地点	層位名	深 度 (cm)	法 量 (cm・g)				石 質
				長さ	幅	厚さ	重量	
76	B-e3	黒褐色土層	IIa層 30	6.9	5.8	5.6	402	砂 岩
77	B-a3	黄褐色混土礫層	IIb層 80~100	6.7	(5.4)	3.4	150	変成した砂岩
78	C地区	—	—	10.6	(5.5)	(4.2)	374	"
79	"	—	—	(5.7)	(3.4)	(2.8)	75	"
80	"	—	—	10.2	5.1	4.8	260	"
81	C-k15	—	—	(8.1)	7.6	6.8	600	"
82	"	—	—	7.1	(5.8)	6.5	410	"
83	"	—	—	8.8	(6.4)	(5.2)	510	"
84	B-a3	淡黒褐色土層	IV層 90~120	(5.3)	(6.9)	(4.0)	124	"
85	"	混貝土層	IIc層 100~130	10.3	7.5	4.5	480	"
86	B地区	—	—	11.7	(6.2)	4.7	500	"
87	B-a3	混貝土層	IIc層 100~130	(8.8)	7.7	5.2	560	"
88	B-c3	黒褐色土層	IIa層 20~30	13.7	8.0	5.4	840	"
89	B-a3	混土貝層上部	IId層 130~160	(8.3)	7.0	5.1	310	粗粒砂岩
90	C-k14	—	—	(7.7)	6.6	5.3	385	砂 岩
91	B-a3	黒褐色土層	IIa層 0~80	8.2	5.7	5.0	303	"
92	D地区	—	—	9.3	5.3	2.8	292	細粒砂岩

ひねるように押圧力を加えたために生じた回転擦痕とおもわれる。№77はおよそ半分が欠失しているがほぼ球状をなすとおもわれる。面が不明瞭な多くの稜線でしきられ、多面体的な型態をなす。中央に径18mm・深さ2mmの盲孔がうがたれている。盲孔の周辺には打痕は発達していない。

卵状敲石 №78は全形が卵状をなす石器で、両頂部に打痕が発達する。一部に両頂部を結ぶように打痕をなす。敲石としてはもっとも手に握りやすい型態である。№79は小片であるが№78に類するものとおもわれる。頂部に打痕が発達し、側部は良好な研磨が施されている。№80は型態が角のとれた三角すい状をなすが、使用面の位置や使用方法等を考慮すれば卵状敲石の部類に属しよう。使用面には大きな剝離痕が生じている。

これらの石器はいずれもアルコース砂岩製で、長軸方向の加撃で剪断、又は剝離を生じている。

塊状敲石 №81～84が属する。全形が不定形な多面で構成され塊状をなす。敲打痕の発達は著しく、主に両端2箇所形成される。本類は擦石と兼用されるのが目立った。№81は一面が平坦な面に形成され、擦石としての用途も大きかったとおもわれる。№82・83は両打痕部を結ぶように剪断される。№84も打痕部から剪断される。

自然石利用敲石 №85～91は手ごろな自然石に何ら整形を加えずそのまま敲石として利用した石器で、大きさもほぼ一定している。敲打痕は両端部に形成される。器型は三角柱ないしは円柱に近いものが多かった。

方柱状敲石 №92は細粒砂岩製の完形石器で両端部に打痕が形成される。表裏両面に盲孔がうがたれている。盲孔の大きさは、①径17～20mm・深さ3mm、②径12～14mm、深さ2mmである。

4. 石 う す 類

石うす(石皿)は総数7点出土した。これは形態分類の対象とした石器中6.1%を占める。分類対象外の石器片の中に、石うす片ではないかとおもわれるものが3点あるが、確認には至らなかった。

石うすは4種類の石質から構成され、その出土点数は、石英斑岩……4点、琉球石灰岩……1点、アルコース砂岩……1点、有津礫岩……1点であった。これらはいずれも堆積岩であり、アルコース砂岩を除いてはすべて軟質で脆弱である。№94・95・98は層中からの出土であり、B-a3ピットIV層120～150cmの深度で、3個ともまとまって出土した。

石うすは型態的には2つに分類できた。ひとつは№98のように短軸方向の断面が台形状をなし、器高は一方が高く、一方が低くなっている。そのため作用面(皿状の円形凹地)が傾斜して形成される。このような石うすは仲尾次貝塚〔多和田他, 1975〕や浜崎貝塚〔名嘉真他, 1976〕等からの報告がある。もうひとつは、器高が低く一定で、全形が円形または方形をなし、断面が凹レンズ状をなすものである。作用面は水平に形成される。№96や№99がこれに相当する。

石うすには表のみでなく裏にも作用面が形成されたり、片面に2つないしは3つの作用面が形成されたりするのが観察された。それらは一覧表に掲示してある。

№96は唯一の硬質の石うすで表裏に作用面が形成される。全形は円形をなすものとおもわれ断面は凹レンズ状を呈している。№99は有津礫岩製で方形をなしていたとおもわれる。中央部より剪断されている。№97は完形品で、左右に作用面が形成され、そのひとつはさらに上下に凹面が重なっている。

第42表 石うす類一覧表

石器 番号	地点	層位名	深 度 (cm)	法 量 (cm・g)				石 質	面の数 表/裏
				高さ	長径	短径	重量		
93	B-d2	耕作土層	I層	(11.4)	(19.1)	(12.5)	2,838	琉球石灰岩	2/0
94	B-a3	淡黒褐色土層	IV層 120~150	8.5	(22.2)	(16.2)	3,050	石英斑岩	1/1
95	"	"	"	12.7	(22.2)	(16.5)	3,805	"	1/0
96	C地区	—	—	6.2	(21.5)	(14.5)	2,685	アルコース 砂岩	1/1
97	"	—	—	20.4	39.4	17.6	15,000	石英斑岩	3/0
98	B-a3	淡黒褐色土層	IV層 120~150	(11.4)	(11.9)	(7.4)	830	"	1/0
99	C地区	—	—	5.3	32.8	(17.1)	3,350	有津礫岩	2/0

5. その他の石器・石製品

砥石? №100~103は砥石と推定される石器である。これまでに、沖縄貝塚時代における砥石の報告例はなく、グスク時代においてその出土が知られる程度であった〔安里, 1969〕。そのため、これらは貴重な資料のひとつとなる。

出土した石器は、その使用痕から2種類に大別できた。一種は細粒砂岩製のもので、作用面に凹状の溝を形成する。石斧の胴部、特に縁部を研磨するのに都合がいいようにおもわれた。№100と101がこれに属する。もう一種の砥石の型態は石墨片岩製のもので、平坦な面に幾条もの線状の擦痕をのこす。それらはすべて同一方向に形成される。№102・103がこれに属する。

№100は擦石? が一部に剪断を受けたあと二次利用されたものと思われる。縁部や剪断面に五箇所にかぶ凹状の溝が観察される。片面中央に大きな浅い盲孔がうがたれ、他面には長軸方向に太い凹状の溝がはしる。盲孔の大きさは、径28mm・深さ3mmである。№101は断面が方形をなす偏平な石器で、平坦な両面は敲打により雑に整形されている。側部を使用面としており、深い凹状の溝が一方は直線的に、一方はゆるやかなカーブをえがいて形成される。№102は偏平な薄手の石器で、両面の長軸方向に浅い線状擦痕が幾条もはしる。擦痕はほとんど同一方向にはしり、一様である。№103は千枚岩質の石器で、片面の中央付近に短い線状擦痕が多くはしる。擦痕はすべて同一方向で、ナイフで傷つけたような細さである。

石錘? №104・105は石錘とおもわれたが、いずれも人為的な加工痕・使用痕が確認できず、石器として断定できなかった。これらは従来沖縄貝塚時代における比較資料がないため、これを石錘とするのは困難である。№104は環状の自然石で、中央の孔も自然なものである。孔の上部は弧上に欠失しているが、人為的かどうか不明である。形状は貝錘に似る。№105の中央部には小孔があるが、これも人為的かどうか判然としない。孔から縁にかけて浅い溝が存する。

皮なめし用石器? №106は断面が楕円状をなす片面研磨の石器である。一方の端部には打痕が観察され、他方の端部には擦りへり痕がみられる。研磨面はいくつかの軸方向の稜線でしきられる。側部の一方は直線的で、他方はゆるやかな弧をなす。両端部は厚みがある。これらのことから本石器は皮な

めし用石器としてとらえたいが、これまでに沖縄貝塚時代における報告例および比較資料がないので推定の域を出なかった。

パイプ状石製品 №107はドーナツを積みあげたような厚みのあるパイプ状の石製品である。一端に突出部があり、その一部にノミ状工具によるおもわれる歯形がみられる。突出部を切断しようとしたのであろう。中央の孔は丁寧に仕上げられており、孔径も33mmでほぼ一定に整形されている。器壁の厚みも一定である。用途は不明である。

ナイフ状石器 №108は厚さがわずか2mmの台形状の石器で、二辺が表裏より研磨され刃部を形成している。小型ナイフ的な役割をなしたと考えられよう。黒色片岩製である。

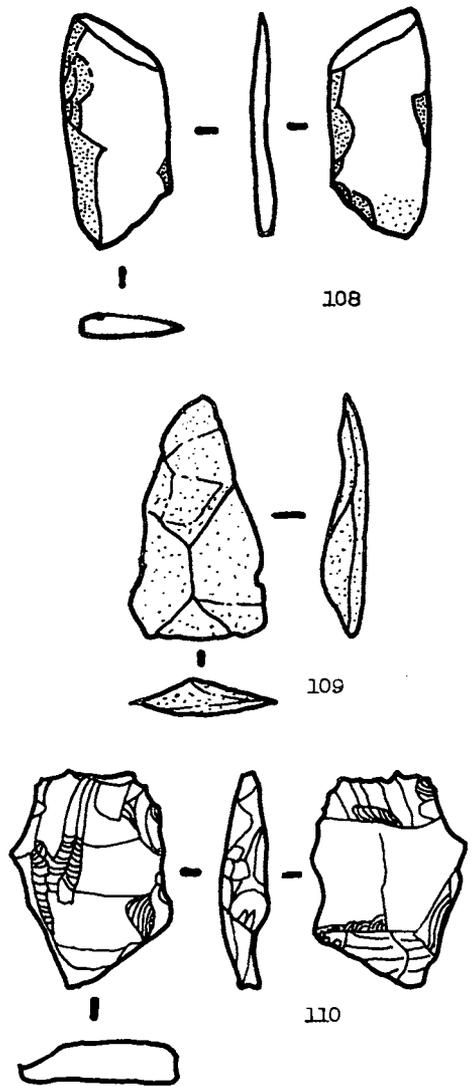
石鏃 №109は変成した砂岩製の平基式石鏃である。沖縄の遺跡からの石鏃の出土は少ないといわれているが、これまでの出土例からみれば、平基式と凹基式に限られるようだ。時期的には貝塚時代前期から中期にかけて出土するようである。石質はチャート製が主体を占め、変成した砂岩製の報告例はないようである。

スクレイパー №110はチャート製のスクレイパーである。敲打による打ち欠きで縁部が形成されている。貝殻状剝離痕はさほど発達していない。また、刃部は厚く鋭利ではない。未製品であろうか。

くぼみ石 №111は中央に浅い盲孔が穿たれ、くぼみ石としての用をなすものと思われる。整形は完了しては、研磨も充分ではない。くぼみは整形段階のものか、あるいは未完成のまま使用せられたものだろうか。

未製品 №112は輪郭線は整形が不安定だが、全形が冊子状をなす偏平な石器である。器面は雑で研磨はされない。№113は円すい状に整形された石器である。使用痕はみあたらないが、器体中央部に抉り状の浅い凹部がある。

特殊石器 №114は台形状の石器である。両端部に打痕が発達し、一端部は一部が平坦面をなし擦痕が発達している。打痕と擦痕の形成上の先後関係は判然としていない。本品は使用痕から判断すれば、敲石と擦石の用途をなしたとおもわれるが、前述した敲石や擦石に比較して重量があり、同様に用いるには困難なように思われた。



第32図-② その他の石器類実測図(1/1)

第43表 その他の石器類一覧表

石器 番号	地点	層位名	深 度 (cm)	法 量 (cm・g)				石 質
				長さ	幅	厚さ	重量	
100	B-b4	黒褐色土層	IIa層	9.6	6.8	3.1	234	細粒砂岩
101	B-a3	淡黒褐色土層	IV層 0~30	9.8	8.8	4.4	530	"
102	C地区	—	—	(8.6)	(5.4)	1.9	150	石墨片岩
103	"	—	—	(6.8)	(6.8)	1.5	100	"
104	"	—	—	7.9	7.8	2.2	125	琉球石灰岩
105	"	—	—	3.4	4.9	2.0	28	サンゴ石灰岩
106	B-c3	黄褐色混土礫層	IIb層	10.7	4.8	3.0	263	粗粒玄武岩
107	B-a4	混貝土層	IIc層	10.0	7.7	7.4	456	琉球石灰岩
108	B-d3	黄褐色混土礫層	IIb層	3.0	1.3	0.2	2	石墨片岩
109	B-a3	石灰岩礫層	III層	3.2	1.7	0.4	2	変成した砂岩
110	"	"	"	2.8	2.0	0.6	3	レッドチャート
111	"	淡黒褐色土層	IV層 90~120					変成した砂岩
112	"	"	IV層 0~30	(11.2)	13.9	(2.5)	765	琉球石灰岩
113	B-b2	黄褐色混土礫層	IIb層	8.4	7.5	3.3	244	"
114	C地区	—	—	20.3	12.3	5.7	2,042	変成した砂岩

6. 石 器 小 結

本遺跡より出土した石器・石製品は総数206点に達したが、石器機能がおおむね把握され、分類の対象となりえたものは114点であった。他の92点は研磨痕等を有する小片がほとんどであったが、その中には完形品でありながらも不定形なためその用途が判然としなかったり、表裏面が風化されて使用痕や整形痕が不鮮明になり、人工品か否かの判断に困難なものもあった。また、114点中において、本報告ですべてを扱えなかったのは残念である。

最後に、本遺跡出土の石器観察を通して、おおむね理解できたことや疑問点などをまとめて結びとしたい。

① 石斧状石器類

本遺跡出土の石斧状石器類は、使用痕の判然としないものが多く、その機能を把握することは困難であった。石斧状石器類の範疇には、クワ・ヘラ・ノミ・斧(axe)・手斧(adze)が考えられる。

本稿の分類中、特殊な大型石器としたものは、クワ的な機能を果たしたのではないと思われる石器である。ピラ型の石器は2点出土した。№16は線條痕が中軸線に対して斜位に形成されており、斧としての機能が考えられ、№18・20などは破片ながら、中軸方向に形成された線條痕より手斧を連想させる。№13や14は刃部が片寄って形成されており、機能を判断するうえで注目したい。

② 擦石類と敲石類

擦石類は使用面が擦痕・擦りへり痕・研磨痕により形成されるもの、敲石類は使用面が敲打痕によりなされるものとして両者の機能分類を行なった。使用痕よりすれば、擦石類は押圧力による粉碎・圧潰などの機能が、敲石類は打撃力による敲打・打突・粉碎などの機能が考えられる。

渡喜仁浜原貝塚では両者で68点の出土をみたが、擦石類においては敲打痕または剝離痕を伴わないものは稀で、ほとんどが両機能を兼用している。また、敲石類においては押圧力による使用痕を伴う場合とそうでない場合がある。このことは、擦石類が押圧力と打撃力の両機能を併用しうるのに対し、敲石類にはそれを併用しうるものとそうでないものも含み、単に打欠や敲打などにのみ用いられるものがある。これは、敲石の機能の範疇の広がりを示しており、擦石類は敲石類の範疇に含まれることを示す。たとえば、楕円体状擦石のほとんどが敲打痕を伴うのに対し、自然石利用敲石のほとんどが押圧力による使用痕を伴わないことなどである。

さらに、擦石類のほとんどが整形されるのに対し、敲石類は整形されないもの、整形されるにしても雑に仕上げられているものが多い。これについても両者の特色のひとつである。

また、打痕の位置や研磨痕、擦痕の走向、あるいは剝離の方向などから各石器類の持ち方や用い方がある程度推測されたが、発表に至るまでの資料は得られなかった。次の機会をまって報告したい。

③ 石器機能と石質

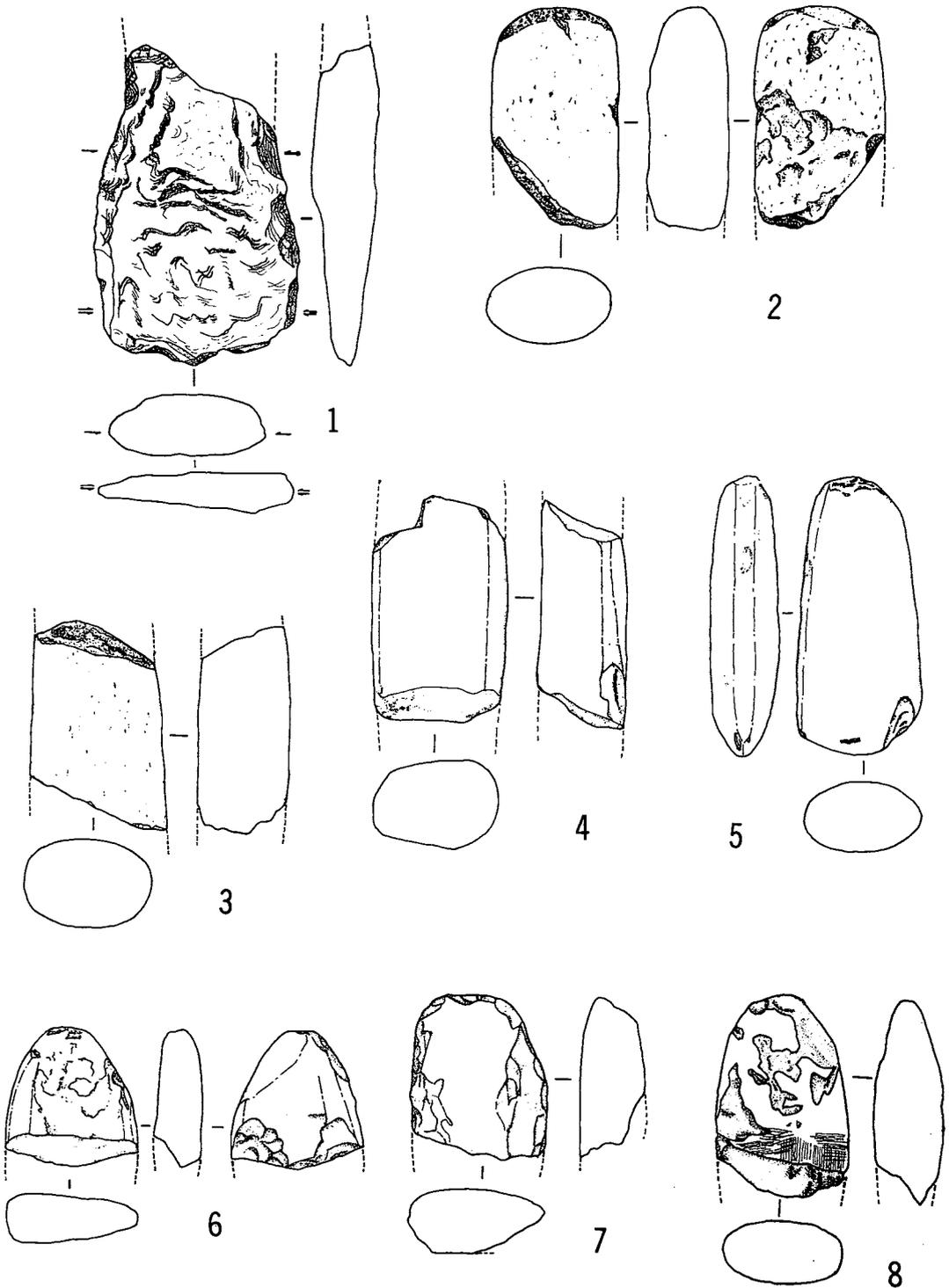
- イ. 石斧状石器類 変成した砂岩が主体である。しかし、本遺跡出土の火成岩・変成岩製の石器は本石器類に集中しており、石斧状石器類としての火成岩・変成岩の需用は高かったといえよう。
- ロ. 擦石類 ほとんど砂岩で占められる。とりわけ変成した砂岩が多い。
- ハ. 敲石類 すべて砂岩である。この類も変成した砂岩が多い。
- ニ. 石うす 石英斑岩・琉球石灰岩・変成した砂岩・有津礫岩から成る。
- ホ. 砥石? 石墨片岩及び細粒砂岩から成る。

このように、石器機能と石質の間には強い相関関係がみられ、石質が選別されていたことを示す。この興味深い事実は、当時の石器生産の過程を知る上でさまざまな示唆を与える。ひとつには、貝塚集団に石質に対する認識—硬度・加工のしやすさなど—があったことが窺える。

注1 これらの使用痕概念は、麻生他編『日本の旧石器文化 1 総論編』(1975)所収の橋本正「石器の機能と技術」、同編『同 5 旧石器文化の研究法』(1976)所収の藤本強「技法と機能」、考古学ジャーナル28号(1969)所収の梅津昇「使用痕観察による石器用途の一考案」、同43(1970)・50(1970)・54(1971)号所収の木村剛朗「縄文時代石器における機能上の実験」、同74(1972)・75(1972)号所収の木村「実験よりみた敲石とその用途」等を参考にした。

注2 長さによる分類は、各石器の計測値(破損品は推定長)から3つの階級値が得られたので、それらを石器の三類型(b, c, dが相当する)として用いた。これらの数値は機能との連関をみるうえで、いまだ便宜の域を出ず、今後多くの検討を必要とすると考えらる。

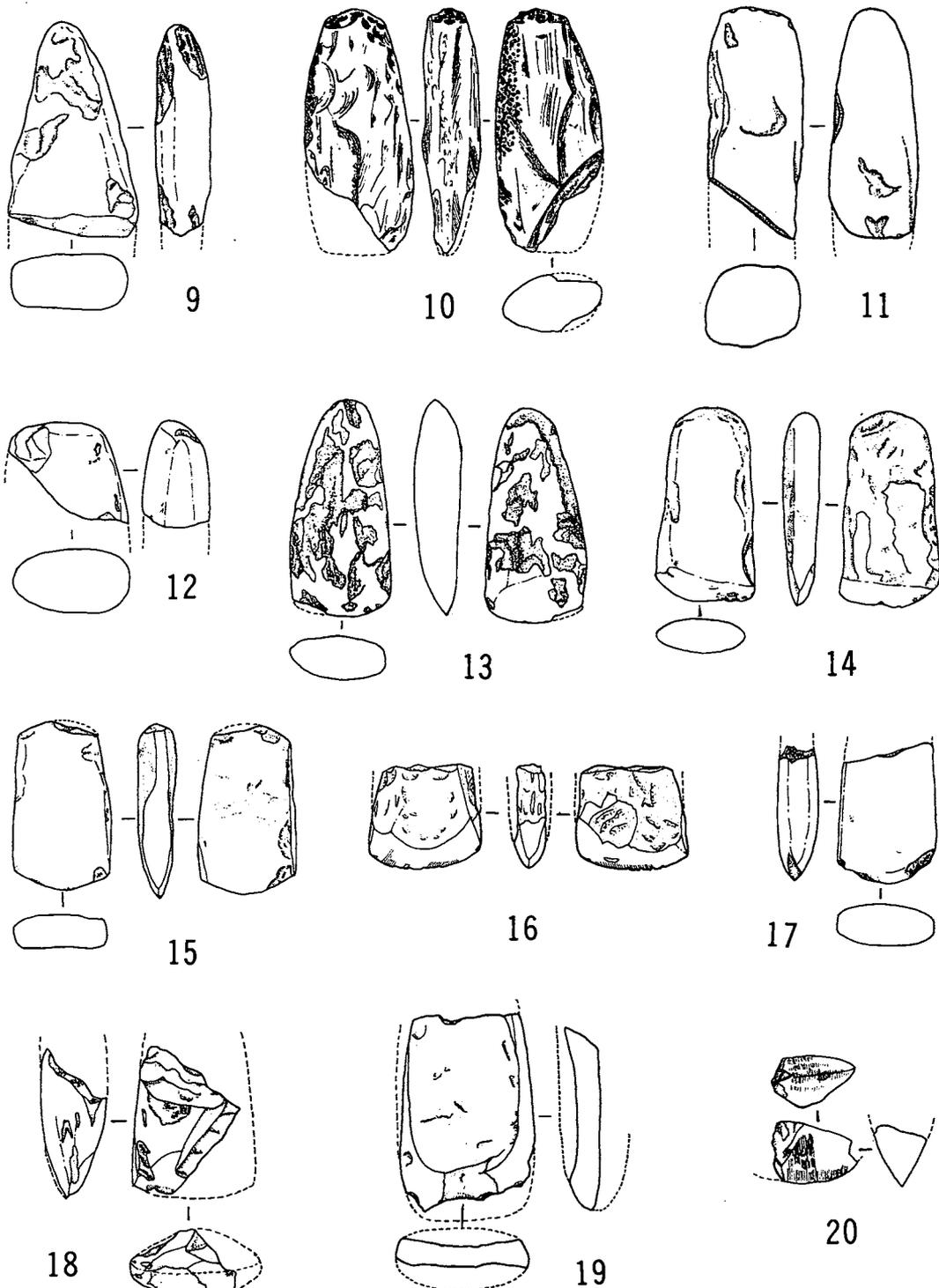
注3 笹森儀助著『南島探検』(1973年)を参照してもらいたい。



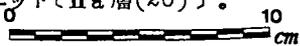
B-a3ピット〔Ⅱa層(5)、Ⅲ層(7)、Ⅳ層(6)〕：B-b2ピット〔Ⅱb層(8)〕：c地区〔1~3〕：D地区〔4〕

第28図 石斧状石器類実測図(1)

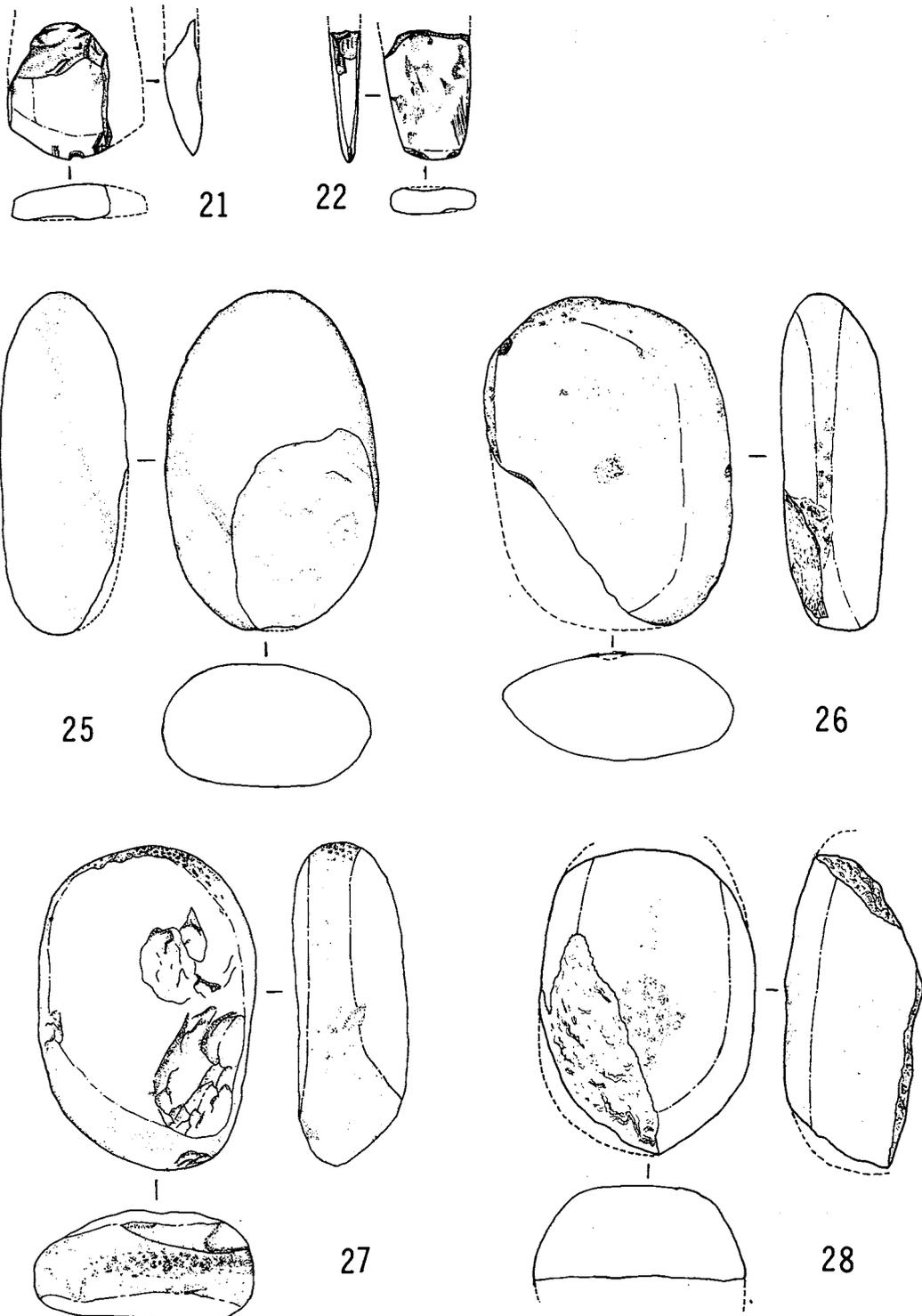




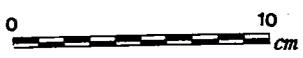
B-a3ピット(Ⅱd層(9)、Ⅲ層(10)、Ⅳ層30~60cm(12)) : B-a4ピット(Ⅱa層(20)) :
 B-b2ピット(Ⅰ層(19)) : B-b3ピット(Ⅱa層(18)) : B-d2ピット
 (Ⅰ層(16)) : B-z3ピット(Ⅳ層(11)) : C地区(13~15・17)



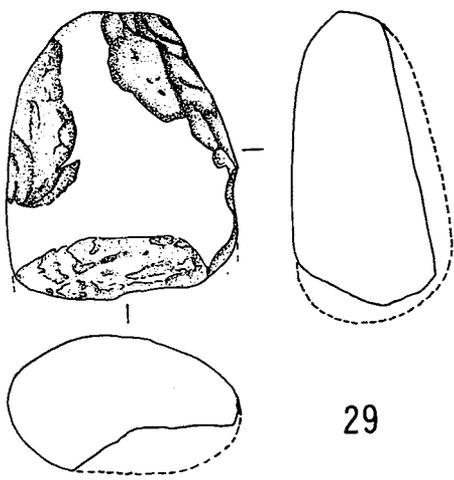
第24図 石斧状石器類実測図(2)



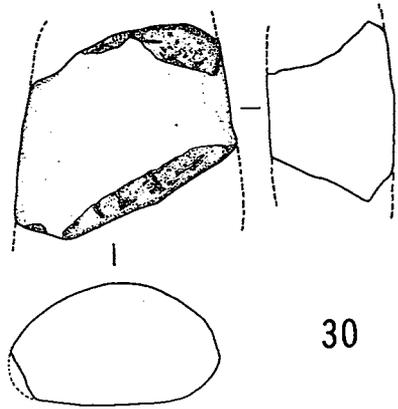
B-a3ピット〔Ⅱa層(25・27)〕：B-a3ピット〔Ⅰ層(21)〕：
 C地区〔22・26・28〕



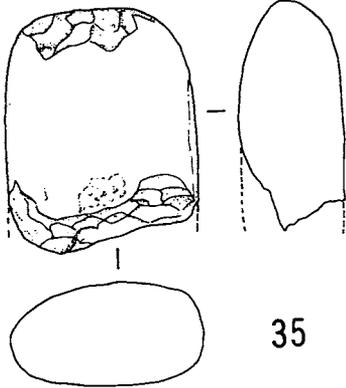
第25図 石斧状石器類 (3) 及び擦石類実測図 (1)



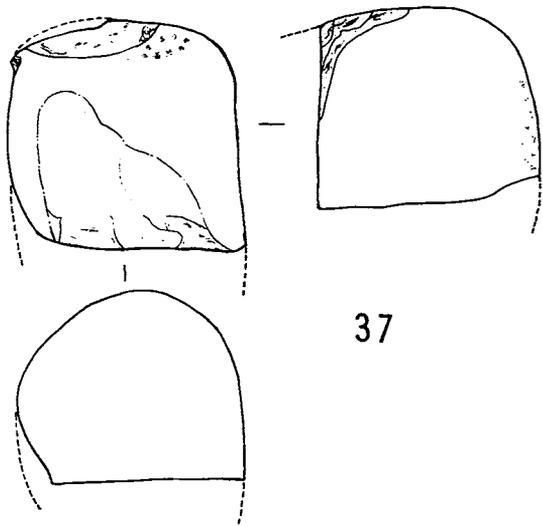
29



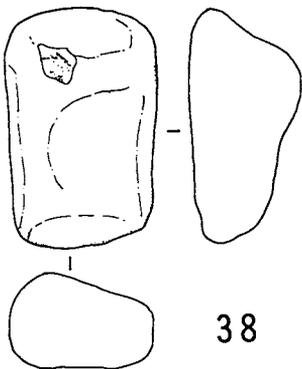
30



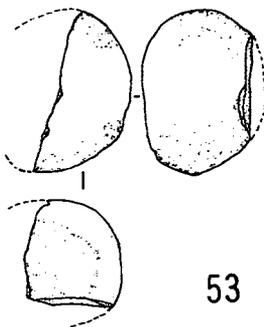
35



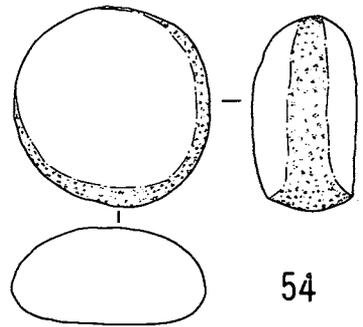
37



38



53

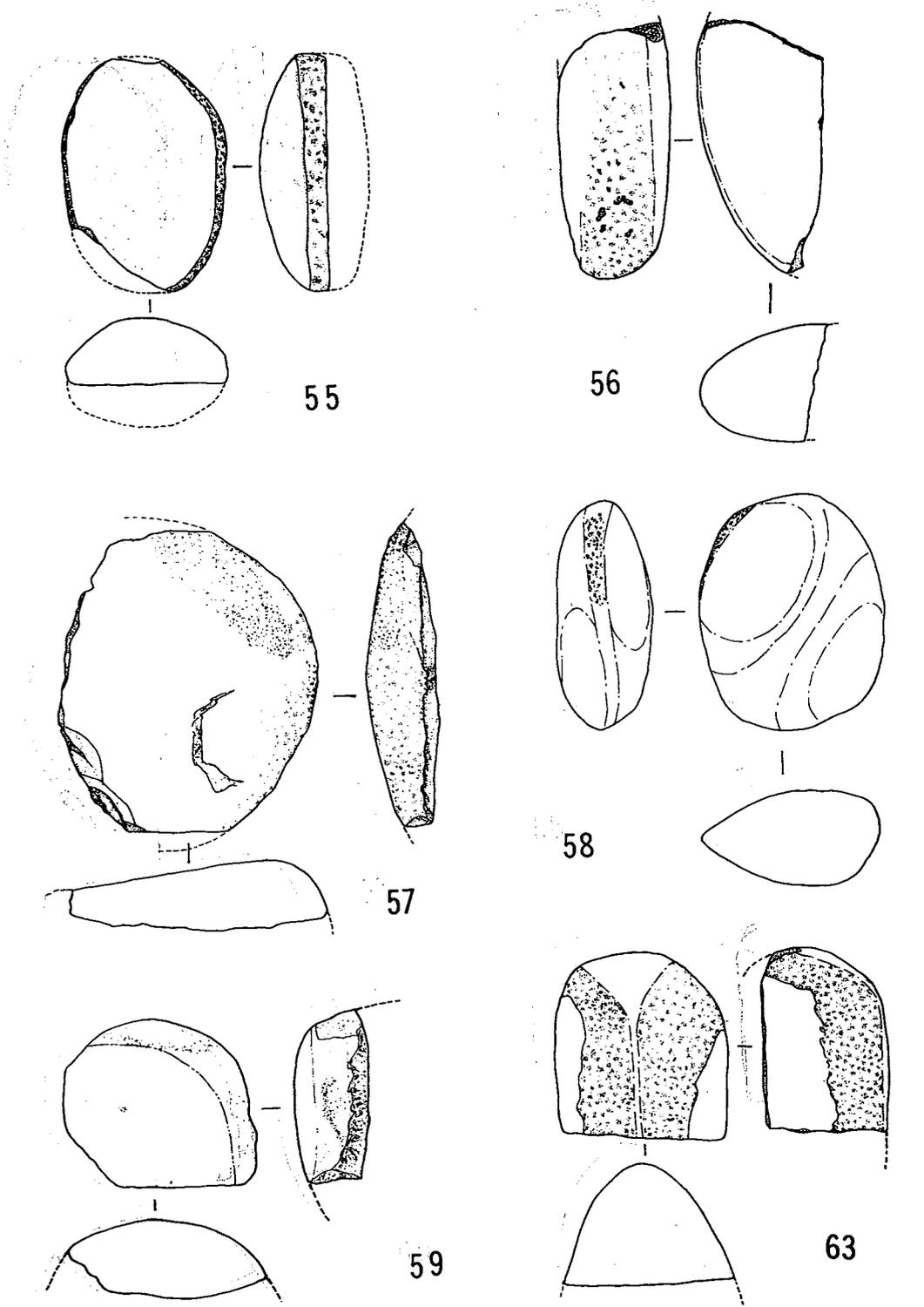


54



B-a3ピット(Ⅱd層(29・30))・c地区(35・37・38・53・54)

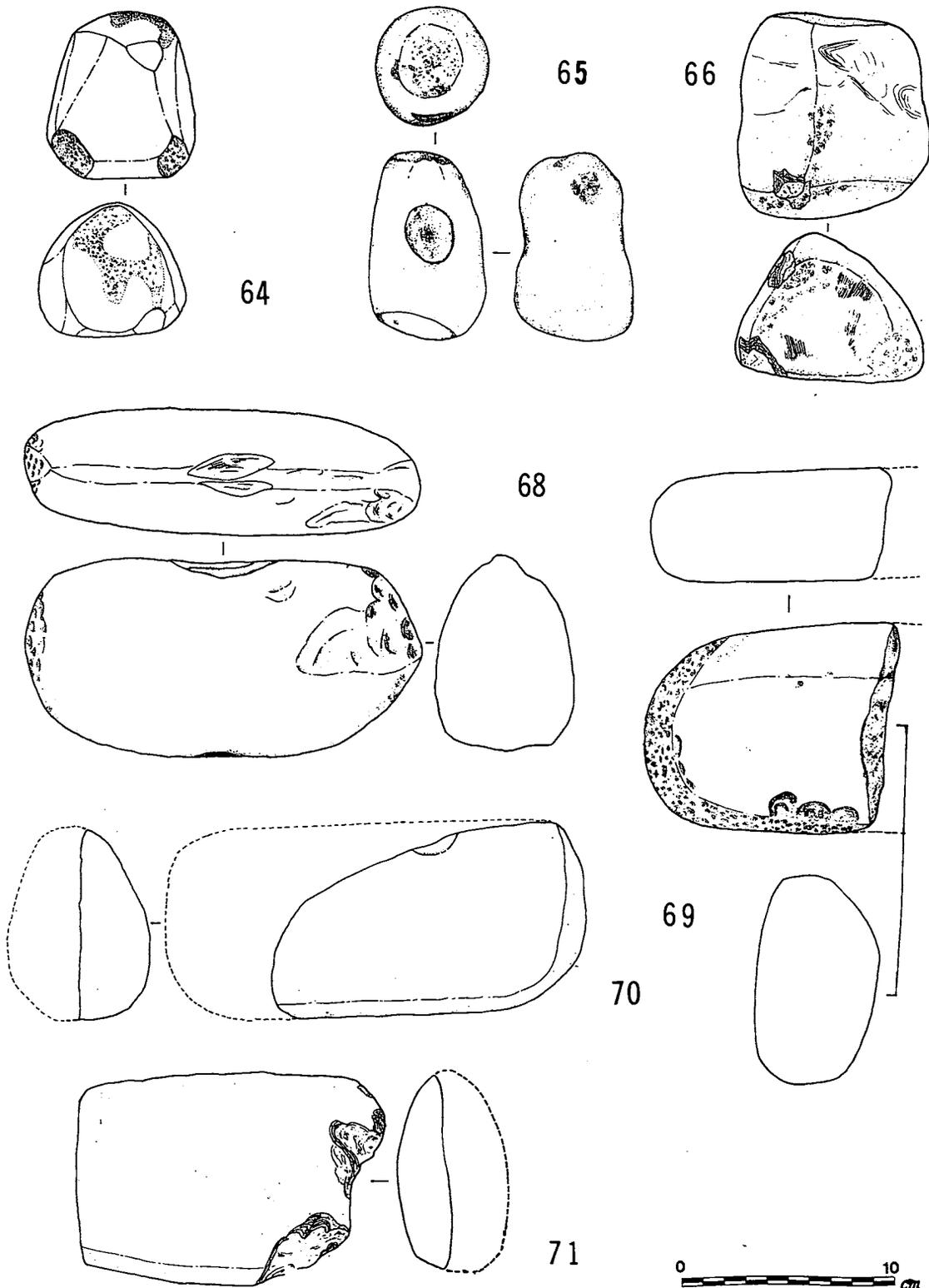
第26図 擦石類実測図(2)



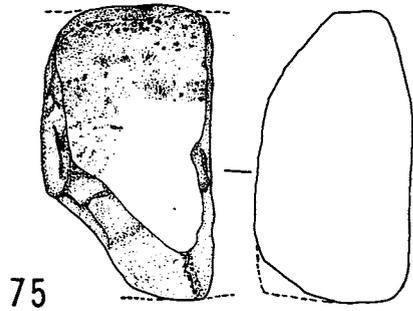
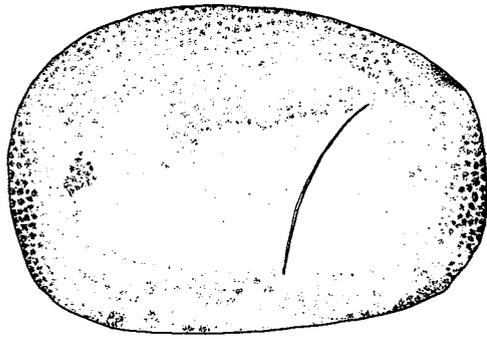
B-a3ピット(Ⅱd層(63)、Ⅲ層(59)、Ⅳ層0~30 cm(56)、同30~60 cm(58))；B-a4ピット(Ⅱa層(55))；c地区(57)

0 10 cm

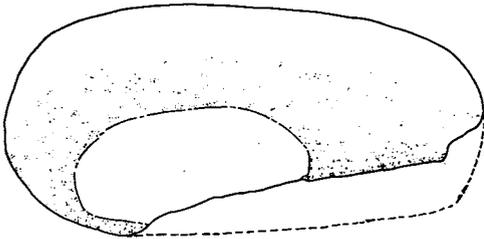
第27図 擦石類実測図(3)



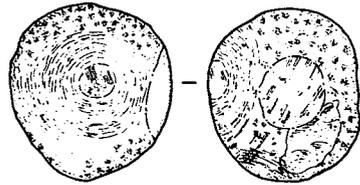
第28図 擦石類実測図(4) B-a3ピット〔表採(66)、II d層(65・69)〕; C地区〔64・68・70・71〕



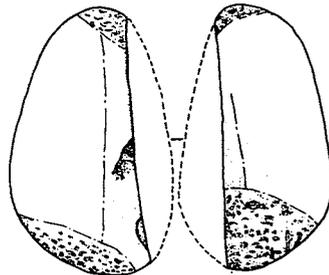
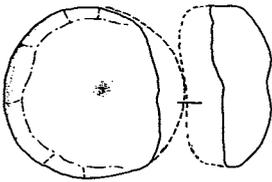
75



72



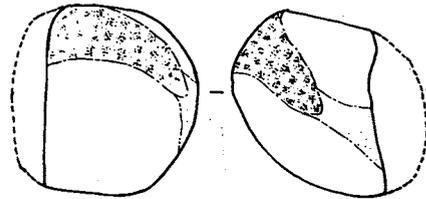
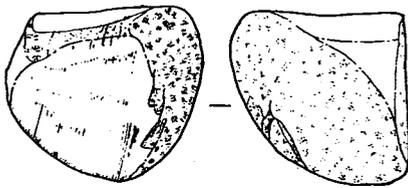
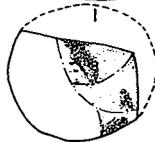
76



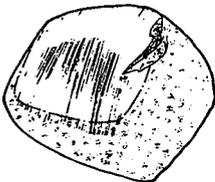
78



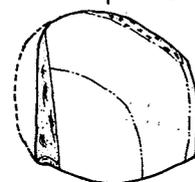
77



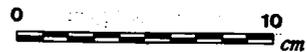
82



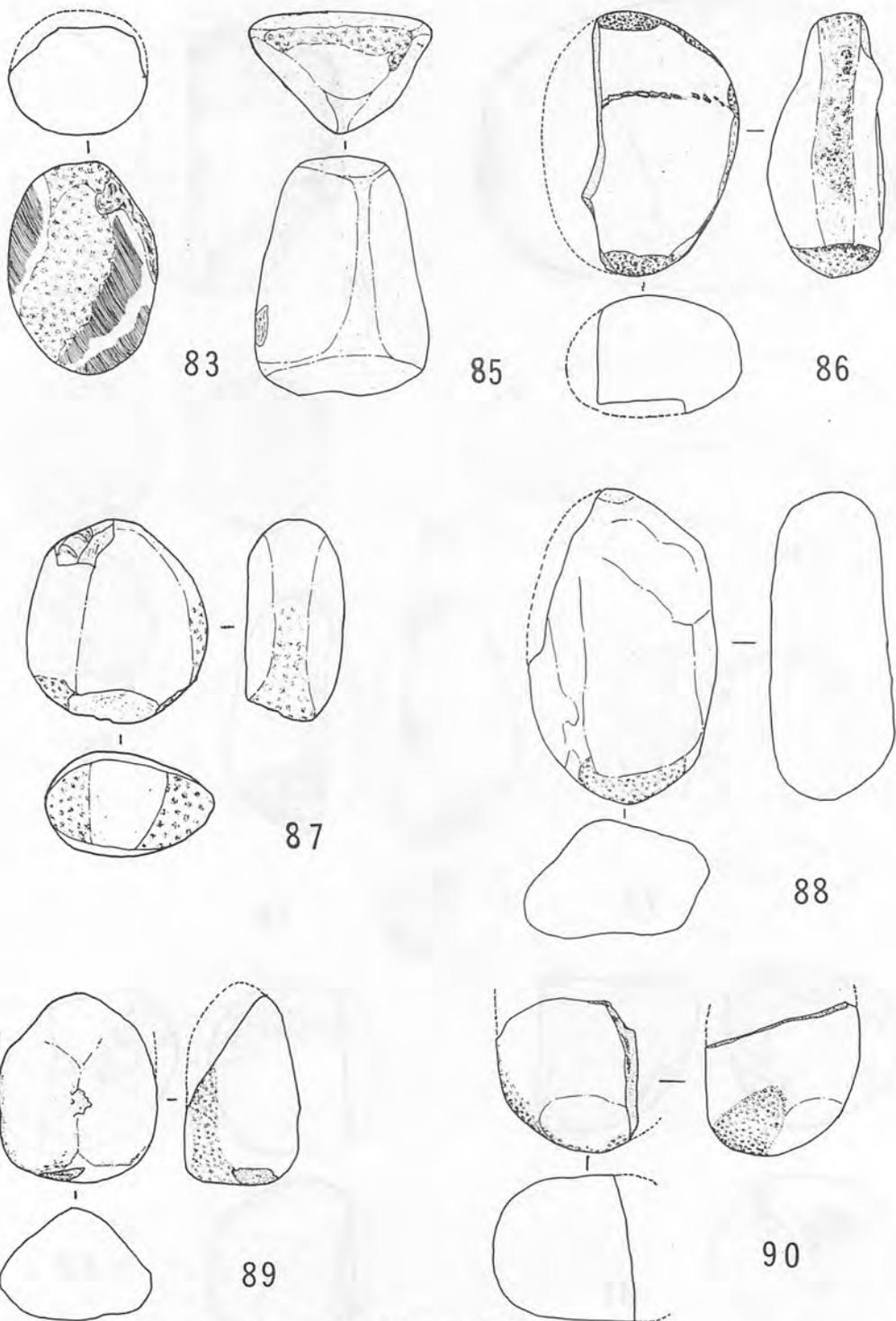
81



B-a3ピット(Ⅱb層(77)) : B-e3ピット(Ⅱa層(76)) : C
地区(72・75・78・81・82)



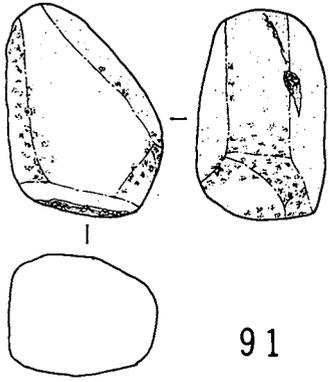
第29図 擦石類(5)及び敲石類実測図(1)



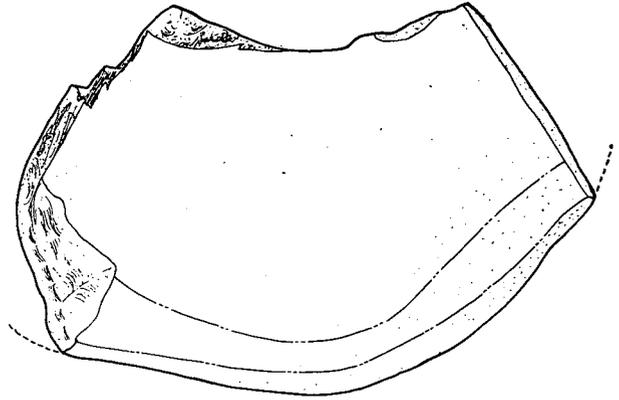
B-a3ビット〔Ⅱc層(85・87)、Ⅱd層(89)〕:B-c3ビット〔Ⅱa層(88)〕:B地区表採(86):c地区(83・90)



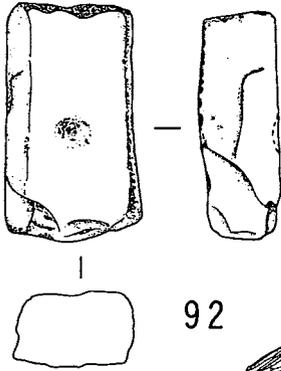
第30図 敲石類実測図(2)



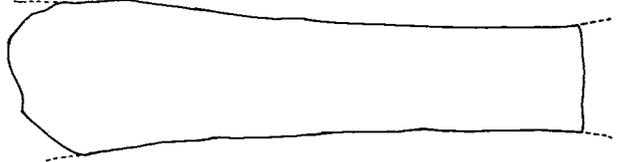
91



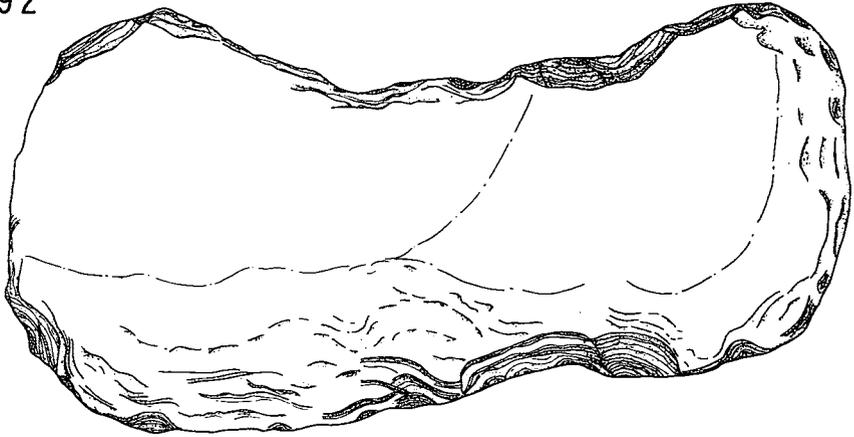
1



92



96



1

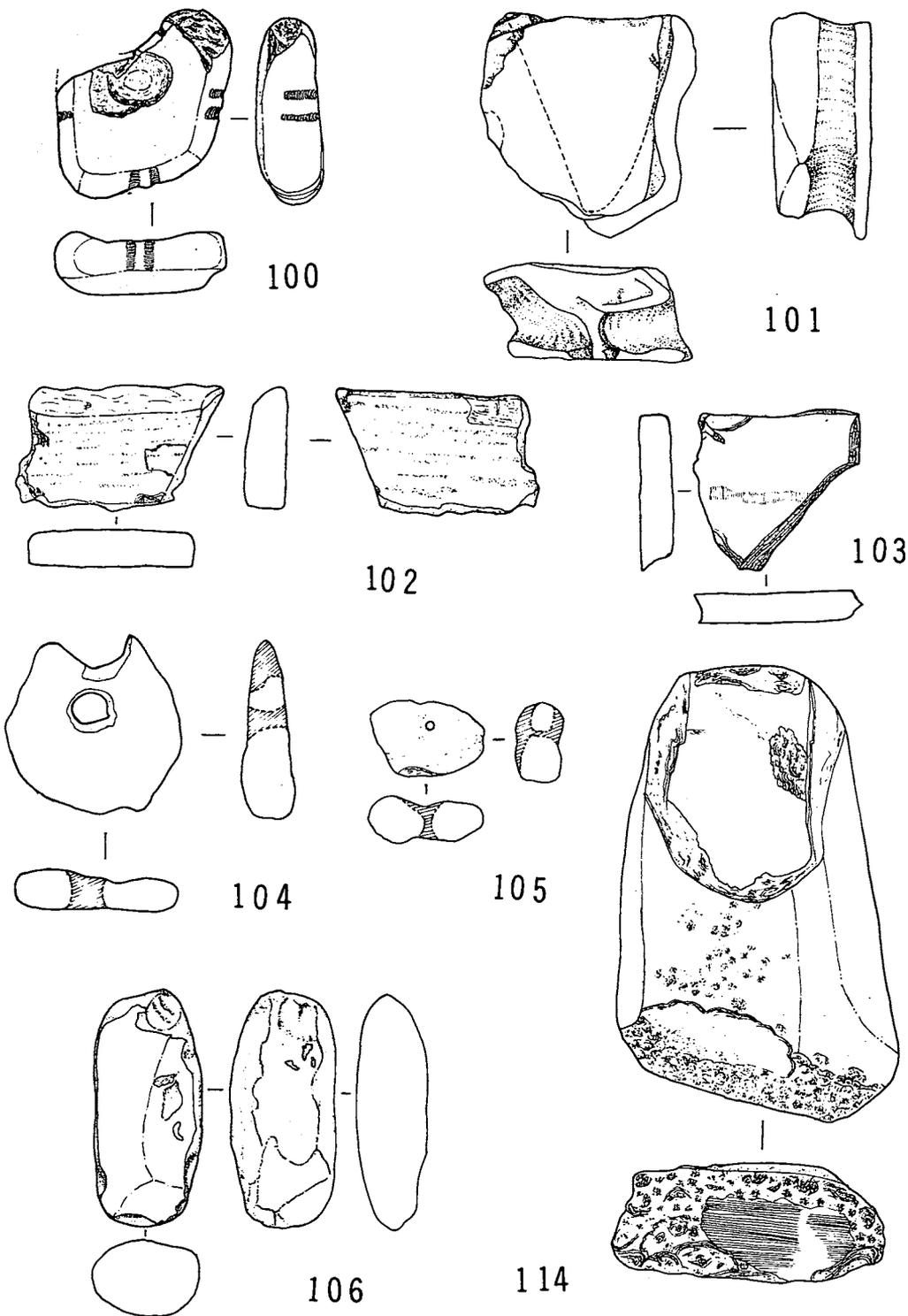
99



B-a3ピット(IIa層(91)) : C地区(96・99) : D地区(92)



第31図 敲石類(3)及び石うす類実測図



B-a3ピット(IV層0~30 cm(101)) : B-b4ピット(IIa層(100)) :
 B-c3ピット(IIb層(106)) : c地区(102~105、114)

0 10 cm

第32図-① その他の石器類実測図

第6章 渡喜仁浜原貝塚の貝製品・骨製品

1. 貝製品

渡喜仁浜原貝塚出土の貝製品は、第一・二次調査を含めて94個でその出土状況は第44表に示した。各地区の出土状況を見ると、B地区66個、C地区24個、D地区1個、砂浜表採1個、不明2個である。

第44表 渡喜仁浜原貝塚出土貝・骨製品一覧表

地区	層位	製品名 深度 名称		貝製品											骨製品			合計					
				貝 錘				貝 刃	ヤコウガイ			いもがし科	アコヤガイ	ホラガイ	貝 輪	その他	小 計		骨 錐	用途不明	小 計		
				ザルボウ	うみぎく科	しゃこがい科	他		貝 斧	貝 匙	有 孔												
B地区	I層	0~30	耕作土層		1				1									2			2		
	II層	0~60	a:黒褐色土層						1									2			2		
		60~100	b:黄褐色混土礫層	3	3					1	1	1						9	1		1	10	
		100~130	c:混貝土層	1	2	1				1	1		2					8				8	
		層	130~160	d:混土	上部	3				3	1			1			1	9		1	1	1	10
	160~180		貝層		下部	1											1					1	
	III層	0~20	石灰岩礫層	上部																			
		20~40		下部																			
	IV層	0~30	淡黒褐色土層		1				5						1	7						7	
		30~60																					
		60~90						1			1 ⁽³⁾						3 ⁽³⁾	1				1	
		90~120						1							1			2		2	2	4	
		120~150																					
		表面採集			6	2			1		1 ⁽²⁾	3	1	5		1	1	21				21	
	小計			1	15	7	1	13		4	5	3	9	1	2	5	66	1	3	4	70		
C地区	C-1 ピット	14		1					1								2				2		
		15	1				6	1			1	1					10		1	1	11		
	表面採集			2	1	2	1				1		2	1		2	12				12		
	小計			1	3	1	2	7	1	1	1	1	3	1		2	24		1	1	25		
D地区	表面採集					1 ⁽²⁾										1					1		
砂浜表採					2 ⁽¹⁾						1						3				3		
総合計				2	20 ⁽⁵⁾	9	3	20	1	5	7 ⁽⁴⁾	4	12	2	2	7	94	1	4	5	99		

- 注. (1) うみぎく科製貝錘は出土地点不明である。 (2) 第二次調査で出土した。
 (3) 第二次調査出土だが深度不明である。 (4) 貝輪とその他を含む(本文参照)。
 (5) うみぎく科製貝錘のB地区表採の中に第二次調査を含む(第46表参照)。

出土した貝製品は、貝錘、貝刃、貝斧、ヤコウガイ製品（貝匙、有孔製品、その他）、いもがいの製装飾品、アコヤガイ製有孔製品、ホラガイ製品、貝輪、その他（用途あるいは貝種不明）に大別できる。以下、それぞれについて記述する。

A. 貝錘（図版34参照）

貝錘は、二枚貝の殻頂部を穿孔したもので、本遺跡では、B地区24個、C地区7個、D地区1個、不明2個と合計34個出土した。出土状況を層位別にみると、B地区では、I層1個、II層14個、IV層1個、表面採集8個でII層が最も多く、その中でもII b層、II c層に集中する。貝科種別にみると（第44表参照）うみぎく科20個、しゃこがい科9個、リュウキュウザルボウ2個、ソメワケグリガイ1個、種不明2個で、うみぎく科が最も多い。

第45表 貝錘の重量測定表

地区・層位		重量		0~9		10~19		20~29		30~39		40~49		50~59		60~100		100以上		不明		合計
		貝科	う	し	う	し	う	し	う	し	う	し	う	し	う	し	う	し	う	し		
B地区	I													1								1
	II	1	1 ⁽¹⁾	5	1	2		1					2					1				14
	III																				1 ⁽³⁾	1
	IV																					
	表採	1		2	1	1				2			1									
	小計	2	1	7	2	3		1	2			1	3				1		1			24
C地区	c-k	1				1 ⁽³⁾																2
	表採		2 ⁽²⁾	2														1				5
	小計	1	2	2		1												1				7
D地区	表採																	1				1
不明																				2		2
合計		3	3	9	2	4		1	2			1	3				3		3			34

『う』はうみぎく科、『し』はしゃこがい科の略である。

〔単位：g〕

注. (1) ソメワケグリガイ製貝錘

(2) 2個とも貝科種不明

(3) リュウキュウザルボウ製貝錘

重量別にみると（第45表参照）、10~19g台が11個、0~9g台6個、20~29g台4個と10~19g台が最も多い。貝科では、しゃこがい科の場合、50g以上のものが多く、他の種は30g以下に集中する。次に貝錘の大きさ（殻高）を第46表に示した。うみぎく科は、4.0cm台、5.0cm台に多く、しゃこがい科は、4.0~9.0cm以下と大きさは一定しない。リュウキュウザルボウはそれぞれ4.3cm、5.0cmである。ソメワケグリガイの大きさは3.5cmである。

次に貝錘の孔についてみると、本遺跡の貝錘のほとんどが打製で粗雑に仕上げられているが、図版34-Aの1、2、3、の孔は研磨されている。装飾品に用いられた可能性もある。他に、うみぎく科の腹縁近くに孔を有するものも1個出土した。リュウキュウザルボウの孔は2個とも自然に割れた感が強く、摩耗も認められない。

第46表 貝錘一覧表

整理番号	地区・ビット	層位	殻高	殻長	孔径	重量	図版	貝種
1	B-a3	IIb	62.6	52.3	9.2 × 11.8	26.4	A-3	オオナデシコ
2	"	"	48.6	37.7	18.9 × 11.8	14.4	A-9	ウニメンガイ
3	"	"	不	不	34.8	54.4	B-8	ヒメジャコ(破片)
4	"	"	45.8	71.8	15.3 × 16.2	19.1	B-2	ヒメジャコ
5	"	"	54.0	83.8	不	36.5	—	ヒメジャコ(未完成)
6	"	IIc	不	58.9	28.6	13.3	—	うみぎく科(破片)
7	"	"	35.3	37.7	7.0 × 4.3	9.6	—	ソメワケグリガイ
8	"	"	78.3	143.8	26.3 × 21.8	160.5	B-5	ヒメジャコ
9	"	"	52.0	89.8	23.0 × 17.2	52.7	B-1	ヒメジャコ
10	"	IIa(上部)	70.8	64.3	31.0 × 16.7	27.2	A-10	うみぎく科
11	"	"	50.9	55.4	15.2 × 20.0	14.6	A-12	うみぎく科
12	"	"	54.5	51.4	28.8	14.7	—	うみぎく科
13	"	IIa(下部)	不	不	不	4.3	A-13	うみぎく科
14	"	IVo~30cm	50.2	80.4	14.8 × 8.0		—	リュウキュウザルボウ
15	B-c2	I	69.5	65.0	13.5 × 13.4	50.7	A-1	オオナデシコ
16	B-c3	IIb	55.0	54.2	10.1 × 9.9	16.9	A-2	ヤスリメンガイ
17	B地区	表採	49.2	50.4	9.0 × 11.0	10.5	A-11	うみぎく科
18	"	"	不	不	13.5	12.9	B-3	ヒメジャコ(破片)
19	"	"	47.7	46.5	17.9 × 18.0	10.7	A-14	うみぎく科
20	C-k14	I70~80cm	43.8	54.2	24.3 × 23.0	8.3	A-15	ヤスリメンガイ
21	C-k15	I0~30cm	43.0	63.8	11.4 × 16.8	21.9	—	リュウキュウザルボウ
22	C地区	表採	97.5	160.5	12.2 × 26.9	295.0	B-6	しゃこがい科
23	"	"	不	39.3	20.4	5.7	—	?
24	"	"	不	不	7.1 × 4.8	2.7	—	?
25	"	"	62.7	59.6	23.5 × 18.2	19.6	A-6	うみぎく科
26	"	"	17.7	不	31.2	17.7	A-16	うみぎく科(破片)
27	?	?	54.0	54.0	11.6 × 12.4		A-7	うみぎく科
28	?	?	56.6	58.5	8.0 × 9.2		A-4	うみぎく科〔以上第一次〕
29	B地区	表採	58.4	82.2	32.4 × 14.6	51.0	B-4	ヒメジャコ
30	"	"	71.2	58.6	13.2 × 11.0	43.5	—	うみぎく科
31	"	"	不	不	14.0	7.1	A-17	うみぎく科(破片)
32	"	"	不	不	13.2 × 11.8	20.1	A-8	うみぎく科(破片)
33	B-z3	表採	70.4	67.8	29.0 × 24.0	45.6	A-5	うみぎく科
34	D地区	表採	89.4	160.0	26.6 × 18.0	210.0	B-7	ヒメジャコ〔以上第二次〕

注. 図版はすべて図版.34である。〔単位: mm及びg〕

B. 貝 刃

第33図及び図版35-Aは二枚貝の腹縁に押圧剝離を加えて刃を付けた製品で、用途については後日検討を要するが、関東・東北縄文時代の遺跡（稀に弥生時代の遺跡から出土する）〔神沢他, 1971〕から出土する“貝刃”と酷似する。また沖縄でも類例品がヤブチ洞窟遺跡〔国分他, 1965〕、下田原貝塚〔西村他, 1960〕、仲間第二貝塚〔西村他, 1960〕から報告があるが、はっきりした名称がないので便宜上、前者の“貝刃”と仮称する。

本品は第44表によると20個出土し、そのうちわけは、B地区13個、C地区7個である。層位別にみるとB地区では、I層1個、II層4個、IV層7個、表採1個でIV層が最も多く、次にII層と少なくなる。また、貝種別にはシレナシジミ19個、リュウキュウマスオ1個である。リュウキュウマスオ製のものは、後背縁近くの腹縁が剝離しているものである。大きさは第47表によると殻長7.16cm、殻高5.01cmでB地区a3ピットII d層の出土である。

シレナシジミ製は19個出土したが、そのうち刃先が荒いもの（図版35-Aの6・7）4例、刃先が細かいもの（同図版-Aの1）9例、部分的に刃のあるもの（同図版-Aの5）6例である。また、貝殻の使用は左殻8例、右殻10例、不明1例で大きさについては第47表によると、殻長6.5cm、殻高6.0cmのものが平均値である。沖縄における報告例は前述した遺跡のみでとくに八重山の仲間第二貝塚、下田原貝塚では貝種（シレナシジミ）も同一である。本遺跡ではIV層において宇座浜式土器と共伴する。

第47表 貝刃一覧表

整理番号	貝 種	殻長	殻高	刃先	地区・ピット	層 位
1	リュウキュウマスオ(左)	7.16	5.01	左	B-a3	II d (上部)
2	シレナシジミ (左)	5.16	5.10	細	"	IV 0 ~ 30
3	" (右)	6.36	6.30	左	"	"
4	" (左)	7.20	不	荒	"	IV 90 ~ 120
5	" (左)	5.30	4.60	細	C-k15	I 75 ~ 85
6	" (右)	6.09	5.98	荒	B-a3	II d (上部)
7	" (左)	5.40	5.26	細	C-k15	I105 ~ 125
8	" (右)	7.00	6.66	細	"	"
9	" (左)	破	片	細	B-a3	IV 0 ~ 30
10	" (右)	4.85	4.99	左	"	"
11	" (右)	8.15	7.56	左	C 地区	表 採
12	" (右)	5.50	5.43	荒	B-c2	I
13	" (左)	7.14	6.70	右	C-k15	I 75 ~ 85
14	" (左)	6.95	6.10	細	B-c3	II a
15	" (右)	8.12	8.08	右	C-k15	?
16	" (右)	4.65	4.33	荒	B-a3	IV 0 ~ 30
17	" (不)	破	片	細	"	IV 60 ~ 90
18	" (右)	7.30	7.00	右	C-k15	I105 ~ 125
19	" (左)	7.60	5.74	細	B-a3	II d (上部)
20	" (右)	8.16	7.08	細	B 地区	表 採

〔単位：cm〕

C. ヤコウガイ製品

ヤコウガイを利用した製品は第44表によると13個出土し、それらを器種別に分類すると貝斧、貝匙、有孔製品、その他(貝輪らしきもの及び装飾品を含む)である。

貝斧

図版37-Bの3はヤコウガイのフタを利用したもので大きさは短径7.7cm、長径8.6cm、重量201gでこれに周縁の薄い部分に幅6.1cmの打痕が認められる。C-k15ピット出土である。面縄第二貝塚(国分他, 1959)、ヤーヤ洞窟(永井他, 1964)、浜屋原貝塚(沖国大, 1977)などに報告例がある。本品の用途について、国分直一氏は台湾南部の火焼島の陸耕遺跡における例から粟作との関連(国分, 1972)を、河口貞徳氏は奄美先史遺跡出土の円形石斧との関連(河口, 1975)を述べられ、また、調査団のメンバーの一人、新田は魚を調理する際の利器として使用されたと考えている(新田, 1976)。さらに、新田の糸満市宇喜屋武での聞きこみ調査によると、その用途は海草などを掻き集める際にも使用されたという。

貝匙

貝匙は、図版36-Bの3、4、5、6、7の5個出土したがすべて破片である。同図版Bの5、6、7は貝殻の表層が残り、周縁と外面に研磨痕が認められる。同図版Bの5は幅6.5cm、7は幅7.4cmで長さは破損しているために不明である。出土状況を見ると、同図版Bの5はB-a3 II層、6はB-z3の黒褐色攪乱層(第二次)、7はC-k14ピットより出土した。同図版Bの4、3は研磨が著しいため、両者とも貝殻の表層がなく、内部の真珠層が現われている。前者は貝匙の先端のコーナーの部分、後者は柄の部分と思われる。それぞれB地区II層、IV層から出土した(第44表参照)。前記の3個に比べて全面に研磨され、装飾の様相が強い。報告例は、地荒原貝塚(多和田他, 1962)、謝名堂貝塚(友寄, 1964)津堅貝塚(嵩元, 1961)、シマシヤーマ貝塚(国分他, 1957)、アカジャンガー貝塚(高宮, 1960)、奄美大島では、面縄第二貝塚(国分他, 1959)、沖之永良部の住吉貝塚(河口, 1959)、種子島の広田遺跡(国分他, 1958)等に見られる。

有孔製品

有孔製品は3個出土した。図版36-Bの9、11、12はヤコウガイの体層部を利用し1.5~2.6cmの孔を有するものである。同図版Bの11、12はほぼ完形で、前者はB地区、後者はC地区の表採品である。両者とも周縁及び孔の中に打痕が認められるが、後者は摩耗が著しい。同図版Bの9は前記の2個に比べて小さく、破損品である。これらの用途は有孔であることから貝錘かあるいは垂飾品と考えられるが出土例がなく判別しえない。

その他(貝輪、装飾品)

図版36-Bの8、10はヤコウガイの体層とくに殻口に近い部分を利用したもので貝輪と推察されるものである。同図版Bの10は完形品で、大きさは11.6cm×9.2cmで中央に3.6cm×6.4cmのたて長の孔があり、また、外縁及び内縁は打痕が認められ、とくに外縁は摩耗が著しい。同図版Bの8は前者と同じく貝輪の破片と思われるが破片が小さいため大きさは復元できない。

第34図3、4(図版36-Bの1,2)はヤコウガイの製品で前者は遺跡近くの砂浜、後者はB地区の表採品である。第34図3(図版36-Bの1)はヤコウガイの殻口を利用したもので頭部中央に二又のえぐり

及びその両端にもえぐりを有する。また、中央部に $1.5\text{ cm} \times 0.3\text{ cm}$ のたて長の溝状の孔を両面からあけてある。周縁及び外面は研磨が著しい。第34図-4(図版36-Bの2)は前者と同形の破片と思われるが、裏面の孔をあけるためのすり痕が二叉をなす点で前者と異なる。しかし、両者とも、類例品の報告例は認められないが、その研磨痕及び形状から装飾品かあるいは貝匙の柄の部分と考えられる。

D. いもがい製装飾品

いもがい製装飾品は4個得られた。第35図-1(図版35-Bの2)は体層を縦位に両面から研磨し、さらに、螺塔部に穿孔したもので長さ 2.1 cm 、頭部の直径 1.3 cm でB-C3ピットII a層の出土である。類例品は広田遺跡(国分他, 1958)、地荒原貝塚(多和田他, 1962)にみられる。第35図-2、3(図版35-Bの7、8、9)は螺塔部を利用したもので、全面に自然に摩滅した感を受けるが製品か否かについては保留しておく。大きさはそれぞれ直径 0.5 cm 、 1.5 cm 、 1.2 cm で孔径も $0.3 \sim 0.7\text{ cm}$ で一定しない。C-k15ピット、B地区表採及び同地区II層でそれぞれ出土した。これらの報告例は、浦添貝塚(新田, 1970)、熱田原貝塚(高宮他, 1958)、嘉手納貝塚(嵩元・新田, 1960)、アカジャンガー貝塚(高宮, 1960)、備瀬貝塚(高宮, 1968)、浜屋原貝塚(沖国大, 1977)、勝連グスク(高宮他, 1966)、ヒニグスク(嵩元, 1966)等の沖縄貝塚時代の前期~後期、グスク時代の長い時期にわたってみられる。

E. アコヤガイ製有孔製品

第34図-2(図版36-A)は、アコヤガイの殻頂部近くに孔を有するもので、B地区9個、C地区3個の計12個出土した。第34図-2(同図版-Aの1)は完形品でB-a3ピットII層の出土である。殻高 12.2 cm 、殻長 11.3 cm 、重さ 74.3 g で殻頂部近くに孔径 $1.9\text{ cm} \times 2.0\text{ cm}$ の孔を有する。他の11個は破片で前者の製品の殻頂の部分に相当するもの9片、殻頂以外の部分2片である。用途は、殻頂部に孔を有する点から、貝錘と類似するが、貝殻がもろい点や大きさからは貝錘と断定し難いため装飾品と考えたい。これらの報告例は、熱田貝塚(高宮, 1969)、具志原貝塚(友寄他, 1968)、浜屋原貝塚(沖国大, 1977)等の後期の遺跡にみられ、本遺跡でも、後期系土器が主体的に出土するB地区II層に出土する点は編年的に一致する。

F. ホラガイ製品

図版37-Aの1、2の2個出土した。同図版-Aの1はB-a3ピットIV層下部から出土したもので大きさは殻高 36.2 cm 、殻径 16.5 cm 、重量 1160 g である。本品は、殻口に近い中位の体層部に2個の孔を有し、殻口の外側は孔径 $2.7\text{ cm} \times 2.0\text{ cm}$ 、内側の孔径 $2.7\text{ cm} \times 2.5\text{ cm}$ で両方とも打痕があり、研磨痕は認められない。また、殻口の外層部に石灰が付着し、体層部の底の部分は火を受けたため、貝殻が非常にもろい。同図版-Aの2はC地区の表採で殻高 27.2 cm 、殻径 10.6 cm 、重さ 300 g で前者に比べて小さい。殻口に近い中間の体層部に孔径 $3.5\text{ cm} \times 3.6\text{ cm}$ の孔を有し、前者と同じく殻口の外層部に石灰が付着している。両者の用途は、宮古島や伊平屋島の民具(上江洲, 1973)のブラヤクン、ブラヤクワンに酷似

することから、両者とも法螺貝製薬⁹⁶の機能を持つと思われる。

G. 貝 輪

第35図-5、6、図版35-Bの3、4の2片で両者とも巻貝の殻口近くの体層を利用したもので、内外面とも研磨が著しく、貝種は、製品のコーナーの状況から、いもがい科かそでがい科等の巻貝類と推察される。同図5(図版.35-Bの4)はB-a3ピットIV層0~30cmの出土で幅0.8cmで厚さ0.4cmである。同図6(図版.35-Bの3)はB地区表採で幅1.1cm、厚さ0.5cmである。

H. そ の 他

貝製品として断定しえないものと前述の分類にあてはまらないものをその他として記述する。

第35図-4(図版35-Bの10)はパイプウニの棘の先端部を両側から加工したもので、長さ5.6cm、幅1.1cmの棒状をなし先端部の断面は両刃的形状を示し、その上部の片側にえぐりを有する。用途については、類例品の出土や民俗例もなく、詳細は不明であるが、その形状から小形ノミを想起させる。

図版35-Bの1はウミウサギの体層部に孔径1.3cm×1.0cmの孔を穿孔したものでB地区表採品である。孔は打痕のみで他の部分にも加工痕は認められず、詳細は不明である。

第33図-1(図版.37-Bの1、2)は巻貝の体層に孔を有するものである。そのうち、第33図-1(図版37-Bの2)はゴホウラの体層両面に孔を有するもので孔の大きさは表4.8cm×4.8cm、裏6.4cm×3.8cmで裏の孔は切断するための傷跡が残存する。貝輪あるいは他の製品の未成品と推察される。B-a3ピットII層の出土である。図版37-Bの1はスイジガイの体層部に孔を有するものでC地区表採である。孔の大きさは4.4cm×4.8cmで、それは、破損のためきたとも考えられるが、スイジガイは、土俗例で“魔よけ”として使用した例などがあるため、本品はそれとは異なるが一応報告しておく。

図版35-Bの6、5は巻貝の体層を利用したもので、研磨が著しく、また、小片のため貝殻の全形を復元することは困難で、貝種は不明である。前者は完形品で周縁部及び外面は研磨が著しく、方形をなす。これまで類例品の報告はなく、用途は不明である。後者は、前者の貝殻よりやや厚めでその周縁の一部及び内面に研磨痕が認められる。小片の破損品であるため、貝種及び用途については不明である。

以上、貝製品について記述したが、これらを総括する。B-a3ピットの層位別出土状況をみると、I層3%、II層44%、III層0%、IV層21%、表採32%である。後期系土器を主体とするII層が最も多く出土し、その中でも貝錘は全体の48%を占める。本層は海産貝や魚骨の出土量も顕著で、他にアコヤガイ製有孔製品、ヤコウガイ製品等が出土する。このことは、熱田貝塚、アカジャンガー貝塚、具志原貝塚等の後期の遺跡と酷似する。故にII層は前述の遺跡等と同様、網を用いた漁撈が生産活動の中心をなしていたと考えられる。

中期系土器を主体とするIV層は21%とII層に比べて少ないが、この時期の遺跡で報告例のない貝刃、ホラガイ製品の出土は、貝製品の出土の少ない中期において、特異な様相を示している。

2. 骨製品

(計測は残存部の最大値を測定した。)

本遺跡出土の骨製品は、第一次、二次の発掘調査を含めて第44表によると5個で、完形品はなく用途及び形態の判別できるものは骨錐1個のみである。

A. 骨 錐

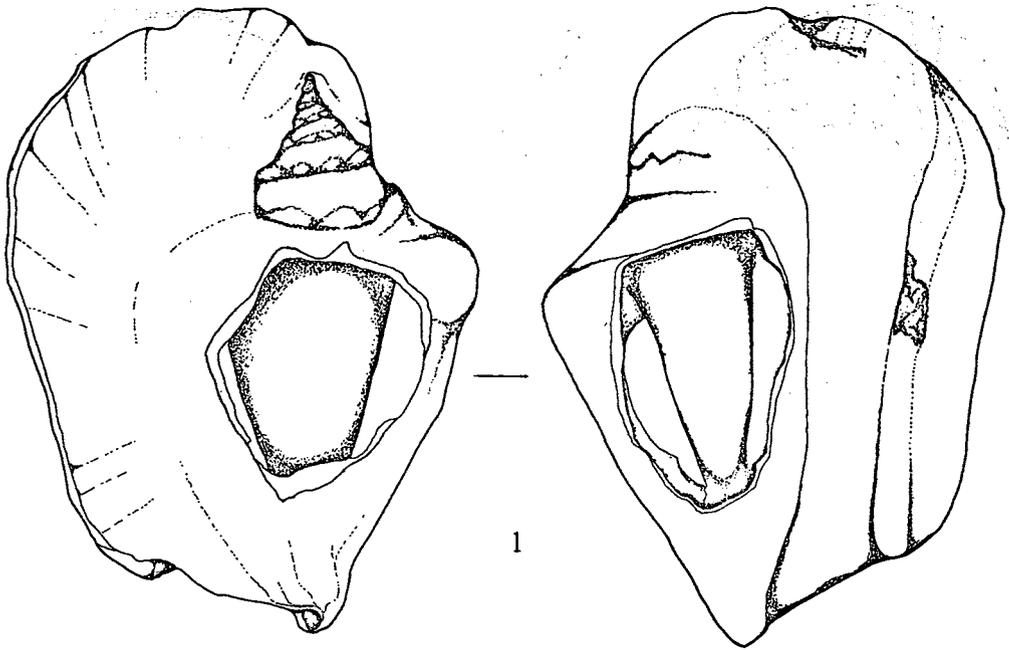
第35図-7(図版35-Bの12)は、B-a3ピットII b層より出土したもので、イノシシの尺骨を利用したものが先端部が欠損している。残存部の長さは7.2cmで背面の上部から下端にかけて鋭利な利器で切削され製作技法が推察される。類似品は、伊波貝塚〔大山, 1922〕、萩堂貝塚〔松村, 1920〕、嘉手納貝塚〔嵩元・新田, 1960〕、城嶽貝塚〔小牧, 1927〕、崎樋川A貝塚〔島田, 1932〕などの諸遺跡から報告例がある。これら遺跡報告の骨錐は先端部に研磨痕がみられる。

B. そ の 他

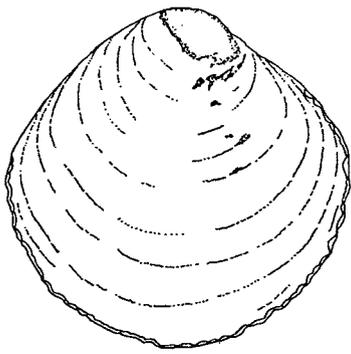
同図-11(図版35-Bの11)は、B-a3ピットII d層上部より出土したもので、イノシシの骨を使用したと思われる製品だが頭部が破損し全体の形態は窺えない。残存部の形態は、網針(アグイ)の先端部に類似しており、最大長5.6cm、最大幅1.4cmで断面は弧状を呈し、えぐり部分に長さ1.7cm、幅0.3cmの長方形の孔があいている。用途は外見上網針を思わせるが、ミゾ(孔)には、網針のように糸をかける針がみられず、また、先端部はかなり摩滅していることから刺突の要素をもつ道具の可能性もある。しかし、他遺跡からの報告例などもなく、用途については断定しえない。

同図-10(図版38-A)は、C-k15ピットI層(攪乱層)より採集したもので、クジラの脊椎骨を使用したと思われる装飾品だが大部分破損している。残存部の形態は、ハットのグリップ状をなし長さ11.7cm、重量160gである。底部はやや楕円形をなし、短径5.6cmで底面は研磨されており中央部あたりに直径1cmの穴がある。側面は、粗製で底面から6cmのところ竹のような幅0.9cmの節があり、節の中央部に0.1~0.2cmのミゾがある。報告例がなく用途について断定しえないが呪術的要素もあると思われる。

同図-8、9は、B-a3ピットIV層90~120cmから出土した製品で小破片のため形態及び用途は推察しえない。同図-8の下端部は切断面があり、断面は弧状で最大長4.6cmで表面は研磨痕がある。同図-9は、最大長4.0cmで全面に研磨されている。



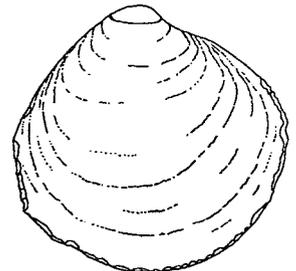
1



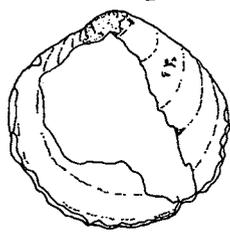
2



3



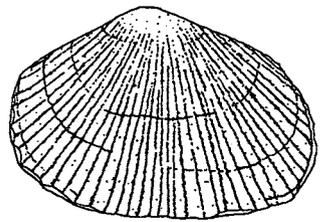
4



5



6

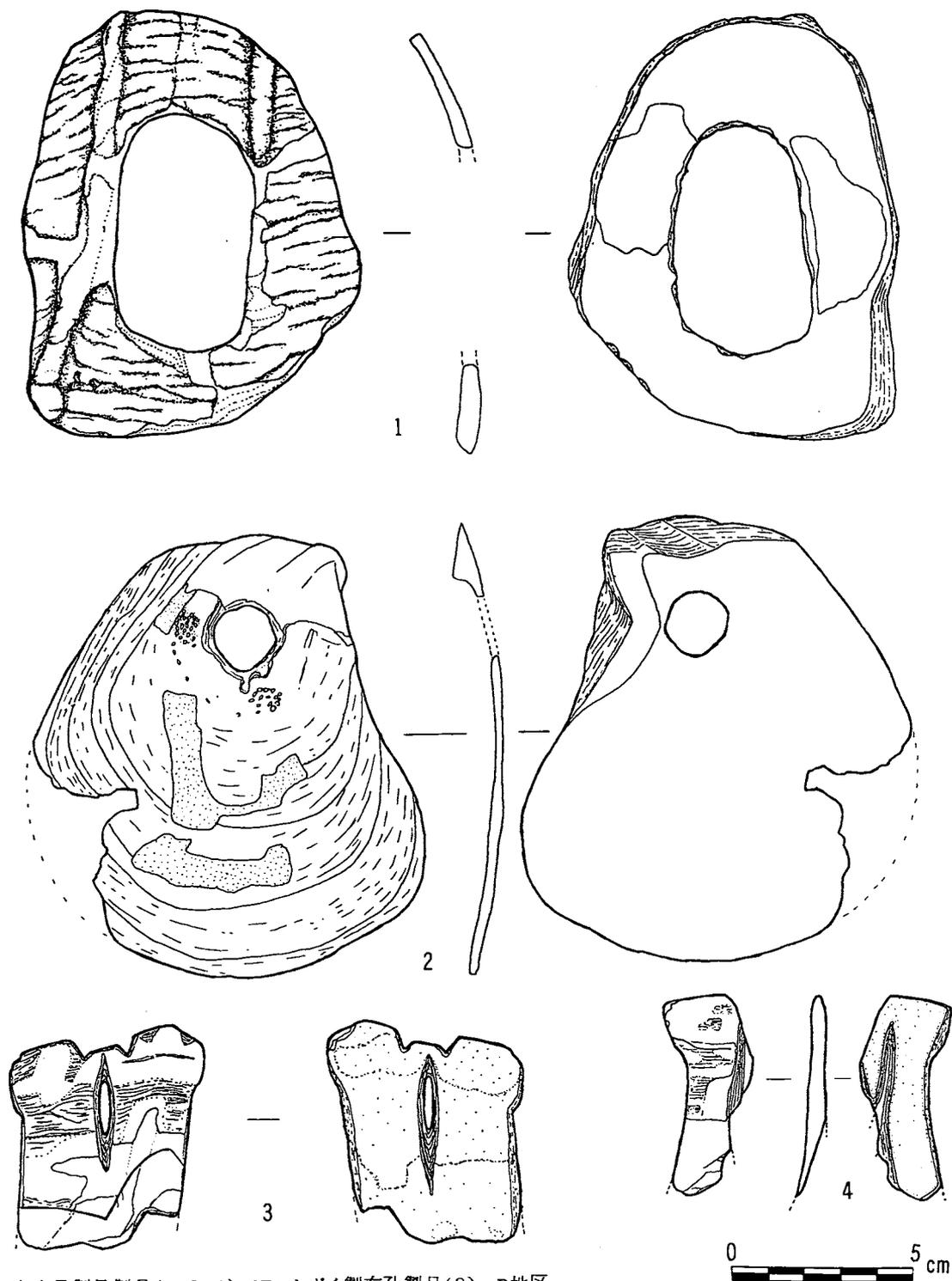


7



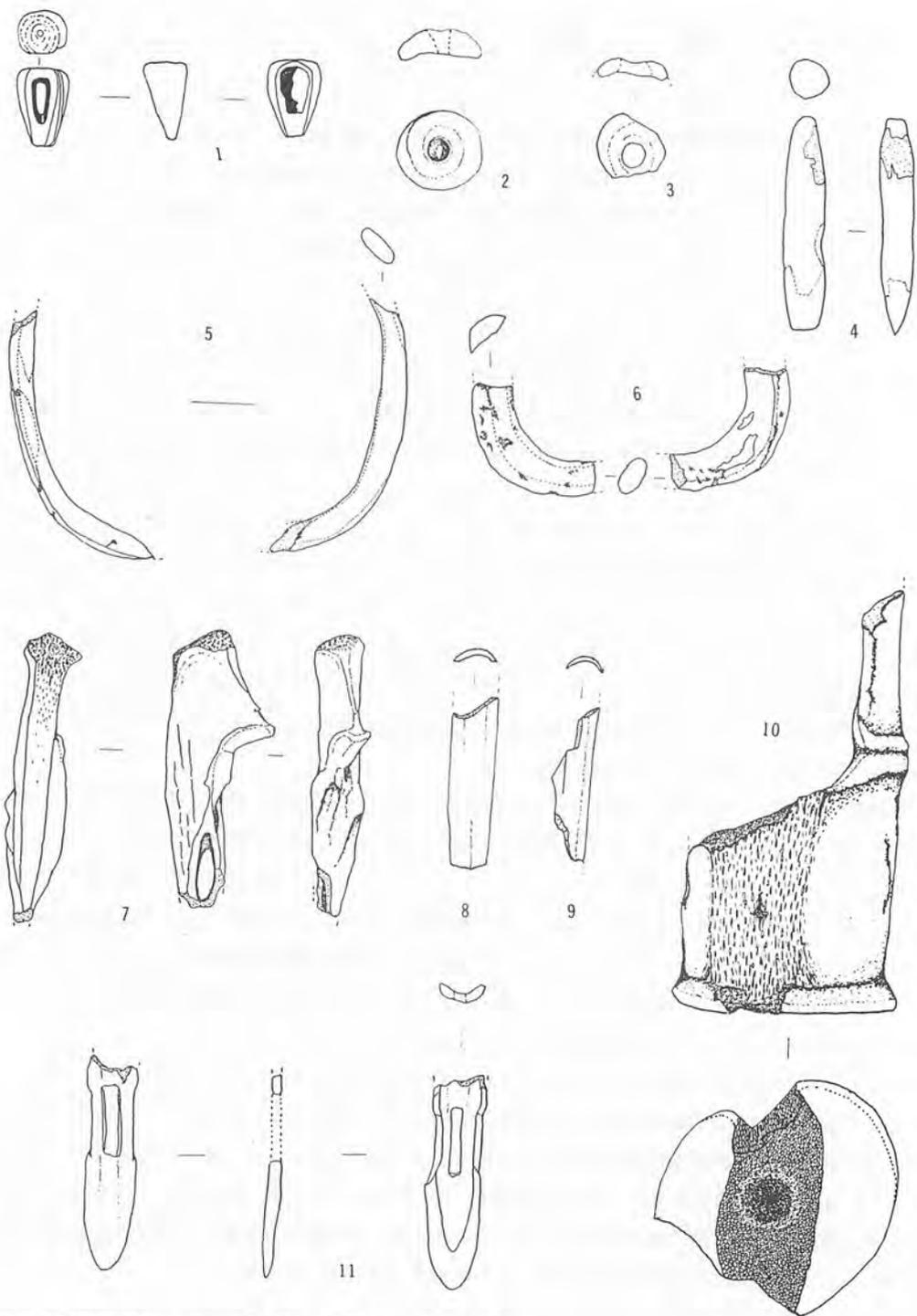
ゴホウラ製有孔製品(1) シレナジミ製貝刃(2~6)
 リュウキュウマスオ製貝刃(7) - B地区(II層(1・3・7)、
 IV層(4・5・6)) : C地区(2)

第33図 貝製品実測図



夜光貝製貝製品(1・3・4) アコヤガイ製有孔製品(2) - B地区
 [表採(4)、II層(1・2)] : 砂浜表採(3) -

第34図 貝製品実測図



イモガイ製装飾品(1~3) バイブウ=製品(4) 貝輪(5,6)
 骨製品(7~11) -B地区〔表採(3・6)、II層(1・7・11)、IV層
 (4・5・8・9)〕;C地区〔2・10〕-

0 5 cm

第35図 貝・骨製品実測図

第7章 収 束

渡喜仁浜原貝塚の発掘調査によって得られた若干の知見と問題点について収束する。

占 地 本遺跡は、本部半島のほぼ中央部に立地する乙羽岳より北東部に向かってなだらかに傾斜する台地の北縁部に位置する。この台地は、海拔30~40mの琉球石灰岩からなり、東西方向にのびた一連の崖地帯を形成するが、遺跡は同方向に平行して生じた割れ目より崩壊した巨大な石灰岩塊の間に形成されている。

渡喜仁浜原貝塚の位置からは、北東方向に古宇利島や沖縄本島の北部地帯が手にとるように見渡され(図版.1-①)、北西側には伊平屋、伊是名の各島々が遠望できる。また、大井川の河口部から古宇利島の対面側に及ぶ、広大な裾礁型の岩礁地帯と砂地地帯の発達したサンゴ礁地帯のすべても望見される。大井川の河口部は、本遺跡よりおよそ1500m西側に位置し、約3500m南西側の乙羽岳の裾野から続くものである。

渡喜仁浜原貝塚の置かれている考古学的位置(占地)は、上記の環境を抜きにしては考えられない。すなわち、貝類・魚類棲息に良好な岩礁・砂地に富むサンゴ礁地帯を身近にもち、あわせて、広大な河口域と獣類棲息に良好な山野をも有していることが、まず指摘される。また、この貝塚集団にとっての生産場(サンゴ礁地帯)と上記のごとく四方をよく遠望できることは、生産場の観察・監視と外敵?を眺望する自然の要所地といえよう。また、石灰岩台地の基部付近に数箇所の湧泉が存在し、崩落した巨大な石灰岩塊が遺跡の北方に屏風状に立ち広がって直接北風をさけることなどを考え合わせると、実に理想的な場所に居住地が選定されたことが窺われる。

層序と遺物 前記の琉球石灰岩台地とそれより崩落した巨大な石灰岩塊の間に、遺物や土砂、石灰岩礫が堆積し、表面がやや平坦面をなすところを「B地区」と称した。第一次調査においては、本地区に2m四方のグリッドを設定したなかより、a3、c2、c3、c4ピットについてのみ調査を行なった。しかし、調査日程や諸事情により、a3ピットのみ発掘可能な深さまで調査し、ほかはIIb層あたりまでしか発掘できなかった。そのことをかんがみて、B地区における層序と層相についてはa3ピットを中心に記述したい。さらに、そのピットの知見に、cトレンチおよび第二次調査の成果をも加味して、各層位の平面的広がりについても概観したい。

B-a3ピットにおける層序は、大きく分けて4層まで確認され、それぞれI層、II層、III層、IV層とした。I層は耕土による攪乱層である。II層は細分して5小層に区分できたが、文化遺物とくに土器のうえでは沖縄貝塚時代後期の様相を呈していた。区分した5小層については、上部よりa・b・c・dを付し、IIa層(黒褐色土層)、IIb層(黄褐色混土礫層)、IIc層(混貝土層)、II(d)層(レンズ状石灰岩礫層)、IIa層(混土貝層)として使い分けた。IIa層の上部あたりまでは攪乱をうけた形跡が認められたが、それ以下は攪乱をうけていない本来の遺物包含層である。

各小層のB地区における平面的広がり、IIa層の場合、b2ピットの南西隅よりa3ピットの北東隅を対角線状に区切った北西部においてのみ分布する。従って、現存するB地区の北西側一崩壊した巨大な石灰岩ブロック間近のb4、a4では最も厚く、そこより他ピットへ末広がり、b2、c3、d3ピットで途切れる。IIb層は、eトレンチを除きほかの2トレンチ、3トレンチ全域に分布する。4ト

レンチは、Ⅱ a 層を完掘するに至らないので不明である。なお、Ⅱ c 層、Ⅱ d 層も、a 3 ピットを除き第一次、第二次調査において発掘していないので、平面的広がり不明である。しかし、d 3 ピットにおいてⅡ b 層直下より a 3 ピットでは見られない赤色土層が、確認された。それは、e 3 ピットのⅠ層直下部を構成し、B 地区東端の「石積み」と接続する。遺物は、大山Ⅱ類土器を含み前・中期の様相を呈した。

Ⅲ層は、淡黄褐色砂礫と石灰岩礫が互層をなし、a 3 ピット南側では大きな石灰岩塊によって絶ち切られている。Ⅳ層は、多くの石灰岩礫を混入する淡黒褐色土層をなし、一部には、それとやや異なる黒褐色土が堆積していた。しかし、深度 1 m 内外（表土より約 4 m）のところでは、大きな石灰岩塊が埋まり、それ以下の調査には至らなかった。第二次調査における z 3 ピット（a 3 ピットの西側）の発掘等から、石灰岩塊下にも遺物包含層があるだろうと予測される。Ⅲ・Ⅳ層共に、土器のうえから、沖縄貝塚時代前・中期の様相を示すが、自然遺物（食料残滓）よりみると、他の沖縄諸島前・中期遺跡の一般的な出土状態とは異なる傾向を示す。

(1) Ⅱ 層

土器の主体を占めているのは後期土器で、Ⅱ層でもⅡ c 層とⅡ d 層から多く出土する。器型は、外反する甕型、または鉢型土器で、底部は、くびれ平底が殆どである。頸部の長い壺型土器がⅡ d 層上部より 1 片出土した。土器の色調は暗褐色が多く、赤褐色がこれに次ぐ。器面調整法は、撫で・ヘラ削り・研磨・貝殻による調整手法がみられ、その調整は、外器面と内器面とは異なる傾向を示すが、両器面共に撫でが多かった。文様は、殆ど無文であるが、有文の場合は突帯上に刺突を施した U 字形突帯刺突文土器もみられた。これは、津堅第一貝塚や熱田貝塚出土の資料に類似し、その手法は、具志川市具志川グスク下層にもみられた。この第Ⅱ層からは弥生系土器が 3 片検出されている。口縁部が 1 片、底部が 2 片である。底部の器型からすれば、九州弥生中期以降の甕型土器に類似する。

石器は、たたき石やすり石が主体を占め、石斧状石器類は 2 点出土しⅢ・Ⅳ層と比較して同数であった。

貝製品は、貝錘 14 点、貝刃 4 点、アコヤガイ製有孔製品（完形品）1 点の出土が目立っている。骨製品では、「残存部が、アグイの先端部に類似している骨製品」が出土した。しかし、本標品には、ミノ（穴）に網針のように糸をかける針がなく、後頭部も欠損しているため、形態と用途を同定することは困難である。追加資料を期待したい。

食料残滓は大きく分けて獣類遺存体、魚類遺存体、貝類遺存体、植物遺存体である。

獣類遺存体で同定されたものは、イノシシの一種のみである。イノシシはⅡ層からの出土が全体の 54.8 % を占め、最小個体数でも 7 個体が確認できた。魚類遺存体で同定されたものは 4 科 10 種で、ぶだい科、べら科、ふえふきだい科、はりせんぼん科である。他に、ジュゴンなどの哺乳類海獣遺存体なども検出された。Ⅱ層の出土状況は全体の 63.1 % である。本層出土魚類は、殆どがサンゴ礁域に棲息するもので、特に本層では群れをなすふえふきだい科とぶだい科の出土が目立っている。これは、貝錘の出土と共に網漁による漁獲法の登場を示唆するものであり、追い込み漁などが想定される。貝類遺存体は、a 3 ピット出土全個体のうち、66.1 % を占める。層内での貝類組成比率は、海産貝 89.7 %、陸産貝 4.1 %、河川の貝 6.0 % で海産貝が圧倒的に主位を占め、海への依存度が高いことを示している。なお、第二次

調査においては、植物遺存体の検出も主要な調査目標として作業を行なった結果、イタジイの種子やまめ科の炭化物らしきものが本層上部より検出された。専門家に同定中なので、後日、発表する機会もきたい。

また、特殊遺物として、Rosinと推定されるものが2点得られた。1点(129)はII b層、他(589)はII d層出土である。森氏によれば、「本来、RosinはTerebinthina(いわゆる、生松脂：筆者註)から水蒸気蒸留によってoleum terebinthinae(精油)をとった残渣に水を加えて蒸発乾固させて製造する固形樹脂である。」と、される。そして、本遺跡II d層出土品については、「最初、Terebinthinaを、何らかの生活用品として用いられたであろうものが、風乾され、樹脂となり、この樹脂が長年かけてテレピン油が自然に抜けRosinとなったものであろう。採取されたRosinの大きさからTerebinthinaの量は相当な量であったことが予想され、生活の用によく用いられたものと予想される。」と、した。さらに、Terebinthinaの現在の用途から、古代人のそれは「①矢じりを竹にひもで巻きつけ、これに塗り固める。また、弓の弦の強化など。②着衣に塗布し、野山をかけるときの身体の保護?。③ワラジなどにつけて足の保護に供する。④薬用として用いる。」と想定されている。渡喜仁浜原貝塚集団、ひいては沖縄貝塚時代人の生活様相を把握するうえで、重要な示唆である。

以上、詳述してきたII層の展開期は、沖縄貝塚時代後期の時期で、その上限は九州弥生時代中期以降から、下限はフェンサ下層式までのある時期に対応し、後期でも後半に編年されるものとおもわれる。

(2) III 層

本層は、沖縄貝塚時代中期の無文字座浜式肥厚口縁土器を主体とし、僅かに後期系土器が混入している。

また、横耳形の外耳土器や前期的手法の口縁部に軽いふくらみを持ち、二条平行点刻文が施されている土器片も検出された。

従来、中期の遺跡の状況として、食料残滓が皆無か減少する報告例が多くなされているが、本遺跡では比較的多量に検出された。とくに、組成比率において、陸産貝がII層、IV層に比較して増加を示していた。中期の経済様相については、今後追求すべき大きな課題であるが、前期と後期に比較して一般的に食料残滓が減少することは、遺跡の立地や遺物の包含される状況、遺物の投棄される場所の問題、発掘規模の問題等ともかかわりをもつようであり、基本的な事項を総検討しない限り何ともいい難い。

(3) IV 層

発掘した段階での知見では、土器は、胎土の第一群、第四群に分類される大山III類土器や宇座浜式肥厚口縁土器に有文が施されたものが主体をなしていた。肥厚口縁土器にみられる有文は、横捺に綾杉または格子目を要素とする文様で、類例品は平安名第二貝塚などにみられる。このことから、IV層は、III層より型的に先行することが把握できた。

食料残滓の出土状況についても注目すべきものがあつた。すなわち、貝類遺存体においては潮間帯砂地の貝類が主体を占め、陸産貝、河川の貝の順位になっていた。また、魚類遺存体においては、群れをなさないべら科の出土が目立っていた。II層の網漁による「群れ魚」をとる漁法に対し、単独魚を狙ったのなんらかの漁法があつたものと想定された。

IV層の展開期は前期終末より中期に位置づけられる。しかし、発掘部の最下部にある大きな石灰岩塊下にも遺物包含層が残存していることが予想されるために、それより遡る可能性を持つ。

ところで、2・3ピットII b層上部において、一定の大きさの石がまとまりをもったような状態で配され、その凹凸は砂礫や土で整地された「石列」が露出した。第二次調査の知見によれば、その「石列」は、b2、b3、d2、d3ピットにも拡がること把握された。しかしながら、それは、a4、a5、b4ピットにおいて確認された焦土面とともに、住居址等の遺構と関連するものか判定するには至らなかった。

また、本地区の南崖上方の石灰岩台地縁辺部（A地区）に、試掘溝を4ピット設定して調査を行なったが、試掘溝内からは遺物は検出されなかった。ただし、地表採集により無文胴部土器片1点、すり石2点、石材4個、ペブル13個が得られている。そして、調査協賛の一団体である琉大考古学研究会の予備調査（1976年2月11日）においても、無文胴部土器片3点、石器片1点が採集された。当初、この地区は生活面と想定された場所であるが、第一・二次調査共に確認できなかった。

さらに、B地区の西側遺物包含層が、崩壊し、それが二次堆積して傾斜状をなしているところ（C地区）にも、遺物採集を目的として2m四方のピットを2つ設けた。遺物は、B地区から出土する遺物の範疇をでるものではなかった。

周辺遺跡との関連 従来、渡喜仁浜原貝塚周辺には第1章第2節において詳述した運天貝塚群（4地点を含む）、松当原貝塚、大浜原貝塚、長根原貝塚、渡喜仁原遺物散布地、そして渡喜仁浜原貝塚の9遺跡が確認されている。さらに、隣接する古宇利島にも古宇利原A遺跡、同B遺跡、中原遺跡が存する。これら遺跡の多いさかんがみて、調査団は、渡喜仁浜原貝塚を遺跡群総体のなかの一遺跡として把え、その発掘調査による文化的・経済的実体把握に基づいて、他遺跡との連関（集落立地の変遷、遺跡集団相互の関係等）を追求することを調査目的のひとつに据えた。そのための作業の基礎的段階として、発掘調査・出土遺物の整理と並行しつつ本遺跡周辺の遺跡分布調査を実施した。その結果を第36図に示し、以下概観する。なお、各遺跡番号は第36図と一致する。

1. 長根原遺跡（1976年1月28日発見，図版．2-③の1）

字仲宗根の長根原747番および988番に相当する標高約25mの石灰岩台地縁辺部に形成された沖繩貝塚時代前期後半から中期に編年される遺跡である（詳細は第1章第2節参照）。

2. （1976年8月24日発見，図版．2-③の2）

長根原遺跡の立地する石灰岩台地より段差約2mをなして崩落した巨大な石灰岩塊上の赤色マージ土に形成された小規模な遺跡である。遺物包含層を形成する長根原遺跡と同一遺跡かとも思われる。遺物は、渡喜仁浜原貝塚III・IV層および長根原遺跡出土土器と同じく、胎土に古生岩含有の異質岩片を多量に含むものや無混和の赤褐色砂質土器片（調査団土器班の第四・五群および第七群土器に相当する）を擁する無文字座浜式土器を主体とするが、横捺刻文・細沈線文等の有文土器片もみられる。しかし、貝殻の散布はみられない。前期後半から中期に編年される遺跡である。なお、ここから採集された遺物は、北山高校生物クラブに保管されている。

3. （1976年2月11日確認）

字仲宗根の沖繩リゾート開発公社前に植えられたソテツ苗木の植土—赤色マージ土より、底径の

小さな平底土器と若干の無文胴部土器片およびすり石等の石器片を採集した。しかし、このソテツ苗木の自生していた公社西南部は、すでに土地造成のため湮滅し、明確な遺物包含地は確認できなかった。採集遺物よりすれば中期に編年される遺跡であったと思われる。

4. (1977年1月3日発見, 図版. 2-③の3)

字仲宗根のヒージャー浜西端にある小湾状の海岸地に形成されている遺跡である。そのため、波浪を直接受けて侵食が激しく包含層が露出している。露出面は約450cmの高さをなすが、上部200cm余は舗装道建設のための客土であり、その下半部が純然たる遺物包含層である。包含層は、色調からして3層に区分されるが、いずれも粘着性のある土層をなす。遺物は、各層位ともに少量で土器片や摩滅した貝殻が点在する。本遺跡の時期は、無混和の赤褐色砂質土器片(第七類土器に相当する)を主体とすることから中期に属すると思われるが、標高約1mの包含層最下部から前期系の条痕の荒い無文胴部土器片が得られ、また、それ以下にも包含層が続くことを考えると前期にまで遡る可能性をもつ。また、客土内より後期系土器を得たが、その搬出地の確定には至らなかった。

5. (1977年1月3日発見, 図版. 2-③の4)

ヒージャー浜の西側に形成されている遺物散布地である。遺物は、宇座浜式土器等中期系土器片が採集される。なお、本散布地の西側、すなわち上記4.遺跡に隣接して破碎された貝殻(海産貝類を主体とする)の集積した堆積土をみるが、遺跡としての確認には至らなかった。そのなかより、若干の無文胴部土器片を採集したことを追記する。

6. (1977年1月3日発見, 図版. 2-③の5)

ヒージャー浜の中央部に形成されているが、上記4.遺跡と同じく、波浪を直接受けるために侵食を被り遺物包含層が露出している。包含層は、約50cmの厚さをもつ石灰岩礫を含む黒褐色混礫土の単層をなすが、その上部は南方からの流れ込み土で被覆し、下部は古生層基盤に接続する。包含層中には、くびれ平底・無文胴部土器片や貝殻(海産貝類を主体とする)が僅かに分布する後期に編年される遺跡である。

7. (1977年1月3日発見, 図版. 2-③の6)

松当原貝塚、大浜原貝塚と同じく、砂丘地に形成されている遺物散布地である。その範囲については不明だが、石器、土器、貝殻が散布し、南側には石灰岩崖が控え、西方には湧泉が隣接する。石斧状石器、くびれ平底・無文胴部土器片等が採集されたことから後期に編年される。

8. (1976年5月8日発見, 図版. 2-③の7)

字渡喜仁よりヒージャー浜に抜ける通路の東方、標高約25mの石灰岩台地縁辺部に形成された貝塚である。遺物は、貝殻が多量に存し、沖縄製陶器、陶質土器が採集される。

9. (1976年8月7日発見)

渡喜仁浜原貝塚に近接する標高約15mの湧泉付近に形成されている小規模な貝塚である。遺物は、渡喜仁浜原貝塚Ⅱ層と同じく、くびれ平底・無文胴部土器片等後期系土器が得られる。貝層を構成し、後期に編年される。将来の調査如何によっては、渡喜仁浜原貝塚の地点遺跡とみることもできよう。

10. (1976年5月7日発見)

渡喜仁浜原貝塚東方、約150mの石灰岩台地崖下の標高約10~15mの傾斜地に形成された遺物散

布地である。遺物は、くびれ平底を有する無文甕型土器を土器の主体とし、海産貝類を中心とした貝殻が散布する。後期に編年される貝塚である。

11. 大浜原貝塚

字渡喜仁の東方、ウッパマと称する標高約4mの砂丘地に形成された貝塚であり、渡喜仁浜原貝塚の東方約600mの場所に位置する。採砂のためかなり破壊されてしまった。後期に編年される。

12. 松当原貝塚

字渡喜仁と運天の中間にあたる標高約3mの砂丘地に形成された貝塚である。この貝塚も大浜原貝塚と同じく、採砂のためかなり破壊されてしまった。後期に編年される。

13. 14. 運天貝塚群

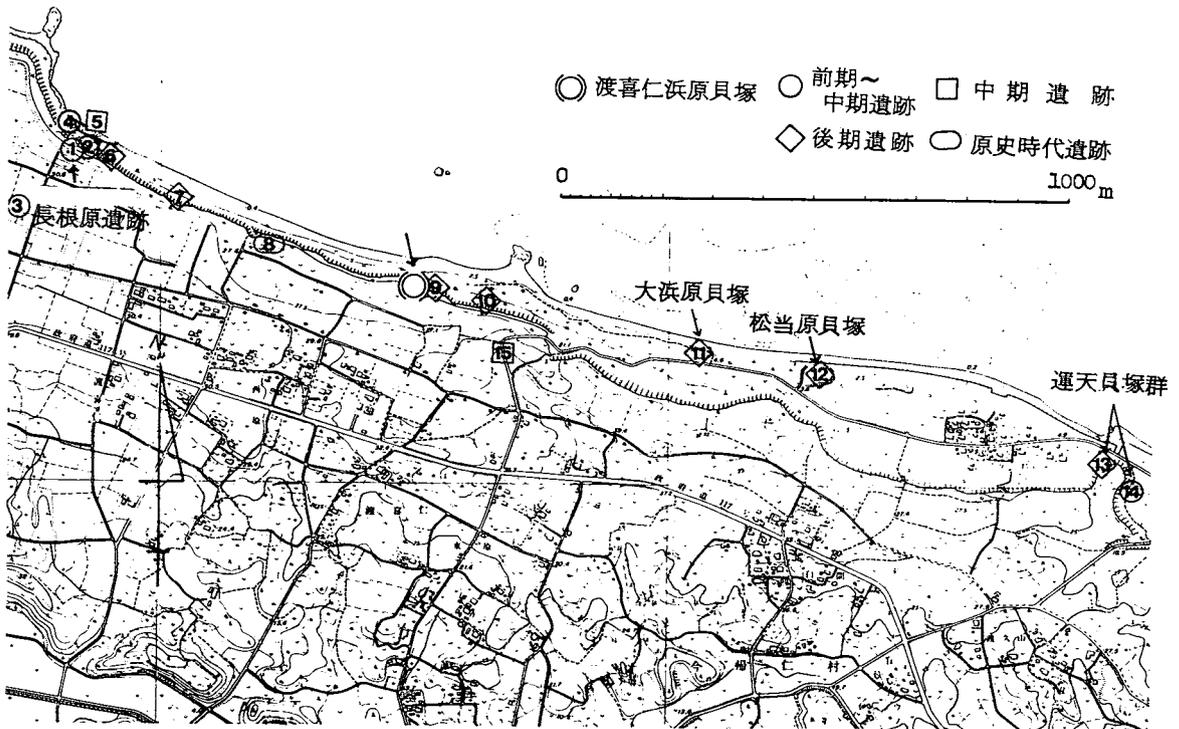
字運天の海岸に面して半島状に突き出した標高約20mの台地下に形成された4地点を含む貝塚である。13貝塚は後期に、14貝塚は前期後半から中期に編年される（詳細は第1章第2節参照）。

15. 渡喜仁原遺物散布地

字渡喜仁よりウッパマへ抜ける道路上や土手より多和田真淳氏と調査団の一員である新田は、若干の中期系土器片や貝殻を採集している。

その他にも「そこ（渡喜仁原遺物散布地：筆者註）から西方渡喜仁原の北面した海岸の台上、現在汚物タンクのすえられた個所から十数個の石斧が出土している。このように思いもかけぬ場所に石斧が埋

第 38 図 渡喜仁浜原貝塚周辺の遺跡群



蔵されているのを発見することがあるが、これは古代人が祈りを捧げた祭祀遺跡と考える。〔多和田他、1975〕とされる遺跡が存する。

このように、大井川から運天の東方水路に互る一連の崖地帯には、沖繩貝塚時代の遺跡が、8遺跡を除き今までのところ39遺跡が分布する。そのうち、渡喜仁浜原貝塚Ⅲ・Ⅳ層一すなわち前期後半から中期あるいは中期一に対応する遺跡は、1・2・3(?)・4・5・14・15(?)の7遺跡が相当する。Ⅱ層一すなわち後期一に対応する遺跡は、6・7・9・10・11・12・13の7遺跡が相当する。しかし、このことは、これら一連の遺跡が同時に存在したかどうかを決することにはならない。同型式の土器の存在だけでは、その同時性を証明することにはならないからである。運天貝塚群の2地点については不明である。そして、これら遺跡群のなかで渡喜仁浜原貝塚は前期から後期に互る重複した遺跡であるといえる。

しかし、各遺跡とも十分な調査がなされず、そのおのおのの実体が判明していない現在、前記遺跡の同時性の問題も含み本地帯における歴史的展開、渡喜仁浜原貝塚との連関については将来の課題としておきたい。

追 記

渡喜仁浜原貝塚調査以後、今帰仁村教育委員会による遺跡の保存措置工事を行なった際に、調査団がA地区と設定した台地上の畑地から遺物が検出された。

これはB地区遺物包含層の崩壊を防ぐ土留め工事のためにトラックが畑地を通り、踏み固められた後をユンボで掘り起して元の状態に復元する作業を行なった際に発見されたものである。

遺物の検出された地点はB地区におけるbトレンチの延長線上にあたるところで、雑木林の南側縁から畑地内約10m入ったところで、台地の崖端からは24m内外のところである。

遺物包含層は耕土下に確認され、下層からは高宮廣衛氏設定の「地荒原B式」の範疇かとおもわれる有文土器が、上層からは後期無文土器が出土している。この層序と遺物の状況は、基本的にはB地区のⅢ層～Ⅳ層の下層とⅡ層の上層に対応し、同時期である。

このA地区は第一次調査で、渡喜仁浜原貝塚集団の生活址があるのではなからうかと想定されながらも、日程の都合で確認するには至らなかったが、今度の作業で追証された意義は多大である。A地区の全面調査によっては、集落址の発見が期待される。

なお、B地区のb4ピットでⅡa層を除去した段階で、プライマリーの『焦土』が発見され、その広がりを目指した結果、a4・a5ピットにおいても確認されたことは調査の成果で前述したとおりであるが、この『焦土』は台地上からの流れ込みによる二次堆積とは考え難く、貝塚集団内の小集団の生活址的なものではなからうかと解釈する意見もあった。しかし、反対に疑問視する意見もあり、これらを含めて集落址の把握は今後の課題である。

付章 渡喜仁浜原貝塚の特殊遺物

森 巖

本品 (図版38-B) はRosinであると推定する。本来RosinはTerebinthinaから水蒸気蒸留によってoleum terebinthinae (精油) をとった残渣に水を加えて蒸気乾固させて製造する固形樹脂である。この方法で製造されたRosinは、淡黄色ないし淡褐色でガラス様透明で破砕されやすい固まりである。表面は黄色の粉末でおおわれて、かすかにテレピン油様の香気がある。原産地として著名なのは、アメリカ、フランス、ポルトガル、イギリス、ベトナムなどで、主成分はabietic acid、Pimaric acidなどの樹脂酸の混合物で精油を少量含有するとされている。

本品の性状は褐色で、ガラス様透明で破砕されやすく表面は黄白色の粉末でおおわれ、Rosinの外観を呈している。

A. 化学的な検討

1 本品の粉末を、KBr錠剤法によって赤外吸収スペクトルを測定してみた (Fig.1 参照)。
 $3700 \sim 3100 \text{ cm}^{-1}$ の broadな吸収は、OH、Radicalの存在を予想させ、 $3000 \sim 2800 \text{ cm}^{-1}$ のごとく broadな吸収は $-\text{C}-\text{H}$ 、 $-\text{C}-\text{H}_2$ 、 $-\text{C}-\text{H}_3$ の伸縮振動であり有機物であることの証拠となる。また、 $1800 \sim 1600 \text{ cm}^{-1}$ の broadな吸収は $\text{C}=\text{O}$ の伸縮振動である。以上のことから本品は主として樹脂酸を含有するものと判断した。

2 本品の粉末を約30%の水酸化ナトリウム水溶液中で8時間加水分解し、冷却したのち漏過。この漏液をエチルエーテルと振り、エーテル移行部を濃縮し、高速液体クロマトグラフィーによって分離すればFig.2に見られるように、2個の吸収ピークであり、このものは2種の有機酸の混合物であることが判明した。

本品についての赤外吸収スペクトルはFig.3に示した。

Fig.3について

イ、 2940 と 2970 cm^{-1} の吸収は $\text{C}-\text{H}$ 伸縮振動で有機化合物には必ずなければならぬ吸収である。

ロ、 2870 cm^{-1} の吸収は、 $\text{C}-\text{H}_3$ (メトキシ) Radicalの吸収である。

ハ、 1745 cm^{-1} の吸収は、 $\text{C}=\text{O}$ の振動でカルボン酸 (有機酸) の特性吸収である。

ニ、 1600 cm^{-1} の弱い吸収は、 $\text{C}=\text{C}$ の存在を示している。

ホ、 1460 cm^{-1} の吸収、 1380 cm^{-1} の吸収は $\text{C}-\text{O}-\text{H}_3$ の吸収を示し、 1380 と 1370 (1380 の肩になる) の吸収は $-\text{C}-\text{H} \begin{matrix} \text{O} \\ \text{H} \\ \text{C} \\ \text{H} \\ \text{H} \end{matrix}$ の吸収である。

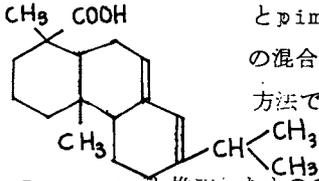
ヘ、 1280 cm^{-1} の吸収は、OHまたは $\text{C}-\text{O}-\text{C}$ の吸収でエステルなどの存在が推定される。

ト、 1120 cm^{-1} の吸収は、 $>\text{C}=\text{C}-\text{H}$ の吸収。

チ、 1080 cm^{-1} は、二級炭素-C<の吸収。

リ、 740 cm^{-1} のものは、 $-\text{CH}_2-\text{CH}_2-\text{CH}_2-\text{CH}_2-\text{C}$ の吸収である。

赤外吸収スペクトルに限って推定すれば、abietic acid (アピエチン酸)



と pimaric acid $\text{HOOC}-\text{CH}_2-\text{CH}_2-\text{CH}_2-\text{CH}_2-\text{CH}_2-\text{COOH}$ の混合物と推定されるが正確には、Fig 2に見られる二個のピークを何らかの方法で分離し、その単品について構造を決定する以外に方法はない。

3. Rosinと推定したものの少量をとり、エチルエーテルによって抽出した部分の赤外吸収スペクトルがFig 4である。本品は飽和炭化水素、テルペン類の混合物と予想しているが、このものは数種の混合物であろう。アルデヒドの定性試験により陽性でアルデヒドの存在は確かである。

以上のことから遺跡出土品については、冒頭に述べた如く Rosin と推定した。

B. Rosin、その他の性質ならびに用途

Rosin (ロジン) の原料は先にも述べたように、Terebinthina である。ここで Terebinthina について説明しておこう。Terebinthina (生松脂) は、マツ属植物の樹幹に切傷をつけて、浸出物を採取したもので、このものはマツ属に限らずモミ属、カラマツ属、トウヒ属からも同様な方法で採取できる。Terebinthina は淡黄色～淡黄褐色の濃粘液で普通白色結晶性の沈殿を含むが、水溶上で加熱すれば溶けて帯黄褐色となり、ほとんど澄明な液となる。樹脂70～90%、精油15～30%からなるもので樹脂の主成分は、abietic acid, pimaric acid であり、精油は pinene, dipentene, limonene などであるとされている。皮膚刺激作用があるので古くから〔吸出し膏〕に用いられ軟膏、硬膏の基礎剤とされている。本品を用いた製剤バジリ軟膏は、刺激性吸出し剤で化膿したはれ物に用いられ、発泡膏は発泡剤として肋膜炎、その他の内臓の炎症に塗布する。この Terebinthinae が乾燥したものが樹脂で、生松脂や樹幹の切口などに自然に固結したもので引赤発泡剤として松脂硬膏を製し、絆創膏などの原料とする。

この樹脂を前述の方法で、テレピン油 oleum terebinthinae をとった残りが Rosin である。Rosin の性質についてはすでに述べたが、そのものの用途は、現在次の様に用いられている。絆創膏その他硬膏剤の基剤とし、またハイ取り紙に用いられる。工業的には、製紙、塗料、印刷インキ、防水、靴墨などと共に防腐塗料、石けん香料、外国医薬品となる。

C. Rosin となるまで

それぞれについてその用途を主にして述べてきたが、遺跡出土品 Rosin の出来るまでのことを考えてみるに、最初 Terebinthina を何らかの生活用品として用いられたであろうものが、風乾され樹脂となり、この樹脂が長年かけてテレピン油が自然に抜け、(テレピン油は一般に揮発性であり、また

空気酸化を受けやすい) Rosinとなったものであろう。採取されたRosinの大きさからTerebinthinaの量は相当な量であったことが予想され、生活の用によく用いられたものと予想される。

D. Terebinthina, Rosinを含めて古代人は何に用いたか。

前項においてTerebinthina, Rosinの現在の用途について述べてきたが、これらの用途から次のような事が推理される。

1. 絆創膏などの如く、粘稠性、粘着性があり、しかも固化して防蹠性を示す。
 イ、このようなことから、矢じりを竹にひもで巻きつけこれにぬりかためる。また弓の弦の強化など。
 ロ、着衣に塗布し野山をかけるときの身体の保護?。
 ハ、ワラジなどにつけて足の保護に供する。
2. 薬用として用いる。

第48表 [Rosin]分析表

Fig.1

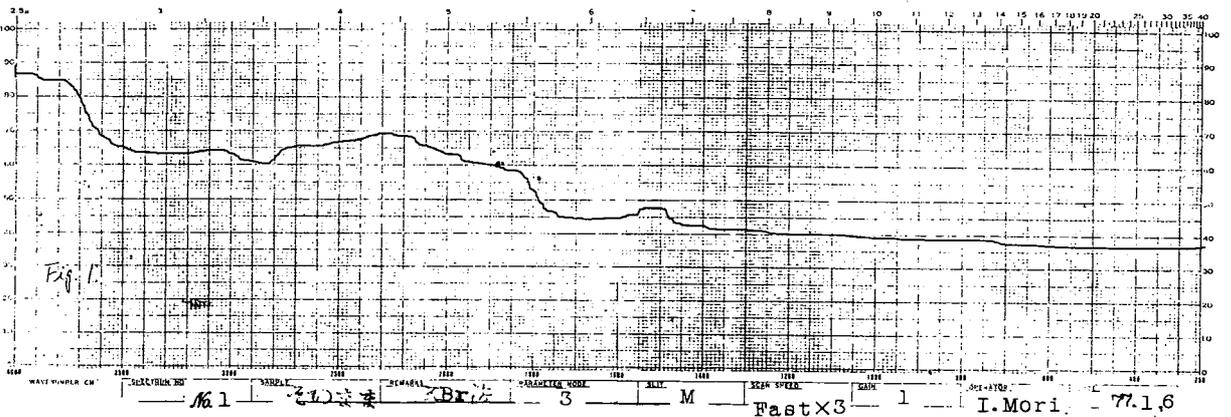


Fig2

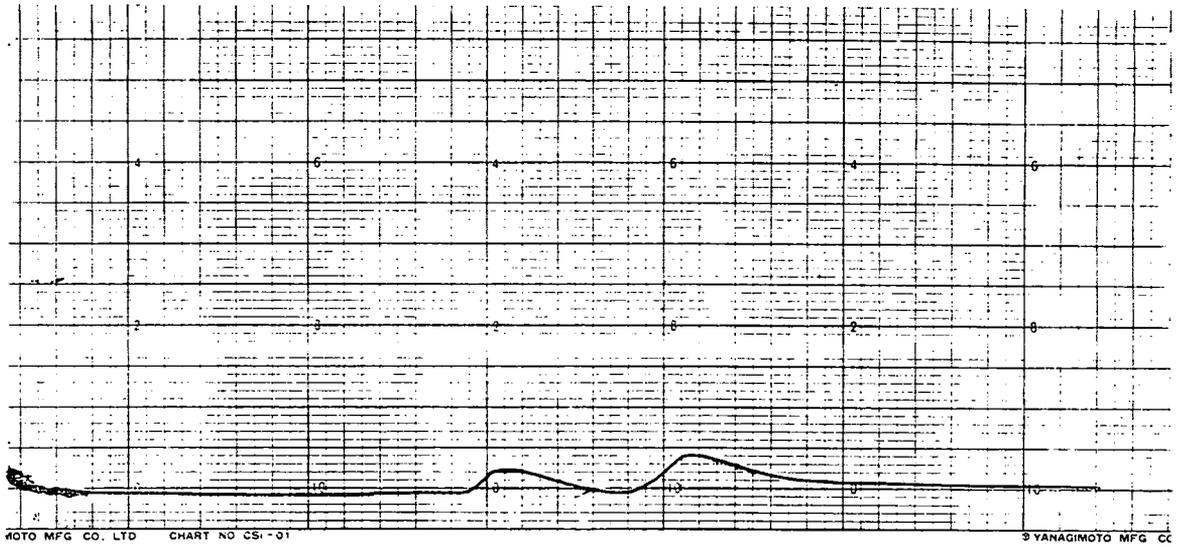


Fig3

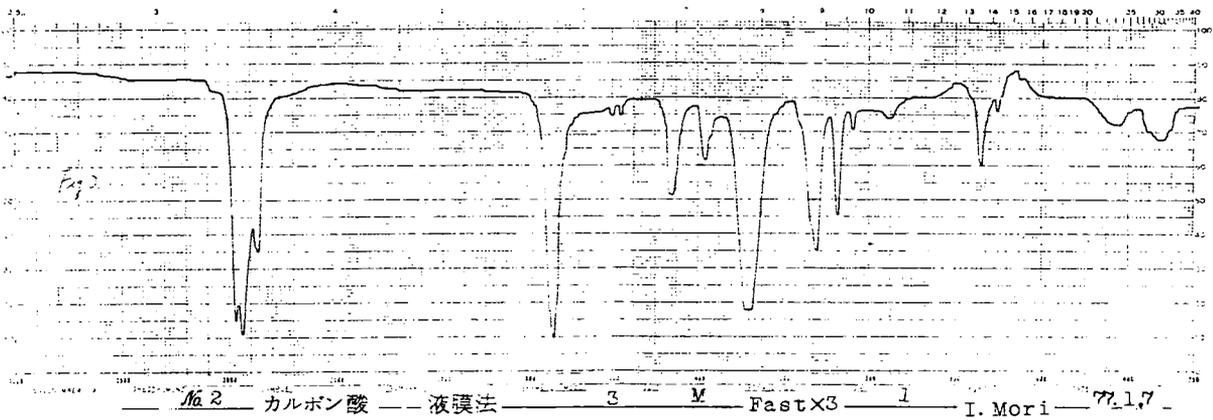
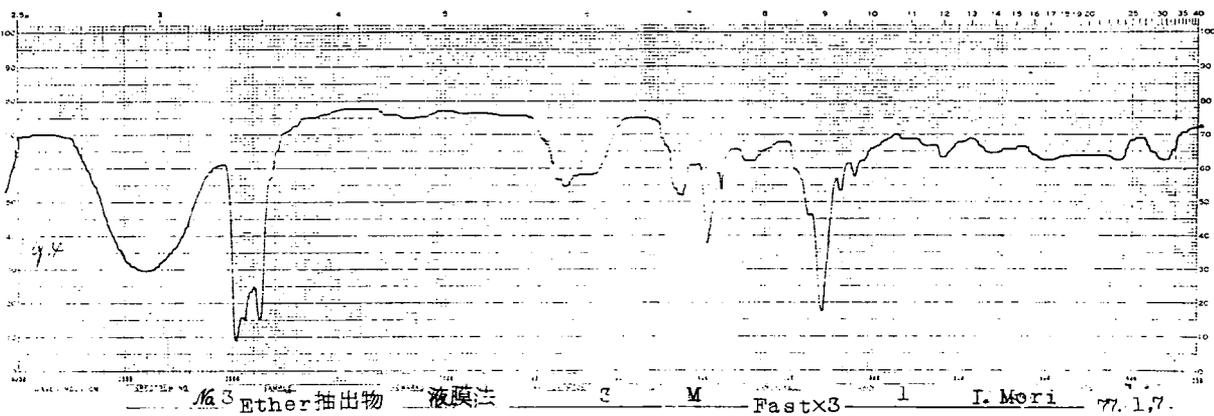


Fig4



—地域と文化財—

今帰仁村教育委員会社会教育主事 玉城 勝男

今帰仁村は、沖縄本島の北部・本部半島の東北部に位置し、東西に連なるおおむねゆるやかな丘陵地緩傾地および平坦地が多く末広がり地形で隆起珊瑚礁と古生層からなり、覆土の上質が多く、末端の平地は耕作の主軸をなす。また、幾世代にわたって自然と戦い、社会生活を営み、さまざまな文化をつくりあげ、そういう文化の一端を知ることができる遺跡や遺物が数多く残り、人々は前代からの文化の継承・発展に努力がなされ、その文化遺産の豊かさに重みを感じずにはられない。

渡喜仁浜原貝塚の第一次、第二次緊急発掘調査並びに展示会を通して人々の文化財、特に埋蔵文化財に対する興味・関心度が急激に高まりそれが文化財保護の大切なことを自然に理解されるようになってきた。アンケート調査からみると

「ほくは、今まで今帰仁村には、貝塚や土器などがあるとはゆめにもおもってみなかったが・・・きょうみをもつようになってうれしく思う。」 「自分たちの郷土の歴史なのに、あまり知らないでいた自分がはずかしいような気がした。・・・」 「子供をつれて、参観し・・・自分達の村から発掘されたのを見て、時代の流れを実感として受け取った・・・」 「私達のみじかに、貝塚があって、そのみじかな古い歴史を知り、とてもきょうみが出てきた。・・・」 「昔の人の生活のようす、生活のちえ等がみえて、本当によかった・・・」 「私達の祖先が、どんな生活をしていたのかを、知ること、たいへんだいじなことだと思います。・・・」 「・・・吾が先祖の生涯を知る大事な資料を得てうれしい。今帰仁の村の文化を知り誇りに思ふ。」

さらに、「私達は、今、社会科で貝塚や土器のことについて学習しています。教科書や参考書などだけでは、色・形などが、くわしくわかりませんが、こうして実物を見ると、昔のことが、よくわかるような気がします。・・・」 「・・・本で見るよりほんものを見たほうが、とってもいいです。」 「・・・食器や暮らしの様子をみていると、人間の生き方は、今も昔も変わらないような気がします。・・・」 「・・・人間というものは、勝手なもので、自分の身近かにある大切な何かを見落しがちなものである。・・・自己の生活を何か反省させられた気がした。・・・」

このように、新しい発見と事実の生き生きとした把握が今回の発掘を通して出てきている。それは、何よりも『むかしとの対話』の中から現在失われつつある人間らしさ、生き方などが人々の心の中につぎつぎとでてきている。また、過去・現在・未来への指標となって出てくるからであろう。

文化財を、記録にとどめるだけでなく、それを広く一般に公開し、正しい認識をもってもらうための努力もしていかなければならない。それは、歴史の流れの中から私たち地域の文化財をとらえて、そこから郷土の歩みを知り、正しい歴史の見方を知ると同時に、これからの文化財をも守るために大きな力となるだろうから。まさに、文化財を守り、文化をつくるのは一市の方針・行政上の問題だけではなく、地域の人々にあるからである。

引用文献目録

- 松村瞭, 1920年: 「琉球荻堂貝塚」 『東京大学理学部人類学教室報告』第3篇所収。
- 大山柏, 1922年: 『琉球伊波貝塚発掘報告』。
- 小牧実繁, 1927年: 「那覇市外城嶽貝塚発掘報告」 『人類学雑誌』42巻8号所収。
- 島田貞彦, 1932年: 「琉球崎樋川貝塚」 『歴史と地理』第30巻第5号所収。
- HANZAWA, S, 1935年: Topography and Geology of the Ryukyu Islands. Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ. Sec. 2, 17。
- 島袋源七, 1947年: 「阿児奈波の人々」 『沖縄文化叢説』所収。柳田国男編。
- 多和田真淳・外間正幸・嵩元政秀, 1962年: 「地荒原貝塚発掘報告」 『文化財要覧』所収。琉球政府文化財保護委員会編。
- 多和田真淳, 1956年: 「琉球先史時代の編年の概念」 『文化財要覧』所収。琉球政府文化財保護委員会編。
- 国分直一・新垣孫一・川平朝申, 1957年: 「久高島シマシヤーマ貝塚の調査概報」 『文化財要覧』所収。琉球政府文化財保護委員会編。
- 高宮廣衛・C. W. ミーヤン, 1958年: 「知念村熱田原貝塚発掘概況」 『文化財要覧』所収。琉球政府文化財保護委員会編。
- 多和田真淳・賀川光夫, 1959年: 「宜野湾村大山貝塚の調査概要」 『文化財要覧』所収。琉球政府文化財保護委員会編。
- 国分直一・三友国五郎, 1959年: 「徳之島面縄貝塚調査報告」 『古代学』8巻2号。
- 国分直一, 1959年: 「沖縄本島南部米須浜貝塚における試掘調査報告」 『水産講習所研究報告人文科学篇』第4号所収。
- 国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義麿・原口正三, 1959年: 「奄美の先史時代」 『奄美—自然と文化』所収。九学会連合奄美大島共同調査委員会編。
- 国分直一・盛園尚孝, 1959年: 「種子島南種子町広田の埋葬遺跡調査概報」 『考古学雑誌』第43巻3号所収。
- 嵩元政秀・新田重清, 1960年: 「嘉手納貝塚発掘報告書」 『文化財要覧』所収。琉球政府文化財保護委員会編。
- 高宮廣衛, 1960年: 「野国海岸発見の石器について」 『沖大論叢』第1巻第1号所収。
- 西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚, 1960年: 「八重山の考古学」 『八重山』所収。滝口宏編。
- 高宮廣衛, 1960年: 「具志川村アカジャンガー遺跡調査概報」 『文化財要覧』所収。琉球政府文化財保護委員会編。
- 嵩元政秀, 1961年: 「津堅貝塚発掘概報」 『文化財要覧』所収。琉球政府文化財保護委員会編。
- 吉良哲郎, 1963年: 『原色日本貝類図鑑』
- 小林行雄・佐原真・丹信寛, 1964年: 『紫雲出』

- 友寄英一郎, 1964年:「久米島謝名堂貝塚調査概報」『琉大文理学部紀要社会篇』第8号所収。
- 永井昌文・三島格, 1964年:「奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」『考古学雑誌』第50巻第2号所収。
- 国分直一・三島格, 1965年:「ヤブチ式土器」『水産大学校研究報告人文科学篇』第10号。
- 嵩元政秀・高宮廣衛・新田重清, 1966年:「勝連城跡第二次発掘調査報告書」『琉球政府文化財調査報告書』所収。琉球政府文化財保護委員会編。
- 嵩元政秀, 1966年:「ヒニ城の調査報告」『上掲書』所収。琉球政府文化財保護委員会編。
- 琉球大学歴史研究会, 1967年:『歴史研究』第3号。
- 波部忠重・小菅貞男, 1967年:『貝』
- 友寄英一郎・高宮廣衛, 1968年:「伊江島具志原貝塚調査概報」『琉大法文学部紀要社会篇』第12号所収。
- 高宮廣衛, 1968年:「上本部村備瀬貝塚調査概要」『沖大論叢』第8巻第1号所収。
- 高宮廣衛, 1968年:「那覇市の考古資料」『那覇市史資料篇第1巻の1』所収。
- 友寄英一郎・嵩元政秀, 1969年:「フェンサ城貝塚調査概報」『琉大法文学部紀要社会篇』第13号所収。
- 安里 進, 1969年:「沖縄の炭化米・大麦出土遺跡」『考古学ジャーナル』№32所収。
- 高宮廣衛, 1969年:「恩納村熱田貝塚調査概報」『沖大論叢』第9巻第1号所収。
- 新田重清, 1969年:「最近の沖縄における考古学界の動向」『琉大史学』創刊号所収。
- 新田重清, 1970年:「浦添貝塚調査概報」『南島考古』第1号所収。沖縄考古学会編。
- 豊見城高校郷土史研究クラブ, 1970年:『豊高郷土史』第3号。
- 多和田真淳, 1971年:沖縄タイムス・琉球新報1月27日付。
- 神沢勇一・川口徳治郎, 1971年:「東京湾沿岸地域出土の貝刃について」『神奈川県立博物館研究報告』第1巻第4号所収。
- Clausade. M. N. et al, 1971年: Coral reef morphology in the vicinity of Tulear (Madagascar) Contribution to a coral reef terminology. Tethys, Suppl. 2。
- 新田重清, 1972年:「粟国島巢飼原貝塚調査概報」『琉球政府立博物館館報』№5所収。
- 直良信夫, 1972年:『古代遺跡発掘の脊椎動物遺体』。
- 多和田真淳, 1972年:「おいこみ網」『沖縄文化史辞典』所収。
- 国分直一, 1972年:『南島先史時代の研究』。
- 上江洲均, 1973年:『沖縄の民具』。
- 具志堅宗弘, 1973年:『現色沖縄の魚』
- 平田義浩・仲宗根幸男・諸喜田茂充, 1973年:『沖縄の貝・カニ・エビ』。
- 嵩元政秀, 1973年:「平安名第二貝塚について」『興南研究紀要』第2号所収。
- 河口貞徳, 1974年:「奄美における土器文化の編年について」『琉大史学』第6号所収。
- 新田重清, 1974年:「具志川市具志川城跡表探の考古資料について」『沖縄県立博物館館報』№7所収。
- 琉球考古学研究会, 1974年:『稻福遺跡』。

沖縄鳥類保護協会，1975年：『自然保護のための「沖縄の自然」』。

高宮廣衛，1974年：「いわゆるカヤウチパンタ式および宇座浜式土器について」 『沖縄国際大学文学部紀要社会学科篇』第2巻第1号所収。

河口貞徳，1975年：「南島先史時代の文化交流」 『アジア文化』第11巻第3号所収。

今帰仁村史編纂委員会，1975年：「今帰仁村史」 （〔多和田他，1975〕に準ずる）

安里嗣淳・金武正紀・当真嗣一・高安克己，1975年：『仲泊遺跡発掘調査概報（1）』。沖縄県教育庁文化課編。

服部仁，1976年：「沖縄、奄美の貝塚から出土したブダイ科類の咽頭骨」 『魚類学雑誌』第22巻第4号所収。

佐原真，1976年：『弥生土器』。

名嘉真武夫・安里嗣淳・当真嗣一，1976年：『浜崎貝塚』 伊江村文化財調査報告書第1集。

高安克己，1976年：「沖縄県本部半島北部の第四紀石灰岩」 『地質学雑誌』第82巻第3号所収。

新田重清，1976年：「糸満市喜屋武同村貝塚出土の管畑・縄系土器について」 『沖縄県立博物館紀要』第2号所収。

古川博恭，1976年：「沖縄および九州地方の元新世地史」 『琉球列島の地質学研究』第1巻所収。木崎甲子郎編。

沖縄生物教育研究会，1976年：『沖縄の生物』。

県立博物館，1976年：『特別展一多和田真淳氏所蔵考古資料』。

西長浜原遺跡調査会，1977年：『西長浜原遺跡発掘ニュース』第1号、第2号。

沖縄国際大学考古学研究会，1977年：『島嶼の考古』創刊号。

謝 辞

渡喜仁浜原貝塚の第一次発掘以来ほぼ一年、ようやく報告書刊行の運びとなった。この間、本書刊行に至るまでには多くの方々多大な御協力を戴いた。

発掘調査においては、発掘をこころよく了承して戴いた運天康有氏をはじめ地元の方々ひとかたならぬ御援助を戴き、各位に御礼を申し上げます。

出土遺物の整理にあたっては、琉球大学の川島由次助教授、吉野哲夫講師、森巖教授、沖縄貝類標本館の仲嶺俊子氏はもとより、本遺跡周辺の海況調査において、琉球大学の渡久地健君、池間朋子さん、下関水産大学校の伊東隆博君に多大な御協力を仰いだ。これらの方々の御協力なしには、本報告書の刊行をみるには至らなかったであろう。とりわけ、森巖教授、渡久地健君からは、本遺跡を理解するうえで貴重な論稿を戴き、謝意を表する次第である。また、琉球大学考古学研究会の顧問である友寄英一郎教授には、資料分析における文献収集の便宜を計らってもらい、また、沖縄国際大学考古学研究会・考古学研究室の諸兄からは資料分析における御助言を戴いた。さらに、本書刊行に至るまでには、上記の方々以外にも多くの方々から多大な御支援を仰いでいる。記して感謝申し上げます。

なお、報告書刊行まで資料整理の場を提供していただいた県立博物館の館長外間正幸氏をはじめ職員各位に対し御礼を申し上げます。

今帰仁村文化財調査報告第1集

渡喜仁浜原貝塚
調査報告書〔I〕

1977年3月30日 印刷
1977年3月31日 発行

発行 今帰仁村教育委員会

沖縄県今帰仁村字仲宗根289
TEL (098056) 2647

編集 渡喜仁浜原貝塚調査団

代表 新田重清
(沖縄県那覇市字大中1-1)
(沖縄県立博物館内)

印刷 平山印刷

沖縄県那覇市字寄宮314
TEL (0988) 32 0177
